冬至の十字星

—青潟大学附属シリーズ—
中学編　3

舞夜じょんぬ

その１　闇の声が聞こえる

「ったく、だからお前はガキだっていうんだよ、立村」
　今日も同じ怒鳴り声の繰り返し。三年Ａ組の教室に閉じ込められたまま、上総は本条先輩の言葉をうつむいたまま聞いていた。
「第一な、一年野郎を手なずけられないでどうするんだ。俺がいるからまだ押さえがかかっているようなもんだが、それをなんだ？　顔色ばっかりうかがってび くびくしながら覗き込んで、結局無視か。もちろんビデオ演劇のことだけだったらまだいいだろうよ。二年中心でやるのも手だ。だが、お前の本音はそうじゃね えだろ！」
　答えない。ここで口にしたら、もう逆らえない。上総は目を見ないで乗り切ることにした。
「おい、いいかげん顔を上げろよ」
　顎に指がかかり、無理やり本条先輩とにらみあわされた。
　教壇の上で対峙する自分と本条先輩。完全に背丈は頭ひとつぶん高い。
　本条先輩の目を見るにはかなりぐいと顔を上げなくてはならない。
　――まずい、本条先輩本気だ。
　片手を握り締めたり緩めたりして、緊張をほぐす。いつもならばへらへらと馬鹿話で現を抜かすこの人なのに、今日ばかりはかなり火薬庫状態だ。
「またかよおいおい。目をうるうるさせてどうするんだよ。お前男だろ。新井林じゃねえけど、ついてるもんがついてるのかって言いたくなるぜ」
　必死に目をそらす。また元に戻される。今度は首の後ろを押えられて動かせない格好に持っていかれている。
「自分の立場、わかってるんだろうな。立村、お前は評議委員長なんだぞ。指名した俺の立場も考えろ」
「申しわけありません」
　時間稼ぎだとわかっている。あやまってしまう。すぐに見抜かれてしまう。
「そうやって、またごまかそうとしてるんだな。お前の魂胆が見えないと思ってるのか馬鹿野郎。もう、お前には愛想尽かしてえよ。全く、どうしてお前なんかに委員長任せることになってしまったんだろうなあ」
　深々とため息を疲れ、放り出された。少し後ずさりした。
　窓の外には白い雲がたっぷりとかかっていた。放課後、日の落ちるのは早く、すでに三年の教室には誰も人気がなかった。残っているのはそれぞれの委員会関 係者と、部活動に参加している奴くらいだろう。風が冷たそうだし早く帰りたかった。でも、手を緩めてくれる気配すらない。上総は観念して、もう一度うつむ いた。

　学校祭、合唱コンクール、中間テスト、一通り片がついた。次期評議委員長という肩書きのもと、二年全校集会も無事に仕切り終えた。立村上総次期評議委員長という名前は、十月、この一ヶ月で全校に知らしめたはずだった。

　青潟大学附属中学において、それぞれの委員会トップは、委員一致の選出ではなく、前委員長の指名によってほぼ行われていた。いろいろ問題があるとも言われているけれども、評議委員会においては今のところ特別反対の声も挙がらなかった。二年に上がった段階で同期連中も
「評議委員長は立村、お前で決まりだろ」
と応援してくれていたし、本条里希評議委員長もなにかと上総をひいきしてくれていた。他の委員会はどうかわからないけれども、今のところ上総が来年以降評議委員長として引っ張っていくことは決定事項だった。

「あのな、俺が言いたいのは別に、二年の連中だけで『奇岩城』をやるのが間違ってるってことをつっこみたいからじゃねえんだ。いいじゃねえか。アルセーヌ・ルパンだろ？　ラブロマンスだろ？　しかもお前の出番もあるだろ？」
　コートをじろっとにらんで一瞬だけ笑ってくれた。その瞬間につけこみたいけれどできない。何も言えずうつむくだけ。「悪役ホームズも出てくるもんなあ。 去年の忠臣蔵に比べたらまだ、人数も少なくてすむ、楽だってことは分かる。セットも全部青大附中の校舎を使ってやるってのもいいアイデアだと思う。けど な、なんでだ？　なんで一年連中を巻き込もうとしねえんだ？」
「だから、今の一年は部活動中心ですから、冬休みはみな使えないはずです。それに、もともと演劇をやりたくて入ってきた連中ではないですから」
「そういう言い訳しながら、結局一年が怖くてびくついてるくせにか！」
　響かせた怒号。
　――怖い。
　言い返したくても言い訳が見つからない。
　本条先輩の言うことはすべて本当だ。この人の言うことに嘘はない。
　教壇を降りて本条先輩は、上総の隣りに立った。反対側を向いたまま、扉に向かってゆっくりと話し掛けた。
「言い分はわかる。今年の一年どもが部活最優先主義を貫きたがってるのもわかる。お前が二年の気心知れた連中と楽な気持ちでやりたいのもわかる。それ以上 にもうビデオ演劇にこりごりだってのもいやって程わかる。お前が評議委員長になってからだったら来年以降はやめてもいいや。とりあえず俺の顔を立てるため にやってくれてるんだったら、ま、それはありがとさんと受け取るぜ。だがな」
　振り返り、ふたたび上総の顔を見上げた。うつむいている顔を覗き込む。逃れられない。見られている。
「お前、奴が怖いんだろ」
「怖くなんかないです、そんなこと」
「新井林のことが、おっかねえんだろ。顔見たら全部書いてるぞ」
　――そんなんじゃない。
　言い返そうと口を開きかけたとたん、本条先輩は一気にまくし立てた。
「悪いが評議全員みんなお見通しだ。なにをだ？　今回のビデオ演劇は二年生中心で冬休み行う

予定なので、一年は無理に参加しなくてもいいです。ただ、大道 具や小道具関係などで手伝ってもらうことがあるかもしれないので、参加してみたい人は申し出てくださいってか。お前、それだったら去年の忠臣蔵、逃げただ ろ？　浅野の殿様なんてやりたかねかっただろ？」
　去年のビデオ演劇「忠臣蔵」で大石を演じたのが本条先輩だった。上総は本条の命令で泣く泣く、松の廊下にて刃傷沙汰をやらかす浅野の殿様をやらされた。
「な、そういうもんだ。やりたくなくてもやらねばなんない時があることを お前は気付いてないとは言わせねえぞ。一言でも、高校生探偵イジドールを新井林に振るとか、そういうことくらいは考えたっていいだろう」
「だから、新井林はバスケ部の試合かなにかで忙しいと話していたじゃないですか」
　言い訳その二だとわかっていても、言うしかない。思いっきり頭をはたかれた。耳がきんとなる。
「そこを頷かせるのが評議委員長の役目だろ。お前も他の一年連中は手なずけているみたいだが、はっきり言って使えねえ連中ばかりだろ。一年で使える奴ったら新井林くらいだろ。やる気もあって、ばりばりで、エネルギー全開で」
「新井林にはやる気なんてないでしょう。評議委員会なんて特に」
「そんな懐狭いこと言ってどうするんだ！　馬鹿野郎」
　いつもの冗談めいた頭ぐりぐりでは終わらない。耳もとをおもいっきりはたかれた。
「悪いが新井林は、お前なんかと違ってずっと大人だ。そりゃあ、ガキっぽいとことかもないとは言わないが、少なくとも今の立村よりははるかに頭も働く体も 動く成績もいい人望もある、完璧じゃねえか。ったく、どうしてあいつがお前と同じ学年でなかったか、つくづく後悔したぞ。本当だったら俺だって、お前なん かよりも新井林の方を早めに見繕って指名できればって何度思ったかなあ」
　全身がうずく。耳まで赤くなっているに違いない。手が震える。顔を見たくない。黒板がわを向いたがまた元に戻された。
「それなら下ろしてください。まだ来年まで間があるんですから」
「ばかやろう、それができたら俺だってとっくにやってる」
　目の奥が痛くなった。必死にこらえた。
「あれだけ使える万能人間を先に手下にしねえで、それで結局は、趣味に走るわけか。目が曇ったってわけか」
「何を言いたいんですか」
　声が震えていく。わかっている。本条先輩が何を言いたくて、なにをさせたいのかがわかっている。自分でも、これからどうしなくてはいけないかがよくわかっている。わかっている、わかっている、わかっている。
「巨乳に触りたいからっておべっか使ってるんじゃねえよ」
「本条先輩、それは相手に対して失礼でしょう」
　思わず声が出た。咽の奥にひっかかったような感じだ。咳払いを何度かした。
「俺もその辺の気持ちがわからないとは言えねえよ。だがな、立村。お前がしていることは、明

らかに青大附中の評議委員会にとってマイナスなんだってこともわかっているんだろうな」
「一年同士をうまくいかせようとしていることがですか」
　かろうじて答えた。
「とんでもねえなあ。お前のしていることは一言で言って、自己発電の極地だ。たまたまあの子がいたから、おかず本代わりにして」
「いいかげんにしてください」
　すべてを汚される。　いくら本条先輩でも言わせておけなかった。
「要するに先輩は、俺が杉本のことをひいきしているのが気にいらないだけでしょうか。今の話聞いているとそういう風にしか聞こえません。もちろん俺だって 一年の評議委員たちをまとめたいし、できれば協力参加させたいと思っています。ただ、今年の連中は先輩もご存知のように、部活最優先です。運動部の場合は 特にそうです。練習もきついだろうし、今の二年たちのように時間のある連中も少ないです。そういう相手に無理やり、演劇をやれとか命令しても動くと思いま すか。むしろやる気のある奴だけを巻き込んで、それから少しずつ動かしていけばいいじゃないですか」
「と、お前は言い訳するわけだ。やる気のある杉本だけを、ってな」
「当たり前でしょう。杉本は一生懸命です」
　杉本梨南の、ポニーテールに結い上げた艶やかな長髪が目に浮かんだ。
　笑顔はない、いつもにらみつけるようなまなざし。口にする言葉は、上総を誹謗するような言い方。本条先輩の耳にはそう聞こえているのだろう。大多数派の言葉しか伝わっていないのだろう。
「へえ、不細工、馬鹿とさんざん罵られているのも知っててか。それともお前、マゾっ気あったの？」
　突然背中をぐりぐりと拳骨でしごかれた。
「そういうんじゃないです。なんでそういう話になるんですか。そりゃあ、俺のことを『不細工』だとか『頭が悪い』とか言われていい気はしませんよ。でも、 それ以上に杉本は必死なんだってことが伝わってきます。喜んでもらうにはどうしたらいいか、って毎日一生懸命考えてるんだってことが。そんなことも悪いけ ど、本条先輩、わからないんですか」
「ああ、わからんな。悪いがあの子のお言葉を翻訳できるのは、立村、お前ひとりだ」
　続けてとどめを刺した。
「評議委員長を務められるのは、同時通訳なしに俺たちとコミュニケーションの取れる奴だけだ。それも気付かないで、お前、なあに杉本にばっかりくっついてるんだ。いいかげんにしろ」
「評議委員長にするしないとは関係ないでしょう。本条先輩。それよりも一年の男女が仲悪すぎるんだから、なんとかしてやらないとって思うのが、先輩としての自然な感情ではないでしょうか」
「ごほうびにあの巨乳触らせてもらえるんだったらそのくらいするわな」
　完全に血が昇った。
「俺のことを本条先輩、そんな風に見てたんですか！」

「でなかったら、新井林をあそこまでお前が無視する理由、説明つかなかったからな。違うのか？　やはり、単に新井林のことが怖くて、近寄るのがおっかなくて、それでびくついてたんじゃねえのか」
「あたりまえでしょう」
　鼻を鳴らしていきなりやさしく肩を叩かれた。
「ふうん、そうか。立村、本当に新井林のことが怖くないのか」
「下級生におびえて何ができるっていうんですか」
　言葉にはさっき怒鳴った気迫が残っている。たぶん見抜かれないだろう。
「じゃあ、新井林とお友だちになることもできなくはないな」
「俺は出来ても向こうがいやでしょう」
「あいつは性格が出来た奴だからな。頭を下げてきたら迎えてくれるぞ。体育系の奴ってそういうもんだ。典型的文化系の誰かさんとは違って、ねちねちうらみを持ったりしないんだ。ただ、まあ、お前は運悪く先輩になっちまったから、プライドだけは人一倍高いしなあ」
「何を言いたいんですか。要するに俺が新井林とうまくいってないってことを、文句いいたいだけでしょうか。それは少しずつ仲良くするようにしますよ。もちろん好き嫌いはあるかもしれないけれど、そのくらいのことは」
「ふおお、できるのか？　あいつの前に出ると、言葉がひっくり返って妙に緊張しているように見えるのは、気のせいかな。あいつに敬語使わせてしゃべらせられるようにできるのかな」
　また肩を三回叩かれた。どうして自分はこういう時、気の聞いた言葉を口にできないのだろう。惨めだ。顔をじっと見つめて、ふざけるなと言えないのだろう。悔しい。涙が出る。泣きたい。それも声を出して。
「まあいっさ、お前もその辺、自分が何をせねばならないかくらいは分かるだろう。俺はお前がふさわしいと思って指名したし、三年連中にも納得させた。二年連中もお前を気に入ってるってことだ。だがな」
　肩に食い込む手が重たい。
「俺は最後の最後まで、評議委員長を変更する権利を持っているってことは忘れるな。お前が本当に堂々と評議委員長になりたいんだったら、新井林を手なずけ てみろ。立村先輩のためだったらついていきますくらい言わせてみろ。もしできないようだったら、三月の段階で評議委員長変更もありうる。誰を指名するか は、想像に任せる」
　言葉は冷えていた。
　――本条先輩、本気だ。
「わかりました。覚悟しています」
　もう一度、顔を指で無理やり上げられた。完全に涙目になっているところを見られている。
「まったく、立村、お前はどうしようもなく、ガキだな、情けねえ」
　そのまま振り返らず本条先輩は教室を出ていった。

　取り残された上総は、まず窓の鍵がかかっているかを確認した。だいぶ暗くなってきている。

運動部の掛け声が響き、時折生徒を呼び出す放送がかかっている。追試の連絡もまだ後だろう。人からは「シャーロック・ホームズ風」と呼ばれるコートを羽織り、教室を出た。
――なんで俺のことをガキだガキだってみんな言うんだよ！
袖で急いで目をこすり、廊下に誰もいないのを確かめた。今の顔は誰かに見られたらかなりまずい状態にある。清坂美里たちにも先に帰るように頼んでおいてよかった。男だからこそ、泣き顔なんて死んだってみられたくないプライドがあるのだ。
――プライドばっかり、ってなんだよ、いったい。
先輩だから逆らえない。特に本条先輩には。
言い返したいこともあるけれども、否定できないのが悔しかった。
――評議委員長として、だからしてることじゃないか！
――あの一年連中が仲悪すぎるから、少しずつよくしていこうって思ってるだけだって！
――杉本のことだって。
そうだ。何も分かっていないのだ。本条先輩はいつも、一年ホープと新井林健吾のことを持ち上げている。バスケ部のホープと謳われ、成績も抜群、精悍な顔 立ちと筋肉質の身体つき。大きな瞳に光るのは狼に似た表情か。上総もそれは認めないわけではない。上総と対峙するといつも見下げた格好でしゃべる。首を下 げているからそう見えるのだろう。
――けど、新井林が俺を嫌っていることくらいわかるだろ。俺にばかり頭を下げさせようとしないで、少しは向こうに協力してくれるよう言ってくれたっていいじゃないか。嫌われたって当然だってわかってるけど、俺にはあれしかできないんだって。
自転車置き場に向かった。まだ雪が降らない時期なので特別気がねもいらない。ただ、冷え込みは日々厳しいので、指なしの手袋が欲しいとも思った。
「あれれ、りっちゃん」
声をかけてきたのは南雲秋世次期規律委員長だった。上総と同じような立場である。上総は慌てて目をしばたき笑顔を作った。慣れている。
「今日もまた、本条先輩と話か？」
「そんなとこだ。日々、厳しいお言葉を頂戴してるってわけだ」
「ふうん」
南雲もどちらかいうと、毎日現在の規律委員長から引継ぎのあれこれを教えてもらっているはずだ。ほとんどがファッション小冊子作りの委員会と思われているようだけど、それなりに「校則」関連の厳しい話なども聞かされているらしく、たまに
「胃が痛いよなあ、りっちゃん」
とぼやかれたりする。
「ところでさ、冬休みのビデオ演劇の件だけど」
「ああ、あれな」
もう一度ため息をついた。そうなのだ。二年生中心でビデオ一本に録画して行う、「奇岩城」。アルセーヌ・ルパンが主人公の冒険活劇、だがフランスまで録 画旅行なんてするわけもない。学校内で上手に撮って組み合わせようと話し合いがついている。ただ、せっかくなので衣裳を集

めてほしいというお願いを、現在 南雲に頼んでいる。
「人にもよるけど、体型のでこぼことかは特にないのかな」「ないと思う。今のところは。ただ、その時になってみないとわからないなあ」
　頭の痛い問題がここにもひとつ。
「それはそうとりっちゃん、なんか最近妙に疲れていませんか」
「別に、いつものことだけど。追試の前はやたらと疲れるな」
「数学？」
　図星だ。上総は大きく頷いた。

　しばらく軽い話題をかわした後、上総は自転車をこいではるかかなたの我が家へ向かった。品山まで自転車で約四十分弱。いやスピード上げればもっと早いか もしれない。近道を発見したのでだいぶ短縮されている。父が家に戻っていることはまずないし、大抵はひとりで食事をする。自分で作るのが普通だけれども、 疲れた時はありあわせのもので間に合わせることもある。
　――疲れてるかもしれないな。
　昨日の残り、カレーライスをまずは胃の中に収め、上総はぼんやりと食卓でスプーンをくわえていた。
　――なんか、食べても食べても、腹が空くっていうか。
　そのくせ、食べようとすると食欲がなくなる。よくわからない自分の体内。
　――何もかも忘れて、寝たいよな。
　皿を下げて、食卓のテーブルにほおをつけてしばらくそのままでいた。あわてて起き上がり、牛乳をもう一杯飲んだ。一日牛乳一リットルは消費しなくてはと、自分に課している。立ったついでに柱に背を当てて、頭の上へ見えないようにこっそりボールペンで線を引いた。
　――たったこれっぽっちかよ。
　まどろっこしいくらい、一年の頃にくらべて伸びが足りない。五センチ、伸びたか伸びないか。まだまだ本条先輩には届かない。
　――だからガキ扱いされるんだ、きっと。　くさくさしてきたので風呂を焚いてさっさと入ろうと決めた。
　小さい頃から心の中に見えない友達が一緒にいて、慰めてくれたりおしゃべりしてくれていた。悔しくて泣きじゃくっている時には、耳もとで
「大丈夫、かずさは悪い子じゃないよ、大丈夫だよ」
と話し掛けてくれるような存在だった。人に言ったら変態扱いされるのは目に見えていたので、もちろん内緒にしていた。
　それが最近になっていつのまにか、ずうずうしい相手にすりかわっている
「何甘ったれてるんだ、要するにお前が悪いんだろ、背は低いし泣き虫でどうしようもなく小心もんで、おどおどびくびくしやがって、ほんっと馬鹿だよな。十 四にもなって指先使って計算してるなんて情けねえ奴だ。そのくせ、スケベなことには耳ざといくせに。ほら、今夜は何してたか白状してみろよ」

と罵る。
耳をふさぎたくても、聞こえてくるものは消せない。
結局そう感じるたびにひとりで声を押し殺して枕に顔をうずめるしかない。　もしくは言われる通りに写真を見たり妄想にふけったりして気を静めたりする。そして大抵後悔して、また泣きじゃくるはめになる。
――中学に入ったら、絶対に泣かないって決めてたのに、なんでだよ。
自分で自分を罵ると、心の中でわめく声も消える。いつも上総はひとりで自分を貶すことにしていた。数も数えられない、頭も悪い、性格も陰気、人の顔ばかり見ておどおどしている救いようのない奴だと。背も低くて、全然伸びなくて、結局は本条先輩にどやされる相手。
――最低だ、こんな奴、生きてて意味ないよな。
――本条先輩に見捨てられて当然なんだ。
評議委員長に選ばれることは、一年の段階で決まっていたから誰も反論はなかった。ただ、一時期
「一年の新井林に逆転するんではないか」
という噂が流れたことがある。表面上何も気にしないふりをしていたけれども、本条先輩がやたらと新井林と楽しげに語らっているのを目の隅で捕らえるたびに、また奥底から声が聞こえた。
「あいつ頭いいし、腕力もあるし、ルックスも最高じゃねえか。お前みたいに指を折って計算なんかしてないんだぜ。なによりも本条先輩がお気に入りにしてる じゃないか。お前にはいつも『お前ガキだなあ』というくせに、新井林にはため口叩くこと許してるだろ。新井林もお前のこと、先輩だなんてこれっぽっちも 思ってやしねえよ。ほら、この前言われただろ。『ついてるかついてないかわかんないような奴』ってな。お前は内面ではスケベなことばっかり鬼のように考えているくせに、表面ではのぼーっとした顔で通してるからそう思われるんだろうなあ。よかったなあ、一年でも早く上でいて。ま、運良く評議委員長になれたら その時はラッキーと思えよ。お情けなんだからな、お情け」
いつも本条先輩からは
「お前ってガキだからなあ」
とため息を吐かれていた。言われても仕方のないことばかりしてきたから反省している。でもいつかは本条先輩に認められたくて、必死に走ってきたつもりだった。だから評議委員長に無事指名された時は、心からほっとした。役職が欲しかったからじゃない。
――本条先輩に、認めてもらいたかっただけだ。
「ふうん、認めてもらったと思ってるのか、甘ったれてるよな」
また馬鹿にする声が聞こえる。風呂場の水がちゃぽちゃぽとゆれる。何度も湯船に潜っては出て、また潜りを繰り返した。
「あれだけお前が委員長の座に汲々としていたから、本条先輩も同情してくれただけだろ。本当は本条先輩、絶対に新井林のことをひいきしたくてなんなかったはずだぜ。そうだろ」
――だったらどうするんだよ。
顔を湯で洗い目をこすった。

「最後の最後までどうなるか、気を抜かないことだな、がんばれよ」
――わかってる、わかってるけどさ。
見事、声は正しいことを言ってくれた。その通りだ。
――三月に逆転の指名可能性ありって奴かよ。
上総はのぼせる寸前まで湯船につかり続けた。ぐったりすれば、声も消えてくれる。ただ何も考えずに寝ることができる。声が物笑いにするような儀式もしないですむし、これから先評議委員会で何を言われるかを考えないですむ。
――ああ、わかってる。俺はどうしようもなく頭が悪くて、永遠に数学を覚えることできなくて、もしかしたら裏口入学だったのかもしれなくて、馬鹿なこと ばかりして本条先輩に怒られて、究めつけは下級生に物笑いにされてるんだ。表向きはいいかっこばかりしているけれども、写真集みては変なことを考えてる、 そんな最低な人間なんだ。それだけ言えば十分だろ！　俺は評議委員長なんてできる器の奴じゃないんだって！
何も言わずに、声は上総を寝させてくれた。ありがたかった。

――いったい誰が「奇岩城」なんかにするって言い出したんだよ！
別に脚本を作るとか、いいかげんな英語劇にしようとか、そういうのだったらかまわない。上総も手伝うにはやぶさかではない。いいさ、演出くらいやってや ろう。衣裳だって作るの手伝ってやろう。二年生評議一丸になって、去年の「忠臣蔵」を越えるようなビデオ演劇をこしらえてやる。
しかし、よりによってシャーロック・ホームズを指名されるとは思わなかった。「奇岩城」原作はルブラン。アルセーヌ・ルパンシリーズの名作だ。ルパンと 高校生探偵イジドール少年との対決が見ものの推理恋愛小説だ。失敗したのはこの作品を上総は読んでいなかった。シャーロキアンなＢ組の男子評議の影響で、 ホームズものは一年の段階で読破したが、しくじった。
――ホームズが出てくるなんて知らなかったんだからさ、あれって絶対、だまし討ちだよな！
にやついていた連中の顔を見て、なんとなくおかしいとは思ったのだ。
夏休みの評議委員会合宿で
「もしホームズやれなんて言われたら、俺は評議委員長の権限でやめさせるからな、忘れるなよ！」
と釘をさしておいた。案が出た時にホームズものは一作も出なかったので安心していた自分が馬鹿だった。
――よりに寄ってホームズがラストに、悪役として出てくるなんて知らなかったんだからさ。なんで、ルパン対ホームズなんて、作者が違うのに意味のないこ とするんだよ！　確かホームズ書いたコナン・ドイルが激怒したんだよな。そりゃそうだ。異国の俺が大迷惑こうむってるんだ。当然だ！
理屈は通っていないのは承知の上だ。上総はたんすの中にしまいこんである、とんびのマントを思い出してはため息をついた。きっと、あれのせいだ。

　授業が終り、冬休みの予定をそれぞれ確認した後、上総は各クラスの評議委員連中に文句を言いながら「ビデオ演劇」の予定を立てた。クランクインは一月に 入ってからでいい。できれば冬休み一週間以内で撮り終えたいということ。使うものは家庭用ビデオカメラを三台ほど。編集は青大附属高校にいらっしゃる結城 先輩に手伝ってもらおう。大道具小道具などは一年生に手伝ってもらおう。イジドール少年だけだれか一年にやらせようか、などなどだ。
　決めたいことはたくさんあるけれども、実際動くのはまだ先のことだから、上総もまだまだ余裕をもって話ができる。
「おい立村、本当に一年入れるつもりなのか？」
「本条先輩のご命令」
　不承不承上総はつぶやいた。
「俺はやだぜ。あいつら何考えてるんだよ。そりゃ本条先輩には懐いてるぜ、今の一年連中。けどさ、あいつらの態度なんだよ。特にあの新井林の奴は」
「言うな。腕力勝負では勝てないって」
　ちっと舌を鳴らしみな、二年連中は黙る。　ここでぐちぐち不満をもらすしかない二年の立場も問題だと、上総は思う。なんとか暇がある時に、うまくなだめ ようとしてみたのだが、うまくいかない。なにせ六月の一年生全校集会以来の怨念が、二年連中には漂っている。一番侮辱された上総が懸命に押えても、気持ち を変えることはできないわけだ。
「立村、お前も言う時ははっきり言えよ。本条先輩の方ばっかり向いてねえでさ」
「うん、わかってるよ」
　これ以上話を聞いていると、自分の馬鹿さ加減で泣きそうになるので早めに切り上げた。これから杉本梨南と、「おちうど」にて話をするつもりだった。
　もちろん清坂美里には、きちんと理由を告げている。

その２　ふたりの言葉が重なる

　外に出るとささくれた空気が頬を叩く。ひりひりする。今日は黒いコートだった。自転車を引っ張り出し、校門まで乗っていくとやはりポニーテールに結い上げた女子が立っていた。ケープ型の紺色コートだった。襟には真っ白いコサージがついている。
「杉本、寒くなかったか？」
「大丈夫です」
　冷たく答える杉本。この言い方で男子たちの多くはむっとするらしい。愛嬌もなにもない、言葉そのものをぽんと出すだけ。拾いあげれば見えるものがたくさんあるはずなのに。上総は頷いて自転車をひいて歩いた。
「杉本が手伝ってくれたから、無事学校祭も終わったしな。本当に助かったよ」
「当たり前です」
　ここで、
「そんなことないですよ、先輩」
とか言ってにっこり笑えば、きっと杉本に惚れる男も出てくるのだろう。それだけの容姿を持っていると上総は、男の目でそう思う。黒いポニーテールは高い位 置にくくられていて、艶やかで大きなリボンでまとめられている。咽から胸にかけてのラインが、コートの上からもはっきりわかるくらい、膨らんでいる。見て はいけないとわかっているけれど、本能が指摘する。唇のほのかな赤さ、色の白さ、どこか遠くを見据えているような真摯な瞳。たぶん、
　――杉本は、人形だったら完璧に愛されたんだろうな。
　上総からすれば、杉本の言動および行動は、ガラス張りそのものだ。言葉の陰に隠れた言葉が、みな手にとるようにわかる。自分でもその理由はわからない。 ただ、瞳を見つめて言葉を唇から受け取れば、誰にでもわかりそうなもんだと思う。どうして他の連中はこの子を誤解するのだろう。
　――少し、黙っているように言った方がいいのかな。
　一年男子連中が杉本のことを、「いつかしばいてやる」と罵っているのも聞いている。天敵たる一年Ｂ組の評議委員新井林健吾の命により、それは無理やり押 えられているとも聞いている。なんで新井林が、蛇蠍のごとく嫌っている杉本のことをかばってやっているのかはわかるようでわからなかった。正々堂々と勝負 をしたいからだそうだが、それも何か勘違いしているような気がしてならない。
「杉本、あのさ」
「何か用ですか」
　また唇を素早く開いて杉本が答える。
「俺の前では何言ってもいいからさ、一年Ｂ組にいる時だけは、男子連中に話をしない方がいいかもしれないよ。桧山先生とかにもな」
「なんでですか。真実を言うのがどこいけないんですか」
　またこれだ。おかしくなる。大抵の男子連中がぶちぎれるらしいが、どうも上総にその回路は

繋がっていないらしい。素直に、あいかわらずだとほころぶだけだ。
「世の中、言わなくていいこともたくさんあるしさ。黙って受け流して、自分の仲良しの人とだけ付き合っていくのも一つの手だと思うんだ。俺はさ」
「だから立村先輩は清坂先輩とおつきあいをされていらっしゃるんですか」
　――またこれだ。
　羽飛貴史や南雲秋世に似たようなことを投げつけられたら、けっと無視するだろうが杉本にはその気持ちが湧かない。決して恋愛感情のこもった問い返しではないとわかっているだけに、またほころびかえす。
「そうだな、うちのクラスもいろいろいるから、話の合う奴合わない奴、結構いるんだ。そういう場合はうまく受け流しておく。せっかく同じクラスにいるんだから、喧嘩してこれ以上仲悪くなるのもったいないしさ」
「そうやって立村先輩はなあなあできたのですね」
　こっくり上総は頷いた。返事はこれ以上、しなかった。
　学校裏の林を抜け、かなり闇を増した木々の間をすり抜け、抜け出た先の和風喫茶店へと向かった。二階は日本伝統芸能関連のホールも付随している和風喫茶「おちうど」。杉本とは何度も通っている、秘密の園だった。

「あらかあさくん、今日はさむいからおしるこね」
　いつもふたりで通っているので、たぶん「おちうど」のおかみさんからは恋人同士だと思われていることだろう。もしかしたら母に御注進されているかもしれ ない。それは覚悟の上だ。杉本が礼儀正しく深々と一礼をした後、後ろのソファー席に向かった。今日は雨が降りそうな天気のせいか、人は少なめだった。相変 わらず着物姿の中年女性がげらげら笑っていた。
　「おちうど」は上総の母繋がりでいろいろ融通してもらっている店だった。母の手伝いで、日本舞踊とかお茶会の手伝いにひっぱりだされることの多い上総 に、「おちうど」の女主人さんは特別手当として、「いつきてもただでお菓子とお茶をご馳走してあげる」というプレゼントをしてくれた。以来上総は、杉本や 特定の友人とふたりきりで、学校の連中にばれない話をしたい時に利用することにしていた。中学生が勇気出して入れるような雰囲気ではないし、馬鹿笑いして顰蹙を買ってしまうのもいやだ。必然、連れて入る人を選ぶことになる。もちろん杉本梨南を選んだのは、和風のこまやかな雰囲気になじめることと、しゃべる 時に馬鹿笑いしないことからだった。ちなみに清坂美里は一度も連れてきたことがない。

　つるつるすべっこい漆塗りのテーブルに、和紙のテーブルクロスが二枚。金と銀に貼り分けられていた。赤い入れ物と黒い入れ物、両方にちょこなんとおしるこを勧められた。お菓子が出るとまずは食べるのが、ふたりの約束だった。
「あのさ、杉本。今ここには誰も青大附属の連中がいないから聞くんだけどさ」
　もちで少しおなか一杯になったところで、上総は切り出した。
「新井林たちとは、相変わらずなのか」

　杉本は表情ひとつ変えずに答えた。
「男子はみな馬鹿だと思ってますので、一切無視してます。先輩に言われるまでもありません」
「そうか、そうか」
　何もしゃべっていないのだったら、少しはいい方向に向かっているのかもしれない。ほっと一息ついた。杉本梨南は一年Ｂ組の評議委員だが、実に新井林健吾 とのそりが合わない。小学校時代から同じクラスとのことだったが、それ以来のいがみ合いで尋常ならざる戦いが続いている。まあ天敵同士というのだったらよ くあることだが、問題は「男子ＶＳ女子」の系図が出来上がっていることと、杉本が新井林の恋人に対して「いじめ」をしているという噂が流れていることだ。
　生徒連中の間だけならまだいい。
「それと、佐賀さんとも、相変わらずなのか」
「許すわけいきません」
　きりりと口を結び、杉本は冷たく答えた。
「でも、まずいだろ。佐賀さん杉本のことを友だちだと思っているんだろ」
「口ばかりの女を信用するわけにはいきません」
　――女ときたかよ。　上総は再びため息をついた。これじゃあ、勝ち目がない。
　番茶を一気にすすり、おかわりをもらい、上総は杉本がしずしずとあんこをすするのを眺めていた。手馴れているのか、音を立てず上品だ。このまま時を止めて、人形にして、一年Ｂ組に連れて行ってやればきっと、この子は嫌われないですむだろうに。

　杉本はきっと、自分が来年、評議委員長に指名されるものだと思い込んでいる。
　心の奥でひりりと痛み目を背けてきたものだった。
　六月、杉本と新井林の間で激しい言い合いがあり、その際に一時、
「次期評議委員長は新井林健吾にするらしい」
という噂が飛び交った。もちろん本条先輩はしっかりと、次期評議委員長を上総にするべく釘をさしてくれたけれども、一瞬だけでも新井林最有力説が流れたのは事実だった。たぶん信用した人もいただろう。
　杉本はその時に、はっきりと、
「私は立村先輩側に立ちます」
　と言い切ってくれた。本条先輩と新井林の前で。
　いつもは
「立村先輩は救いようのない不細工で頭も悪いし、なんで清坂先輩のような可愛い彼女がいるのかわかりません」
と断言しているのにだった。正直、自分が不細工で頭が悪くてなんで美里のような恋人がいるのか信じられないというのは、本当のことだった。だからちっとも 腹が立たなかった。どうしてかわからないけれど上総はいつもそうだった。杉本の言うことの奥を、いつも覗き込んでしまう。

――評議委員長、指名してやりたいよな。でもな。
茶碗をなめたまま、上総は上目遣いで杉本を見据えた。気付かないでおしるこをすすっている杉本。
本条先輩の言葉が耳に蘇る。
――評議委員長は、一匹狼じゃできないんだよな。
もう答えが出ている。杉本梨南には不適格だということを。
男子連中を敵に回し、ただでさえ活躍中の新井林健吾を叩きのめしつつ委員会を運営していくことができるとは思えなかった。いや、杉本ひとりでだったらな んでもやり遂げるだろう。入学して以来圧倒的な学年トップの座を守っているし、一年学年全校集会の時に見せた、緻密な構成力でこしらえた「青大附中ファッ ションクイズ大会」。あれは杉本でなくてはできなかっただろう。　しかし、評議委員会はひとりではできない。
いやというほど、上総も思い知らされていた。
ビデオ演劇だってそうだ。どんなに「奇岩城」の内容が頭痛いものだったとしても、作品を発見してくれた奴はすごいと思う。音楽担当すると張り切っている 女子もいる。美里は衣裳係と、ちょい役だったらやると言ってくれている。上総もいやいやながらとんびのマントを羽織って悪役ホームズに化けることになるだ ろう。
みんなが、「やるよ、がんばるよ、応援するよ」と言ってくれること。これが一番大切だ。
幸い上総は同期の連中に恵まれている。男女八人、評議委員はみな仲がいいし、多少恋愛沙汰もあるものの、それなりに楽しく盛り上がっている。たまには、 男子同士で女子にはいえない秘密も打ち明けあったりする。二年近くたって上総も心を許せるようになってきた奴らばかりだ。
杉本にそういう子はいるのだろうか？
観察した結果、全くいなかった。
少なくとも評議委員会の中では。委員長としての資格は取り去さられる。
――対抗馬がな。
新井林健吾のつんと反り返った、筋肉ついた身体が目に浮かぶ。
バスケ部の次期キャプテンとの誉れも高く、弱小青大附中運動部を復活させる可能性の高い奴。
大抵の運動はこなし、しかも杉本に次いで成績もトップクラス。
杉本曰く、
「あの男は顔以外にとりえがない馬鹿男」
という。裏を読み取ってしまう上総のくせで、またたまらなくいとおしさを感じる。
――羽飛に近いタイプだろうな。あいつは。
当然、上総のことを軟弱者呼ばわりするのも当然だと思うし、そのことについてはあきらめ以外感じていない。どうせ、腕力で殴り合いしたところで、勝てないだろう。あっさり伸されるだろう。わかっている。
杉本と新井林との件については、過去の因縁がいろいろあり、しかも最近は恋愛沙汰も紛れ込んでいてややこやしいと聞いている。杉本からも何度か詳しい話 を聞かせてもらっている。杉本

の親友だった子が、新井林の恋人になったということで友情決裂。それ以来杉本は一切親友を無視しているが、たまたま他の女子 たちも一緒に無視してしまったために、いじめの首謀者扱いされているということ。
「私は佐賀さんを守ってあげました。馬鹿な男子たちから守ってあげました。なのに、佐賀さんは私を裏切って新井林の方につきました。だから怒るのは当たり前ではないですか」
　ごもっとも。その時は頷いたけれども、どうもひっかかり、陰でいろいろ聞いて調べた。
　素直にそうとは頷けなくなった。そして、評議委員長としての資格について疑問を持たざるを得なくなった。
　――杉本が悔しいのはわかる。わかるけどさ、でもな。
　一度、佐賀はるみ……杉本の親友だった、新井林の恋人……と話をしてみたいと、上総は思った。
　もしかしたら、かなり近い感じ方を佐賀はしているのかもしれない。
　すべては直感だった。

「あのさ、杉本、俺も前から思っていたんだけど、佐賀さんは杉本のことを友だちだと思っていたんだろ？　たまたま新井林と付き合ったんだろ？　気持ちはわかるけどさ、でも今のままだと大変なことになるよ」
「私をあそこまで嫌う相手を選んで、どうして私が無視してはいけないのですか」
　――佐賀さんにとって、杉本は親友としての価値がなかったんじゃないかな。
　上総はぼんやりと感じた。でも口に出してはいけないとセーブした。
「だってさ、友だちになりたがってることがわかるんだろ。男子連中にもそうなんだろ。だったら、表面だけでも仲良いふりした方がいいんじゃないかって思うんだ。無理に新井林と口を利く必要なんてないけど、佐賀さんとよりを戻したら、もしかして少しずつよくなるかも」
「立村先輩は小学校時代いじめられた相手にそういうようなこといえますか」
　棒読みの言葉で杉本は答えた。
「いえるのだったら言ってみてください、許すことできるんですか」
「わかんないな」
　トイレに立ち、話を断った。
　逃げているのは自分の方だった。

　杉本の言葉ひとつひとつが突き刺さってくる。
　トイレの壁にもたれ深呼吸を二回。
　たぶん杉本はすべて知っているのだろう。上総が小学校六年の時にやらかした事件の数々と、いろいろ噂に流れている女ったらし伝説を。あえて否定はしていない。それでも杉本は上総のことを慕ってくれているのだから、ありがたいこととだけ思っている。
　でも、言われるとおり、許すことができるとは思えなかった。
　――俺は心狭い奴だからな。

六年間上総はいじめられていたと思い込んでいた。今思えば、仲間に入れてくれるという、彼らなりの友情表現だったのかもしれないし、いわゆる「いじめ」 のひどいことはされていなかった。服をぬがされて解剖もされてなければ、椅子で殴られたこともない。けとばされて傷だらけになったこともない。たぶん、み な、悪ふざけ程度、プロレス程度の感覚だったのだろう。
それを「許せない。殺してやる」と思いつめた自分が馬鹿だったと、今は思い知った。
わかっているし、反省した。でもどうしても謝ることはできない。
いくら自分の思い込みが悪かったとしても、あの時感じた憎しみと恐ろしさだけは消えていない。
今でも通学路を通る時に、本品山中学の制服がちらつかないかを注意するとか、朝早く出発するのは本品山中学の通学時間にダブらないようにするためだとか。今でも姑息なやり方で逃げ回っている自分がみっともなくてならない。
――もっと堂々としろよな。なにびくびくしてるんだろ。
本条先輩の言葉がまた響く。
「ごめん、でもさ杉本。担任の桧山先生と今、うまくいってるのか？」
一番気になることを尋ねた。英語科関連の情報はかなり入ってきている。上総も気になることはちょこちょことチェックするようにしていた。職員室で質問をかまして情報提供を求めるのも、評議委員長の勤めである。
「あんなつまらない下手な授業、役立ちません」
「あ、そうか」
思わず笑った。頷けなくもない。桧山先生は二十四歳の若手英語科教師だ。この秋から一年Ｂ組の新担任となった。もとの担任が身体を壊して入院し、長引きそうということでの判断だった。
ひそかに女子からも人気があるのだが、硬派でかつ男子たちのことを強烈に可愛がるということで、一部からは非難の声も上がっている。杉本もそのひとりのはずだ。
「つまらない授業なので、自分で毎日英語の勉強をしています。立村先輩、どういう勉強をなさってますか。大学の授業というのは、はるかにましですか」
「いや、大学の授業ったって、なんか映画みたり、小説の読解やったり、あといろいろな話聞いたりとかだからさ」
話をもごもごまかした。あまり聞かれたくないことを杉本は突いてくる。席を立ちたくなるけれど、杉本だから許せてしまう。どうしてかわからない。
「でもな、やはり先生たちとうまくやっていった方があとで楽だよ。俺も人のこと言えないけどさ」
「そうですよね。立村先輩、宿泊研修で大騒ぎをひきおこしたそうですね」
「よく覚えてるな、そうだよ」
黒く艶やかな杉本のまなざし。いつもそこをじっと見詰めると震えているのがわかる。本人も気付いていないに違いない。それを見るたびにほっとする。
――いつか怒らせるんでないかって思ってるんだろうな。

大抵の男子、先生は怒ったのだろう。よろいをいつ着てもいいという準備の姿。
ありのままの杉本のまま、上総は見つめていたかった。

「うまくいえないんだけどさ、杉本」
説教臭くなりそうでいやだけど言うしかなかった。
「今、桧山先生がいろいろといじめ問題について取り組んでるってのは知ってるだろ。二年、三年もホームルームでいろいろ言われているけれども、一番叩かれ やすいのは一年だと思うんだ。それに、杉本も誤解されやすいことが多いから、もしかしたら桧山先生に文句を言われてしまうかもしれないんだ。たたでさえ新 井林とのことがからんでいるし。せめて、今のうちに佐賀さんと仲直りするか、したふりをしたほうがいいよ。無理に親友にならなくたっていいけれど、ふつう に話をする程度のことはしたほうがいいよ」
「先輩もできもしないことを良くいうものですね。もし先輩が同じことされたらどうしますか。裏切られた私の立場をわかってくれないんですか」
「世の中のほとんどは理解してくれないと思うよ」
これだけ言い切った。時計を覗き込んだ。
「じゃあ、今日はこの辺にするか」
まだ残っていたそうだったけれども、杉本は立ち上がった。
「立村先輩、新井林には気をつけてください。先輩よりも動きが早くてすばしこくて、頭もいい相手なんです。私をスパイにして使ってください。私にしてほしいことがあったら、何でも言ってください。私が顔を出さないでできることなら大丈夫です」
左右にポニーテールのふりこが揺れた。
きちんと揃えられた長髪を眺めて、自分もコートを羽織り、上総は外の景色を眺めた。
完璧に闇だった。何も見えなかった。危険だから遠回りだけれども林の外側を通って帰ろう。杉本を送っていこう。
――どうにかなんないかな。本当は杉本を「ビデオ演劇」の音楽担当にさせられればかなり面白いんだけどな。なにせ「ルパン」だろ。やはりしゃれたクラ シックとかジャズとか、そういうものでまとめると面白そうな気するんだけどな。でもそうなると、高校生イジドール探偵を新井林にするという案が通らなくな る。ただでさえいがみあっている二人が、協力するなんてまず不可能だしな。

杉本を送り届けた後、上総は自転車のライトをつけたまま勢い良くペダルを踏んだ。剣の風が髪に刺さり痛かった。
――でも、それ以前の問題として、一年Ｂ組、無事来年評議委員あのふたりで決まるのか？
英語科に立ち寄った際耳にした噂。
――もともと先生とは折り合い悪いと聞いてたけどさ、杉本と桧山先生相変わらずいがみあってるんだろ。まあ、授業が悲惨だっていうのは噂に聞いていたけ どさ。でもそういうのは勝手にこっちで勉強すればなんとかなることだろ。そのくらいがまんしたっていいだろう。それとも

なにかな、あの先生、男子をやたら とひいきしている男尊女卑野郎だとも聞いたことがある。男子が宿題忘れた時は教室で立たせるだけだけど、女子の時は廊下に出してバケツ持たせるって。ちょっと差別でないかって杉本が抗議したら、女子は一度甘やかすとくせになるからなって鼻で笑ったらしい。それは確かに俺も問題あるんじゃないかって思う よ。でも、このままだと杉本のことをどんどん叩く方向に進むんじゃないかな。ただでさえ、佐賀さんと新井林の問題が片付いてないのに、杉本ももう少し、新 井林とうまくやっていけたらいいんだけどな。新井林も必死にがまんしているみたいだし、杉本がもう少しなあ。

　でもがまんできない理由も、ガラスの奥から透けて見えた。

　――恋愛感情なんてわかんないけど。

　新井林について口にする時の杉本の瞳、また震えていたのをいつも知っていた。

　――顔だけの馬鹿男か。杉本は面食いなんだよな。

　家に着く頃には手もかじかみ、指の先がちりちりと痛かった。風邪を引きそうで三回連続してくしゃみをした。鼻をすすりながら玄関に入った。父はまだ帰っ ていなかった。当たり前だった。最近は仕事が忙しいので、上総が寝入っている時にしか来ないらしい。特別しゃべりたいこともない。

　いつものように食事を冷蔵庫から出して、温めて食べていると電話がかかってきた。急いで咽に流し込み、受話器を取った。

　――立村くん？

　聞きなれた清坂美里の声だった。

「あ、清坂氏か」

　――うん、あのね。

　ひっかかることない軽やかな調子で、美里がひとりで話し出す。上総は頷きながら聞いていたけれども、きっとだんまりを決め込んでいると思われているだろう。怒っているかもしれない。気付いてあわてて、

「うん、うん、それで」

　とあいづちを打った。

　清坂美里と付き合い始めたのは六月の最初だった。

　入学式の時、幼なじみだという羽飛貴史と友だちになったことがきっかけで、美里とも顔なじみとなり自然のなりゆきというのが正直なところ。途中、言い合 いになったり、別れを言い出したりとかいろいろあったけれども、雨降って地固まる。今は羽飛を挟んで仲良くおしゃべりする仲だ。

　――でね、立村くん。今日は杉本さんと話をしてたんでしょ。

「うん、いろいろ気になることがあったからさ」

　かいつまんで上総は、一年Ｂ組に関する理由を挙げた。

　――杉本さん可愛いのに、誤解されやすいよね。

「そうされて仕方ない理由ってのもあるしな。でもあまり突っ込むと顰蹙かいそうだしさ」
　――そうそう。でね、立村くんがずっと気にしてたでしょ。杉本さんの友だちがどうのこうのってこと。
　佐賀はるみについての情報を欲しいと前から思っていた。時折、美里にも相談したりしていた。変な誤解はされていないはずだ。その証拠に、美里はふくれていない。
「ああ、佐賀さんという人のことだよな」
　――新井林くんの彼女。ちょっと情報を集めてみたんだ。
「え、もうか？」
　――ふふふ、そりゃあ簡単よ。こずえがいるもの。
「古川さんも知ってるのかよ」
　――こずえはもともと杉本さん大好きだから、純粋に心配してあげてるのよ。立村くんのことはどうだかわかんないけどね。
　杉本と仲良しだというのは、前から気付いていたけれども。ちなみに古川こずえとは、上総の隣り席で毎朝「朝の下ネタ漫才」をかます相方だ。断じて上総が希望したわけではない。何が楽しくて
「ねえ、あんた今日朝立ちあった？」
ということに答えなくてはならないのか。
「明日、古川さんに何言われるか怖いな」
　本音を持って上総は答えた。
　――大丈夫。私も少し手加減しなって言っといたから。
　古川こずえは美里の親友である。おさえは、利かない。

　――もともとは杉本さん、その佐賀さんって子のことをいろいろ面倒みてきたみたいなの。男子たちとその頃からうまくいってなかったみたいだから。佐賀さんにもとばっちりがきたってことじゃないかな。
　そりゃそうだろう。この辺は上総も知っている。
　――でもね、六年の時にきっかけがあって、佐賀さんは新井林くんと付き合い出して、杉本さんをおろそかにしたらしいの。それで杉本さんはものすごく傷ついたんだって。
　本人の会話でもって知っている。
　――けどねえ、正直なところ、私がもし佐賀さんの立場だったとしたら、やだろうなあって思うよ。何から何まで、それこそノートの形とか、エンピツとか、 消しゴムから、みな杉本さんの形に合わせさせられてたってことだもん。杉本さんはもともと、大人みたいなのが好きでしょ。可愛い感じのものって嫌いで しょ。でも、佐賀さんはそういうのが大好きだったみたいで、周りではかわいそうがられてたんだって。
「かわいそうがられてたって、佐賀さんをか」
　――そう。だから新井林くんを佐賀さんが選んだって話を聞いた段階で、周りは「やっぱりね」って思ったらしいんだ。

杉本がもともと男子受けしない人間だというのはわかっていた。
でも女子受けするのは。
――で、その佐賀さんって子なんだけどね。うーん、言っていいのかなあ。
「情報として聞かせてもらえると助かるな」
――私のこと、悪口マシーンだなんて言わないでよ。
「言わない言わない。清坂氏のことは長い付き合いでよくわかってるって」
――じゃあ言うけど。あのね、なんかいわゆる「ぶりっこ」って感じらしいんだ。男子や先生の前では、杉本さんのことを「かわいそう」とか言って同情する ような言い方するらしいの。髪型も、ほら、貴史の大好きな鈴蘭優ばりの編み上げ中華娘っぽい感じにしてるし。目立つのよ。うーんと、なんか女子からは顰蹙 かいそうな子って感じなんだ。近いとすれば、杉浦さんみたいな感じ。
「そうなんだ。そうか」
上総は繰り返し相槌を打った。回路が繋がり息が詰まった。身体が冷えた。
――だから、女子たちもみな杉本さんの味方になって無視していたらしいんだ。本当は杉本さんと佐賀さんのけんかって感じだったんだけど、いつのまにかクラス一丸になっての「いじめ」になっちゃったみたいで。
「けどそれじゃあ、杉本をかばいたくてもかばえないよな」
――難しいとこ。さらにややこしくしてるのがね、杉本さんって新井林くんと異常に仲悪いでしょう。それで新井林くんが佐賀さんの彼氏でしょう。だから、 佐賀さんをいじめる奴は杉本さんなんだって決め付けて、いろいろ,文句言ってるらしいの。究めつけが桧山先生。桧山先生はもともと男子びいきで新井林くん のことが大好きだって。だから杉本さんのことが完全に、いじめのボスなんだって目で見ているらしいの。なんか不公平だよね。単に杉本さんと佐賀さんが仲悪 くなっただけなのに、ね。
「でもさ、佐賀さんからしたら、新井林がいるからもう怖いものないんだろ。杉本のことなんてどうでもいいんだろ。それならそれで」
――でも女子にシカトされちゃうのって辛いよ。
「女子のことはよくわかんないなあ。とにかく、杉本にもかなり問題ありってことはよくわかった。ありがとう。あとは佐賀さんに直接話をきいてみたいんだけど、それは難しいよな」
声がとんがった。驚いた。
――やめなさいよそれは。だってあの子、新井林くんの彼女なのよ。あんた、もし新井林くんに誤解されたらどうするのよ。立村くん、あんた決闘申し込まれて勝てると思ってるの？
痛いところを突かれた。
美里の言葉は続く続く。
――新井林くんって見た目、めちゃくちゃ硬派でしょ。いかにも男って感じで一年二年の間で人気高いみたいよ。どこの誰かとは違って、昼行灯なんて言われてないし！
「昼行灯で悪かったな」
力なく言い返した。

――それに、運動も抜群でしょ。本条先輩だって一時期は立村くんを飛ばして評議委員長にしようとしてたって噂流れたくらいなんだからね。でも、今はひた すら佐賀さん命で、いつも側に寄り添ってるんだよ。そうそう、立村くんも知ってるでしょ。一年Ｂ組前の廊下に「青潟大学附属中学スポーツ」って壁新聞でき たのって。

とっくの昔に知っている。何度も観にいっている。

――あれ、新井林くんがなんとかして運動部を盛り上げようってことで、一生懸命に自分なりに何かしようってやり始めたことなんだって。やりたいことがあ れば自分でやろうってとこが、やっぱりかっこいいって私も思うもの。佐賀さんに書いてもらうの手伝ってもらってるんだって。私も知らなかったなあ。バスケ 部ってぼろ負けしまくってるて噂しか聞いてなかったけど、新井林くんってシュートそのものは決めてるんだね。すごい。立村くん、バスケあまり得意じゃない でしょ。いつもシュートチャンスがきても、ボール貴史に回しちゃうでしょ。新井林くん、かなり遠いところからでも勝負かけるってとこあるらしいと初めて聞 いたわ。すごいよねえ。

男としては屈辱的なことを言われていても頷くしかない。

休み時間に体育館でバスケボールとじゃれることはある。貴史の方がシュートを決める確率高いから、そちらに回した方がいいだろうと判断してのことだ。み な、よく見ているもんだ。上総が自分でシュートしても、かならずひっかかるか壁に当たるかのどっちかだ。確率の問題なのにどうして美里はいきなりきついこ とを言い出すのだろう。

「わかってます。反省してます」

――いいよ。立村くんバスケができないことを責めてるわけじゃないから。とにかく、私が言いたいのはね。

美里は力をこめていた。

――真っ正面から勝負したら、立村くん、新井林くんにあっさり負けちゃうよ。佐賀さんについては当たらず触らずの方がいいよ。それよりも、杉本さんをなんとかしてあげたほうが絶対いいよ！

一通り軽い話題もかわした後、受話器を置いた。

切る直前に美里がささやきかけてくれた言葉だけが救いだった。

――立村くん、きついこと言ってごめんね。でもね、私も貴史もこずえも、立村くんのこと、バスケがどうとか数学がどうとか、そんなことで嫌いになることなんてないんだからね。忘れないでよ。

新井林健吾。いつかは対峙しなくてはならない相手だ。

いつまでもボールを渡してごまかしてはいられない。

心臓が苦しくなった、めまいがした。上総は部屋に向かい、子供向けリライト版「奇岩城」をめくり始めた。ルパン、ホームズ、そしてイジドール少年の出番をどう配置して脚本を作るべきか。上総の担当は悪役ホームズと、台本の作成係だった。

その３　本棚の空気が揺れてる

「立村くん、ちょっといいかな」
　男らしい、という表現がぴったりな英語担当・桧山先生に呼び止められた。凛々しい剣士といった方が近いかもしれない。一学期まではまだ担任を持っていな かったけれども、二学期に一年Ｂ組を急遽担当することになった。一Ｂと言ったら問題てんこもりのクラスで知らぬものはない。新井林健吾ＶＳ杉本梨南の 日々、舌戦が繰り広げられているらしいとのこと。
　上総の知っている範囲だと、桧山先生は学校祭の前あたりまでに、だいたいの処理を終わらせてしまったらしい。杉本梨南の口ぶりによると、
「完全なる男尊女卑の方針を貫きたいようです。自分がもっと勉強するべきなのに、全くわかっていません。あきれたものです」
　とのこと。心にしまっておけばいいのに、と上総ははらはらさせられた。心配しても無駄なのはわかっているけれど。
　――杉本も、黙っていればこれ以上傷つかないですむのに。
　自分ができることは、杉本が座ったまなざしのもと、現在の一年Ｂ組状況が杉本不利の態勢である旨、しっかと聞いてやることくらいだった。上総の頭ではい い方法なんて簡単に見つからないかもしれない。でも、杉本の瞳の奥に震えるものを、見つめ続けることはできる。声にならない悲鳴を、聞き取ることだけはで きる。

「なにか御用でしょうか、先生」
　たまたま、南雲と図書館でだべっていたところだった。放課後、別に用はなかったのだけれども、なんとなく帰りたくない時もある。
　南雲が先に明るく返事をしてくれた。上総は付き合いで頭を下げた。
「この前、立村くんは俺の卒論を読みたいとか言ってなかったかな」
　いきなり切り出されて思い出すのに時間がかかった。あたふたして本を閉じたりひらいたりしている上総を見かねてか、隣りの南雲が代わりに答えてくれた。
「そんとき俺もいたから覚えてるよ、りっちゃん。あの、確か、ハーディの『テス』だったっけ」
　――なぐちゃんありがとう。恩に着る。
　心で頭を深く下げ、現実世界では軽く頷き上総はすぐに答えた。
「あ、そうです。あの、先生は青大の英文科だったと伺ってますが……」
「そうだよ、ああ、君はそうだね、今年から大学の講義をいくつか取っているんだったよなあ」
　どうして知っているのか分からなかった。一年の担任がだ。
「俺がお世話になった教授の授業だよ。確か、ハーディの専門だろ」
　何度も頷くけれども、正直なところ授業は話を聞いているだけだった。聞いている分には面白いのだけれども、なんとなく授業という感じがしなかった。人の 話を聞きに行っているだけ。これで「授業」と言って許されるんだろうかと不思議に思っていた。それに大学生たちは目の前で

みんな寝ている。中学の英語の授 業の方がよっぽど、みな真面目なもんだと上総はつくづく思う。
「どうだ、面白いか？　俺はよくわかんなかったなあ」
「面白いと、思います」
　気取っていると思われそうで不安だったけれども、上総は頷いた。
「そうか。でも翻訳を読んだことあるのか？」
「あります。小学校の時に」
　また背伸びしていると言われそうだけど本当のことなんで、答えた。
「そうなのか。なら、もしな立村くんが読みたいのだったらなんだが。俺の卒論、生の読んでみないか？　たぶんあの教授、最後にレポートを提出させるはずな んだよ。まあ立村くんにはそこまで求めないかもしれないけれど、大学生のお兄さんお姉さんたちがどういうのを書くのか、興味はなくないか？」
　――興味ないわけじゃないけどさ。
　上総は答えるのに戸惑っていた。なんといえばいいのだろう。顔はにこやかだし、男から見てもいい感じの雰囲気だ。腕力はありそうだし、顔もくっきりしている。
　杉本が言うには「女子たちの人気は一応ある」とのことだ。
　「売れない俳優」みたいだともいう。
　もっと気持ちよくいい人だと思えればいいのだが。
　しかし上総の本能ではどうも、うさんくささが匂ってならない。うまくいえないのだけれども、おならをした後の空気という雰囲気だろうか。
「けど、僕はまだそういうのわからないと思うし」
「いや、そんなことないよ。立村くん、この前別の英作文の講義でちゃんと、レポート書いたんだろ？　話は聞いてるよ。文章は非常にうまいし、大学生でもここまで書ける奴はいないって、研究室の連中が誉めてたって」
「あれはたまたま、得意なとこが出たし、先生も親切だったから」
「いやいや、そう謙遜しなさんな。立村くん、自分に自信を持つことは大切だよ。そうだ、あさっての放課後、生徒指導室に来てくれないかな。あまり他の先生たちには見せたくない内容なんだ。やはり大人にべらべら見せるとな、いろいろ粗も見えるしさ」
　肩をつついてにやっとするのは南雲だ。いつもながらすかっとした笑顔だ。
「りっちゃん、チャンスじゃん。貸してもらっちまえよ」
　桧山先生の顔をもう一度見つめ返した。おならの匂いみたいなものは気のせいだったのかもと、思うくらいのさっぱりした顔だった。ただ、まだ重たいものが顔の前をふらふらしているようだった。
「じゃあ、あさって、生徒指導室でな」
　上総の答えを待たず、桧山先生は足早に図書館を出て行った。背広姿で隙のない姿。背はぴんとして、実に男前だ。見ただけで男、と断言できる魅力。

「すげえなありっちゃん。俺、頭悪いからなあ。ところで『テス』ってどんな話？」
「ふたりの男に惚れられて、最後にかたっぽの人を殺してしまう女の人の話」
　まだぼうっとしたまま、上総は答えた。あまり適切なあらすじではないけれども。
「こええなあ」
「けど、宗教関係のことがわからないと、俺もよくわかんないな」
「面白い？」
「たぶん先生にとっては、おもしろかったんじゃないかな。卒論にしたくらいだから」
　上総はため息をついた後、別の話題に切り替えた。

　――旧家の娘という冗談を間に受けたテスの両親は、さっそくそこの旧家へ奉公に出す。がしかし、そこのどら息子に見初められて無理やり関係を迫られ妊娠 してしまう。逃げ帰って子どもを産んだものの、すぐに死んでしまう二重苦。人生やり直そうと別の場所で働くテス、性格の純粋さと美貌でもって、幸せな恋が 芽生え結婚までたどり着く。しかしながらあまりにも純粋すぎて嘘のつけないテスは、よりに寄って相手の男へ初夜、告白してしまう。自分だって女遊びしたこ とあるくせに女の過去は許せないという困った男。ぶちぎれた相手は許してくれず逃げ出してしまう。そして……。

　はっきり言うと、男ふたりの馬鹿さかげんに情けなくなる小説だ。
　作品がどうのこうのというのではなく、女主人公テスの出会う男がどうしてこうも情けない奴なのか。
　自分が男であることがみじめになりそうだった。
　上総も話の内容をすべて理解したわけではないけれども、怒りで手が震えんばかりだったことを覚えている。面白かったか、と聞かれて、泣きましたと答えるのが正確だったかもしれないと思う。
　しかし、ほとんど顔も覚えられていない桧山先生に、なぜ呼び止められたのかわからなかった。考えられるのは、一年Ｂ組の男女評議委員のいがみ合いかもし れないが、だからといって「テス」の話題を持ち出すようなことはふつうしないだろう。卒論を見せてくれるのはそりゃあ面白そうだけど、なんで職員室ではい けないのだろう。考えれば考えるほどわけがわからず、気持ちが悪い。
　でも南雲に話しても、
「それはりっちゃん、考えすぎだよ」
と言われるのがオチだろう。上総はおとなしく従うことにした。桧山先生の言葉ではなく、親愛なる友人、南雲秋世に。

　――さて、どうしようか。
　規律委員の連中と、「青大附中ファッションチェック」の資料を集めに行く……別名、洋服屋を冷やかす……南雲を見送り、上総はしばらく図書館の机でうた たねしていた。最近は夜眠れず

授業中に居眠りしてしまうことが多い。しょっちゅう教科書で頭を殴られているような気がする。
　――やっぱり、話を聞かないと片手落ちだよな。
　美里には止められているけれども、やはり佐賀はるみを捕まえて、一度杉本梨南に対する本音を聞いてみないと一歩も前に進めない。そんな気がした。噂や美 里情報によると、明らかに「男子受けはいいが女子には不人気」、ある意味いじめられても仕方ないタイプの子であるらしい。上総も幾度か見かけたことがあ る。清楚と思う。細かく三つ編みにした髪を、器用に丸めて耳の上に留めている。中国の少女がチャイナ服を着てポーズとっていそうな感じだった。
「新井林の好みって保守的だよなあ。典型的亭主関白を狙いたい性格だなあ」
　本条先輩が深くため息を吐いていた。付け加えて、
「それに引き換え、立村、お前は完全にかかあ天下だもんなあ」
　とこづくのはやめてほしかった。
　――ああいうタイプが好きな奴は多いだろうな。けどなあ。
　どうも上総には苦手な感じがした。いや、厳密にいうと、なんとなく避けたい感じがする。できれば一対一で話をしたくない。たぶん挨拶をすれば返事が返っ てくるのだろうが、それ以上の会話をしたくない。美里やこずえのようにこてんぱんに言い負かされることはないかもしれない。かわりに、自然と要求の飲ませ られて頷くしかない、催眠術にかけられてしまいそうな気がした。
　たかが一年の女子にそんな恐れ、感じるのも変なのだが。
　――羽飛は、鈴蘭優に似てるから可愛いとか寝言みたいなこと言ってたな。
　正直、上総の好みは鈴蘭優ではない。なんで貴史があそこまで熱を上げるのか謎である。音程がかなりずれているあの状態で、レコードを出すというのは、何か間違っているような気がする。
　――かくなる上は、お姉さんに頼むとするか。
　今朝から考えていた案を実行したくて、上総は図書カウンターに向かった。

「古川さん、ちょっと相談があるんだけど、いいかな」
　信じがたい事実だが、古川こずえは本日、図書局員のお仕事中なのである。
「なによ立村。いきなりなんなの？　ははん、大学図書館からやばい本借りたいんでしょ。江戸時代の春画とかさ。あれってもろ、だってよ。やめときな。ちゃんとエロ本は自腹で揃えなよ」
「人が話をする前によけいな想像力働かせるのはやめろよな」
おとなしげにカウンター席にて文庫本を五冊くらい重ねている古川こずえ。しかしながら出てくる言葉は相変わらずの下ネタ攻撃だ。いつもだったらこずえの当番をずらして借りるのが常なのだが、本人に用があるんだ、しかたない。
「とにかく、ひとつ頼みがあるんだ。ちょっとだけ出てこれないかな」
　隣りで一年の女子らしい子が、こずえに頷き返している。先輩どうぞ、の合図だろうか。ちなみに図書局は部活扱いなので、委員会活動のように過剰な締め付けは一切ない。確かこずえは中

途入局のはずだ。
「ったくほんと、あんたってガキよね。がまんできないんだからさ」
　悪口は受け止める覚悟あり。上総は軽く一年の女子に手を合わせ、こずえには背を向けて角の百科事典並びに向かった。ほこり臭い本ばかりで、借りる奴はまずいない。旧かなづかいの本なんて、小口に埃が溜まったままだってことを上総はちゃんと知っている。

　こずえは肩をすくめながら、ポケットから小さな丸いものを取り出し、口に放り込んだ。ほっぺたを右、左と交互に膨らませた。
「さっきからあんた、南雲としゃべってたよねえ。桧山先生とも」
「良く見てたな」
　カウンターから様子をうかがってたところを見ると、話は早い。
「さては美里をまた怒らせたとか？　やあよ。また私にまでとばっちりくるなんてさ。あんた男子だからわからないかもしれないけど、美里をなだめるのって大変なんだからさ」
「違う。今回は清坂氏とは関係ない」
　きっぱり答えた。その辺誤解をさせないように。声が冷たくなったみたいで、こずえがむくつけた表情を見せた。
「なによ、そうびびらなくたっていいでしょが」
「ここなら誰もいないな」
　百科事典の並んだ本棚はベルトの少し上くらいの高さだった。窓がうっすらと曇っている。雨が降りそうな天気で、すでに図書室は蛍光灯全開だ。上総はこず えを手招きして一番角のところにもたれるようしぐさで示した。わざとらしくため息をついたけれども、こずえは逆らわなかった。ふたり、並んで棚に持たれ た。前にも横にも、聞こえる場所には人がいなかった。

「杉本のことなんだけど」
　たぶん巨乳目当てかとつっこみをされること覚悟で切り出した。
「古川さん、杉本とは結構仲良いだろ」
「あの子おもしろいし、話してて飽きないもんね。いい子だよ。男子なんであんないい子嫌うんだろうね。あんた、こういうとこだけは人間として崩れてないね」
　共感するところもあるが、話をとにかく進めたい。無視した。
「じゃあ、今の一年女子たちが何かごたごたしてるってことも知ってるよな」
「あんたが知ってることくらいは十分にね」
「ありがたい。あのさそれでさ」
　上総はもう一度息を殺すようにしてこずえの肩に話し掛けた。髪の毛が短いので耳のかたちがはっきり見える。
「佐賀さんって女子のことは、聞いてるか」
「ああ、あの子よねえ。杉本さんを見捨てて男を取ったっていう」
　思いっきり顔をしかめるこずえ。どうやら上総の読みは当たっていたようだ。美里も悪口を言

わないように気を遣いつつも「ぶりっこ」と言っていたではないか。たぶんその通りなのだろう。できるだけ中立を保とうとして上総は続けた。
「新井林と付き合っているのは知っている。でも今、一年Ｂ組で杉本が佐賀さんをいじめているってことになっているんだろ。そうとうきつい状態なんじゃないか？」
「らしいよね。私も見たわけじゃないけど、ありゃあ杉本さんがかわいそうだよ。だってさ、ずっと杉本さんがかばってあげてたのにさ、いきなり手のひら返し たように男子に走るんだもんね。ちょっとなあって感じだよ。ほら、美里が私との友情捨てて羽飛と付き合うってパターンと一緒よ」
　――それとこれとは全然違うと思うんだが。
　言いたいのをがまんした。倍返しは避けたい。
「もともと仲の悪い新井林と、自分の親友とが付き合ってしまった。杉本はそれが許せないから、無視してるってだけなんだな」
「そうだよ。あんたもよく知ってるねえ。ただ運が悪いことにね、クラスの女子も佐賀さんがぶりっ子っぽいことしてるのが面白くないって言って、真似し ちゃったらしいんだよね。杉本さんももともと女子とは線引いた感じで付き合ってるみたいだし。ひとりだけ、ちょっとつっぱった女の子と仲良くしてるけど、 あとはみんな二年とかあんたとか、そのくらいだよ。佐賀さんがいじめられているというけど、あの子他のクラスにも友だちいるって言ってるし、杉本さんの方がずっと孤独だよ」
「孤独？」
　こずえは大きく頷いた。拳骨を握り締めてはあっと息を吹きかけた。
「男子にはわかんないかもしれないけどさ。佐賀さんみたいな態度の子って、なんかむかつくんだよね。たまにあんたもそういうこと言うでしょが。俺が悪いんだ、みんな自分が悪いんだって顔して。やたらと顔色覗き込んだりして」
「そんなことしてないだろ」
　ポケットに両手をつっこんだまま、上総は足下に吐き捨てるようつぶやいた。
「自覚ないってのが、佐賀さんと一緒だよ。あんたもまったくガキなんだから。でもまあ、あんたは女子に色目使ってないし、受けも悪いし、佐賀さん現象もそれほどではないしさ」「なんだよその佐賀さん現象ってさ」
　どうやらこずえも、佐賀はるみにはいい印象を持っていないということがわかった。
　そりゃそうだろう。もともと杉本梨南のことが大好きで、いつぞやは
「杉本さん頭いいんだから、一年飛び級しちゃって二年Ｄ組に来ればいいのにね。あ、だめか。あのぼいんで立村の理性が飛んじゃうか」
と朝の漫才をかまされたことがある。「ばかばかしい」の一言で打ち捨てたけれども、提案そのものは鋭いと思う。
「けどさ、男子ってああいう子、好きなんだよねえ。あんたは例外としてもさ、羽飛だって鈴蘭優って感じの子好きだしさ」
「単にそれが原因かよ」

　それ以上は言わないでおいた。上総なりの気遣いだった。なにせこの人は、一年の時から「姉さん」だったのだから。毎朝、「朝の下ネタ漫才」をかまされて頭が痛いところもあるけれども、だからこそ浮かないですんだところも認めざるを得ない。
「ま、杉本さんを守りたいってことだったら、私は協力するよ。美里には黙ってあげるからさ」
「それとこれとは違うだろ！」
　思わず声が出た。一瞬だけ静まりすぐにざわめきがぶり返し安心した。
「なあにあせってんのよ。だから立村、あんたはガキだってのよ。それより、立村、佐賀さんと話したことあるの」
「ないよ。清坂氏にも止められた。やめとけって。かえって杉本の立場が悪くなるって」
　こずえはにんまりしながら、鼻の下を人差し指でこすった。
「美里の立場も悪くなるかもしれないしね。ま、それはそうとして、あんたからみて佐賀さんってどんな子に見えるわけ。やっぱり一年の馬鹿男子連中とか、鈴蘭優ファンくずれとか、そいつらと同じ目で見てるってわけ？」
「俺は鈴蘭優ってそんないいと思わないし……」
　腰を書籍棚に打ちつけたまま、上総は軽くうつむいた。数回すれ違った程度で、印象もさほど残っていない。唯一強烈だったのは、六月の一年全校集会で新井林の相手役として体育館で、手のひらキスを受けていたところだろうか。杉本とは正反対の性格であろうことがうかがえた。
「あのさ立村、もしかして、顔、覚えてないとか言わない？」
　答えなかった。あの時は顔が暗くてよく見えなかった。頷くしかない。
「そうだよねえ、あんたってさ、人の顔覚えづらい性格だよねえ」
「悪かったな」
　ぽん、と握りこぶしを包むように手を打ったこずえ。にんまりではなく、今度はすっきりと笑顔だった。
「じゃあさ、ちょっとつきあいなよ。体育館の戸口にいるよ。佐賀さん。まずはあんたの目でどんな子か見てみなよ」
　上総の答えを待たずに、こずえは口笛を吹くように口を尖らせ背を向けた。一度ぴいっと鳴ったっきり、あとは息が唇の隙間から洩れるだけ。
　――下手なくせに。
　つぶやきながら書籍棚をくぐりぬけ、こずえの背を追いかけていった。足が速いけれども、ついていけないほどではない。扉を閉めた後、こずえは立ち止まりささやいた。
「じゃあ、これからのことは、美里にも杉本さんにも、内緒にしとくんだよ。わかったね、わが弟よ」
「わかりました、お姉さま」
　どうせ一度は佐賀はるみと話をして、杉本の言い分と擦り合わせてみたいと思っていた。ちょっと早まった程度だったらそれでもいい。美里に止められたのに こずえに言い寄って頼んだような形だから、ちょっとまずいかもしれない。あとでこずえと雁首並べて、美里に怒鳴られそうな気がした。

「ばかだね、あんた何誤解気にしてるのさ。そういうとこが女々しいってのよ。立村。あんた、次期評議委員長なんでしょが。可愛い後輩たちの面倒を見たり、問題が起こっていたらできるだけ手助けしてやるのが人間でしょうが。あんた義務よ、義務って奴」
　――よけいなお世話って気もするけどな。
　一年Ｂ組教室前を通る。大きく「青大附中スポーツ新聞」が二枚、模造紙にでかでかと張られていた。きれいな字だった。柔らかい、筆で書いたような感じ。心なしか自分の手に似ているような気がした。
「ああ、あれね、噂の青大附中スポーツ新聞ね。新井林がいきなり『部活動最優先主義』革命したいとか言い出して、勝手にやり始めたって奴」
「バスケ部一年の次期キャプテンだから、運動部がここまでレベル低いってことに頭に来たんだろう」
「あんたも卓球やってたらもう少し、人生変わったかもね」
「冗談じゃない。俺は評議委員会だけで十分だ」
　しばらく言葉のキャッチボールを続けていた。美里とも、杉本とも違う感じでしゃべることができる、古川こずえという女子。実をいうと小学校時代、一番た くさんいたタイプの女子だったのではと上総は感じる。とにかくうるさい、はしゃぐ。一言文句をいうと百倍プラス利子をつけて返してくる。きんきんと耳に痛 い女子が上総は苦手だったはず、だった。
　――慣れたんだろうな、俺も。
　たまたま美里と仲良しでかつ、貴史に恋焦がれているこずえだったから、中間の位置にいる上総にちょっかいをかけるのは、当然といえば当然だろう。二歳下 の弟がいて、上総にそっくりだから話し掛けやすいというのもあるのだろう。こちらとしては下ネタの連呼をされるのがたまったもんじゃないが。
　ただ青大附中二年Ｄ組の教室内ではまったく、痛さを感じない。もちろん結構きついことを言われて、人目につかないところでどんより落ち込んだりすることはある。でも、後を引かない。
　――いいかげん羽飛も、古川さんのこと考えてみるってのもいいんじゃないかな。
　上総なりには気遣ってやったりもする。わざと席を隣りにしてやったりもするし、ふたりいいムードだと判断したら席を外すようにしたりしている。しかし、「鈴蘭優命」の貴史はこずえとふたりっきりになるのがどうも苦手らしい。まあ、鈴蘭優とは全く似ても似つかないのだから、仕方がないといえばそうなんだ が。
「ほら、立村、見てみな。戸口のところにいるよ」
　ちょうど曲がり角。相手からは見えないがこちらからは十分観察できる場所。
　佐賀はるみは体育館の入り口で、両手を組み合わせるようにしてまっすぐ立っていた。

「体育館、何してるんだ」
「ばかね、気付かないの？　バスケ部の練習に決まってるっしょが。あの子の彼氏誰だか分かってるでしょが」
　――そうか、新井林のつきあい相手だもんな。

改めて思い出した。それが問題の発端なのに忘れてるなんておばかもいいとこだ。
一年の公認カップルで、異様なほどのべたべたぶりは二年、三年の間でも知らぬものなし。
一緒に帰る程度なら多少はしていることだけれども、休み時間ほとんど離れることがなく、部活が終わるまでじっと立ち尽くして待っている。どうしても帰ら なくてはならない時は、門の所まで新井林が送る。さらに、新井林の眼の届かない場所で佐賀への「いじめ」が行われるのを危惧してか、一年男子たちにも女子 たちへの監視を怠らぬよう命令している。運動万能成績優秀、彫りの深い顔立ちにたっぱも十分。男としての能力価値は完璧だ。すでに来年のキャプテン任命は 決定事項だとも聞いている。三年が引退する前に下級生へキャプテンを譲るというのは、非常に珍しいことだ。それだけずば抜けていると考えていいのだろう。
――本条先輩もそう思ってるから、だったんだよな。
こずえを片手でけん制しつつ、上総もじっくりつ佐賀はるみの姿を観察することにした。横顔がはっきりと見える。蛍光灯で顔が照らされている。少し青白く、唇の赤さだけが目立った。いつも巻き上げている髪型が、この日はだいぶ乱れていた。肩に長くひとふさ垂れていた。
「ねえ、どう？　ああいう子だよ」
「見た目だけで判断するのはどうかと思うよ」
力のない声で答えた。ひと目見るなり、水あめに似た空気が流れている気がしてきた。佐賀はるみのまわりを取り囲む、透明だけど後をひっぱるようなねばり。
ずっと微動だにせずに体育館の扉を少し開き、覗き込むようにして立っている佐賀はるみ。上総が見ている間全く動こうとしなかった。
「なにか見たいものでもあるのかな」
「ばかね違うって。新井林を見つめてるだけなんだから。ほら、そのうちに先生か先輩連中が出てきて、佐賀さんを中に入れるはずだよ。もう毎日、こうだから」
「確かに立ちっぱなしだったら足が疲れるだろうしな」
「違うのよ、あんたほんとガキだねえ。男子は佐賀さんのあの目に弱いのよ。見つめられたらそそられるって話じゃないの。あんた、本条先輩からその辺教えてもらってないの」
「関係ないって、なんで本条先輩の話になるんだよ」
思い出したくなくて頭を振った。だだっこだ。
「じゃあ聞き方変える。あんた、ああいうタイプ、好み？」
口角を弓なりに上げて、覗き込むこずえ。唯一の救いは、こずえより上総の方が背が高いということだけ。
「……だから、俺は鈴蘭優って好みじゃないからさ。羽飛だったらどうか知らないけどさ」
黙って上総の顔を唇と瞳、同じ力加減で見つめたこずえは、肩でため息をついた。
「美里が心配するまでもないってことか。ちゃんと最後までそれ貫くんだよ」
「だからなんで清坂氏が出てくるんだよ」
答えずにこずえはひじで上総をつついた。
「視察終了。私も図書館の当番まだ終わってないから戻るね。まあ美里が、『佐賀さんに近づくなかれ禁止令』出している以上、あんたもおおっぴらに佐賀さんの情報手に入れるのは難しい

かな。だったら私がやってあげようか」
「え？　古川さん？」
もう一度、来た廊下を並んで歩きながら、
「もちろんそうしてくれたら助かる」
「私もね、杉本さんが元気なくしてるの見てるとかわいそうでかわいそうで、思わずぎゅっと抱きしめたくなっちゃうもんね。レズの道には走りたくないしさ。 誤解されてるのも辛いだろうしねえ。だから、佐賀さんが本音どう思ってるのかを、今度聞いてみる。あんたが動くと、美里がジェラシーの鬼になるだろうし、 それは避けたいだろうしね」
　上総も不必要なことをつぶやかないよう心した。
　ありがたくこずえの善意を受け取ることにした。
「わかった。じゃあ今度、羽飛に新しい出来事が起こったら真っ先に報告してあげよう」
「さすが、よく私も仕込んだわ、わが弟よ」

　図書室カウンターにもどったこずえに、片手で挨拶した後、上総は家に戻った。
　――なんなんだろうな。
　自転車をこいでいる間も、食事をしている時も、なんとなく離れないもの。水あめのような。
　――うまく言えないけど、咽がつまりそうだったな。
　風邪を引かないように、手洗いとうがいを欠かさずしている。でも、風邪の気配はまず咽にくる。一匹小さなありんこが咽に這い上がったようなひりつきがあ る。その後、咽の奥まで染み渡っていき、最後にせき、のど、たんの三重奏となる。その最初の気配みたいなものだった。風邪が気持ちいいことはまずないの で、はっきり言って、不快な感覚だ。
　――でも、羽飛なんかはああいう子が好きだと思うな。
　――一年の男子連中も、嫌いじゃないから、体育館の中に入れてやったり、監視してやったりするんだろうな。
　――もちろん、あいつも。
　上総は数回うがいをした後、口をぬぐった。他の連中と自分の感覚がずれていることは十分承知している。貴史の大好きな鈴蘭優も、上総からすれば「音程の 外れた歌い方をする子」でしかない。たぶん、佐賀はるみみたいな子の方が人気あるのだろう。おとなしそうで、唇が赤くて、守ってやりたい、そう思えるらし い女子の方が。本条先輩も話していた。こずえには言わなかったけれども、
「やっぱしなあ、そそるぜ。新井林の彼女」
　はいはいさようざんすか、と上総は流したけれども、たぶん他の連中もおおむねそうだろう。南雲は奈良岡さんが最高のパートナーだから例外としたいところだけれども、可愛い子が嫌いだとは思えない。佐賀はるみに好感は持つだろう。
　――俺だけか？　この感覚。
　子どもの頃、病気でなにかの検査をした時のこと。背中にひんやりしたゼリーのようなものを塗られたことがあった。気持ち悪くて寒くて怖くて、泣くだけ泣 いて、あとで母にこっぴどく叱

られたことがあった。なんの害もないとわかっていてもいやだった。とにかく背中にべたっとしたものがくっつく感覚がたまらな かった。

　同じものを、佐賀はるみに感じた。

　杉本梨南の憎まれ口には染みを残さない自分の心。佐賀はるみのまなざしと姿形に、うまくいえないねばりけを感じたのは、どうしてなのだろう。わからなかった。

その４　考えることが多すぎる

二年実力試験が終った。試験期間中の出席番号順川の字配置から、いつもの班ごと三人一列の組み合わせを整えた。南雲もこずえも席に着いている。
　帰りの会が始まるまでの間、上総は自分の席で腕時計を覗き込んでいた。
　これから桧山先生のところに行って、卒論を貸してもらう予定だった。大学の授業で読んでいるハーディの「テス」を取り上げているのだから関心ないわけではない。でもなにも生徒指導室に呼び出しを駆ける必然性ってないんじゃないだろうか。
　南雲に気付かれぬよう、すれ違いにこずえが器用に折りたたんだ手紙を上総の机に押し出した。
　いかにも他の女子から預かってきた、というような感じでだった。近くの席にいる奴らに見られてもたぶん、美里の恋文だと勘ぐられる程度だろう。内容は当然古川こずえ様じきじきのお言葉である。
　あとで読もうと決め、上総は素早くブレザーのポケットにしまい込んだ。
　たぶん、佐賀はるみとの対談に関する詳しい内容だろう。
　電話で聞くことも考えたけれども、大抵上総に対する鋭い突っ込みが入るのは目に見えていた。一刻も早く話を聞きたい。それなら手紙でもらったほうがいいと、あえて頼みこんだのだった。
　――佐賀さんとどういう話、したんだろうな。
　上総はポケットにもう一度手を当てた。

　杉本梨南ほど、わかりやすい子はいない。
　――なんで桧山先生を始め他の連中は、そうしてやんないんだろうな。
　上総はいつもそう思う。桧山先生にしろ、前担任の溝口先生にしろ、杉本を扱いあぐねて頭を痛めている嫌いがなきにしもあらず。あの本条先輩ですらも、
「巨乳なのになあ、杉本はあの口調と目つきさえなければもっと、男よりどりみどりなのになあ」
　とため息をつく始末だ。別のところで関心しろよ、言いたい。
　どうして他の連中は杉本梨南に噛み付かれるような言い方をするのだろう。
　同じ言い方をするのだったら、もっとまろやかなやり方だってあるだろうに。
　もし上総が杉本の担任教師だとしたら、怒鳴ったり叱ったりなんて絶対にしないだろう。
　一方的に嫌われてしまいそれっきりになることが見え見えだからだ。本人は真実だと信じきって言っていることなのだから、最初は頷く。とにかく話をとことん聞いて、頷く。最初にこれを言う。
「俺は、杉本の能力がすごいってこと、わかってるつもりだよ」 と。
　杉本が一番欲しがっている誉め言葉は、「巨乳だね」でも「可愛い」でもない。「頭がいい」「才能がある」などの、能力を認める言葉なのだ。何度か話をし てみて、そう思った。他の女

子たちが「可愛い！」とか「美人さんよねえ」とか「スタイルいいわ」とか言われてきゃあきゃあはしゃいでいるのを見たことがあ るが、杉本にそれは通じない。
　なによりも、能力と成績だ。　学年トップを保っている頭脳、緻密な計画と実行能力と。沈着冷静に物事を運ぶことのできるポーカーフェイス。自宅の百科事 典で叩き込んだらしい豊富な知識量。決してプラスになるものではない。単なる頭でっかちと笑う奴もいるだろう。青大附中では成績のよさよりも人付き合いの よさ、性格のよさだけが評価されるのだ。杉本みたいなタイプは嫌われるのもしかたないだろう。
　でもそういう知識がなかったら盾になるものがなにもない、という現実。
　毎日、誰にも負けたくない、負けたら終りだ。死ぬしかない。そのくらいの覚悟で毎日、生きてきたはずだ。どんなことがあっても、能力だけは誰にも負けたくないと信じて。
　たぶん、周りからは単なる「頭でっかち」と言われて謗られてきたのだろう。
　上総も自分の経験からかんがみて、そう感じる。
　でも、そういう知識を増やすことでしか、自分を守ることのできないことも上総は経験してきた。そうだった。指を使って計算するしかない自分の数学能力を 隠すため、同じ年の連中よりもはるかに難しい文学書や論文などを読み、せめて日本語読解力だけは上だと見せるよう努力してきた。わからなかったら、大学の 図書館にもぐりこんでこっそり資料をひっぱり出したりしてきた。誰にひけらかすわけでもないけれど、自分の中に溜まっていく物語の思い出、それだけが命綱 だった。
　杉本梨南にとっても、そうだったのだろう。
　誰にも、負けたくなかったのだろう。弾き返した連中を見返すためには。

　とうとう手紙を読みたい気持ちに負けてしまった。幸い、菱本先生はまだ戻ってこない。ポケットを探ってノートの間に挟みこみ、こずえに視線で合図を送った。これから読む、という合図である。
　こずえは眠そうに試験疲れの眼をこすり、数回早めに頷いた。勝手にして、ってことだろう。
　――この前Ｋさんとさしで話したことについて。Ｋさんはやはり Ｓさんと仲良くしたいと言ってるね。向こうが無視するからなかなか話ができないけれども、 でも、このままだとＳさんがかわいそうだし、周りの男子たちからも無視されるから、助けてあげたいって言ってるよ。じゃあどうすればいい？って聞いたら、 Ｓさんが早く別の好きな人を作って幸せになればいい、とか言ってるね。あんた知ってた？　Ｓさんのことでなにか？　――

　イニシャルＫさんは佐賀はるみ。Ｓさんは当然杉本梨南。ということは、新井林健吾は当然Ｎだろう。
　――おいおい、これだけかよ。
　独り言をつぶやくとむっとした顔で、古川こずえがしかめっつらを見せた。
「せっかくこれだけ書いてやったてのに、それはないでしょそれは」
「要点はつかめた。けどさ、一時間くらい話したんだろ」

　こずえはシャープの先をノートに突きたてた。
「あのね、女子同士だからこそ聞き出せたことだってあるの。男子のあんたに話せないことだってたくさんあるんだから」「じゃあ俺はどうすればいいんだよ。情報ないと動けないだろ」
「あんたが知っとくべきことはね、要するに」
　理科のノートを無理やり奪われ、書き込まれた。丸っこい文字だ。
　――要するに、ＳさんがＫさんにやきもち妬いてるってこと。
「やきもち？」　低い声で上総はつぶやき返した。
「もう、一年の中では常識みたいだから話しとくけど、ＳさんはどうもＮのことが小学校の頃から、だったみたいなのよ。でもＫさんが取っちゃったから怒ってるとみんな思ってるのよ」
「けど、周りからは天敵同士って言われてるだろ」「だから、ほの字だから、いじめるっていう、あれよ」
　こずえはにこりともせず、先を続けた。ほんとはこういうことを手紙に書いてほしかった。すばやく上総は、開いたままの手紙を押し返した。読み終えた後は用なしだ。
「Ｋさんも悩んでいたらしいんだよね。小学校の頃からずっとＳさんがＮのことを好きだったこと、分かっていたからさ。でもＮはご存知の通り、Ｋさん一筋でＳさん大嫌いときたもんよ」
「だから単純に天敵だって言ってたじゃないかよ」「ここが不思議なんだけど、ＫさんＳさんの通っていた先生たちは、みんなＳさんの横恋慕ってことを知って たみたいで、いないところでちゃんと『Ｓさんはかわいそうだからそっとしておいてあげましょう』みたいなこと言ってたらしいの。すごいよねえ」
「俺なら無視してほしいな」
　上総は耳の後ろを軽くかきながら、もう一度こずえに続きを促した。
「ところが卒業式間際になって、ＫさんにＮが告白しちゃって、それもＳさんの目の前で。Ｓさんはそれ以来Ｋさんを一切無視するようになったんだって。言い 方かえると『親友に好きだった相手を取られ、しかも相手は自分のことを蛇蠍のごとく嫌ってる』という最悪のシュチュエーション。しかも、青大附属では同じ クラス三人って奴？　悪いけど私Ｓさんがこれでなんのわだかまりもなく『おはよー！』なんて言っていたら、そちらの方を疑うよ。地獄だよこりゃ」
　こずえはたぶん、杉本梨南寄りで物事を語っている。偏りまくっているこずえですらも、杉本が佐賀はるみにした行為は「失恋ゆえの僻み」に見えるのだろう。上総も、もし杉本を知らないで聞かされていたらそう感じているだろう。
「でもな、ＫさんはそういうことされてもまだＳと友だちでいたいって言ったんだろ？　そっちの方が俺には理解不能だけど」
「ほらほら、そこがね、女子の微妙なとこなんだよ。今から教えてあげるからよーく聞いてな。将来、あんたも美里のことで大変なことあるだろうしね」
「大きなお世話だ」
　後半の言葉は無視して、こずえの講座をしっかり聞かせていただいた。他の連中も答えあわせの一部ひそひそ話に燃えているらしいので、あまり目立たないですんだ。
「Ｓさんは意地でもＮのことを意識したなんてこと、認めないと思うんだ。けど、辛いことも

多かったと思うんだ。ＫさんとＮのいちゃいちゃぶりを見せ付けられ、さらにＫさんに同情されてさ。たとえば私と美里が、ある男子を取り合ったとするじゃない？」
　窓際の席にいる、貴史を見やる。
「でも私は、美里みたいな子、嫌いじゃないし、もし取られたとしても友だちでいたい、とは思うんだ。頭の中ではね。けど、もしそうなったとしたら、そんな奇麗事言う自信なくなると思うんだ」
「古川さん、すごいこと言ってるなあ」
「大丈夫、あんたが美里を押さえている以上そういうことはありっこないから」
　シビアな現実をちらつかせる。
「Ｋさんも、そういうところがあるんじゃないか、とは思った。私なりに。けどね、彼女の場合、もうひとつなんかありそうでさ。ほらあの」
「Ｋさんに、女子の友だちっていないのか？　それこそＮ以外に」
　上総もイニシャルでしゃべることに慣れてきた。
「いると思う。思うけど、男子たちの方が圧倒的に仲良しみたいだよ。特別なにかするってわけじゃないんだけど、みな女王様にひれ伏すってかね。みな、Ｋさんに対しては礼儀正しく振る舞うっていうかね」
　こずえの言いたいことはなんとなくわかる。佐賀はるみを見かけた時に感じた、得体の知れないねばっこさを。上総はなんとなく不快に感じたけれども、他の連中はそれがいいというのかもしれない。「そそる」ものなのかもしれない。
「ＫさんはＳと態度、大違いだからな」
「そうなのよお。私とか女子とかだったら、Ｓさんの方が圧倒的にいい子だって感じするんだけどね。裏表ないし、わかりやすいし、素直だし」
「同感。わかりやすいな」
「でもね、Ｋさんだとさ、なんというか何考えてるかわかんないってか。少なくとも私、Ｋさんと羽飛を一対一で会わせるのだけはやだなって思ったよ」
　うつむいて笑い出しそうになるのをこらえた。
「羽飛、ああいう髪型好きだもんなあ」
「よけいなこと言わないで、ただじいっとけなげに見つめる、耐えてる、可憐、って感じするじゃない？　Ｋさんって」
「古川さん妄想が炸裂してる」
「そうだよそうだよ。で、いつのまにか男子たちが集まってきて姫をお連れするって感じ。なあんも、こっちでは言わなくてもみんなか片付けてくれるっていう感じよね」

　だいたいの概略はつかめた。
　佐賀はるみは杉本梨南が自覚していない、新井林健吾への片想いを早い段階で見抜いていたということだろう。こずえにそこまで話すのもすごいとは思うのだ が。さらに、自分が新井林と付き合ったことにより、杉本が佐賀に激怒したというのも本当のことらしい。上総が聞いている

限り、「嫌いな相手とくっついて親 友だった自分を見捨てた佐賀が許せない」という言い分だが。おおむね、佐賀の方が周りを納得させられるものなんだろう。
　しかしながら、佐賀にとって杉本はいまだに親友の存在。
　なんとかして仲直りしたい。
　でも新井林と別れる気はさらさらない。
　それゆえ佐賀も悩んでいるらしい。
「なるほどな。しかし、女子ってわからないなあ」
　上総はため息をつきながら、机に頬をつけてこずえを覗き込んだ。
「わからないってなにさ」「古川さん、Ｋさんと話したのって、これが初めてか？」
「こうさしでってのは初めてだね。何度か顔を合わせたりはしてたけど」
「そういう相手に、言うもんか、自分の親友がどうのこうのって」「知りたがってたのはあんたでしょうが。こっちが話しやすく聞いてやったのよ。感謝しなさいよ」
　確かに。こずえでなければ、そこまでの惚れたはれた情報は汲み取れなかったに違いない。
「立村、言っとくけどさ」
「なんだよ」
　顔を上げながら答えた。
「いくらＫさんの魔力にめろめろになったとしても、あんたはＳさんの味方になってやんなよ」
「大丈夫、俺は普通の感覚と違うみたいだから、予防注射打たれてるみたいなんだ」
　反対側で居眠りこいていた南雲が、ひょいと顔を上げてささやいた。
「りっちゃん、そういえば明日、インフルエンザの注射の日だなあ」
　こずえとの会話をどこまで聞いていたかはわからないが、上総は一応頷いておいた。
「さすが、保健関係の情報はしっかり捉えてるよな、なぐちゃん」

　菱本先生が現れてからは早かった。みな試験明けということで、さっそく遊びまくる計画も発動中。来週から評議委員会ビデオ演劇「奇岩城」の製作会議にはいらなくてはならない。
　貴史、美里とも試験の手ごたえについてため息を付き合った後、上総はすぐに図書室へ向かった。
　借りてきた本だけ返したかった。片付いてから桧山先生の待つ生徒指導室へ行くつもりだった。
　今日はこずえの当番日ではないようで、カウンターでは何事もなく本を受け取ってもらえた。
　まだ時間があるので、本の物色をしようと決めた。ひとりで本棚の間をうろうろしているのが、一番落ち着いた。

　――やはり、どうみても周りからは杉本が一番悪いと思われてしかたないよな。
　こずえからもらった情報と、佐賀はるみに対する杉本梨南の言動。
　杉本はどうしようもなく新井林健吾のことを追いかけつづけていたのだろう。かなり前から気付いていた上総だけではない。おそらく他の連中にも見え見え だったのだろう。こずえの話だと

そういうことになる。親友だった佐賀はるみはもちろんのこと、小学校時代のクラスの連中、下手したら思われ当人の新井林ま でもが。
――だから、あえて「いじめるな」みたいなことを言っていたのか。あいつは。
心臓の辺りがちくちく痛くなった。少し息をこらえてなだめた。
――けど、それを知ってて佐賀さんは新井林と付き合って、さらには杉本と友だちでいたいと言い張ってるわけか。杉本にとっては最大の屈辱だよな。
無表情・無感情を装っている杉本梨南の瞳に、大きく揺れるまなざしが隠れているのを、上総はいつも読み取っていた。新井林のことを憎憎しげに話す時、ど うして揺らめくのか、本人も気付いていないだろう。佐賀はるみについて怒りを表す時、涙に近いものがちらりと覗くのを、どうして本人は意識しないのだろう か。
――意識したら、もう耐えられないだろう。
――俺だったらもう生きていけないと思う。
その一方で佐賀はるみの立場もかなり厳しいものだと同情も感じる。
杉本はいつも言う。佐賀はるみを小学校時代ずっとかばってきたのは私、と。
――でも、あれやられたら、俺だったらたまったもんじゃないよな。
杉本のことを後輩として思っているから、上総は素直に杉本の言葉を受け取ることができるのだ。でも佐賀の場合はどうだったのだろう。一方的に支配された ようななものだったのではないだろうか。もちろん、杉本を罵る野郎連中のとばっちりで、佐賀が迷惑をこうむっていた可能性はある。杉本が「守ってあげた」 つもりではいるのだろう。でもそれは。
――きっと、佐賀さんには迷惑だったんだろうな。
――だから、いいかげんひとりになりたかったんだろうな。
佐賀としては杉本に一方的に押し付けられるのをご破算にしたかったんだろう。お互い、対等な関係にしたかったのだろう。非常に良く分かる。
さらにつっこむならば、青大附中で新井林に恋人として、正々堂々選ばれた佐賀はるみ。
すでに杉本の本心をすべて見抜いていたとするならば、佐賀もひそかに優越感を感じていたのではないか。杉本が指をくわえて見つめていた新井林を、いとも簡単に騎士として側に置いているのだ。
――俺だったら、当然そう思うな。
青大附中に合格した時に感じた感情と同じものとするならば、上総もそれを味わったことはある。
品山小学校の連中を見下すことができた、いじめられっ子の上総が感じたそれを。
だから否定できない。佐賀はるみの気持ちは自分にぴたりと重なる。

しかしだ。
やはりそのあたりが女子の特殊なところなのかもしれないが。
佐賀はるみはいまだに杉本梨南と友だちでいたいと思っているわけだ。もちろん杉本が佐賀をそれ以来一切無視というのは、いじめに近いと取られてもしかたない行為だろう。

男として新井林が選んだのは佐賀であって、杉本ではなかった。ただそれだけのこと。
杉本がその時どうすべきかは上総も判断できないけれど、あきらめるしかなかっただろう。黙って頭を下げて、あとは黙々と自分を責めるしかないだろう。相 手にしてもらえない自分を罵るしかないだろう。自分には愛される価値がない。杉本が自分の行動を改めない限り……改めたとしても難しいだろうが……新井林 は杉本を受け入れることをしないだろう。せめてこれ以上関係を悪化させたくないのだったら、素直に佐賀にひれ伏して、今までのことを謝り、屈辱とはいえ許 しを請う。同じ立場の上総だったらそうするだろう。
それをしない代わりに杉本は怒りを直接、佐賀にぶつけたわけだ。　いわば佐賀と杉本の仲たがいに過ぎない。杉本の言い分を認めるならばクラス女子を扇動していじめに走らせたわけではないだろう。
――杉本との個人的なやりあいが、いつのまにか佐賀さんＶＳ一年Ｂ組女子の対決になってるってわけか。これはまずいだろ。やはり、桧山先生もこれだと、介入しないわけいかないしさ。一番目立っている杉本に攻撃の矛先が向くのも、当然だよな。
結局、本を借りることはしなかった。もし本物のシャーロック・ホームズだったらパイプをくゆらし近くのワトスンくんに推理を披露するのだろうが。
――要は、杉本が本当は、佐賀さんや新井林に仲良くして欲しいから今までのことを謝れば、一番丸く納まるのか？　新井林もそういうところは単純だから、 佐賀さんの味方になるっていうんだったら、挨拶くらいはしてくれるかもしれないしな。佐賀さんはもともと、杉本の友だちでいたいと言い張ってるんだから、 すぐに許してくれるだろうし。
――でもそんなこと、俺だったらできないな。杉本が今までしてきたことは、周りからしたら悪かもしれないけど、杉本本人にとってはあれしかやり方知らな かったんだから。きっと佐賀さんも、杉本が本当はどれだけおびえていて、惨めな気持ちでいるのかを気付いていたんじゃないかな。
だからあえて、嫌わないでおこうと思ったのだろう。
友だちだったらそうだろう。
この人は強い。人を恨まず許そうとする意地のようなもの。
たぶん上総が感じた粘っこさと気持ち悪さは、そこからきたへびのようなものかもしれなかった。
――俺はそういうこと、出来ない奴だからな。

廊下は静かだった。めずらしい。そういえば一年実力試験は一日遅いと聞いていた。部活動は試験三日前から休止ということだったけど、おとといは佐賀が ずっと体育館で新井林を待っていた。まずくなかったのだろうか。今日は体育館からも、グラウンドからも運動部特有の掛け声が聞こえない。
三階の生徒指導室へ向かう途中、後ろから声をかけられた。
「立村くん、ちょうどよかった」
桧山先生だった。やはり実力試験前ということもあって、いろいろ面倒なのだろう。生徒も職

員室には出入り禁止になっている。
「試験はどうだった？」
「数学以外は、たぶんなんとか」
　もごもごと答えた。
「人間、微分積分が出来なくても生きていけるから気にするな。さあ、入ってくれ」
　桧山先生が灯りをつけた。まだ四時を回っていないのに、部屋はだいぶ薄暗かった。掃除は行き渡っている。たぶん、掃除当番が片付けた後なのだろう。テーブルもソファーの皮張りも、光っていた。
　窓の外には銀杏の木がほんの少しだけ、彩りをとどめていた。白く分厚い雲が広がり、見ているだけで震えた。爪が妙に紫っぽいのが気になった。桧山先生が熱いお茶を入れてくれた。番茶だ。
「ごめん、今日はな、家から出てくるときにちょうど、玄関に置いてきてしまったんだ」
「え？」
「卒論だよ。いやあ、学生時代からほとんど手つけてなかったからなあ」
「急がないからいいです」
　せっかくお茶を入れてもらったのだから、まずは飲む。熱かった。
「それで立村くん、せっかくきてもらったんだから、ひとつ、相談にのって欲しいんだが」
　――まさか。
　一年Ｂ組の担任である桧山先生。
　相談に乗ってあげるようなことは、上総もそれほどないはずだ。
　唯一、あのふたりについて以外は。
「あの、英語のことでですか」
「いやいや、俺たちよりも立村くんの方が自分でよく勉強してると思うよ。いやな、今回は生徒としてではなく、次期評議委員長として、一年Ｂ組の評議委員ふたりについての相談なんだ」
　――やはりか。
　上総は心を引き締め、番茶の入った湯のみをテーブルに置いた。
「僕はあまりそういうことは得意じゃないと思います」
「いやいや、本条くんからもいろいろ聞いているが、君はとにかく一生懸命に後輩の面倒を見ていると評判じゃないか。男女問わず面倒見がいいってな」
　――本条先輩が？
　気になったが、それは飲み込み上総は聞き役に徹することにした。それにしてもこの先生、明日が一年実力試験日だっていうのに、そんないいかげんなことしてていんだろうか。
　桧山先生は作り笑い特有の、えくぼをこしらえてじっと上総を見た。
　探っているらしい。身構えた。

「いろいろ聞いていると思うが、一年Ｂ組は今非常に困った状態なんだよ。クラスで女子のいじめがあったりしてな。だから先生としてはなんとしても、来年ま でにいじめのない明るいクラス

にして、二年にあげたいと思っているんだ。ただ、先生にはどうしても、みんな本音を話してくれないし、前向きに取り組もうと する人がなかなか出てこない」
　――当たり前だろ。誰が先生に本音打ち明けるっていうんだよ！
　心で吐き捨てたが、決して顔には出さない。
「本条くんにも聞いたが、杉本の面倒を一学期から一番よく見ているのは、立村くん、君だと聞いている」
「僕だけじゃないです。二年の女子の方がずっと」
　言いかけたが遮られた。
「いやいや、女子たちは基本として杉本の機嫌を取っているだけだな。しかし立村くんは、杉本がこれからどうすればいいか、どうしたらいいかを一生懸命、意見してくれているとも聞いているよ」
「誰がそんなこと」
「だから、本条くんだよ」
　一体どこで本条先輩は、先生にそういうことを告げ口しようとするのだろう。最近ほとんど顔を合わせていない本条先輩のことを思い出した。
「それでなんだが。実はこのままだと、杉本が取り返しのつかない行動に出てしまうのではないかというのが、先生として非常に心配なんだ」
「とりかえし？」
　短い語句でしか返していない自分の会話。
「君も杉本から聞いていると思うが、一年Ｂ組では今、女子のいじめが起こっているんだ。クラスの不名誉になることだからあまり言いたくないことだが、きっかけがどうも杉本にあるらしいということもわかっているんだ」
「あの、それは僕もよくわかりませんが」
「いやそんなことはないだろう。他の生徒たちも最近は気付き始めているんだ。もちろんいじめという行為はよくないことだけれども、それなりにみな理由はあ るだろうから、言い分は聞くつもりでいる。しかし、杉本の行動はどう考えてもかばうことができないんだ。わかってくれるよな、立村くん」
　――なんてタイミングがいいんだよ！
　卒論というえさで釣り上げようとしたのだ、ということに今ようやく勘付いた。
　しっかり食いついてきた自分が馬鹿だと思う。
　でもなぜ。なぜだろう？
　今の言い分だと、桧山先生は杉本を「助けたい」そう思って行動しているように見える。
　「取り返しのつかない行動」ってなんだろう？
　単なる女子ふたりのけんかに過ぎない、そう割り切ることがどうしてできないんだろう？
　しばらく話を黙って聞くことにした。でないと、読めない。

「立村くん、たぶん君は杉本から一方的に、どうしてそう言う行動をしているのかという言い分

を聞かされているんじゃないかと思うんだ。女子はおおむね、自 分を被害者に仕立てたいものだからな。いじめていてもいじめられるにはそれなりの理由があると思いたいからなあ。でも、大人の目から観ると、これは非常に 許しがたい行為なんだ。もちろん、杉本にはそうするだけの理由があるのだろう。でも、いじめられている相手にとっては一生の傷が残ることでもあるんだ。幸 い、杉本は君の言うことだったら素直に聞くと、本条くんも話してくれた。だったら、君の言葉で、なんとか杉本を『いい子』にしてやってくれないか」

――いい子、と来たかよ。

鼻で笑いたい。勘違いもいいところだ。本条先輩もとことん誤解している。杉本が上総の言葉を素直に聞くのは、上総が説得したからではない。杉本の感じた ことが、自分と同じだと分かっているから共感するだけのことだ。説得なんてできない。今、桧山先生が口にした言葉のわざとらしさが頭にくる。たぶん杉本も 同じことを感じるに違いない。ただ、上総の方が「うっかり本音を口にしたら地獄を見る」とわかっているから、がまんするだけのことだ。

「きっと本当は、杉本も真面目な子なんだと思う。勉強も評議委員の仕事も一生懸命だ。ただ、大切なところがまだ育っていないんだ。相手がどんな痛い思いを しているかを想像することができないんだ。だから、自分が悪いということを反省することができないんだ。今はまだ、いじめられた子も杉本を許してやろうと 思っているし、まだ立ち直るチャンスはある。クラスも、杉本が反省してもう二度としない、許してくださいといえば、受け入れてくれるだけの連中が揃ってい る。でも、このまま勘違いしたまま二年、三年、高校に進んだら、後で大変辛い思いをする。早いうちに自分を反省して、自分が馬鹿であることを認識してもら い、大人になってほしいんだ」

――正論だな。

やはり軽蔑しきったまなざしで答えたい。杉本だったらそうするだろう。上総の弱さがそうさせないだけのこと。しかし感じ取ったのか、桧山先生はいきなり遠い目で窓辺の銀杏を眺め始めた。外国の恋愛映画で相手の男役がポーズをとるような感じで、持たれてつぶやき出した。

――なに気取ってるんだ。

日本のお茶をすすりながら上総はお付きあいした。

「俺が高校三年の時だった。実をいうと俺は転勤族の息子だったんで、高校を二回転校してるんだ。青潟に来る前の学校には、やたらと芸術家の子息が多くて、 言い換えれば感受性豊かでかつ、性格が個性的な奴が多かった。たまたま俺のクラスはその気が少なく、普通の家の普通の奴が多かったんだが。でもひとり、か なりエキセントリックな女子が一名いたんだ」

転勤族とは初めて聞いた。青大附属上がりだと思っていたのだが。ちょっと驚いたのが伝わったのか、桧山先生は満足げに笑みを浮かべた。

「その女子はオペラ歌手を目指しているとかで、毎日声楽の練習やなんやで熱心だった。音大の試験の場合、指を守るために決してバレーボールの練習をしない とか、レッスン優先のために授業を休むとかは日常茶飯事だったらしい。俺もその辺の事情はわからないが、はっきり言ってクラス活動に非協力的だったのはよ く覚えているんだ。たまたま、クラスが一丸になりやすい、ま

とまりのあるクラスだったからなおさら彼女の行動は非常に目立った」
　居心地の悪さを感じつつも、上総は頷きながら聞いていた。
「体育大会に都合つけて休むとかそのくらいだったら仕方ないと思う。担任も彼女の才能を高く評価していたらしく、大抵のわがままは大目に見ていたからな。 才能のある人、天才は何をしても許される。そういう雰囲気があったのも事実だ。ある日、合唱コンクールの練習中、いきなり彼女は怒り出し、ひとりの女子を 罵り始めた。そりゃあ声楽科を目指す歌手の卵が、どしろうと集団の合唱に耐えられないのはわからないわけじゃない。。でも俺たちはしょせん、気取ったオペ ラよりもロックンロールで踊りたいタイプだ。さらに悪いことにひとり、どうしようもない音痴の女子がいたんだ。罵られた女子、彼女だったんだ」
　桧山先生は顎に親指を立てて、ふたたびポーズを取り直した。相変わらず銀杏の向こうを眺めつつ。
「彼女の声はひどかった。たぶん一緒にカラオケには行きたくないと思うだろう。でも、欠点はそれだけだった。クラスに対しても、他の男子女子に対しても、一生懸命で笑顔で、人気者だったんだ。だからみんなは彼女をフォローしようとして一生懸命だった。それをだ」
　片手を握り締めて、怒りを表すポーズ。
「声楽科志望の女子は、音痴の彼女に対して言葉に尽くせないくらいの罵倒を繰り返した。それなら勝手に休んでくれればいい。俺たち男子連中はもちろん、女 子連中も激怒した。当然、音痴の彼女を守るべく、みな立ち上がって激しく言い合った。だが、相手は動じなかった。『音程が狂っているからもっと練習しなさ い、もっと迷惑をかけないように歌いなさい。聴いている人たちの迷惑になる』と言い放った。とうとう音痴の彼女は耐え切れなくなって教室から逃げ出して いった。問題はそこからだ」
　――まさか、自殺したとこか……。
　手を握り締めた。汗をかいているようだった。
「もちろん音痴の彼女には味方がたくさんいたから次の日からは何事もなく学校生活を送った。さすがに合唱コンクールでは小さい声で歌うように気を遣ってい たみたいだが。本来だったら担任がもっと厳しく声楽科志望の女子に注意を与えるべきだった。反省させて、暴言を撤回させて、自分がいかに醜いことをしたか を大勢の前で反省させるべきだった。でないと気付かないだろう。歌のうまい下手よりも人格こそが一番大切なのだと教え込む最大のチャンスだったはずだ。担 任のしたことはまず、『彼女の感受性は特別なものであって、どうしてもうまくなじめないところがある。どうか許してやってほしい』という言い訳をすること だったんだ。相手には一切反省の弁を述べさせずにだ。当然俺たち生徒はみな激怒した。たかが、悲鳴みたいな歌が上手だってくらいで、人の心を傷つける権利 があるとは思えない。人間として最低のことをした以上は、たとえ才能があろうがなかろうが、当然土下座すべきものだと主張した」
　手に腰を当てて、上総に振り返った。
「声楽科希望の彼女は当然のように学校に来て、当然のように授業を受けて、当然のように無視して卒業していったらしい。俺も最後までは見届けなかったが。 全く、クラスの連中が怒りの無視攻撃をしても気にかけていない様子だった。音楽と関係ない授業は時間の無駄とでも思ってい

たんだろう。彼女は堂々と有名音 楽大学に入学し、すぐに頭角をあらわし現在はドイツのオペラ劇場で歌手として活躍しているらしい。だが」
　桧山先生は最後に付け加えた。
「卒業式の後、クラスの連中は誰一人、彼女をクラス打ち上げコンパに誘わなかったそうだ。また数年後、彼女がなんかの声楽コンクールで優勝して新聞社が取 材に来た時も、クラスの連中は「ふーん、そういう人いましたっけ」ととぼけ通すことにしたというんだ。どんなに才能があったとしても、たかが音痴の子を罵 るだけの人間を認めることはできない。ちなみに音痴の彼女はすぐにクラスの奴と卒業後結婚して、今は二児の母だ。幸せだときいている」
　桧山先生はゆっくりと、両手を振りながら椅子に腰掛け直した。
「もちろんささいなことだったかもしれないし、今思えば声楽の彼女も感受性が鋭すぎるゆえに人間関係がうまく行かない、繊細な感情の持ち主だったのだろ う。だからこそ担任としてはがさつな俺たちクラスメートから全力でかばってやらねば、と思ったのもあるだろう。だが、それで迷惑をかけられた才能のない普 通の連中はどうすればいいんだろう。音痴の彼女だって、自分が望んでそういう声になったわけではないだろう。合唱コンクールの時に、自分が邪魔をするのはわかっているから、なんとか直そうと必死だったのかもしれない。そして、あえて良くとれば、そういう音痴の彼女を応援しようとして、あえて声楽科の彼女は 厳しく教えたのかもしれない。音楽のレッスンとはかなり厳しいらしいからな。だが、それは普通の人間に求めるもんではない。クラスが普通の人間中心で構成 されているのならば、出来る限り大人数にあわせてもらうべきだ。醜い声の羅列に耐えられないのだったら、少数派である自分が離れればよかったんだ。合唱の ひとりふたり、いなくなっても誰も迷惑はかからないのだから」
　お茶をもう一杯、注いでくれた。
「立村くん、俺が杉本に望んでいるのはそういうことだ。もちろん杉本が類稀なる感受性の持ち主であることは俺も分かっている。でもだからといって、このま まの性格でぶつかってくれば迷惑をかけられたほうはたまったもんじゃない。あくまでも、自分は少数派なのだということを自覚して、他の連中にうまく合わせ て、その上で自分の個性を発揮できる場所を探していくのがベストなんではないだろうか。と思うんだ。他人に迷惑さえかけなければ、多少個性的であろうがな んであろうが、誰も気にしない。社会的に迷惑をかけないことさえ守ってもらえればだ。だが、今の杉本は明らかに『いじめ』という行為で人に迷惑をかけてい る。自分の感じたことをはっきり言い過ぎることで、他人に不快感を与えている。それを人に言わないようにして、自分が少数派であって、自分の感じているこ とは他人の感じていることと違うので妥協することを覚えていく、それによって初めて、彼女は存在することを許されるんだ。そうしないと、今話した声楽科の 彼女のように、クラスの連中からは意識的に見捨てられ、相手にされなくなる。たとえ有名なオペラ歌手になったとしても、俺たちの中では最低の行為をした人 間であるという認識は消えないだろう。そのためには、自分のしていることが普通の人には許されないことであると認識してもらわないといけないんだ、立村く ん、わかるか」

　ほとんど上総は反応しなかった。小さく頷き、何度か桧山先生に目を留めるだけだった。

「じゃあ、もう一度明日、ここに来てくれないか。今度はきちんと『テス』の卒論持ってくるよ。やはり話のわかる奴を相手に話すのは、楽だよ」

二杯目のお茶はほとんど口をつけなかった。上総は一礼して部屋を出た。

その５　うらはらな道を探して

　試験結果は桧山先生にも話したとおり、結果のよかったのもあれば悪い科目もあった。英語国語はそれなりに恥をかかずに済んだけれども、理科の公式使う奴で結構しくじった。たぶん順位はガタガタだろう。
「立村くん、数学は？」
　かなりご機嫌よろしい美里に尋ねられ、上総はうなづいた。
「うん、もともと数学は計算に入れてないからさ」
　ちなみに数学の答案には、狩野先生が丁寧に模範回答を書き込んでくれていた。次回の期末テストでは、それを丸ごと暗記して答案に……あっているか間違っ ているかはともかく……書き込めば、合格点はもらえるはずだ。もっとも他の奴に話すといんちきやっていると思われるのが関の山。美里にも内緒にしてある。
　コートをしっかと着込んだ美里が、三回上総の机を覗き込んだ。なに意味しているかはわかる。自分の茶色いコートをカバンの上に置いて、上総は両手を合わせた。
「ごめん、清坂氏、今日これから呼び出しかかったんだ」
「あれ、本条先輩に？」
「違うよ、先生関係」
　ああ、と納得している様子の美里。追試と勘違いしているんだろう。
「なんか悪いことしたの？」
「してないよ。たぶんだけど」
　詳しい話をするわけにもいかず、上総はもう一度目で合図して、教室を出た。

　生徒相談室にまっすぐ行くのもなんかいやで、上総は図書室で時間をつぶした。一日ずれた一年実力試験。一年生達もようやく解放されたとあって、はしゃぎまくっている。中には小さいボールを投げつけて遊ぼうとする輩もいたりして、図書局員たちは気ぜわしい。
　――本当だったら評議委員会もあるはずなんだけどな。
　――そろそろシナリオも作らなくちゃな。
　まだ半分、手をつけた程度の「奇岩城」をぱらぱらめくった。子供向けの本からそのままセリフを抜き出せばいいのだから楽だけど。
　――まあ、ホームズのセリフと出番をどうやって減らすかが問題なんだよ。
　生徒相談室には、三時半前後に行けばいいだろう。

　コートをもう一度抱えなおし、扉を開いた。
　一礼しようとして、びくんと体がこわばった。
　新井林健吾が桧山先生の脇で、一文字の視線を投げつけてきたからだった。　膝をおっぴらいている。見下したようなまなざしだった。すぐにそらしてくれたのでようやく声が出た。

「桧山先生、この前お話で伺ったものをいただきに参りました」
　鼓動に惑わされないように、あらためてもう一人、確認した。扉のそば、桧山先生とガラステーブルを縦に挟んで向かい合うかっこうで、杉本梨南が座っていた。目が合った。一瞬だけど膝の力が少し抜けた。
「ああ、ちょうどいいところに来てくれたね、立村くん。悪いんだけどな、ちょうど君の後輩ふたりの意見を聞いてもらう時間があるかな。俺の卒論はここにあるよ。時間あるだろ？　君は部活に入っていなかったはずだよな」
　昨日とは打って変わって、よそ行きの口調だった。　わざと親しげな様子を演出しているような。
　扉側の長いソファーが空いている。桧山先生の視線は、いかにもそこに座ってくれといわんばかり。なんどもあごで促す。
「僕がいていいんですか。真面目な話し合いをされているんじゃ」
「杉本、立村くんがいた方がいいだろ？」
　一切上総には視線を向けず、杉本は桧山先生を見据えたままだった。
　代わりに新井林がぐいと上総へ鼻の穴を膨らませるようにして、
「俺はやだね」
　できるだけ新井林とは距離をおいておきたかった。上総が腰をおろすと同時に、ソファーの反対端で踏ん反りがえっている新井林が腰を付け直していた。やわらかいゴムボールのような弾力が、こちらに流れてくるようだった。追い込まれてしまいそうだった。
「新井林、日本語がわかる人がある程度いないとまずいだろ」
　巨大なゴムボールを抱かされたような気持ちで、上総はさとった。
　――つるし上げなのかよ。

　改めてコートで新井林との間を取り、上総は杉本に話し掛けた。向こうふたりが余裕ありげなのに、なぜか空気が煮詰まってる。
「杉本、どうした、何があったんだ」
「わかりません。いきなり呼び出されました。いつものことです。話し合いさせようとしているみたいです」
　あいかわらず口調はたいら、感情は奥にて微々と震えているだけ。
「それより、立村先輩」
　わずかに上総へ、やわらかい響きが伝わった。杉本の手は、しっかりと握られていた。
「先輩も、新井林と一緒にたぶらかされようとしているんです。安心してください。私があいつらから先輩をお守りします」
　にこりともせず、それでも杉本はささやいた。

　いきなり新井林が立ち上がった。
　上総と杉本の位置を斜め上から見下ろすように、ミサイル攻撃するように。

「これを見ろ」
　用意してあったのだろう。二冊の小冊子らしきものを取り出した。
　見覚えある。よく写真を現像した後、おまけにもらえるような薄いアルバムだった。
　テーブルに叩きつけ、かがみこみ、上総の方まで一気に滑らせた。
　白地と黒地、それぞれ無地だ。
　まずは杉本に渡した。一ページ、黒地をめくり、すぐに閉じた。
「新井林が撮った写真を見るのに何の意味があるのですか」
「よく見比べてみろ。一冊目は小学校時代、二冊目は中学時代。中学のものはみな、俺が撮ったものだ」
「変態、悪趣味だわ」
　杉本の視線はまっすぐだった。
「ああ、惚れた女の写真を撮るのが変態のすることならそう言えばいいさ。だがな、小学校の時と中学の時とどのくらい差があるかを見てみろ。表情ひとつひとつをよっく眺めてみろよ」
　口を開きかけふたたび毒を浴びせようとしたのだろう。じろんとにらみつけ閉ざしたのは桧山先生だった。「悪いが、先に俺が見ていいか。愛のカメラマン新井林の腕をとくと拝見したい」
「別に、いいっすよ」
　ふっと口元で息をつき、杉本は二冊まとめて上総に渡した。触るのも汚らわしい、いいたげに軽く、手をハンカチでぬぐっていた。その手がこわばっていたのも上総は見た。
　桧山先生に渡そうとし、新井林の膝を丁度掠める形となった。目を合わせず、背中を向けるように努力した。
　腕から心臓が熱い。全身けばたちそう。
　うつむいたまま渡し、自分の座っていたところへ腰をおろした時、耳に心臓の音が鳴り響いた。
　――さっさと卒論もらって帰ろうかな。
　ついでに黒い表紙の卒論に手をのばしてみた。新井林にもっと近付かないと無理だった。まだどくどくいっていて、今すぐ手にするのは無理だった。

　桧山先生はじっくりとページをめくり続けていた。ところどころ、吹きだしたりしている。微笑ましい写真なんだろう。
　たぶん話の内容からすると、佐賀はるみと杉本梨南の写真関連なのだろう。
「佐賀もこういう顔、するんだなあ」
「幼稚園の頃、ずっとそうだった」
　短い言葉だけど、新井林の声はかすれ、和らいでいた。
「愛が詰まっている第一冊目を置いて、さて二冊目か。うーん、雰囲気ががらっと変わるな」
「どう思う、先生」
「暗いなあ。雰囲気がこわばっているというか」
「先生も、そう思うか」

「この差はいったいなんだってことだな、新井林」
「そういうことだ。じゃあ続けるぜ」
　――なに続けるっていうんだよ。
　杉本の様子をうかがいつつ、上総は横目で桧山先生、新井林との様子を探った。
　「この写真の違いはどこだ、答えられるかよ」
　二冊の写真を見開き、新井林が突きつけた。
　あらためて上総は中身をしっかと見ることができた。

　一冊目はセーター、トレーナー、ブラウス姿の女子たちが躍っていた。
　二冊目は青大附中の制服を着たひとりの女子だらけ。髪の毛を耳の上でふたつに結わえ、くるりと丸めて中華娘風にあしらっている。
　まぎれもなく、佐賀はるみだった。

「違う写真に決まってるじゃないの」
　あいかわらず棒読みの杉本。
　かすかにまぶたの揺れが垣間見れた。はたして新井林は気付いているのだろうか。　自分の手が脇のコートのボタンをいじっているのに上総は気付いた。
「両方とも佐賀の写真だ」
「下品ね、男の本能丸出しで品がないわ」
「ああ、俺はもともと下品だ。どこかの誰かとは違って、上品ぶってにこりともしない写真ばかり残したりはしないんだ。ちゃんと見るべきものを見て、力の抜けた写真だけ、この中には入ってるんだ。良く見ろ」
　ふだん着バージョンの写真をつついた。
　「たぶんそばにはお前がいるんだろうな。杉本、いつも言ってたな。佐賀に向かって『写真を撮る時笑うと下品な人間になってしまうから、きちんと口を閉じ て、正面を見なさい』ってな。菊乃先生あとで大笑いしてたぜ。写真は笑顔で撮ったものが最高なのに、お前みたいなのは非常に損してるってな」
　動かない杉本。喉の奥が震えているのに本人も気付いていないのか。ひたすら上総が指を袖口をまさぐりつづけているだけだった。動悸が激しい。喉が詰ま る。どうしてか、自分でもわからない。目の前の桧山先生が落ち着いたまま三人を見つめているのとは違う。ああなりたくて、何度も上総は何かをつかもうとし た。
「結婚するまえに子どもを作った人に言われたくないわ」
「じゃあ聞くが杉本、お前これだけ人に好きになってもらったことあるのかよ。佐賀や菊乃先生のように、自分が好きな相手に好きだって言われたこと、本当にあるのかよ。親以外に、惚れられたこと、あるのかよ」
　――新井林、お前、まさか。
　杉本梨南をあらためて、上総は瞳から喉から口から、すべてを見つめた。

　かすかだけど、揺れた瞳の奥を、新井林も読み取ってるとするならば。
　上総の感情センサーが壊れていないとするならば。
　――新井林、お前、知ってて、知ってて、言ってるのかよ！

「ばかじゃないの。よく恥ずかしくもなく言えるものね。下品な人間と話すと口が汚れるわ」
「かわいそうに、誰にも好きになってもらわないで、お前は生きていけるってわけか。佐賀のように笑顔でいられるってわけか。言っとくがな、他の女子はお前のことを好きでもなんでもないんだぞ。ただ変わった動物を見てよろこんでいるだけだって、菊乃先生も言ってたぞ」
　なぜ、桧山先生がこの会話を続けさせているのかわからない。何度も瞬きが増えているのを言葉が揺れているのを、大人なら気付かないことないだろう、そう叫びたかった。上総だけではない、見抜いているのが新井林だとしたら。
「恥を知らない人間と話す必要はないわ。先生、こんなくだらないことで呼び出したわけですか」
「新井林、続けろ」
　上総が止め方を見つけられずにいる間、新井林は両方の瞳に毒をいっぱい貯め、発射した。

「いいか、佐賀はな小学校時代、いつもこんな顔をしてたんだ。俺は何かがおかしいと思ってた。まあ何もしなかった俺が悪いとはわかってるさ。お前が佐賀を 守ってやっていたふりをして、こき使っていたことを見逃していたさ。傍観していた俺も犯罪者だ。卒業してお前から離れるようになって初めて、佐賀は俺を見 て笑うようになったんだ。お前と話をしなくなったとたんにだ」
「あんたがはるみにのめりこんでいるのはわかったわ。でもそれと私と関係ないわ」
「俺はただ、佐賀の笑顔を守りたい、それだけだ。佐賀がおびえる何者かをおっぱらいたい、それだけだ。だから他の女子連中については許してやった。お前が 佐賀を傷つけさえしなければ、俺は何一つ手出しはしねえ。勝手に来年評議委員長になっていただいてけっこうだ。だがな、一年Ｂ組現在の状況はなんだ？　佐 賀はクラスの馬鹿女子たちからシカトされ、馬鹿女子たちはお前の言いなりだ。あそこは魔女の巣窟だ」
「私は何もしていない。新井林が勝手に捏造してるだけよ」
　新井林は前かがみになり、唇をゆがめた。
「ああ、そうさ。俺が佐賀にべたべたしすぎるからだって言うな。だがな、もし俺が他の奴みたく、遠くから見ているだけだったらお前が何しでかすかは想像が つく。また佐賀を自分の手下のようにこき使って、写真を撮る時は口をゆがめて人をにらみつけるような顔をさせる。下品だ、馬鹿だ、馬鹿男子と付き合うなん て最低だ、とさんざんわめき散らされる。冗談じゃねえ」
　答える杉本の背筋は伸びたまま。凍っている。
「はるみが私を裏切ったから無視しているだけなのに、何か文句があるの」
「裏切った、かよ。たまったもんじゃねえな。俺はただ、佐賀と付き合いたかっただけだ。しゃべりたかっただけだ。それだけできればあとは十分だ。お前には関係ないだろ。クラスの女子た

ちに無視させることはないだろ」
「無視させてなんていないわ。みな私に賛成してくれているだけよ。あれだけかばってあげたのに最後の最後に私を裏切って、傷つけて、失礼なことをしたはるみに対しては当然じゃないの」
「かばってあげた、かよ。かばうなんて言葉は大嘘だ。佐賀はずっとおびえていたってことがこの写真で判明しただろ。お前は親を使って菊乃先生をつぶそうと したり、俺の友だちをふたり、街から追い出したりやりたい放題してたよな。ああ、死んだ猫を三匹お前の家に投げ込んだのは確かに悪かったさ。けどな猫と人 間の家とどちらが大切なんだよ。仕事取り上げて追い出すってほど許しがたいことか」
「当然の報いよ。馬鹿な人間に対する正義の鉄拳よ。気付かないでいる人たちがばかなのよ。鵜呑みにしている新井林、あんたが一番馬鹿なのよ」
「そういう馬鹿な相手をどうしてお前は追い掛け回してたんだ？」

　とうとう、新井林の表情にはかすかに笑みが浮かんだ。続けた。
「周りは言うな、俺にお前がほれていたから、くっついている佐賀を引き離そうとしたとかなんとかな。悪いが俺は、女の振り方は十分マスターしてるぜ。佐賀 以外の女子からつきあいかけられたらきちんと、俺なりの礼儀でもってごめんっていうな。ああ、それが普通だ。つきあえねえけど人間嫌いじゃねえってこと だ。だがな杉本、お前のことだけは顔を見た時からへどが出るほど嫌いだった。いいか、お前みたいな女に好かれるとしたら、俺は気が狂うほど気持ち悪かったんだ！　うわさが立つだけでも耐えられねえんだ。まあそういうことはありえないと思うがな。それだけでも俺は神経がそそり立っていたんだ！」
「ちょっと顔が人間らしい造型しているからといって何を勘違いしているのかわからない。立村先輩よりもましなことがそんなに自慢したいことなのかしら」
「ああ、お前の好みの顔らしいな。だが俺はお前がこの世で一番憎い。殺してやりたいくらい憎い。抹殺してやりたいくらい憎い。佐賀をいじめる女が一番憎い」
　呪文のように、ゆっくりと。このやり方は、いつだったか本条先輩が教えてくれた技だ。
　――徹底して嫌いな相手に、もう二度と希望がないというふうに教え込む、最後の手段だって。なんで新井林、そこまで知ってる？
「一生お前を好きになるようなことは、絶対にないだろう。世の中の男でまともな男は誰一人として」

　きっと桧山先生は、とことん杉本の自尊心を壊して、反省させようとしているに違いない。新井林のやり方を大目に見ているに違いない。
　止める気なんて、さらさらないだろう。
　杉本は一切反省している気配を見せないのだから。
　――どうして杉本、ここで思いっきり泣いてしまわないんだよ。
　もう、杉本も、自分も、勝ち目はない。
　――杉本が泣かないんだったら。

　次の瞬間、言葉と一緒に身体がふいと浮かんだ。
「新井林、もう止めてくれ！」

　新井林と上総との間に挟まったボールの弾力が、はじけたふうだった。
「なんだよ、あんたには関係ねえだろ」
　一度からだが浮かんだらあとは楽に動いた。コートの端を離し、一歩新井林に近付いた。
「頼む、もうやめてくれ」
　身体奥から、震えるものがある。
　上総は新井林を見据えた。目の前には跳ね飛ばそうとするだけの熱気が立っていた。潰されてはならない、でないと壊れる。
「もう、勝負はついているだろう」

　――もう勝ち目はないんだ。
　杉本がどんなに暴れても叫んでも、新井林、桧山先生の「正義」には勝てない。
　一方的に攻め立てられ、追い詰められ、叩かれるだけだ。
　あの、声楽の彼女のように。音痴の性格のいい女子を罵ったという罪で、一切の存在を無視しつづけた桧山先生のクラスメートのように。もしかしたら声楽の 彼女は寂しい思いのあまりぶつけてしまったのかもしれない。もしかしたら彼女なりのコミュニケーションを取ろうとしてきたのかもしれない。でも、許せない ことは許せない。　それは上総が、小学校時代いやと言うほど感じ、ぶつけられてきたことだったから。
　――杉本がどんなに叫んでも、善意なんだって言ったって、無理なんだ。だったら。

「俺も今まで杉本の話を聞いていただけだし、お前らがどういう繋がりでいろいろいがみあってきたのか一方的にしか知らない。実際見ていないから判断もできない。だが、新井林が恨みを持つ理由は理解できるつもりだ」
「口先だけでよく言うぜ」
「杉本が佐賀さんに対してしたことは、あきらかに悪いと思う。たぶん杉本は純粋に善意だったと俺は見ている。でもそう思えない人だっているのもわかっている。新井林、そういうことだろう？」
「善意であろうがなかろうが、佐賀が六年間ひでえ目にあってきたのだけは確かだ。あんた、もしこの女のしてきたことが善意で本当に佐賀を守るためだったと して、許すことができるかよ。なんとかのためだったら許されて当然だと思っているんだろうな。悪いがそんな甘ったれた料簡は通用しねえよ。傷ついたのは佐 賀なんだ。この女がどんなに土下座したって佐賀の六年間は戻ってこねえんだ」
「だから杉本は制裁を受けてるだろう」

　今も、おそらくこれからも。杉本梨南は一年Ｂ組以外の連中からも制裁を与えられるだろう。

目に見えるようだった。どんなに杉本が訴えても、佐賀にされた事がつらいと泣いても、親友を失った事が苦しいと叫んでも。
新井林は桧山先生および、男子一同の「正義」を突きつけて、杉本を徹底して痛めつけるだろう。そして当然のこととみな思うことだろう。上総も、同じ立場 だったらそう思ってるだろう。もし自分が佐賀はるみの立場だったら……。守ってくれる新井林に頼るかもしれない。本条先輩のような相手にすがり付いていた 自分を思い返せばそれもわかる。
でも、杉本はこれから、片思いしていた相手に徹底して嫌われ、親友だった相手に同情されるという屈辱を耐えなくてはならない。
杉本梨南の視線が背中に張り付くのを感じつつ、上総は自分の口が巫女さんのように動くにまかせた。
「小学校時代のことは新井林、君の考えが正しいと思う。だけど、それと今杉本に言ったこととは別だろう。新井林が杉本を好きになれないのはわかった。でも、わかりきっていることをなんで今さらひっぱり出す必要があるんだ」
いかにもうんざり、といった風に新井林は顔をしかめた。上総の方が一方的に喋りつづけるのに閉口したようだった。
「なあ桧山先生、なんでこいつなんかをつれてきたんだよ。学年違う相手をなんで」

やっと桧山先生が間に入ってくれた。このままだと自分の方が壊れる寸前だった。上総は素直にふたたび、ソファーに腰掛けた。
「立村くん、ありがとう。新井林も座れ。やはり君は次期評議委員長だな。きちんと一方の意見だけを取り入れず、公正な立場で判断してくれているな」
――お世辞言うのもいい加減にしろよな。
吐き捨てたいのをこらえた。新井林も同じらしく、顔を思いっきりしかめた。
「なんでこいつなんかにありがとうだなんて言うんだよ」
「いやな、今日は新井林とふたりで杉本に、一年Ｂ組の現状について理解してもらうつもりだったんだがな。たぶん杉本には理解できない言葉の羅列ではないか と思ってなあ。一番杉本が信頼している立村くんと一緒だったら、きっと杉本も少しは理解しようと努力してくれるんでないかと、期待していたわけだ。本当の 目的は立村くんに俺の卒論を読んでもらいたかった、それだけだがな」
目が全開、壊れる寸前の杉本へ話し掛けた。やはり芝居がかっていた。酔っぱらっているように見えた。
「杉本、新井林の言い分は言い過ぎだったかもしれない。小学校時代のことについては今更何も言わない。だが新井林の言うとおり佐賀が苦しんできたことも事 実だ。佐賀が杉本によって『いじめ』られていることも立村くんを始め全ての人が認めているのも確かだ。いいかげんここで、自分の非を認めることはできない か？　自分が何をしてきたか、これだけ話しても理解できないか？」
杉本は信じられないといった風に唇を軽く曲げた。もう一度にらみつけた。

「ばかばかしい。理解するもなにも、新井林の一方的な話を聞かされているだけです。こんなくだらないことに付き合わされる暇があったら、家で勉強します」
　立ち上がり、コートを抱えた。最後に上総を一瞥した。
「立村先輩、新井林と私との勝負はまだついてません。勘違いしたこと言わないでください」
　――違うって、だからさ、杉本。
　言葉が出ない。もっと別に言う事があるはずだった。
　慇懃に礼をした後、もう一度上総をにらみつけ、出て行った。桧山先生を見据えていたのと同じまなざしだった。

「すみません。明日、先生の卒論直接職員室に取りに行きます。今日は邪魔してすみませんでした」
　それからのことはあいまいだった。とにかくせせら笑っている様子の桧山先生、および軽蔑しきった風にすわり込んだ新井林に一礼し、廊下を走っていった。コートを忘れそうだった。あぶなかった。
「杉本、待て」
　階段の踊り場まで追いかけた。杉本はすでにコートを羽織り、襟元につけた銀のブローチを触れ立ち止まっていた。
「まだご用があるのですか」
「いや、あのさ」
　息が切れて、上手くでてこない。
「どうせ、私のことをばかにしている男子たちのおひとりだったということがわかりましたので」
「違うよ、杉本、そういうんじゃない」
　上総は「違う」という言葉に精一杯の力を込めた。
「俺が言いたいのは、あのままだったら杉本が追い出されてしまうから、ってことだよ」
「別にあんないかれたクラスにいたいとも思いませんが」
「違うよ、杉本」
　腕をつかもうとしたけど、触れる寸前で手を下ろした。
「俺は杉本の味方でいたいよ。でも、あのまま一年Ｂ組の村八分になったらどうする。桧山先生も、新井林も、そうしようとしたら簡単に手を下せるんだ。もう、勝ち目ないんだよ」
「お分かりにならないのですね。私は私の真実を通して」
　口を一文字にする杉本。でも揺れている。まだ見込みはある。上総は回り込んでもう一度早口に続けた。
「このまま杉本の真実を通してたら、新井林も佐賀さんも、お前のことを嫌いになる一方だって、わかってるだろ。杉本くらい頭いいんだったら、わかるだろ」
「別にそれは構いません。私もあのふたり嫌いですし」
「あのふたりも、みんな杉本のことお見通しなんだ」

杉本の両腕をコート越しに押さえた。力が指先に伝わってくる。暖かい。
「今ならまだ間に合うよ。杉本。今から桧山先生のいるあの部屋に戻って、佐賀さんのことだけでも頭を下げてしまえばまるく収まるよ。もう無視なんてしない、ふつうの話するからって言うだけで済むんだよ」
「先輩、プライドお持ちでないんですね」
「俺にはそんなもん、とっくになくしてる。でないと、生きていけないんだよ」

上総にはこれから何が起こるか、手に取るようにわかる。
このまま桧山先生が杉本を、かの声楽の彼女のごとき立場に追い込むことも可能ならば。
また新井林が、写真の枚数以上に想いを捧げている佐賀のために、どんな手も使うならば。
そして佐賀はるみの本心がどこにあるのかも。
杉本の感じていることはたぶん、上総と同じだ。本当だったら、同じにふるまいたかっただろう。夏休みの合宿で起こしたバス脱出事件のことだって、その後 起こった貴史と美里とのいさかいだって、すべては自分が頭を下げたからなんとか二年Ｄ組にいられるようなもの。もし本音で杉本のようにぶつかっていたら。
フィルターを通さない感情の持ち主である杉本を、どうしたら守れるのだろう。
同じように戦って潰せるだけの力が欲しかった。
でも、今の上総には頭を下げ、ただひれ伏し、涙を流すしかやりかたが見つからない。
杉本をどうすれば、最悪の事態に追い込まないで済むのだろう。

そしてもっと悪い事に。
新井林、佐賀への未練がみなの前でそれは丸見えだ。
気付いていないのは杉本本人だけなのだ。
いつか、ふたりが頭を下げて杉本を受け入れてくれると、どこかで信じている。上総だってそう思っていた時期がある。
でも、それができないと知ってからは必死にフィルターを探すよう努力しつづけていた。
どうすればいいのか今でもわからない。
上総は振り切った。頭を一振りして、杉本を見上げた。杉本の両腕を押さえたままだった。

「杉本、どんなに待ったって、新井林は杉本のことを好きになってくれやしないんだ。どんなに佐賀さんを無視したって、佐賀さんは新井林と別れたりしないん だ。杉本の方であらためて、あいさつだけでもいいからしてくださいとか、もう一度佐賀さんと友だちにしてくださいとか、そういわない限り。そうしない限 り、桧山先生は杉本をどんどん攻めていくだけなんだよ。まだ今なら間に合うよ。佐賀さんも、まだ杉本と友達でいたいって言ってくれているうちに。俺もついていく。だから、もう一度戻ろう」
「冗談言わないでください」
声が上ずった。杉本の言葉がだんだん生身にはがれてきた。

「けど、そうしたら新井林だって許してくれるかもしれない。佐賀さんに害を及ぼさない奴だとわかったら、あいつ単純だから、大目に見てくれるよ。佐賀さんだって、かばってくれるよ」
「なんであいつらに頭を下げさせようとするのですか。異様に立村先輩ははるみをかばってますよね。ああいうタイプをばかな男子は好むと聞いてましたが、立村先輩もばか男子のひとりだったのですね」

　もうだめだ。
　両手が杉本の腕から滑り落ちた。
　上総は喉からこみ上げるものをこらえながら、最後の言葉を吐き出した。

「俺がもし、佐賀さんの立場だったとしたら、たぶん杉本のことを許せなかったと思うからだ。新井林の立場だったら、きっと同じことをしてたと思う。でも、佐賀さんは杉本を許そうとしてくれてるんだ。それだけは俺と違う。俺なんかより、まだ救いがあるんだよ」

　杉本梨南は背を向けた。階段を下りていく杉本を見送り、上総は杉本の言い残した言葉を反芻していた。
　――立村先輩もばか男子のひとりだったのですね。

その６　隠し事を知られて

　評議委員会が再開された。本条先輩は相変わらず一年にやさしく二年に厳しい態度を崩さなかった。厳密に言えば上総にのみ、と言うとこだろうか。
「ほれ、『奇岩城』の進行状況はどんなだ。立村、ちょっと来い」
　上総は黙って、教壇の本条先輩のもとに向かった。
　シナリオは一週間かけて仕上げた。どうせ去年の「忠臣蔵」もそうだったけれども、劇が進むにつれてどんどん内容が変わるものだから、がっちり作り上げなくてもいいと思っている。
「だいぶ進んだか。けどなんだ。まだ二年だけでぐちゃぐちゃやってるのかよ」
「一応、シナリオと配役だけでも固めてからにしようと」
　間髪入れず、額を平手ではたかれた。みけんを切られるって奴だ。前髪の上から押さえた。教室にはまだ一年も、二年もうろついているのに。幸い新井林は去った後だった。
「なあにねぼけたこと言ってるんだ。いいか。衣装とか音響とか、そんなんは冬休みに集中してやっても間に合うだろ。機材だってどうせ結城先輩のとこでおねだりすればすむことだ。だが、それまでにやることがあるだろ。まずは、意思統一だ」
「でも、まだ形が固まってないし」
「いいかげんにしろ。ちょっと来い」
　さすがに人前で声を荒げるのもまずいと思ってくれたのだろう。廊下に片腕取られて引っ張り出された。
「いいか立村。あいかわらず新井林とたらたらやっているようだがなあ、いったい進展あったのか。奴とは」
「進展って」
　胃液が上がってくるような記憶。生徒相談室のこと。
　先週の一年Ｂ組評議ふたりを取り囲んだ騒ぎのつれづれを。
「先輩、あの、桧山先生になにかお話し」
　言いかけてまた、耳をはたかれた。ごわっと響く。
「黙れ、今は俺の質問に答えろ」
　本条先輩は、唇の端をなめながら舌打ちした。
「さっきも見たけどな、杉本にもあっさり振られてるじゃねえか。ありゃま、どうした」
　――余計なもの見るなよな。
　舌打ちしたいのは自分の方だった。評議委員会終了後、、何も言わずに背を向けた杉本梨南に、
「杉本、ちょっと待ってくれないか。あのさ」
　声をかけたもののあっさり無視された。戸口まで追いかけてもう一度同じ言葉をかけると、一言。
「先輩には説明する気ありませんから」
　冷たくあしらわれた。周りの女子たちが顔をしかめていたのが印象的。みっともないったら

ない。彼女がいるのに後輩に手を出そうとして振られている情けない男と思われているのだろう。くさくさする。
　詳しい事情を説明する気にはなれない。上総は振り切った。
「そんなの関係ありません。それより」
「なんでごまかそうとするんだ。新井林もあいつ、できた奴だから何にも言わなかったが。いったい何が好き好んで杉本なんかに手を出したがるんだ」
「『奇岩城』とは関係ないでしょう。俺はただ、今の段階でいきなり一年生に話を持ちかけるのは早いと思うだけです」
「ほおなるほどな」
　あざとく流された。
「もう少し、お前がどういう手を打つか、見せてもらうとするか」

　――どうすればいいかわかんないってさ。
　いつもだったら本条先輩に甘えてすべて腹の中から相談するのが常だった。
　八月末の、二年クラス宿泊研修の、あの時までは。
　策略を練り上げ、大嘘ついてバスから飛び降り、明星美術館に駆け込んだ日。
　決行前夜、上総はご意見頂戴したくて本条先輩へ電話を入れた。計画を実行すべきか、それとも別の方法を考えるべきか。あの時本条先輩は、「やめとけ」とやんわり制止してくれた。でも結果、上総が選んだのは本条先輩とは正反対の行動だった。
　はたしてよかったのか悪かったのか、判断はまだ出ていない。菱本先生に張り倒されたり、貴史や美里と揉め事起こしたりと、後遺症はかなり残った。けど、 上総自身はバス脱出以外のどんな方法も取れなかったと信じている。本条先輩の意見以外の方法でないと、どうしようもなかった。
　今思えば、二学期に入ってから自分の中で、本条先輩との間に一線を引いてしまったような気がする。もちろん、ひまな時には三年Ａ組の教室でだべったり、 卓球場でこてんぱんにやっつけたり、同級生たちには言えないことを相談したり、いろいろやっている。でも、口を開こうとすると、何かが押しとどめるように なったのも、二学期からだった。
　――先輩は、公立へ行くんだ。
　七月に、上総にだけ打ち明けてくれた、公立高校進学。
　なにかあれば「俺ばかりに甘ったれてるんじゃねえよ」と突き放すような言い方をされ始めたのも、夏休みに入ってからだ。同期の二年たちともっと猥談に燃えろとか、もっと一年とうまくやれとか……そうだ、新井林との折り合いについて文句言われ始めたのも同じ時期だった。
　――本条先輩から離れなくちゃいけないってわかってるさ。だから距離置くようにしてるじゃないかよ。
　でもできない。置けない。
　特に評議委員長への指名を公認でされてからは。
　できるだけ本条先輩にべったりしないように、距離を置いたつもりだった。厳しく接してくる

のは望むところだたはずだ。
　望んだものが麻酔なしの手術みたいな痛みを持つことを、上総は気づいていなかった。

　玄関ロビーで待っていたのは、杉本梨南ではなく、美里だった。試験が終わってからなかなか一緒にいる時間が取れなかった。貴史にも「美里、めちゃくちゃこええぞ。立村、もう少しなだめてやってくれよ」とつつかれていた。
「立村くん、今日は一緒に帰れるよね」
　本条先輩に小突かれていたのを見られていたのではないだろうか。上総はまじまじと美里の口元に知ったかぶりのあとがないかどうか確認した。幸い、なんでもなさそうだった。美里はコートの襟を直し、ほっとした表情を見せた。
「なあんかね、先輩たちって、自分たちのできないことを私たちにさせようとしてるじゃない？
　それってずるいよね」
　――聞いてたか、やっぱり。
「だからさ、立村くん、気にすることないよ。なんか本条先輩も、公立高校の入試関係でぴりぴりしてるだけじゃないの」
「あの人、合格間違いなしだろ。それはないよ」
「なら、いいけど」
　小さく口を尖らせ、美里はすぐに話を変えてくれた。
　同じ二年Ｄ組のねただったら、馬鹿話やらいろいろな問題やら、先生への悪口やら、話すことはたくさんあったから。

　――付き合う、って、こういうことだけなんだろうか。
　ここ数日、食欲のない日が続いている。
　はっきり杉本に言われた言葉がまだ、耳に残っている。
　――立村先輩も、ばか男子の一人だったのですね。
　堪えた。
　新井林を代表とする男子連中のひとりだったら、たぶん「あの馬鹿女が、けっ」とつばを吐きかけるだけですんだのだろう。誰に相談しても、みな同じく「じゃあ無視しちまえよ。馬鹿は馬鹿なんだから」で終わるだろう。
　そうできないから、上総は迷う。
　どんなに杉本の言葉がつめを立てるものであっても、決して憎しみや怒りにつながるものではない。杉本に対してだけだった。無理やり「この人は善意で言っているんだ」と、心の変換装置を使用しなくても伝わってくるなにかがある。
　――やはり、俺がこうするしかないのかな。
　美里の、だいぶ伸びた肩の髪を眺めた。いつもながらつややかだ。上総には過ぎた彼女だと、みなが言う。もっともだと思う。もっとふさわしい相手がたくさんいるはずだと、上総も思う。それなら、やはり。

――なに考えてるんだ、俺ていったい。
慌てて肩をすくめた。今回の実力試験トップ争いを話題にしているはずなのに、頭からひとつの考えが離れない。
――当たり前だろ、杉本は最初から俺のことなんて、付き合いの対象外なんだから。最初からわかってるはずだろ。問題解決のためにいきなり、付き合ってくれなんて言ったって、完全に軽蔑されるだけだろ。いったい俺、何考えてるんだかな。

土日かけて「奇岩城」シナリオに没頭していた間、ちらっと思い浮かんだ案だった。
美里には申し訳ないけれども、一度「つきあい」を清算してしまうことを。
そして一度、杉本梨南の「付き合い相手」として、新井林と同じ立場を取り、話し合いを持つというのはどうだろう？
たぶん新井林は上総を、「頭の悪い次期評議委員長」としか受け止めていない。「こんな奴」と軽蔑しきった表情でもってつばを吐きかけるだけだろう。しか し、「問題かかえた女子とのつきあい相手同士」ということだったら、上下関係なくすんなり話し合いに持っていけるのではないだろうか。
新井林を基準にして話を進めないと、どうしようもない。

しかし、肝心の杉本本人が上総のことを「つきあい相手」としては絶対に認めないだろうことも予想していた。なにせ、「ローエングリン」とは正反対で「不 細工・頭が悪い」の評価を下している上総なのだ。先輩で、杉本のことをかわいがっているから敬語を使ってもらえるけれども、そうでなかったら徹底して軽蔑 されていることだろう。
それに上総も、恋愛という感情がよくわからない。
杉本を、今まで美里と同じ感覚で接することはできるだろう。一緒に学校の行き帰りを歩いたり、今まで通りに「おちうど」へ連れていったりくらいはできる だろう。でも、美里だってかなり上総に対して不満を持っているはすだ。美里の求める「つきあい」ができているとは思えない。それを、ただ「クラス問題のた め」にだけ「つきあい」という方法を利用するのは、それぞれの女子に対して失礼なのではないだろうか。
――恋愛感情なんて、わかんないよ。そんなの。
すぐに破棄した案だった。

「久しぶりだし、ね、ソフトクリーム食べていこうよ」
この冷え込む中、何が楽しくて、と言いたいのを我慢して上総はついていった。大型スーパー「リーズン」にてソフトクリームを注文し、テーブルについた。
「なんか立村くん、追試続きで疲れ切ってるって感じだよね。大丈夫？」
「おかげさまで」
店の中は暑いくらいで、ソフトクリームの丸まった先が落ちそうだった。急いでかぶりついた

。美里は食べるのが早い。ミックスソフトをあっという間に食べ尽くしている。
「早いなあ。清坂氏、アイス関係を食べるのに限っては」
「立村くんが遅いのよ。早く食べないと溶けちゃうよ」
「食欲ないんだ。余裕あるなら食べるか」
「もーらい！」
　スプーンを持ってきてもらい、美里は電光石火の早業であっという間に平らげた。
「でね、立村くん、テスト終わってからめちゃくちゃ暗いんだけど、別に言いたくないんならいいよ。ただ、私にできることあったら言ってね。ほら、最近だと杉本さんのこととかあるでしょ」
　わざわざ切り出してくれるとはありがたい。上総はため息を遠慮せずついた。
「鋭いな」
　最後はコーンも、「食べていい？」と確認した後、かりりと食べきった。すごい食欲である。
「この前もね、こずえが言ってたよ。立村くんが杉本さんのことでいろいろ悩んでるって」
　――あの人、口、軽すぎ。
　美里には内緒にしようと言ってくれたのを丸のみした自分が馬鹿だった。唇をかんでガラス張りの外を眺めた。
　特に何かを感じたわけでもなさそうで、美里は続けた。
「まあね、みんなが言う通りだとは思うんだけどね。でも、立村くんが真剣に悩んでいるってことは、相当大変なんじゃないかなって、思うんだ」
「いやそんなことないよ」
　テーブルに、使い終わったスプーンを垂直に立て、片手は拳固で上総に向かった美里。
「あのね、立村君。もし、杉本さん関連のことで困っているんだったら、二年女子が味方に立つから安心してね。みんな、あの子のこと大好きだし、守ってあげたいって思ってるんだから。でも、勘違いしたらだめだよ」
「勘違い？」
　言われている意味がわからず問い返した。
「立村くんって、女子たちの立場わからなくて変なことしそうで怖いな。つまりね、もし杉本さんのことで、新井林くん敵なやり方で守ろうなんてしたら、もう、えらいことになるからね」
「新井林的やり方って？」
「やっぱり鈍感だなあ。ほら、佐賀さんがなんで、女子たちから顰蹙買っているかってこと。新井林くん、一生懸命なのはわかるけど、あれじゃあ、逆効果。言ってあげたほういいよ」
「いや、あれは、つまり」
　　美里の手はまだ握り締められたままだ。
「わかるでしょ、ね。だからよ。一年Ｂ組の女子ってたぶん、新井林くんみたいな彼氏がいないと思うんだ。あんな風に一途に守ってくれる人なんていないよきっと」
「俺はその点、失格だな」
　ぽそりとつぶやいてしまい、慌てて飲み込んだ。

「いいよ、立村くんは一生懸命だから。でもね、佐賀さんだから、みんながやっかんでいるのを無視して、しゃんとしてられるけれども、杉本さんはそういうのに耐えられないと思うんだ。難しいよ」
「難しいって」
「だから、私が言いたいのは」
　とんと、スプーンを握った手を、テーブルに打ち付けた。
「立村くんがたったひとりで、杉本さんを守ろうとして、たとえば彼氏っぽくなったりとか、そういうことをしてもだめってことよ。いい？　女子のことはね、 女子が一番よく知ってるんだから。なんでも相談してよ。新井林くんもねえ、佐賀さんが無視されてしまっているのは、本人が目立っているからなんだって、ど うして気づかないのかなあ。ね、そう思うでしょ」
　上総は、コーヒーを一杯おごることにした。
　――女子のことは、女子が一番知ってるか。
「それはありえないよ。清坂氏」
　無理に上総は笑いかけた。
「だってさ、杉本は俺のことを不細工かつ頭が悪いってことを断言してるんだ。もっといい奴一杯いるって」
　心なしか、美里の手は緩み、開いていた。
「そうか、杉本さんの好みがあるかあ」

　次の日は茶道の稽古などでばたついた。茶室の掃除をはじめ、花器、茶碗の洗い物など、評議委員らしくない仕事で忙しい。
　本条先輩にあてつけるわけではないけれど、上総なりの解釈でシナリオはほぼ完成した。あとは二年連中にまわして、感想をまとめて最後に一年へ見せる、という方向で行こうと決めた。
コピー室に行かなくてはならない。
　――表紙、清坂氏あたりにイラスト書いてもらおうか。
　深い意味はない。別に表紙に凝って、完成を延ばそうなんていう姑息なことは考えていないつもりだ。まかりまちがっても新井林に「高校生探偵イジドール」役を当てなくては行けないという問題と、向かい合いたくないからではない。

　一年Ｂ組の廊下掲示板には、でかでかと「青大附中スポーツ壁新聞」が張り巡らされている。一枚だけではない。模造紙三枚使っている。ねたは相変わらず負け戦情報だけども、だんだんイラストとか、小さな写真とかが混じってきている。字は読みやすい丸文字だった。
　二年の間でも話題となっている。休み時間、読みに行くためにわざわざ一年の廊下へ出かける奴も増えている。菱本先生も最近、朝の会などで褒め称えることが多くなった。無視決め込んでいない。ちゃんと上総も定期的に見るよう心がけている。
　――俺だったらもっと、小さく、コピー誌の形式で配るかなにかするだろうな。せっかく評議委員の特権でコピー室ただで使えるんだ。そうすれば玄関なんかにおいて勝手に持っていったり

できるだろうしさ。
　このくらいの助言ができるなら、うまくいくんだろうが。ぼんやり思った。

　一通り片付けがすみ、給食が終わり南雲と「全独ヒットチャート１００」についての意見交換をしていた。貴史はすでに体育館でバスケットボールに興じているのだろう。間に合うようだったら混ぜてもらうつもりだった。この辺、南雲とは別行動になる。難しい人間関係である。
「あれ、りっちゃんの後輩ちゃんが来たぞ」
　言い方が妙にひっかかる。扉に首を覗かせているのは、黒髪をひとつにまとめ白いショールを肩にかけている女子一人。そういうのは一人しかいない。杉本梨南だ。

「あ、杉本、来たんだ」
　言葉がひっかかりつつも、柔らかく立ちあがるようだった。上総は手招きしようとした。杉本はじっと上総を見据え、すぐに扉を閉めた。
「ちょっと追っかけてくるよ」
「ほんと、評議も大変だよなあ」
　同情のムードたっぷりの南雲を置いて、上総は廊下に出た。
　まだ杉本は廊下で立ち尽くしていた。
「いやな言い方でごめん、あの、この前のことだけど」
「立村先輩にはお話しすることはありません」
　くいっと唇をかみ締めたまま答えた杉本。でも委員会の時よりはまだ、甘い感じが残っている。ちょっとくらいなら話しても大丈夫というサイン。すぐに背を向けないで上総の顔を見ているところから明らかだ。
「用があるのは清坂先輩にです」
「あ、そうか。清坂氏は今いないかな」
「お会いしてお話ししました。立村先輩とはもうお話ししません」
　いつものように冷たい瞳。でも逃げない。じっと上総の目を見つめて、五つ数えるようにつま先でとんとんと突いた。話せば、聞いてもらえるってことだ。
「俺は杉本に用があるから、何度でも行くよ」
　言い残し、上総は自分から背を向けた。ちょっとだけ冷たく見せたつもりだった。

　用があったはずの美里はどこに行ったのかわからない。女子たちにはそれぞれ溜まり場があるのだろう。前の日ソフトクリームと一緒にいただいたお言葉によ れば、「女子のことは女子が一番知っている」のだそうだ。反対もしかり。上総も男子連中が女子のいない技術室とか、更衣室などでどんなスケベねたをかまし ているか、まず話すことはできないだろう。男性不信になること請け合いだ。
「それにしても静かだな」
　カセットテープの裏にいろいろ書き込んでいる南雲に声をかけた。めずらしく今日は一人だ。

奈良岡さんにちょっかいかけるでもなく、他の連中とだべるでもなく。「りっちゃん、悪いけど英語の訳貸してくれないかなあ」
「いいよ」
　ついでに宿題の答えが書き込まれたプリントも渡した。次期規律委員長様は決して、「ノートの貸し借り禁止」などという野暮なお達しをする予定ないとのことだ。
「それはそうと、最近りっちゃん、本条さんとあまりしゃべってないと違う？」
「いろいろお互い忙しいんだ」
「ふうん」
　――あれだけべったりしてたくせにって言いたいのかよ。
　珍しく南雲にむっとする。かちんと来た。
「いいだろ。どうせ変な噂を打ち消すことになるだろうしさ」
　言葉にぴりりとしたものが走った。
「いやさ、評議でやるビデオ演劇のことで、今回規律委員会が衣装関係協力することになってるだろ。遠慮なく言ってほしいなって思っただけだよ」
　気づいていないんだろう。けろりと答える南雲。ほっとした。
「ずいぶん情報はやいな」
　まだ南雲には、ビデオ演劇の内容が「奇岩城」に決まったことくらいしか話していなかった。規律委員会は裏を返せばファッション研究部のようなもの。お しゃれにこだわりのある連中の集まりだ。もう少し落ち着いてから話すつもりではいたのだが。「いろいろ噂きくんだけど、りっちゃん」
　目を向けずに南雲はつぶやいた。
「気、つかっちゃうとこあるだろ。いろいろと。けど、事務的なことはどんどん先取りして俺の方が言っちゃうから、りっちゃんも遠慮しないでほしいなあ。あ、いざとなったら元気の出る薬を彰子さんに頼んで、保健室から密輸入してもらうってこともできるしさ」
「元気の出る薬を密輸入かよ、怖すぎる」
　英語訳を書き連ねたページの隅に、南雲は三本さらりと縦線を引いた。
「一年の男女で、家庭科および縫い物関係パーフェクトって奴が二人いるんだ。最近の規律委員会、いわば手芸部化してるんだ。もし小物関係も頼まれたらどんどんやりまっせ」
「じゃあ、シナリオが完成しだい渡すよ」
　答えず南雲は、あくのない笑顔でうなづいた。思わず上総もつぶやいた。
「なぐちゃん、しっぽ振ってるって感じだよな」

　結局、昼休みは南雲との語り合いで終わり、チャイムと同時に他の連中が戻ってきた。社会の授業だった。菱本先生の担当だった。面白くないとは言わないが、顔を見るだけでうんざり、しばし居眠りしまくる授業でもある。
　貴史が机の前で上総のカンペンケースをつかみ、肩をたたいた。
「立村、わりい、ちょっとこいや」

　いつぞやの修羅場を思い出してぞっとするものの、すぐに安心した。怒っていない証拠に貴史はむりやりウインクしている。はっきり言って、無理するなと言いたい。席の後ろにぷらぷら行った。
「お前さ、なんで言わねえの」
　軽く切り出された。正真正銘怒っていない。にやっと笑っている。
「なんかあったのか」
「ま、いいけどな。言いたくねえならいいけど、さっきな、美里たちが菱本先生のとこへ行って、お前のことをすっげえ剣幕で話してたんだ。いわゆる、青年の主張ってやつみたいなのりなんだけどな」
　美里が戻ってきていないかを見渡す。まだ来てない。
「俺のことをか。なんだろ。そんな話、してたのか」
「お前、知ってると思ってたけどな」
　思いっきり首を振った。見当がつかない。
「俺に関係することで清坂氏がかよ」
「当たり前だろ。あんなでけえ声でさ、『立村くんのプライバシーを先生たちが侵害していいんですか！』って叫んでたぜ。あ、美里だけじゃない。古川も一緒だ。お前、別に隠しごとしなくたって、俺とかなあんも思わねえのにな……立村、お前本当に、知らねえのか」
　――わからないって。そんなこと言われても。
　じいっと射すくめる貴史。
　うそついていないので、がまんして見返した。
「もしかして、美里の奴、ひとりで突っ走っちまったのかよ。まあいいっさ。別に悪いことしてるわけじゃねえもんな」
　もう一度、今度は平手で腕を弾み良く叩き、貴史は自分の席に戻って行った。
　美里とこずえが戻ってきたのはすぐあとだった。
　こずえの方が話しわかるだろう。口も軽いし。

「あのさ、古川さん」
　一声かけた。なにか言いたそうな顔で指さししようとしたこずえだが、
「こずえ！　変なこと言わないで！」
　美里から止めが入った。
「おいおい何だよ。さっき羽飛から聞いたけど、俺のことでまたなにかまずいことあったのか」
「あんたは黙ってな。前科あるんだからね」
　わざと美里にも聞こえるように返事するのは止めてほしかった。
「当事者の俺に話せないことなのかよ」
「ばかだねえ。立村、だからあんたはガキだって言うのよ。美里にあとで感謝のプレゼントかなにかしてやんなよ。まったくねえ美里も」
　におわせる言い方で好奇心一杯、おなかがすいた。

上総は美里の方を肩越しに眺め、念を送ってみた。伝わっているかどうかは、わからない。
――いったい、俺のプライバシーってなんなんだよ。清坂氏。

かなり顔が赤らんでいる菱本先生の歴史授業は終わった。別に内容でエキサイトしたわけではなさそうだった。美里と一戦交わしたのだろうか。自分が挟まっていると考えると、かなり落ち込みそうだ。
「清坂氏、ちょっといいか」
「知らない」
厳しくつっぱねる。引こうとは思わない。逃げようとする美里の後を追った。「知らないって何だよ。さっき羽飛が言ってたけど、俺のことで菱もと先生となにかあったのか。怒ってるんじゃなくてさ、もし、また俺が馬鹿なことしてたら、わるいと思って」
十分のささやかな休み時間。美里は廊下に逃げ出そうとする。しつこく追う。
「どうせ、立村くんは知っても知らなくてもいいことなんだもん」
「隠しごとしたがるのはめずらしいな。俺にはさんざん、隠しごとするなって言うくせにさ」
「別に私、悪いことしたわけじゃないもん」
「いや、そんなことしてるって思うわけないだろ。清坂氏のこと、これでも信用」
「どうだか。どうでもいいよそんなの」
押し問答が続いたが、とうとうトイレに逃げられてしまった。さすがに追えない。
しかたなくポケットに両手を突っ込んだまま教室に戻る。
――なんか、わけわからないな、みんな。
隣のこずえにも、もう一度頼んでみたが無駄だった。
「あんた、そういうのは美里から聞きなさいよ。それにしてもねえ」
もやもやしたまま帰りの会を迎えた。こんな気分だと、とてもだが美里と帰る気にはなれない。言い訳してコピー室にこもろうかと決めた。
菱本先生が手ぶらで教室に戻ってきた。相変わらず顔だけゆで蛸状態。
――酒でも飲んでるのかよ。
上総が思っただけではない。他の連中が直接、「先生、ほろ酔い？」と、脳天気な言葉を投げかけていた。無視したのは珍しい。おちゃらけてない。
じっと、上総にひとつうなづいた。いやな予感がする。
視線をそらして美里と貴史、最後にこずえの顔色をチェックした。
「なにじろじろ見てるのよ。ほら、あんた号令でしょ」
あわてて「起立」と一声かけた。

「みんな、今、俺はひとつだけ言っておきたいことがある」
――また、青春ドラマの真似事かよ。
菱本先生が背を伸ばし、目を輝かせてお説教をした時、早く帰ることのできたためしはない。長丁場を覚悟した。

「一度、このことについては話すべきだったと思うが」
　上総をもう一度見下ろした。この視線経験がある。夏の宿泊研修後、上総のやらかした事件を総括した時の、あれと一緒だ。
「青大附中において、一部の生徒が、規定の試験を受けて大学の講義に参加したり、芸術関係の科目を受講したりしているのはみな知っていると思う。Ｄ組だ と、美術の選択授業を金沢が、あと英語関連の授業を立村が、それぞれきちんと試験に通って毎週みんなとは違う授業ととっている」
　――そのことでなんかまずいことしたかなあ。
　先週なんとか受け取った桧山先生の卒論を思い出した。
「いいか、人の能力というのは、それぞれでこぼこがある。悪いが立村の例が一番わかりやすいと思うのでちょっとだけ我慢してくれよ。立村」
　――俺をまたつるしにかけるのかよ。
　言い返すのも面倒で、小さくうなづいた。菱本先生はめずらしく無表情のまま上総を見返した。
「立村の場合、一年の頃から英語の成績がずば抜けていた。まあな、一年最初のうちは成績がいい奴も多いんだが、だんだん落ちてきてあらあらってことがほと んどだ。だが立村は語学に関して中学生以上の授業を受けても大丈夫だということが判明したわけだった。だから、二年にあがるまえに試験を受けてもらったっ てわけだ」
　――思い出させるのかよ。たぶん、俺の数学のことで今度は落とすんだな。
　聞き流した。言葉を切ってまた、菱本先生は上総を覗き込んだ。他の連中はまだがやがやと関係ない話をしている。
「ちょっとだけだ。まじめに聞いてくれ。だが、立村の場合もうひとつ、大きな問題があった。数学のことだ」
　――さぼっている上にどうしようもないって言いたいんだろ。どうせ俺は努力しがいのない数学能力なしだよ。
　ののしるのは自分だけで十分だ。うつむいた。
「たぶん、一部の人は、ひとりだけ立村がやさしい数学の問題を渡されていることとかに腹を立てているかも知れない。これは狩野先生とも相談したことなんだ が、この点だけは理解してほしいんだ。立村の場合は、さぼって数学の成績が良くないわけではない。努力しても挽回できないいくつかの理由があるんだ。それ は立村本人もよくわかっていると思うし、先生たちも理解している」
　――それがなんだってんだよ。
　足をひっぱられる。中学一年春の、悪夢に引っ張られる。耳をふさぎたい。
「いいか。人間の能力は人それぞれ、でこぼこがあるんだ。金沢はすばらしい絵を書くことができるという才能を持っている。数学が得意な奴、音楽が得意な 奴。文章を書くのがうまい奴。いっぱいいる。でもその反面、苦手なところもたくさんもっているはずだ。努力すればクリアできる問題もあるし、単なるさぼ りってのもあるだろうな。それこそ、やればできるくせにって奴だ

。でも、どうしても苦手なもの、どうしてもわからないもの。たくさんあるはずだ。青大附属では、できるだけみんなの得意分野を伸ばしてやりたいし、苦手分野は少しでも標準に持っていってやりたい。でも、できないことを自覚するのも、必要なこと なんだ」
　大きく息を吸い、菱本先生は上総に向き直った。説教ラストスパート。体がこわばる。
「立村、たまたまお前は数学という弱点があるよな。でも決してそれは恥ずかしいことではないんだ。人間、卒業すればサインコサインタンジェントなんて、 めったに使うことなんてない。だから勉強する必要はないとは言わない。だが、自分に欠けているものが何かわかれば、それだけでも人生、楽になるぞ。立村の 場合は、これから先数学と取っ組み合う時誰に助けを借りればいいか、それを勉強することができるからな。自分の得意分野と苦手分野を見極めて、困った時はみんなの助けを借りることが大切なんだ。今のことは、立村だけではない。二年Ｄ組のみんな、全員に対してそうだ。でこぼこは、友達、先生、家族の手を借り て、どんどん埋める方法を考えて行こう。そうすれば少しでも、道は開けるはずだ」
　両手をぱんと打って、菱本先生はもう一度、「よし」と怒鳴った。
「じゃあ、お疲れさん。帰っていいぞ」
　悪いがクラスのほとんど、だあれも聞いていない。
　熱血説教は、食らうほどにさめるっていい例だ。
　痛いのは当事者だけだ。今回は上総が張本人だった。

　――なんだよ、いったい、意味不明だ。
　教室がすかすかになるまで上総は席についていた。菱本先生に聞かないとわからないことだらけだった。美里もこずえも、男子連中も廊下に出てしまった。
「あの、すみません。なんか、僕のことでなにかあったのでしょうか」
　こういうことでもなければ、質問することもない。天敵なのだ。
　菱本先生はしばらくおもしろげに上総の顔を眺めていたが、
「清坂はいい彼女だな。お前、すっかり尻に敷かれてるな」
　――こう言うからこの先生嫌いなんだよ！
　口をゆがませてるところにぞっとした。
「いいか立村。何度も言っていることだが、数学の授業で狩野先生がいろいろ配慮してくださっていることを恥じる必要はないんだ。クラスの連中に、お前だけ えこひいきされているみたいなことを言われても、堂々としていろ。自分ではどうしようもない弱点がある、でもそれは立村上総という人間を否定するものでは まったくないものだ。もしなにか言われたり、失礼なことをされたら、ひとりで落ち込むな。そのために俺たちのような教師ってのはいるもんだからな。何度も 言うが、忘れてくれるな」
　一礼して教室を出た。なにかがにおうが、まだかちりと合わさらない。

　一言も話した事はなかった。
　狩野先生が特別に、上総に対してやさしい問題を用意してくれていることとか、テストの時は

教えてもらった問題の答えだけ丸暗記して書くように言われていることとかを。
　一部気づいている奴もいるらしい。
「立村くんって、ひとりずるいよね。やさしい問題もらってるし」
　とささやく子がいる。あまり目立ちたくないから隠していた。もちろん美里にも、貴史にも話してはいない。
　でも、そうせざるを得ない、自分の能力の問題も、他者から証明されてしまっている。
　自分ではどうしようもないことなのだと、一年の春休みに。
　――まさか、清坂氏、そのことを。

　上総は玄関に向かった。美里を探した。すぐに見つかった。玄関のロビーでふたり、ひそやかな話をしている様子だった。上総を見つけてすぐに立ちあがった。
「清坂氏、もう一度聞きたいんだ」
　改まった声でたずねた。
「あーら、なあにあせってるのよ、立村」
　こずえのからんとした声が邪魔っ気だ。悪いがどいていてほしかった。
　無言で見返している美里に歩み寄った。
「菱本先生と、俺のことで話したって、俺が数学できないことでなのか」
「話、されたんでしょ。それだよ」
　美里は短く答えた。まじめな顔だった。口を尖らせていた。
「けど、聞いたならいいじゃない。立村くんだって話したくないことなんだから」
　ぴりりと切れている言い方。途切れがち。何度か瞬きしている。早く切り上げたいらしい。
「なんで隠す？」
「あんたがいっつも隠しごとしてるからよ！」
　靴箱前のすのこに駆け出そうとするのを、こずえに止められる。
「ほらほら、美里ってば。話がとおってないでしょってば。まったくやだねえ。ほら、立村も冷静になりなよ。私が説明してあげるからさ」
　美里の肩を両手でぎゅうっと押した。ロビーのいすに座らせた。上総も隣に座るよう視線で命令された。こずえ姉さんの言葉には逆らえない。座った。ひとりでにやつくのだけはやめてほしい。

　こずえはリコーダーをかばんから取り出し、剣道の竹刀を持つようにして上総に向かった。
「ちょいと、立村、あんたなんもわかってないねえ。聞いてないんでしょ」
「なんどもさっきから俺が聞いていただろ。まったく何がなんだかわからないってさ」
「つまりね」
　腰に手を当て、リコーダーをマイク代わりにこずえはポーズを取った。
「けさ、たまたま杉本さんに会ったのよ。昨日の一年Ｂ組帰りの会でまた桧山先生と一戦交わしたらしいけどね。なんとそのときに、杉本さんに『精神科に行 け』みたいなこと言われたらしい

のよ。むかつくよねえ。詳しいこと聞いてないけどさ。その時に、『君の大好きな先輩もそういうところに通っている』みたい なことまで言われたらしいのよ。杉本さんの大好きな先輩といえば、私とか美里とか、あとあんただよね。杉本さん、かなり頭に来たらしいんだ。自分のこと も そうだけど、立村、あんたのことが一番心配だったみたいだよ。『立村先輩を侮辱しています。お付き合いされている清坂先輩にこれは報告すべきだと思いまし た』って。それで、すぐに新井林あたりから裏を取って確認してさ」
「新井林から裏ってなんだよ」
　こずえはにやにやしてさらにリコーダーを上総ののどもとに突き刺そうとした。両手で受けた。
「美里が心配してるから、教室に行こうとしてた新井林を捕まえて、いろいろ聞いたのよ。やっぱりそういう会話があって、桧山先生がかなりエキサイトしてい たのは確かだってね。まあ立村も、いろいろ事情があったんだなあと私らは思うけど、そうそうべらべらしゃべっていいもんでもないと思うんだよね。２Ｄ正義 の味方たる私たちは、即、昼休み、菱本先生のところにいって抗議してきたわけよ。『立村くんの隠しておきたいプライベートなことを一年生に話すなんてよく ないと思いまーす！』ってね。菱本先生熱血だから、かなり怒ってたよ。やっぱりお説教で燃えるかなあとは思ってたけどね。やっぱりねえ」

　こずえが一方的にしゃべりまくっている間、隣の美里を横目でそっと眺めやった。目が合った。
「私、悪いこと、してないんだから」
　すぐにうつむき手を握り締めた。美里の横顔が、ほんの少し、ほてっていた。

その７　雪虫に追われてる

――お前さあ、そんな恥ずかしいことだとまだ思ってるわけ？　普通の計算ができない奴って決め付けられたことがさ。

山積みになった机の書類。
大学の講義でもらった資料がかなり多い。それほど難しくない英文のエッセイや論文、その他ハーディ関係の伝記。その間をサンドイッチの具らしく、小学校レベルの分数問題プリントが挟まっていた。
何度解いても答えが同じにならない。
一年の頃、何度も怒鳴られ、小突かれた。二年から上総の答案には一切点数がつかなくなった。かわりに赤字で、解き方がわかりやすく、文字大きくつづられるようになった。理解しなくていい、解き方をそのまま丸暗記すればいい。狩野先生に教えてもらったやり方だった。

――本当に、お前よく受かったよなあ。青大附中にさ。いんちきとか裏金工作とかいろいろ言われてるっけ。否定できねえよな。情けねえ。

自分専用に編集されたプリントを取り出した。いわゆる「算数レベル」の問題一式だ。クラスの連中と同じ問題では、上総が寝るだけだと見て取っての判断だろう。
――そうだよ、俺は救いようがないんだ。
心だけじゃなく、口で、壁にぶつけてみた。
響いて、静まり、みじめになる。

――そうだな、学校でも言われてるだろ。青大附中の入試制度が、杉本たちの代から変わったって。お前の頃は面接が最優先だったけど、一年後それが改正さ れてペーパーテストオンリーになったって。もし一年ずれてたら、確実にお前、落ちてたな。面接でカバーされてなかったら、どうなってた？

青大附中に受かっていなかったら。
見たくない現実が映りそう。
聞こえよがしにささやかれる言葉には、もう慣れていたはずだった。忘れていた頃にいつも刺さってくる。
あの春休みのように、ひとりで壊れてしまいそうになる。

――ちゃんと医学的にも証明されていてこうなんだもんなあ。お前が単なる怠け者だったらあっさり納得したんだろうが、なにせお前ってどうしようもなく、 あきらめ悪いだろ。努力したらいつかまともになれるって信じてるとこ、あっただろ。見事にくつがえされちまったもんなあ。

もう、杉本も、美里も知っていることなのだ。
クラスはおろか、二年全員、へたしたら学校中に知れ渡っているかもしれない。それでもかばってくれる友達がいる。ありがたいと、頭では感謝している。
普通の人にはできることが上総にはできない。
走ることも、読むことも、変わらずできるのに。
どうしても、同じ枚数に紙をそろえることとか、挙手した人の手を確実に数えることができない。わからない。努力しても無駄だと、言われたあの日。

――言われただろ。生まれつきの脳のしくみの問題であって、決して親のせいでも、ましてやお前が努力してないせいでもないって。生まれ持った頭の問題 だって。まあ、その代わり外国語なんでもわかる能力をもらってるんだから、とんとんってとこだって言われてるだろ。しかたないって。あきらめろ。
だからしかたない。
努力したって、だめなんだ。
同じことはできない。
――本条先輩には、なれないんだ。

赤ペンの入った実力試験・数学の答案を手に取り眺めていた。狩野先生はこまやかだ。読みやすい。わかりやすい。こんなに丁寧に教えてくれるのに、上総はプラスとマイナスを掛け算して、どうしてマイナスになるのかがわからなくて悩んでいるというわけだ。

桧山先生が次の日から学校を休んだという話は、地獄耳のこずえから伝わってきた。火のないところに煙を立てたい菱本先生とのごたごたが、職員会議で繰り広げられたらしいとのことだった。
「あんたも当事者だけど、ま、がんばんなよ」
やっぱり好奇の視線はびしびしと感じつつ教室に入ると、すぐに一声かかった。クラスの男子連中は、上総を見るなりにんまりと笑い、
「立村、いやあたいへんだよなあ。菱本先生もやるじゃねえか」
あいかわらず、味方であることをアピールしてくれる。そうでないのは、一部の女子から流れる空気のみ。やはり、前から上総の扱いや立場に不満を持っている人が居るということだろう。ひそやかにささめく声。
「やっぱりよねえ、病院に……」
知らないふりをするのが一番だ。
美里が耳元で手を、かえで風にかざした。
――味方だって、言ってるんだろうな。
無理して笑ってみせた。

「おい、立村、すげえことになったなあ」
　クリームソーダめいた空気が漂う中、貴史がつんつん上総の背中をつついてきた。廊下に出てほしいみたいだった。上層が白くあわ立ち、下の層が透明。ひっぱり出された。廊下を通る他組の連中にも笑ってみせ、上総は壁際に持たれた。
「お前、桧山先生にそうとうひでえことされたみたいだなあ」
　貴史の表情はくったくなげだ。一応あらたまってはみたけれど、別に悪いことじゃないしという感じだった。
「立村のことを菱本先生がすっげえかばって、だああっと文句言ったんだと」
「文句？」
　状況が把握できなかった。
「ほら、昨日のことだぜ。ま、その辺は美里の方が詳しいだろうけどなあ。職員会議の時にいきなり、菱本先生が『生徒のプライバシーを関係のない生徒に暴露するのはいかがなものでしょうか』って、らしくねえ言い方で抗議したんだと」
　――俺のことをかばってって、いったい今度はなんだよ。
　混乱してきた。どう言えばいいかわからなかった。
「桧山先生も往生際悪いよなあ。別に変なこと言わなくたって、素直にあやまっちまえばいいのになあ。開き直ったんだと」
「どんな風に」
　なんで貴史がそこまで詳しいのかわからなくてさらに首をかしげた。自分でも間の抜けた返事だと思った。
「だから、わかってねえなあ」
　今度は軽く肘鉄を食らわす感じで、
「桧山先生、お前が精神科に通っているとかなんとか言ったらしいんだぜ。失礼だよなあ」
　きっと、本当のことを貴史はまだ、知らないのだろう。
　さらりとあっさりと、学校をサボったことを怒られた程度の話題だと思っているに違いない。たぶん美里からも聞いていないのだろう。
　上総は低く、襟のネクタイの結び目に向かってつぶやいた。
「本当だよ、みんな」
「はあ？」
「病院じゃないけれど、いわゆる、そういうところには行ってた」
「はあ？」
　今度は貴史の方が口を尖らせた。
「だから、俺は数学が生まれつきできないから、そういうとこに小学校の頃から行ってた。本当のことを桧山先生は言っただけなんだ」
　やっと納得したらしく、貴史はふんふんとうなづきを繰り返した。
「なあんだ、みんなご存知ってことばっかりじゃねえか。そんなの」

　からっと返されると、自分の方が困る。上総は貴史のネクタイから襟元、口、最後に目まで一直線で見上げた。
「けど、立村は知られたくねかったんだろ」
　声が出ない。両手を後ろに組んで下を向いた。
「だから隠してたんだろ。単純じゃねえか」
　震えるだけ。唇が乾いた。
「ならいいじゃねえか。言われたくねえことをばらされたら、頭にくるのが当然だ。じゃ、教室もどろうぜ」
　貴史は上総の腕を無理やり取って、教室に押し込んだ。ちょうど鐘の鳴るのと同時だった。

　もっと詳しい状況については、図書局員かつ地獄耳の古川こずえに肉付けを頼んだ。こずえが言うには、たまたま一年の図書局員が職員会議中の状況を、廊下でしっかり聴いていたとのこと。かなり詳しい内容が明らかとなった。
　近所であんまん肉まんを各一個ずつおごるということで、情報料については話がついている。廊下、図書館、授業中、少しずつ分けてそのときの事情を聞き出した。

　菱本先生は激しく興奮していたという。
「『生徒が懸命に授業についていこう、努力しようとしているのに、それを逆撫でしたようなものです。これはプライバシーの侵害です。許されることではあり ません』って叫んでたらしいよ。かなりでかい声でね。もちろん桧山先生も応戦していたけど、やっぱり立場悪いよね。口すべらしたのは桧山先生なんだから さ」
　――プライバシー侵害たって、あの人がそんなこと言えるのか。
　上総としてはつっこみたいけれども、当事者の立場は弱いのでがまんする。
「桧山先生が言うにはね、『一年Ｂ組の問題をなんとかしようとしているところで、たまたま出てきてしまっただけです』って。要するに、桧山先生は杉本さん のことを職員会議で問題にしたかっただけみたいなのよ。ひどいんだよ、杉本さんのお母さんに、『お宅の娘さんは病院で頭見てもらったほうがいいですよ』見 たいなこと言ったらしいもん。それを、他の先生にも言いふらそうとしてたみたいよ。やだねえ」
　――杉本にか。けど、いくらなんでもそこまでひどいことするわけないよな。
　信じがたいことを聴かされると、最初はうそだと思いたくなる。
「でもやっぱり、伊達に菱本先生、桧山先生より年食ってないってとこ見せたよね。結局、だあっとせめてせめてせめて終わり。生徒のプライバシーはきちんと 守りましょう。守らなかった桧山先生はしばらく学校を休んでくださいってね。知らなかったよ。先生も謹慎ってのが、あるんだねえ」

　おおまかにいうと以上のことらしい。
「でもねえ、杉本さんに言ったことも、私、どうかと思うな。いきなり親呼び出して、『病院

行け！』って言ったんだもん。杉本さんをいじめてるって奴よ。ク ラスのいじめをなくそうとするんだったら生徒いじめやめろって言いたい。男って顔の良し悪しで判断するもんじゃないよって言ってやりたいよ。ほんと気持ち 悪い顔してるくせにさ」
　――この前まで、美形だとかりりしいとか噂してたくせに。
「もともと杉本さんはおかしいから、そういう子を直してくれる病院に連れてけとか、行かないなら学校やめさせるとか言うんだもんねえ。杉本さんのお母さんさあ」
　ここで声を潜めた。
「誰にも言うんじゃないよ。美里にも」
「わかってる」
　カウンタごしのこずえににぎりぎりまで耳を近づけた。たぶん隣の図書局員にも聞こえないはずだ。
「杉本さんのお母さん、パニックになっちゃたみたい。だから杉本さんのうち、いま大変みたいだよ。杉本さん本人は冷静に、たんたんと話してるけど、帰ると 大騒ぎみたい。うちの母さんみたいに『ざっけるんじゃないわよ、うちの娘にふざけたこと言うんじゃないよ！』ってたんか切る性格ではなさそうだもんね」
　この辺、さすがこずえも気を遣ったのか、言葉を濁した。
　――桧山先生の手は、強烈すぎる。
　こずえを見据えて、小さく首を振った。
「清坂氏には内緒で、杉本のこと、頼みます」
「当たり前。友だちをかばってやんなくて、どうすんのさ！」

　予想できない返り討ちだった。
　桧山先生が杉本を痛めつけて土下座させるために、ありとあらゆる手段をかましてくるとは思っていたが、とうとう実力行使に出るとは。
　只者ではない。大人を甘く見ては行けないってことだ。
　今回はたまたま、上総の学習障害問題が絡んで大ごとになったけれども、本来だったらこのまま杉本だけが泣くはめになってもおかしくはなかっただろう。先 生としては当然のことをしただけと、きっと開き直るだろう。菱本先生だって、怒ったのは上総のプライバシー侵害についてだけだ。杉本のことについてはたぶ ん、納得してしまうんではないだろうか。
　誰もかばいようがない。もう、生徒の自分は何もできない。
　――杉本、大丈夫だろうか。
　騒ぎの前の昼休み、上総のもとに現れてじっと見上げた時。
　あの時からすでに修羅場が自分の家で繰り広げられていたら。
　――帰りたくないよな。

　桧山先生が杉本の親に何を話したかはわからない。たぶん桧山先生は、上総の時と同じように……もっとも上総の場合はそれぞれの親と以前から連絡を取って はいたらしいが……一度検

査をしてみたらどうでしょうか、程度のことだと認識していたのではないだろうか。耳鼻科検診の時に問題のあった生徒へ、後から 「病院へ行ってください」というプリントが渡されるのと同じように。
　桧山先生はそれと同じなのだから、と思ったのだろうか。
　でも、言われた当人にとってそれがどんな意味を持つのか、きっとわかってくれてないのだろう。わかるわけないし、無理に理解してもらおうとも思わない。
　ただ、どうすれば、傷つかないですむのかを教えてほしかった。これからどんなに努力しても手の届かない「ふつう」という言葉。自分が普通になれないとい う現実を、どうすれば素直に受け入れることができるのか、それを自分と、杉本に見せてほしかった。納得できる答えが欲しかった。

　事件から一週間が経過した。二年Ｄ組には特段変わったこともなかった。爆弾娘の美里については、あえて上総も触れないようにしていたので関係は良好だ。 こずえに全部暴露されてからは、妙におとなしい。うっかりあてこするとさらに暴発しそうなので、はれもの触るように接している。
「なぐちゃん、ちょっといいかな」
　時たま、ほとんど人のいない時を狙い、南雲に話しかけた。貴史でもいいのだが、美里と関係が近すぎる。相談したことがばれてしまう。これはまずい。
「どうした、りっちゃん」
「そろそろ、十二月だよなあ」
　わざととぼけた声でつぶやいてみた。
「うん、十二月。期末も近いよなあ」
「でも期末が終わったら冬休みだ」
「冬休み、お年玉、雑煮、いや、クリスマス！」
　相変わらず脳天気な南雲である。キーワードが出てきたので話が進めやすい。上総はもう一度つぶやいた。
「そうだよな、クリスマス」
「りっちゃんは今年どうするんか」
　今年、と言われても困る。立村家においてクリスマスとは、ほとんどあってないようなものだった。母がいた頃はお正月中心だったので、ほとんどが大掃除に かまけていた。一応は父がケーキを買ってきてくれるのだが、プレゼントは一切なし。日本にすんでいる以上は、日本の行事を優先すべし、というのが母の言い 分。クリスマスプレゼントなんてものは、もらったことがない。当然、サンタさんへの夢なんて、物心ついたときから持ったことがない。
「今、それで迷ってる」
「迷うって、やっぱり」
　声を潜ませて南雲も耳元にささやいた。
「清坂さんとのことか」

　照れてると思われたくないけれど、めんどうで頷いた。
「経験豊富ななぐちゃん、ひとつ聞きたいんだけど」
「ほいほい」
　手もみして寄ってくる。
「いわゆるクリスマスって、どういう風にすれば女子は喜ぶもんなのかな。食べるものが豪華だとか、どこか連れていくとか、何かプレゼントするとか」
「でかしたりっちゃん、そういうことだったらいくらでもお手伝いしますぜ。なあにまだ一ヶ月あるんだからなあ」
「いや、必ずそうするってわけじゃないけどさ、ただ、なぐちゃんだったら、クリスマスに奈良岡さんとそれなりになにかするだろ」
「できればなあ、いいんだけど」
　言葉をにごらせる南雲。青菜に塩。
「どうしたんだよ」
　小突きつつ顔を覗いてみる。ちょっと悔しそうだが怒ってはいない。
「うち、行事の時って基本として、うちのばあちゃん中心なんだ。ばあちゃんを囲んでケーキを食うって感じでさ。だからクリスマスとか、そういう行事の日はうちにいるんだ」
　南雲はおばあさんと同居している。とにかくおばあさん思いの南雲のことだ。それは当然のことだろう。
「けど、一日中うちにいるってわけでもないし、せっかくだから彰子さんを招いてもいいかなって思ったりもしたんだけど」
「けど」
　言葉に詰まっている。いろいろありそうだ。面白くてつい突っ込んだ。ひじでつつき返した。
「彰子さんの家でも、派手なホームパーティーやるんだと。しかも、来る連中がほとんど野郎ばかりだってさ！　みんな、今から彰子さんのためにプレゼント用意してるんだってさ！　さらにいうなら、それって彰子さんのご両親の公認だってさ！」
「じゃあ、そこに行けばいいじゃないか。混ぜてもらえば」
　素直に上総はそう思う。だって、彼氏だ。
「行けるかよ！」
　頭を抱えはじめた南雲。髪をなでてやった。子犬みたいにうんうん首を振った。
「ここじゃ言えないけど、小学校時代の有志が集って彰子さんファンクラブが結成されているんだ。俺がうっかり足を踏み入れようもんなら、袋に合うんだぜ。 青大附中および彰子さんの家近くまでは俺の管轄だけど、彰子さんが家に帰ったらもうアウト。ファンクラブ会長・副会長がしっかりお守りするって形なんだ。 詳しいこと聞いてないけど、きっとクリスマスパーティーはあの二人が仕切ってるんだと思うんだ。俺だって先月からいろいろ計画立ててきたのにさあ、しっか とくぎ刺されたんだ」
「奈良岡さんに？」
　答えは意外だった。

「いや、ファンクラブ会長じきじき連絡が入って、一切、俺に手出しするなって。十月の終わりにだぞ。ひでえよなあ」
　本来相談すべき内容は今回、いったん後回し。ずっと上総は、南雲の置かれた複雑な環境および、奈良岡彰子の持つカリスマ性についての説明を受けていた。世の中、自分より大変な人がほんとたくさんいるのだとつくづく思った。

　南雲と話している時は脳天気でいられるけれども、いったん教室を出てひとりになると、息が詰まった。
　窓から見える空がだんだんこわばり、細かく砕かれて落ちてきそうな日が続いた。闇になったり、雨になったり。コートだけでは我慢できなくて手袋はめた り。桧山先生の自宅謹慎はまだ解かれない様子だった。廊下や委員会で見かける杉本も、きついまなざしは変わらないけれども、どこか視線が斜めに刺さってい た。時折指先を見つめている。
　家でどういう修羅場が繰り広げられているのかわからない。日ごとに流れる噂によれば、杉本の母親が近所に土下座して娘の罪を許すように頭を下げているとか。クッキーを配っているとか。近所の人は塩をかけておっぱらったとか。
　杉本梨南が石の心ではなく、火をつけたとたんに溶け出してしまう蝋人形だと気づいたら、他の奴ら、特に新井林はどう思うことだろう。まだ、冷たい空気の方がましかもしれない。
「杉本、気をつけて帰れよ、また明日」
「お疲れさまでした」
　交わす言葉といえばこれだけだ。それでもじっと見据えるまなざしに、ろうそくから流れる蝋のしたたりを感じる。上総だけらしい。

　雪かと思って窓べを見た。今日明日には初雪が降るだろう、とはテレビの天気予報。給食室に食器を運んだ後、上総は白いものが浮かんでいるのを目ざとく見つけた。
「初雪かなあ」
　別の組の女子がはしゃいでいる。
「違うかもしれないな」
　答えてしまい、けげんな目で見られた。
　――あれは、雪虫だ。
　落ちてこないで、飛んでいる。よく見ると紫色の点がぽつんとついている。原点はアブラムシ。見た目はきれいだけどつぶすと気持ち悪い。本当の雪が降る前にやってくる虫の一種だった。
　――やっぱり、いくか。
　ポケットに手を突っ込んだ。冷たい金具をつかんでいたせいか、指先が痛い。時間は給食室奥の丸い時計でチェックした。まだまだ五時間目まで十五分余裕がある。

　体育館の入り口まで足早に歩き、背の高い影を見つけてからは、二歩小さく進んだ。スポーツ刈りの色黒いうなじが、ブレザーの後ろ襟から覗いていた相手だった。

　利き手をスラックスのポケットにつっこんだ。握り締めた。
「新井林、ちょっといいか」
　無視された。聞こえないのか。体育館にすたすた入っていこうとする。急ぎ足でもう一度近づいた。
「悪い、少しだけつきあってくれないか」
　新井林健吾が肩を肩をすくめながら振り返った。苦みばしった、つばをかけられそうな顔だった。

　貴史たちの絶叫が響きわたっている。
「おいこら、そんなとこにパス渡すんじゃねえよ」
　バスケ部からあいかわらずスカウトが来ているのもうなづける。すばしっこく敵味方ゴールを走りまくっている。
　新井林の背を追っかけた。見上げるかっこうになるのが悔しい。奴は立ち止まるといきなり、二年連中バスケ対決を真っ正面で観戦するかっこうで壁にもたれ た。隣は空いている。上総も同じようにした。手に息を吐き掛けつつじろっとにらみつけられたが歯を食いしばり耐えた。ようやくお言葉いただいた。
「なんか用かよ」
「うん、少しだけ、時間もらえるか」
「話したいことあるならさっさとしゃべれよ。俺だって忙しいんだ」
　――敬語なんて夢の夢だな。
　本条先輩の指令は果たせそうにない。自分をあざ笑いたかった。
「あの、この前のことなんだけどさ」
「あれそれこれどれなんて使うんじゃねえよ。女々しいぜ」
　風邪気味なのか、新井林は派手に鼻をすすりあげた。
「あの、桧山先生とのことなんだけど」
「なんでてめえなんぞが一年Ｂ組の問題にに顔出すんだよ。関係ねえだろ」
　片方の頬を思いっきりめくりあげ、吐き捨てた。挑発に乗るなかれ、と言い聞かせ、上総は続けた。
「俺もまずかったと思うんだ。あやまる。で、言い忘れてたんだけどさ」
　言おうとしたとたん、さえぎられた。
「あの女にあやまれってか」
　あわててかぶりをふろうとした。でも一応自分は先輩という意識のもと無言で待った。
「冗談じゃねえぜ。てめえもそのくらいのことはわかるだろ」
「あやまれなんて言わない。新井林、お前の言いたいことは、俺もよくわかるつもりなんだ。だから、その点については杉本が悪いと思うんだ」
　少しずつ距離を縮めていく。露骨に肩を上げて避けて行く新井林。よっぽどゴキブリっぽく見えるのだろう。足がもぞもぞする。指先が凍りそう。ドリブルの音につぶされそうだった。

　ようやく上総の方をかすかに向いた。
「ああ、俺は別にあんたが杉本をかばいたいのを止めやしねえよ。ただな、なんで俺にそうも無理やりかまってくるんだ？」
「かばうってわけじゃないんだ。頼む、聞いてくれ」
　パスをしくじったのか、頭上にボールが勢い良く飛んできた。思わず体をかがませると、新井林にちっと舌打ちされた。
「立村、入るか？」
　羽飛が出したロングパスらしい。首と手で断り、ボールを拾い上げて戻してやった。

「じゃあなんか俺に用あるのかよ」
「例の、そのことなんだ。ちょっと外出ないか」
　指が手足ともに凍っている。上総はブレザーのポケットにそれぞれ両手を突っ込みなおした。顔を見るまでの度胸がない。一直線で新井林の前を横切り、グラウンドへつながる出入り口まで進んだ。
　――まあいいか。中靴だけど。
　一瞬だけ躊躇したが、すぐに扉の掛け金をはずした。振り返り、新井林がついてきているかどうかを確かめた。

　体育館真向かい青銅色の扉の向こう。
　白く重たい空の下、雪虫たちがグラウンド一面に舞い踊っていた。
「寒いから早くしろよな」
「ああ、わかってる」
　コンクリートの踏み台を見下ろした。頷くのは時間稼ぎ。息を整え上総は、目を伏せたままでいた。
「この前は邪魔して悪かった」
　少し深く頭を下げた。目を合わせたくない。
「だからなんであんた謝るんだよ。あんたには関係ねえだろ」
　だいぶ声変わりの進んだのど。数度のどをえへんえへんさせている。うつむいたまま上総は続けた。勢いだ。
「桧山先生のこととは別として、新井林、佐賀さんと、杉本との間に何が起こったのかはだいたい調べてわかっている。お前を責める気はない。頼みたいことがあるだけなんだ」
「頼みたい？　やっぱりあの女を許せってか」
　鼻をふくらませ、語尾をゆっくり。
「違う。お前が杉本を許せないのは当然だ」
　上総は覚悟を決めた。息を深く吸いこみながら新井林の視線を捕らえた。じっと目が合う。しっかりとにらみ返された。杉本を見つめるときとは違った、針の ようなまなざし。いつか見た、満天の星たち。他の人たちは美しいというけれど、上総にはとてつもなく恐ろしかった、針山の

ような空。思い出した。
「杉本は決して悪意があったわけじゃないと思う。でも受け取る側としてはむかついて当然のことをされたんだから、嫌って当然だと俺は思う。許せだなんてことは、絶対に言わないよ。新井林、いったい杉本がどうすればお前たちの迷惑にならないかそれを教えてほしいんだ」
「はあ？　迷惑にならないか、だと？」
　もう一呼吸、右手を親指がつぶれるくらい握り締めた。
「杉本をできるだけお前たちの迷惑にならないようにするよう説得してみるつもりなんだ。必ずしも頷いてくれるとは思わないけれど。けど、お前や佐賀さん や、一年Ｂ組の連中をこれ以上傷つけない方法を、なんとか探したいって思ってる。一番公正な目で見られる新井林、お前の意見を聞きたいんだ。許せないのに あえて、杉本をいじめさせないように命令している、お前ならきっとわかってくれると思ったんだ」
　手が汗ばむ。外に出して、意識してこぶしを緩めた。

　新井林は片足を軸にして、上総へ斜に向かい合った。横顔が剣の鋭さを持つ。ちろりと見据えるまなざしが怖い。
「俺の方からも聞きたいんだが、なんで菱本先生があんたの頭のどうたらこうたらで、うちの担任を怒鳴り散らしたんだ？　その日な、清坂先輩が俺にその話を聞きに来たんだけど、それってててめえの魂胆か？」
　――やっぱり清坂氏がか。
　たぶん美里が上総のことを心配してうごいてくれたのだとはわかっているつもりだ。でも、新井林からしたら、当然の解釈だろう。上総のもともとの罪状から推測したら当然だ。
「杉本と桧山先生のバトル中、たまたま出てきたぜ。確かにな。杉本の大好きな先輩も精神病院かどっかに通ってるとかなんとかな。話を聞いてりゃあ、そりゃ あ誰のことかは想像つくだろうな。うちのクラスのアホどもがどこまで気がついたか知らねえが。けどな、桧山先生こうも言ってたんだぞ。精神科とか神経科と か、そういうところに通うことで人を馬鹿にすることはいけないってな。悪いがあんたが想像しているほど人を馬鹿にしたネタなんかじゃない。あの女のことは 別として、何もあんたがびくびくして秘密ばらされたって焦ることねえじゃねえか」
　新井林の怒鳴り声がびんびんと響く。
　目をそらしたい。じっと、新井林の肩に止まった雪虫を見た。雪じゃないから、溶けない。張りついている。
「しつこいようだが、あんたがそういう病院に通っているかどうかなんて関係ねえよ。俺の友だちだってたくさん、頭の悪い奴とか、ちょっとねじが緩んでると か、そういう奴一杯いる。人間性をそんなことで貶すような、くそな人間じゃねえ。ただ、本当のことをばらされてあせって、彼女を利用して桧山先生をぶっつ ぶそうとした、その魂胆が許せねえんだ。ほおら、嘘だったら言い返してみろ。けっ、てめえなんぞ、所詮杉本とおんなじ人間なんだな」
　つばを上総とは反対側にむけてぺっと吐いた。
「よその先生や二年、三年連中は騙せたかもしれねえな。けど、俺は騙されねえからな」

　ぐいと一歩、顔と顔すれすれまで近づかれた。鼻をこすりすぎたのか、真っ赤なトナカイ状態だ。
「嘘じゃねえんだろ。本当のことだろ、嘘だったらここではっきり言えるはずなのにな」
　――なんでそこまで知ってるんだよ、お前は。
　一年前の上総だったらもうがまんできず泣き崩れていただろう。グラウンドにひれ伏して許しを請うていただろう。そうしなくてもいいだけの時間が経っていたのが救いだった。
　――本当のことなんだ、仕方ない。
　静かに聞こえるよう、答えた。
「ああ、本当のことだ。微妙な違いはあるけれど、桧山先生が言ったことは本当だ」

　想像していたよりも新井林は冷静だった。ふんふんとあごで頷いた。
「じゃあ、なんとかしろよな。桧山先生は今、てめえと杉本の汚いやり方によって、学校追い出されそうになってるんだ。本当のことをたまたま口滑らせただけ でだ。あの先生くらいだ。男としてふつうのことしてるのは。それを、あんたが自分の身を守ろうとして、自分にみっともないことをばらされたくないからって 言って、自分の担任を使ってつぶそうとするんだもんな。やり方、こういうのを最低っていうんだぜ。俺より一年早く生まれてるくせにな、分かってねえのか よ」
　――たった一年差か。背はまったく足りないのに。
　見上げられない。足元の上靴を見つめたまま同じ口調を保とうとした。
「そのことについては、俺は言い返すつもりはない」
「ふうん、認めるんだ。本当のことって認めるんだ」
「だけど、それは俺のことだけであって、杉本とは関係ないだろ」
　杉本、と名前を出したとたん、なにかが吹っ切れた。首筋に溜まっていた血が流れ良くなったみたいだった。
　――今、なんのために俺は来てるんだ？　杉本のためだろ？
　――俺が馬鹿だとかなんだってのは、どうでもいいって。いいかげん甘ったれるんじゃない。
　最後の言葉は、自分ではなく、影の声に似ていた。すっくと顔を上げて新井林と対峙した。

「噂された通り俺は生まれつきの馬鹿だから、他の人たちと違って指使わないと計算できないとか、九九を言うのがやっととか、そういうところがあるのもわ かっている。それは認める。そういう関係で、専門の施設に通ったことがあるのも本当のことだ。だけど、それは俺自身のことであって、杉本とは関係ないはず だ。俺についていろいろ言われるのはもう慣れているからかまわないけれど、それと杉本を重ねるのだけはやめてくれ。杉本をこれ以上、関係ないことに巻き込 むのだけはやめてくれ」
　言いたいことをまず言い切ること。杉本と重なりそうな自分を振りきった。
「じゃあ自分でかたを付けろよ。桧山先生の言ったことが本当のことだから、意味不明の自宅謹慎処分を解いてやってくれって、あんたの担任使って頼み込めよ」

「それは、もちろんする。それは俺が悪いから」
　――負けるな、目をそらすな。
　言い聞かせれば言い聞かせるほど、全身が震える。おなかのそこから熱くなっているのに、寒い。新井林はまったく動じない様子。片手を大きく回し、ぶつかる寸前まで持ってきた。気弱になりそうで視線が自分でも定まらないとわかる。
「過去も同じような汚いやり方で、本品山中学の浜野さんをつぶしてきたそうじゃねえかよ。女を追いかけまわしたり、清坂先輩と羽飛先輩に取り入ったり、本 条先輩にごますったりってな。あんたの噂、青大附中内に鳴り響いてるんだけど嘘と言い切れるのか、てめえは。そんな裏で手を回すようなやり方をするのは、 人間として最低じゃねえか」
　――いったいどこでそんなこと、聞きつけてるんだよ。
　のどにたんのでかいものが詰まってきそうだ。
　思い当たるふしは、ある。
　誤解されたままでもいいと、そのままにしてきた噂もある。
　悪意はなかったけど、たぶん本音はそうだったのだと思う自分の行動も否定できない。
　――そうだよ、俺は人間として、最低だ。
　――見捨てられたくなくて、人の顔色ばかり見て生きている、最低人間だ。
　顔を上げたら今度こそ泣いてしまう。それだけは避けたい。下を向いたまま、それでもいわなくてはならないことを言わなくては。上総は必死にこらえた。新井林にむかってではなく、そばでふらついている雪虫にむかって訴えた。

「新井林、俺のやらかしたことについては言い訳しない。けど、これだけは言わせてくれ。なんでお前、杉本の気持ちを知ってあんなこと、言ったんだ？　あ れは反則だろ。杉本は必死なんだ。信じられないかもしれないけど、杉本はお前とふつうに必死に話をしたかっただけなんだと思うんだ。ただ、それがどうして もうまくいかないというか、言葉が通じなかっただけなんだ。許してやれとは言わない。杉本をこれ以上追い詰めないでくれ。お前や佐賀さんに迷惑をかけない ですむどんな方法でも考えるから」
「追い詰めてなんていねえよ。あの女が勝手にちょっかいかけてくるだけだ」
　――うそつけ！　いやってほど杉本の思いがどんなものか、わかってるくせにだろ！ローエングリンだってわかってるんだろ！
　唇を引き絞って新井林を凝視していた杉本梨南の瞳を、上総は知っている。
　知らない不利しているなんて、許せなかった。でも耐えた。勝ち目はない。想いを振りきれない杉本の負けだ。
「わかってる。その話はよくわかる。でもあのままだと杉本は自分を追い詰めてしまうかもしれない。自分ではどうしようもないって気付いてないんだ。けど、きっとあとで後悔する。どうして自分でそうできなかったのか気付いて泣くしかないんだ。そういうもんなんだ。だから」
　――俺がそうやって、ずっと泣いてきたから、そうなんだって。
　ひとつ、またひとつと記憶がよみがえる。雪虫の数より多いかもしれない涙の過去。

杉本梨南もきっと同じだと、上総は確信している。

　新井林はまったく動じなかった。足をしっかと地面につけて、身動きせずに聞いていた。
「じゃあ、聞くけどな。あんた、小学校の頃にいじめられてきた奴らに同じこと言われて、許してやってくれって言われたら、許せるのか？」
「許せるって、なにを」
　力の抜けた顔のまま、新井林の鼻を見つめた。赤い。
「あんたが言ってるのはそういうことさ。情け、かけられるのかよ」
「新井林、どういうことだ」
「勝手に自分がいじめられたと思い込んで、犠牲者ずらして、結局努力もしねえでかわいそうがっているなんて最低だな。男としてまずみとめられねえよ。いったいあんたのどこが良くて、本条先輩は評議委員長になんか指名したのか、俺には理解できねえよ」
　――お前に敬語遣わせられない俺なんか、指名されるべきじゃなかったんだ。
　本条先輩の冷たい態度がひしひしと染み渡る。
「そうだな、俺も自分でそう思う」
「ふうん、認めるのかよ。俺はな、杉本の頭が生まれつきおかしかったとしても、それはそれで人の個性だと思う。勝手にしてろってんだ。ただ、まともに生き ている俺たちに向かって、よけいなことをしたりするのだけはやめろって言ってるだけだ。俺や佐賀のように普通のことをして普通に話をしている奴に対して、 異常なやり方でかみついてくるのだけはやめろってだけだ。それぞれてめえみたいな汚い同類同士でたむろってろってんだ」
　繰り返した。それしかできない。
「だから杉本も必死なんだって」
「必死ならせめて俺たちとかかわらないようにしてもらえればいいだけのことだ。だから俺はいじめもしない、他の男子たちにも手出しさせないように命令させ てるってんだ。普通の世界ではそれが常識だ。当然のことだ。本当だったらとことんリンチされても仕方ないことをあの女はしているが、それでも俺たちが手を 出さないのは『紳士』でありたいからだ。文句あるか。あの女がいじめている事実を桧山先生は認めてくれたしな」
「ああ、わかるよ新井林。だから佐賀さんに対することについては、俺も納得する」
　もう最終通告を待つしかない。言葉があがあがとひっかかる。新井林は唇を一度、真一文字にした後、一声怒鳴った。
「あんた、そこまで認めるならな。あの女を黙らせて見ろ」
　――黙らせるって、いったいなんだよ。
　無駄だとわかっていても、上総は尋ね返すしかなかった。
「黙らせるって、どういうことだ」
　口元にかすかな笑みが浮かんでいる。残酷な表情だ。新井林は上総の言葉を一切受け付けてはいなかった。精一杯訴えれば心が変わるかもと、かすかな期待を 持ってはいた。杉本をもしかしたら、大目に見てくれるかもと思っていた。でも、上総がかつて、品山小学校時代にやろうとし

てできなかったことを新井林に求 めることは無理だった。
――俺も、まだ浜野を許していないんだ。
もう過ぎ去ったことなのに、棘が抜けない。雪虫のように、忘れた頃に飛んでくる。

一方的に新井林はまくし立てている。
「色仕掛けであろうが、殴ろうがそんなの勝手にしろ。それができたら俺はお前のことを先輩として認めてやるぜ。必死にかばおうとして、相手に振られて、そ れでいて自分の相手におべっかつかうなんていい根性だよな。へこへこ頭下げている暇があったら、あの女を黙らせろ。どうせそんなことできるわけねえのに な」

しばらく上総は口を閉ざしていた。目の前で罵倒してきた奴は、一年Ｂ組・新井林健吾だ。上総にとっては評議委員会の後輩だ。完全な「男」としての理想体。運動抜群、頭脳明晰、バスケ部の次期キャプテンかつ、もしかしたら次期評議委員長。
――あいつにそっくりだ。
品山のサイクリングロードから、小学校卒業式後に、決闘でけりをつけた相手に。
――もう、あいつに締められるなんて、もういやだ。
あやうく叫び出しそうだった。

「わかった。新井林。もし、杉本が一年Ｂ組の迷惑にならないようになったら、のことだが」
もう正面から顔を見据えられない。横目で新井林の様子をうかがいながら。
「放課後、茶室の陰でお前を一発殴らせろ」
口が勝手に動いていた。叫ばないかわり、泣かないかわりの言葉だった。

「ふうん、一発でいいのかよ。もしも条件みたしたんだったら」
上総の鼻先にゆっくりと、右の拳骨を、親指出した格好で突き出した。予想通りといわんばかりの態度。精一杯の虚勢すら、この一年男子評議委員にはお見通しなのだろうか。眼の奥が痛くてならなかった。
強めの握りこぶしが、岩石模型のきりたったものに見えた。とんがっていて、握ると痛そうだった。
「腕力の差もあるし、俺がぶっ倒れるまで殴ってよしだ。できればな」
「その言葉、忘れるな。もう、五時間目が始まって二十分経っている。さぼるなり教室に戻るなり、勝手にしろ」
あわてて自分の時計を確かめる新井林。
「やべえ、もう五時間目かよ！」
振り帰りもせず、ばたばたと体育館の扉を開き、姿を消した。新井林が明らかに動揺したのは、今の一言だけだった。

上総は背を向けた。すでに腕時計を覗いた段階で、今日の五時間目国語の授業をさぼることは決めていた。教室には六時間目の休み時間に戻るつもりだった。

――勝ち目ないって、わかってるくせに、俺って何やってるんだよ。

降り掛かる雪虫をそのままに、ひとりグラウンド奥の体育器具室で時間をつぶすことにした。火の気はなくとも外で突っ立っているよりは暖かいだろう。

自分の右手でこしらえた握りこぶしは、赤らんでいる花崗岩のよう。華奢過ぎた。雪虫と同じく指先でつぶされるだろう。上総はもう一度真っ白い空を見上げた。

その８　言葉の氷が溶けない

落ち込んでいる暇はない。時間が勝負だ。
「あのさ、古川さん、ちょっといいかな」
「なあに、立村今度は何をやらかしたわけ」
　後ろの席で美里が怪訝な顔をしているけれども、この辺はあとで考えることにする。すでに教室で朝自習プリントを広げているこずえに一声かけ、廊下に連れ出した。だいぶ教室の面子は揃っている。美里以外の連中も、
「古川さんに乗り換えたのかなあ」
　とか噂する声ひとつあり。ばかばかしい。
　ポケットに手をつっこんで温めた後、上総は軽く廊下の壁を叩いた。
「時間ないんだ。単刀直入に言う」
　恋の告白と誤解されない相手だ。こずえも黙ってじっと上総を見つめている。
「これからしばらく、杉本を一年Ｂ組の教室から連れ出すようにしてもらえないかな」
　奇声を挙げられるものと覚悟していた。こずえは身動きせずに上総の口元へ視線を止めたままだ。もっとしゃべんないとまずいよ、ってことだろう。あせってしまう。
「もちろん古川さんだけじゃなくて、他の女子たちにもお願いできればとは思うんだけどさ、今のところ、古川さんが一番杉本と仲いいだろ。その辺、頼みたいんだ」
　拒否されないことを祈りつつ上総は、じっと見つめ返した。
　ロマンスの薫りひとつない、視線の交差。
　唇でぷっと噴き出すふりをするこずえ。笑みはなくただ、一言。
「いいけどあんた、そこまで杉本さんになんでこだわるわけ」
　今度は上総が無言でうつむく番だった。
　答えられたら、物事がもっと簡単に片付くはず。
「とにかく時間がないんだ。今日の昼休みから頼めないかな」
「美里と一緒にその辺は相談するよ。安心しなさいな。もちろん、あんまん」
「今回はカレーまんとピザまんもサービスするさ」
　食べ物ネタをかましたら大抵は受けるこずえなのに、妙に硬い。
「人間としてやるべきことだからやるよ。そんなのいらない。けど立村、あんた最近、自分が変なことしてると、思ったことないの」
「変なことって」
　口篭もる。また手をブレザーのポケットに入れた。
「理由はあとでいいよ。とにかく、杉本さんは私と美里が保護するから安心しな」
　めずらしく古川こずえはこれ以上つっこまなかった。そのまま教室に入ってゆき、やりかけの朝自習プリント……今日は数学の二次方程式だ……を解きはじめた。美里が慌ててこずえのもとに近寄ってなにか尋ねている。
　――変なこと、言ってないだろうな。

　考えるのも時間が惜しい。上総はその足で生徒玄関へ向かった。菱本先生が朝の会のためにやってくるのには、まだ五分くらい猶予がある。朝自習なんてくそくらえだ。

　すでに生徒玄関は締められていて、遅刻者たちは裏の来客用玄関から入らなくてはならない。違反カードを一枚切られるのが定めなのだが、その辺はみな開き 直っている人がほとんどだ。規律委員たちもみな教室に戻っている様子だが、ひとりだけ堂々とエナメルの黒い靴を脱いでいる女子がいる。　――相変わらずだ な、この人も。
　顔見知り、というよりもかなり付き合いあり。
　親も知っている一年女子だ。
「花森さん、ちょっといいかな」
　先生の切った違反カードを胸ポケットに納め、花森なつめは髪を書き上げた。細かいパーマを髪一杯に広げてかけている。外国のアンティークドールのような風合いだった。口紅はほのかに赤く、目もぱっちりしている。近づくとほのかに母とおんなじ香水の匂いがした。
「立村先輩じゃないですか、どうも」
「どうせ遅刻だろ、杉本のことでちょっといいか」
　杉本のこと、という言葉に花森は目を光らせた。爪を唇に当てた。当然マニキュアの色が派手である。
「いいですけど、先輩もずいぶんひどいですよねえ。杉本さんいじめすぎ」
「そんなこと言ってたか」
　先生の目も同じく二倍強で光っている。かまうもんか。上総は花森と一緒に生徒玄関ロビーに向かった。一分半で話を終わらせ、一分半で二年Ｄ組の教室に戻らなくてはならない。

「杉本さん可愛そうですよ。だって、さんざん桧山の馬鹿男に頭がおかしいとか病院に行けとか言われるし、女子たちにも影で悪口言われてるし。男子連中は開き直ってるし。ああ、ほんっとむかつく。一発殴ってやりたい」
　不良少女、のイメージそのものの花森がなぜ学年トップの杉本梨南と仲良しなのか、謎ではある。杉本曰く、
「花森さんは自分の魅力をきちんと知っていて、自分の求めることを堂々としているだけ。馬鹿男子たちに何を文句言われる筋合いはない。赤いマニキュアも化粧も、彼女は似合うから堂々としているだけ。自分のある人は魅力的です」
　とのことだ。見た目は言い逃れできない問題生徒だろうが、いろいろ花森の家庭事情などを母から聞かされている上総としては、別にいいじゃないかという気がしている。話をしてみて、確かにこの人はしっかりしていると思うところしきりだった。
「ごめん、かなり時間急ぐんだ。手短にいくな」
「あせってますねえ、立村先輩。やっぱりそう言うところが評議委員長っていうか」
　つっこみをしたいけれども口を急いで動かした。
「頼みたいんだけど、杉本をできるだけ、休み時間一Ｂの教室からひっぱりだして、二年の女子

たちが溜まっているところに連れ出してほしいんだ」
「二年の女子たち？　先輩の彼女とか？」
　もう知られまくっている美里との交際。どうでもいい。
「とにかく、二年の女子、図書局の古川さんとあと、まあその、あの人と。だいたいその辺りに話はつけてあるから、杉本をうまく機嫌とって連れ出してほしいんだ」
「いいですけど、どうしてですか。なんか立村先輩あせってますよ」
　花森は上目遣いでじいっと見つめた。大抵誤解してしまう誘惑したげな視線。でも上総は知っている。本当に花森が見つめている相手は、別の場所にちゃあんといて、一途な思いをぶつけているってことを。
「理由は少し落ち着いてからな。とにかく、今杉本がかなり、きつい状況にあるってことは俺も知っているから、少しでも苦痛のない場所に連れ出してほしいってだけなんだ」
「よくわかんないけど、今度、こっそり教えてくださいね。杉本さんには言わないけどね」
「ああわかった。今度、こっそりと、うちの母さんにはばれないように」
「時辻さん怖いですもんねえ」
　この辺の呼吸はぴったりだ。

　上総が慌てて教室に戻った時は遅かった。すでに菱本先生が細い目で上総をにらみつけていた。朝の会はすでに開始で、菱本先生のお説教第一弾だったらしい。
「すみませんでした」
「ったく、何やってるんだ。早く座れ」
　意外にも注意は簡単だった。隣りの南雲が指でちょいとつついてきて、
「遅刻が多いから気を付けろだってさ。ちょっとりっちゃん、あの時間帯に職員玄関をうろつくのはよくないと思うよ。どつぼじゃん」
「いろいろあるんだよ」
　反対側の隣り、こずえは静かに上総を無視していた。
　――あとは、清坂氏に頼むか。
　こずえにつっこまれたからではない。話す場所の選定をしなくてはならないだろう。他の連中のように、ロビーで簡単にというわけにはいかない。
「ねえねえりっちゃん、目が死んでるよ」
　隣りの南雲はなんども袖口をひっぱりアピールしていた。

　二時間目前。すぐに立ち上がって美里の席まで行った。ふたりの付き合いは公認だから、さほどひゅうひゅう言う奴も少ないものの、一部の女子は目を三角にしている。

「清坂氏、ちょっといいかな」
「なあに」
　少しだけ唇を尖らせた。手を机の上で重ね合わせもぞもぞしている。怒ってはいないみたいだ

った。
「今からちょっとだけ、大学の方へエスケープしないか」
「あんた最近授業さぼりすぎじゃないの？」
　昨日の五時間目、新井林との対決で時間をつぶしたことを指しているらしい。
「私まで巻き込まないでよね」
「ごめん、けどどこか静かなとこできちんと話をしたいんだ」
「いいよ、立村くん無理しなくって」
　すうっと、波立たない目でもって美里は尋ねてきた。
「昨日は新井林くんと何かあったんでしょ。貴史が言ってたよ」
　――どうして、知ってる？
　頭の回転が一瞬止まった。
「体育館でものすごく険悪なムードだったって聞いたもん。あんたと新井林くん、うまくいってないこと知ってるから、なにかあったのかなあとは思ったんだ。それと」
「清坂氏、あの、もしかして」
「そのあと、こずえからも聞いたよ。杉本さんのことでしょう」
　――お見通しかよ。羽飛、お前って奴は。
　別の奴らとトランプのスピード勝負をしている貴史に目を向けた。
　美里はたんたんと述べた。
「いいよ。立村くん、私も手伝うから」
「え、あの、だから」
　口篭もるが美里に断ち切られた。
「いいって。私にだけは、無理なことしないでいいよ」
　いつもならず静かな美里がそこにいた。しゃがみこみ、美里の顔を見上げた。
「みんな片が着いてから教えてくれればそれでいいから」
「わかった、約束する」
　こくんと頷き、美里はじっと上総に目を留めた。
　――やっぱり、もっかいなぐちゃんに、クリスマスの時どういうことをするもんか、教えてもらわないとまずいよな。
　ちらっと考えたけれども、時間がない。もう一度しっかと頭を下げ、上総は廊下に出た。

　同じことを今度は二年の女子評議三人に……もちろん各クラスを訪問して……頼み込み、一段落。
　反応はさまざまだったけれども、とりあえずは理由を聞かずに賛成してくれた。
　やはり女子たちから杉本梨南の評価は、想像以上に高いらしい。
　「可愛くて面白くて純粋でいい子」なのだそうだから。
　でも最後に、こずえと同じ質問を投げかけられたのには参った。
「けどなんで、そこまで立村くん、杉本さんをかばおうとするわけ？　別にいいけど」

照れ隠しとでも思われているんだろうが、上総からしたら単に言葉が見つからないだけだ。
「やはり、一年Ｂ組のやり方はまずいだろう？　人間としてさ」
意味不明の言い訳をして、上総はすぐに教室へもどった。なんでみんな納得してくれたのかよくわからないけれども、考えている暇はない。要はよけいなこと言わずに協力してくれるかどうかが問題だ。
――杉本梨南を一年Ｂ組の教室からできるだけ遠ざけること。
新井林が出した条件に見合うやり方はこれだけしか思いつかなかった。
――新井林たち多数派の連中にとって杉本はとにかく目障り。存在するだけで不愉快なんだから、それなら本人が居なくなってくれれば一番丸く収まるんじゃないかな。
ひとり体育器具室で腰掛けて、手に息を吹きかけて考えていたらすぐにみつかった案だ。
よく、「いじめられて転校させる」という話を聞く。学校をそう軽々代えられるというのも信じがたい話だが、環境を思いっきり変えて過去を消すというのもひとつの手だと思う。上総自身も青大附中に入学した時は同じことを考えていたのだから。
杉本の場合は小学校時代の天敵たちと、よりによって同じクラスに回されてしまっている。女子たちは好意的らしいと聞く。いつまで続くかどうかはわからな いだろう。桧山先生によって女子がだんだん崩されていくのも時間の問題だ。このままでは杉本がいじめの首謀者として女子を利用しているということにされて しまうだろう。自分に火の粉がかかってくるとなったら、女子たちも杉本から一線をひこうとするかもしれない。そうなったら一気に一人ぼっちになるだろう。
現二年Ｄ組の場合と比較してみる。上総がさんざん一時期物笑いの種にされていたけれども、貴史や美里、ついでにこずえの力もあってうまく守られたように。いわば、佐賀はるみの位置は、現在上総が置かれている立場とおんなじだ。
菱本先生が、一応は上総を否定しないで受け入れるよう……うざったいという方が先に来るが……クラスの連中に言い聞かせているから、表面上はいじめのな いクラスが存在している。いじめることは悪、とはっきり断言することにより、不満分子を押さえつけている。この点に関してのみ悔しいが、上総は頭を下げな くてはならないと思っている。
桧山先生のしようとしていることもも同じといえば同じだ。
佐賀はるみが杉本梨南にいじめられているということが事実ならば。
おそらく上総から見ても、佐賀はるみの立場は非常に居心地悪いものだったに違いない。
どんなに杉本が友情を持って接してきたとはいえ、六年間好きな男子とも話を禁じられ、自分の好みの文房具も使わせてもらえない状況で腹に据えかねたのも無理はない。
その点、杉本に逃げ場はない。
反省を求める桧山先生の行為は決して責められるものではない。

明らかに杉本が不利という立場を前提に考えた。
でも、どんなに口をすっぱくして説得しても今の杉本は聞く耳を持たないだろう。自分の方がはるかに傷つけられていると思い込んでいるし、自分がそうされ るのには当然の理由があるのだ

と認めるなんて簡単にはできない。上総自身もそうだからよくわかる。自分が痛い思いをしたことの記憶はリアルに残るけれど も、人にとってはそれが普通の感覚なのだから、それに甘んじるしかない。自意識過剰すぎた自分が悪かったと反省し、改めるしか、普通になじむ方法は見つからない。
　新井林の言い分は、「とにかく普通の連中に迷惑かけるな」という点ひとつだろう。
　普通の感覚を持つ人々と、違う感覚を持つ人々の住み分けを進めてくれってことだろう。
　杉本に新井林に頭を下げてなじもうとする努力が求められない現状。それならば、出来る限りそれぞれの居場所を引き離し、互いが目に入らないようにするの はどうだろう。「いじめはしない」と新井林が宣言しているのが救いである。互いの接触を減らせば、それだけ摩擦も減るだろう。全くきっかけをなくすること はできないかもしれない。でも、目に入ることが少なくなれば、「普通の感覚」を持つ人たちも「違う感覚」を持つ人たちのことを忘れていられるだろう。

　もちろんこれが一時凌ぎだということは自分でもわかっている。
　第一、自分ら二年たちがいつも張り付いているわけにはいかない。
　それまでになんとか別の方法を考えるなりしなくてはならないだろう。杉本にもう一度、さしで話をして、なんとかせねばならないのだと言い聞かせるか、もしくは新井林に頼み込んで交渉するか。
　頭の中はぐちゃぐちゃ状態だ。とにかく時間が足りない。
　――ああ、もうひとつやることあったんだ。
　悪いけど、「奇岩城」のことなんて考えている暇なんてない。

　そろそろ期末試験の準備が始まる頃だった。そちらもいろいろ面倒なことが多く、上総は何度も職員室へ足を運んでいた。まだ英語科の桧山先生はお休みのままだ。情報で得た「自宅謹慎」というのも、噂ではないらしい。一応読んだ「テス」の卒論も返したいところだ。
　昼休み、上総はすぐに職員室へ向かった。
　こずえがおぼんを下げてすぐに教室から出て行ったところまでは見届けた。美里がどうしていたかどうかはわからない。すれ違いに二年女子たちが図書館に向かったのは知っている。でも、ちゃんと図書館に杉本を連れ込んでくれたかどうかまでは確認できなかった。時間がない。

「菱本先生、少しだけいいですか」
　息を整えた。社会科の菱本先生のところへ向かうにはかなり緊張する。
　一年時からにらみ合いが続いている関係である。一度爆発したのが、八月末の宿泊研修だった。
　あの時以来、菱本先生は上総に対して、微妙な距離を置いてくれている。苦労して、恥をかかされて、ようやく得たちょうどいい距離感。こちらからそれを縮めるのはなんか抵抗があるが、いたしかたあるまい。心臓がかなり鳴り響いている。

　机の上には、細かい表組みの書類が一枚だけ。ちらっとのぞいたところ、どうも実力試験の順位一覧らしい。自分のうちにも届いているはずだが、父が直接受け取っているので見たことはない。どうせトップに載っているわけもないのだから、上総は無視して話し掛けることにした。
「立村か？」
　疑問のアクセントあり。わりとさっぱりした顔で上総に向き直った。作り笑顔に見えるが気にしない。
「はい、お願いがあって参りました」
　あらたまった口調を使った。少しでも菱本先生の放出するエネルギーから距離を置きたい。チャンスとあらば、心の中に滑り込もうとして手を伸ばす菱本先生のやり方には腹が立っていた。だからふだんは美里や貴史に任せていたけれど、今回はそうもいかない。
　上総の顔に何を読み取ったのかはわからない。菱本先生は一呼吸おいた後、膝に両手を置いて隣りの先生の椅子に座るよう指差した。
「まあ、座れ」
「ありがとうございます」
　唇をかみ締めまずは腰をおろした。じっくりと菱本先生の手を見つめた。
「どうだ、元気か」
　毎日顔を合わせているのになにが「元気か」なんだろうか。うっとおしい。さっさと本題に入ろうと決めた。
「あの、実は先日清坂さんと古川さんが、僕のことについていろいろ、話をしてくれたことなんですが」
「ああ、あれな。みんなクラスの連中は大して気にしてなかっただろ。俺も一度はきちんと、特別な配慮の授業については説明しておいたほういいと思ったから な。お前だけじゃない、金沢とか、あと何人かそういう風に個人的配慮をお願いしている奴がかなりいるから。助けを求めるのは悪いことじゃないんだからな」
「あの、それでなんですが」
　明らかに菱本先生は勘違いの極地である。お礼を述べにきたとでも思っているに違いない。いいかげんにしろ、である。
「先日のことについては、本当にありがとうございました。あのそれで、なんか桧山先生が僕のことについて何かおっしゃられたとかいうことですが」
「いやあれは大人の問題だ。立村は気にするな」
「いえ、あの、それで」
　話しているとあやうく切れそうになるがこらえる。自分のためじゃない。時間がない。
「実はこの前、桧山先生に呼ばれて、一年Ｂ組のいじめ問題について意見を聞かれたんです」
　かなり内容を変えて、上総は一通り説明した。桧山先生がいじめ問題についてかなり深刻に悩んでいたこと、一回当事者同士で話し合いを持っていたこと。そ の時に、桧山先生に……ここらへんはかなり事実と異なるが……上総が自分の学習障害のことについて説明をしたことなどを話した。「こちらが善意だと思っても、相手にとっては悪意としか取れない場合が多いんだから、

その辺をうまく調節しなくちゃいけないんでは、と話して、その時に僕 の、その、数学のことについて話をしました。どんなに理解したくたってできない場合もあるのだからということで、説明しました。たぶん、桧山先生はそのこ とをあらためて、話したに過ぎないのだと思います。だから、決して桧山先生は悪意があって話したわけではないと思うんです」
　――嘘八百もいいとこだよな。
　卒論のお礼にしては大げさすぎると自分でも思う。でも仕方あるまい。
「立村、お前な」
　一通り説明を聞いてくれた。菱本先生は口を結んでじっと上総の周りの空気の色を見ている。嘘をついているんじゃないかと疑うような感じもあり。前科があるから仕方あるまい。
「数学のことについては恥じゃない、と思えるようになったんだな」
「しかたないと思ってます」
　心にない言葉を吐くのは慣れている。
「悪意がないかもしれないが、お前、辛くなかったのか」
「いつものことなので慣れています」
　これは本当だ。
「だが、自分のプライドを傷つけられたら戦うのも男として同然の行為だぞ」
　――だからあんたといつも戦ってるじゃないか！
「大丈夫です」
　これ以上話しているとまた、熱血男のお説教を五時間目ぎりぎりまでかまされるはめになるだろう。冗談じゃない。切り上げ時だ。素早く結論を言い切った。
「だからもし、桧山先生が僕のことをうっかり口すべらせたことで誤解されているんでしたら、そんなことはないと、それだけ言いたかったんです。桧山先生は 精一杯、クラスをよくしようとしているんです。もし誤解されてらっしゃるんでしたら、菱本先生、どうかその点だけわかっていただけますか」
　ああ、丁寧語ばりばりである。でまかせもいいとこだ。
　でもこの先生には一番いいやり方でもあるのだ。二年近く菱本先生のやり方を見てきて、隙を見つけられないほど上総は馬鹿ではないつもりだ。
「立村、そうか」
　頭に手を載せられ、軽くぐりぐりやられた。片足で急所を思いっきり蹴り上げてやりたい。
「お前も大人になったな」
　――あんたに言われたかないってさ！
　以上、十五分たっぷり菱本先生は愛のお言葉を注いでくれた。耳半分にしか聞いていなかったがおよそ「よくぞ心を開いてくれたぞありがとう」ってとこだろうか。評議委員会が隠れ演劇部であることの証明を、今回させていただいたわけである。

　時間が一分でも余れば、様子見で図書館に立ち寄りたかったのだが、例の菱本先生対談により五時間目までぎりぎりの到着だった。こずえと南雲が無言で顔を見上げている。相当険しかった

に違いない。
「りっちゃん、かなりきてるね」
「いや、まあ、ちょっとな」
　言葉を濁す。つっこみをいつもなら入れるこずえがおとなしく三角定規を引っ張り出している。コンパスでぐるぐると、円を書いて遊んでいる。
「あのさ、古川さん、例のことなんだけど」
「大丈夫、ちゃんとやっといたよ。てか、毎日やるよ。私たち」
　元気なさげ。お姉さんらしくない。南雲も異変を感じてか、上総の背から手を伸ばし、椅子の背もたれを叩いた。
「古川さんにしてはめずらしいっすねえ。風邪でもひいたっすか」
「まっさか。風邪引いてたら、あんたの彼女から薬もらいに行ってるって」
　返す言葉もやはり切なげだ。明らかに何かがあったらしい。杉本梨南に手ひどいしっぺ返しを受けた可能性がないとは言えない。急いで座り、小声で話し掛けた。
「もしかして杉本がなんか、文句言ったのか」
「ううん、そんなことないって。杉本さんいい子だもん。茶髪のおっしゃれな子と一緒に図書館来たよ。話したよ。ちゃんと隔離したよ」
「そうか、ごめん。やっぱりピザまんおごるよ」
　それでも消せない憂いの表情。後ろ側の美里に目で合図すると、小さく首を振った。親友の美里にも理由が解せないらしい。
「いいよ。食べ物めあてでやったわけじゃないって。あんた大人になってほっといてよ」
「ならいいけどさ」
　やたらとため息をつきながら、こずえは指先を見つめてまたうなだれている。たぶんこの辺で下ネタ漫才かますとしたら
「やーだねえ、立村ってば、私が日の丸の日だとか思ってるでしょー！　そういうことに男子って好奇心旺盛だから困るよねえ」
とか言って交わすだろうが。　――どうしたのかな、やっぱりなんかあったのかな。
　ついでにもうひとり、顔色確認をした。
　全く変化なく騒いでいる羽飛貴史の姿が見える。三角定規を絡めてヨットをこしらえて遊んでいる。上総からすれば、こういうことこそ「ガキ」と呼んで欲しいもんだ。
「ほら、羽飛がなんか騒いでるって」
「なにむかつくこと言うの、あんたも」
　上総はそっと教科書を開いて、目を落とした。数学の教科書はきれい過ぎる。文章題の難しい問題が並んでいた。解けるわけないので、すでに他の連中から答 えをいただいている。不景気な面のこずえを無視して南雲に、「菱本先生の説教はいいかげんにしてほしいよな」的話題を振った。もちろん、内容は一切明かさ ずに、ため息をついた。同時に隣りから、同じくため息の声が聞こえた。息だけではない、もろに「はあ」と聞こえるようにだった。
「やっぱり落ち込んでますね、姉さんは」

　じいっと上総を見据えた。こずえにしては珍しい視線だった。
「あんた、やっぱり杉本さんのこと好きなんじゃないの」
　真剣に言われると困る。何度も同じ否定の答えを出す。
「そういうんじゃないよ。先輩としてはひいきしてるかもしれないけど」
「いいよ、本当にそうしたいんだったらそうすればいいんだ」
「そんな話になったのかよ、まったくたまらないなあ」
「どうせ、美里には相手いるんだからさ、後釜が」
　――後釜？
　一瞬にして、どんより気分のこずえが生まれた理由を理解した。
　――そういうことか。
　もう一度美里に目を向けた。やはり心配なのだろう、上総に向かって頷いたり、首をかしげたりしている。
「古川さん、ちょっと耳貸せよ」
　南雲には聞かれたくないだろう。そっと上総は無理やり口を近づけた。
「やだねえ、給食あと歯磨きしてないでしょが」
「だから黙って聞けよ」
　片目で相変わらずはしゃいでいる羽飛を見やり、つぶやいた。形のいいこずえの耳は、きれいに掃除がしてあった。みかけによらず、細かいところきちんとしている人だった。
「俺は清坂氏と付き合いやめる気ないよ。ということで当然」
　口を離し、もう一度近づけた。凍り付いているこずえの瞳。潤み加減だ。
「古川さんの相手が清坂氏とくっつくなんてこともないってさ」
　真剣であることの証明として、真横を向いてじっと見つめた。視線を逸らさなかった。
「何言ってるってさ、立村、あんた、なんか」
　言葉がばらばらとほぐれているのが動揺している印。満足して上総は自分のコンパスと三角定規を取り出した。

　桧山先生が学校復帰したと聞いたのは、それから二週間くらいしてからのことだった。上総の嘆願がきいたのかどうかはわからない。一年Ｂ組を揺るがし、上 総のプライバシーをもずたずたにした事件も、とりあえずは丸く収まったようだった。みな人のことは無関心なのはいいことだ。

　期末試験が終り、またも順位発表で騒ぎとなり、一年は相変わらず杉本梨南のぶっちぎり一位らしいと噂にきいた。いろいろあるにせよ、少しは上総の配慮も役立っているのだろうか。そう思いたかった。
　こずえ、美里、その他の女子有志たちが、
「男尊女卑の桧山先生に反抗声明よ！」
　とばかりに杉本をねこ可愛がりしている。ほとんど顔を見ると一礼するだけ。話しかけても無

視される。　でも、他の評議委員女子連中には素直に応じている ところをみると、クラスから引き離す作戦も成功しているのかもしれない。たまに図書室で、女子たちがきゃあきゃあ杉本たちと一緒に、ビーズ細工で遊んでい る声を耳にした。覗き込んだ杉本の表情は、うつろだが尖らす口から飛び出す言葉は、女子たちからすると可愛いものらしい。周りから笑顔は絶えていなかった。
　「青大附中スポーツ新聞」では、青大附中バスケ部が水鳥中学バスケ部からまたもぼろ負けを食らった記事が打ち出されていた。

　――あとで、桧山先生に卒論返してこよう。
　読み終えて一通りの感慨はあるけれども、まだ上総は心に秘めておくことにした。純情可憐で、純粋に信仰深い女性テスが、まっすぐに生き様とするあまり身 の破滅を呼んでしまう悲劇。何度か救われるチャンスはあったのに、運命というか、ストーリー上の都合というか、手に入れることができないまま人をあやめ、 絞首刑に処せられる。
　――桧山先生たぶん、書きたくてこの卒論書いたんじゃないと思うな。教授がたまたま「テス」を専門にしてたから、適当に仕上げただけなんだと思うんだけ どな。だってさ、先生の書いてる内容って、俺がこの前大学講義でもらった参考資料の丸写しだよ。大学って、こういうことで卒業できるのかよ。あ、そうか、 英語で要約書かねばなんないのか。とにかくこれ、俺が言えた義理じゃないけど、なんか卒業論文ってものから夢を奪う以外の何ものでもないと思うな。
　まさか、そんな恐ろしいことを言うことはできない。上総は茶封筒に黒表紙の卒論をしまいこんだ。指先だけ出る手袋をはめ自転車を漕いだ。

　いつものように職員室に寄り、社会の副読本を菱本先生から預かり、扉を閉めた時だった。
「おい、ちょっと逃げんなよ」
　ブレザーを完璧に着くずしたまま、一瞥する奴を見た。
　コートをすぐに着たくなった。身体が固まった。
　じっと射すくめられると同時に目をそらした。
「新井林、いったいなんだ」
　まずは言葉を返す。一切動かずに新井林は声を低めた。
「俺が用あるって言ってるだろ」
「今じゃなくてもいいだろう」
「あんたが言ったんだぜ、『一発殴らせろ』ってな。ちょっと来いよ」
　廊下では規律委員の連中がずらっと並んで、遅刻者をチェックしていた。南雲の姿は見かけなかった。新井林が顎でしゃくって生徒玄関の方へすたすた歩き出したのを追いかけた。
　――いったいなんだよ、今度は。
　できればこのままとんずらしたい。でも動けない。
　いつも新井林と対するとこうなってしまう。こんなんじゃだめだと、自分を殴りつけても、おなかの中の虫が上総を思いっきり引っ張っている。

――どっちが先輩なんだよ、まったく。
黙ってついていくしかない自分が情けない。

「いったい、何を言いたいんだ」
生徒玄関には鍵がかかっている。そこから入ってくる生徒はいない。通り過ぎる先生の姿も見当たらなかった。ロビーでふたたび向かい合った。新井林はま ず、ズボンのポケットに手を突っ込み、少し猫背になり斜に上総の顔を覗き込んだ。立ち止まった上総の周りをぐるぐると回り続けた。目が回って身体が溶けて しまいそうだった。
「悪いけど、あんたすげえなってまずは、けじめをつけたかったってことだ」
一発目、新井林が発した言葉を繰り返した。誉められているのだろうか。
「けじめ？」
「そうだよ、けじめって奴だ。俺は男として最低の人間になんぞなりたくないからなあんたがどういう手をつかったかわからねえが」
――男として、最低の人間って。
責められる、痛い。上総は必死に唇を噛んだ。
新井林は立ち止まった。上総の目の前だった。視線を逸らすことを許さないまなざしだった。
「一週間前の公約通り、一年Ｂ組は見事に静かになったってわけだ」
言われている意味が、耳の中で溶けてこない。鸚鵡返しのみしかできない。
「杉本の、ことか」
「そうだ。お見事、さすが本条先輩の命で評議委員長に推薦されるだけのことはあるって、俺も認めてやるさ。あの桧山先生だって、いきなり教室の状況を見て な、『ずいぶん変わったなあ。静かになったなあ』って言ってたぜ。要は、あの女が教室にいることが少ないと、丸く収まるんだってことが証明されたってこと だな」
上総は持っていた副読本とプリント若干を持ち直した。
自然とため息が洩れた。図書室の杉本の姿が思い浮かんだ。
「そうか、だいぶ落ち着いたか」
「清坂先輩とか、二年の女子の先輩を利用して、よくもまあやるよなあ。思いっきりむかつくが、けどあんたのやり方がお見事だったことも認めてやるさ。俺が 七年間苦労してきたことを、あんたは一週間で片をつけてしまったんだ。ま、本当はあの女の口を封じてくれれば一番いいんだが、それ以上のことを俺は望まね えよ。まあ、桧山先生も復活したことだしな」
じろんと目を一瞬だけうつろにし、すぐに堅く戻した。新井林がよく使う、にらみの技だった。
「今日の放課後、茶室で落とし前つけさせてやるよ」
「落とし前？」
「あんた、おうむ返ししかできねえのか。ほんっと馬鹿じゃねえか。まあいいさ、あんたは俺を一発殴りたいって言ってたしな。この件に関しては俺が全面的に悪うございましたってことで、一発とは言わず、三発くらい殴ってよしだ」

――こいついったい何言ってるんだよ！
即座に浮かんだ言葉を、すぐに打ち消して思い出した。
――そうだ、俺が言ったんだよ。
――杉本をおとなしくさせたら、一発殴らせろって。
花崗岩のような自分の握りこぶし。人を殴りつけたことのない、折れそうな指。武者震いでない、ただのおびえた震えが走る。
――殴れって、そんなことできるかよ。
「新井林、あれは言葉の綾だ」
表向きだけでも落ち着いた風に見せたい。言葉が走ってしまう。見抜いた風に新井林は、にやっと笑った。
「殴らせろって言ってるんじゃねえぜ。俺は殴らせてやるって言ってるんだ。一騎打ちであんたの腕力じゃあ俺とは話にならねえだろ」
上総があせればあせるほど、新井林の声は落ち着いてくる。場を踏んでいる。またいつものように「勝ち目のない戦い」という声が聞こえてくる。足を踏ん張 らねば。言葉のメトロノームが激しく触れていた。「落ち着け、よく聞け。新井林。確かにあの時俺は、そう言ったよ。けど、今の一年Ｂ組が丸く納まっている んだったら、無理にそんな、殴りつけようだなんてことはしない。暴力で物事がうまくいくなんて、ガキっぽいことを考えてはいないんだ」
――何白々しいこと言ってるんだ、俺は。
――ただ、怖いだけのくせしてさ。
言葉に裏切られていく自分がいる。逃げ出したくて足を震わせている自分がいる。見たくない大嫌いな自分がいる。本条先輩のように落ち着いて交わせない自分がいる。きっと新井林の眼に映っているのはそんな奴だろう。
「ほお、前言撤回かよ。ったく、やっぱりあんた、度胸ねえんだな。それともなにか？　俺が騙そうとしてると疑ってるのか？　悪いが世の中、あんたみてえなびくびくした馬鹿男だけじゃないんだ。よっく目の玉おっぴろげて見てみろよ。じゃあな、放課後、茶室の裏で待ってるぜ」
新井林はもう一度にやっと口元をほころばせ、駆け足で一年の廊下へ消えた。
教室に早く戻らないといけないとはわかっているけれど、足がだんだんじんわりと痺れている。菱本先生が近づいてきて、
「おい、立村どうした、早く戻らないと授業始まるぞ」
と肩を叩いてくれるまでは、氷柱の身体ののままだった。

その９　泥にまみれて泣きたい

　自分で言い出した以上、決着をつけなくてはならない。
　人を殴ったことのない自分のこぶしがか弱かった。授業中の窓辺から見える冬空は、なんどか雪を降らせて凍らせていた。まだ十二月だから土が若干こわばる程度。霜が残る程度。でも肩から腕は冷たくて、何度も咳をした。風邪を引きそうだった。
　――やっぱり、一回頬を張り倒すだけでいいのかな。
　殴られたことはあるけれども、反対のことはなかった。
　いくら新井林が無抵抗を表明しても、上総には信じられない。
　そりゃあ、確かにあの時自分は「一発殴らせろ」と口にした。どうしようもなく文句を言いたくて、でも自分が怖くって、頭の中がミキシング状態になって、 それでこぼれた言葉だった。でも、最初から勝ち目なんてないとわかっていた。第一腕力勝負だったら、第一ラウンド一発目でノックアウトされて一巻の終りだ ろう。あの時見た新井林のこぶしは、骨ばっていて、凶器そのものの形だった。武器だった。
　――相手に情けかけられるようじゃ、おしまいだな。
　上総は隣りの南雲に話しかけた。
「なぐちゃん、ちょっといいか」
「なんですか、いきなり」
　社会の授業は基本的にノートを取るだけにとどめている。担任菱本先生の「余談」なんて聞きたくもない。すでに期末試験も終わっているのだから、みな気分 は冬休み一直線。それを盛り上げようとしているのか、菱本先生はいきなり年末時代劇に絡めた話題を持ち出している。もちろん、「忠臣蔵」「討ち入り」あの あたりである。上総は去年の評議委員会ビデオ演劇でいやというほどストーリーを頭に叩き込まれたので良く知っている。「お前、人殴ったことある？」
「へ？」
　か細く、視線は細く。
「だから、殴り合いのけんかとか、したことある？」
　南雲はあっさり頷いた。いぶかしげに上総へ、シャープの先をノートへ刺した。
「りっちゃんないのか」
「やられる一方」
　決まり悪く笑ってごまかした。
「まあ、やるったって小学校くらいの時までだってさ。手を出すよりも頭を使えってことが最近は多いしさ。人殴っても、自分の指がつき指するだけだしさ」
　この辺りでにかっと笑った。つられて上総も笑った。
「やっぱり、人殴ると痛いよなあ」
「自分が痛いと思ったことを、相手にやるのはよくねえよって感じだ」
　南雲はそう言うところ、きちんとしている。
「一度、小学校の時にいろいろあって、一発ずつの勝負を教室の中でやったことあったんだ。そ

んなすごいことじゃないよ。すげえたわいないこと」「たわいないことってなにさ」
「まあまあ」
　話をごまかすところみると、「すげえたわいないこと」ではないんじゃないかと思う。
「あまり話はつっこまかいけど、結局勝ったのか？」
「いいや、負けた、あっさりと」
　南雲は優男と思われているところがある。意外ではない。さらに続けた。「やっぱり、空手やってる奴ってすごいよなあ。その子女子だったんだけど、一度ど うしても人と戦ってみたくなったから、俺に相手して欲しいって頭下げて頼まれたんだ。そう、小学校四年のバレンタインデーで」
「バレンタインデーで？　それと殴り合いとどう関係あるんだよ」
　思わず口がほころぶ。南雲にとってのバレンタインデーはさぞや盛り上がり必至だったろう。
「今思えば、そこで俺がその子を負かせば、チョコレートをもらえるはずだったんでないかな。とにかく、空手やっててごっつい感じってことのぞけば、性格い い子だったしさ。だから、かるーくやろうと思って対決したら、目の前がいきなり天井一面になっちゃって、その子が心配そうに覗き込んで、泣いてたんだ。そ れでしばらく大騒ぎ」
　――なんだよそれ。告白のつもりが殴りあいかよ。
　南雲はにっこりと頷いた。
「最初から断るつもりだったからそれはそれでいいけど、でも、強いことって女子にはしんどいことなんだなって思った。その子、今では中学の空手大会でいいとこ行ってるらしいけどさ」
　できれば上総もそういう子に告白されたくないとつくづく思った。
「で、りっちゃん、なんでそんなこと聞くの」
　答えたくない時は、なぐちゃんお得意、「笑ってごまかす」だ。
「いや、なんとなく。身体を動かしてみたいなって」
「それだったらりっちゃん、今度一緒に卓球場行こうよ」

　冬休み前の自由研究準備を言い訳に、上総は職員室へ向かった。もちろん、長らく借りっぱなしの卒論を桧山先生に返すためだ。何度か廊下や全校集会などで 顔を見てはいたけれども、ゆっくりとお礼を言う暇はなかった。英語科準備室を覗いたが一度目は在室せず、二回目は電話中だった。
　――まあ、急ぎじゃないし、いいか。
　どうせ話すのだったら、ある程度時間が欲しかった。

　新井林健吾との対決は一刻一刻と迫っている。新井林曰く、「殴らせてやるよ」とのことだが、裏には上総が殴れるわけないというしたたかな読みがあるのも否定できない。
　――できないと思ってるのかよ。ばかにするなよな。
　一度もこぶしを振り上げたことはない。でも、ネクタイを引っ張り挙げて、あごを上げさせて、ストレート一発かますくらいだったらできそうだ。

肉体的には可能だろう。あとは自分の割り切りだ。
暴力なんかでうまく片がつくなんて甘いことを考えてはいない。自分のことを思い出してもそうだ。殴り合って感動して抱き合うなんて、いかにも菱本先生の 好みそうなパターンだ。ぞっとする。頬に張られた手、熱、痛み。憎しみしか得られないし返されない。仮に上総が新井林の挑発に乗って、一発二発張り倒した とする。もちろん約束したことだからなんとも言われないだろうが、新井林からはおそらく、
「けっ、あんたも所詮、俺が手出ししないという保証の元でしか、殴れないんだな、ばーか」
と軽蔑されるだろう。評議委員会が開かれるたびに、あいつから軽蔑の混じった視線を向けられる羽目になる。教壇の上から一年間、新井林の勝ち誇った顔を見下ろすのはごめんだ。
――結局、自分が一番大切な奴なんだよな。俺は。

こずえと美里が、相変わらず杉本の面倒を見てくれていた。いろいろ情報が入り交じっているけれども、杉本がどうしようもなく追い詰められ、撃墜されるの は時間の問題ではという気がした。桧山先生の真意はわかるようでわからない。とにかく杉本を孤立させて、「いじめ」問題をあっさりと片付けたい。そのため には手段を選ばない。それこそ逆のいじめ状態になったとしても、それは制裁として当然のことと思っているきらいありだ。
それを止める気はなかった。
突き落とそうとする相手を止めることはもうできない。
自分にできるのは、崖から突き落とされた相手を受け止めるためのクッションを、出来る限りたくさん集めておくことだけだろう。桧山先生、新井林、そして 佐賀はるみの立場を考えれば、恨みは募って当然だ。上総にその気持ちを押えさせることは、たぶんできない。ただ、もうひとつ、クッションを集めておきた かった。
――佐賀さんって、あの子かな。
帰りの鐘が鳴った。廊下から外を眺めると、中庭にひとり、髪を両耳の上に丸めて載せた、すらりとした女子が立っていた。ひとりだった。見かける時はいつ も新井林と一緒だった。本当にいじめの犠牲者なのか、と言わんばかりに気品ありげに微笑んでいた記憶が残っている。今は表情が見えないけれども、誰かが来 るのを待っているようにも見えた。
決闘相手は少し待たせてもいい。十分の一秒で決断し、上総は中庭に下りた。空気が下にいけばいくほど冷えていく。息が切れた。

「佐賀さん、ですか」
なんとなく佐賀はるみには敬語を使わねばならない気持ちにさせられた。ゆっくりと首を回し、身体を向けた。明るい紺色のダッフルコートだった。学校では目立つだろう。ほのかに唇へ赤いものが見えた。
「はい」
「今、少しだけいいですか」
一メートル以内に近づいて声をかけた。遠くで眺めた時と同じく水飴のねばりに似たものを感

じた。
「はい」
　従順に、素直。杉本とは大違いだった。杉本だったらおそらく「名乗ってください。失礼ではないですか」と噛み付くだろう。慌てて上総は付け加えた。
「二年の立村といいます」
「知ってます」
　短く答え、笑みともいえないわずかなやわらかさをたたえて、佐賀はるみは頷いた。
　――こういうタイプって苦手なんだよな。
　調子が狂いそうだった。隣り合った。

「佐賀さんが杉本に迷惑をかけられていることは聞いています」
　うまく切り出せなかった。佐賀がきょとんとしながらも、首をかしげてじいっと見つめた。黒目勝ちのまなざしが留まった。
「俺もその点については、いろいろな人から話を聞いています。だから、佐賀さんがこの事態をなんとかしたいと思っているのはわかっているつもりです。だからできるだけ、杉本にそういうことをやめさせるように努力します。ただ、ひとつだけ聞きたかったのですが」
　なんで敬語使ってるんだろう。自分でもおかしかった。
「杉本のことを、正直なところ、どうしたいと思ってますか」
「どうしたいって言われても」
「すみません。このままだとたぶん、杉本はクラスで嫌われることが決まっています。たぶん、佐賀さんはこれ以上被害を受けないですむと思います。桧山先生も、それと、あの」
　新井林も、とは言えずに口篭もった。
「わかってます。ありがとうございます」
　背を伸ばすと上総と若干背の高さが同じだった。
「おそらく、佐賀さんの意志でこれからの杉本の扱いは変わると思います。許してやってくれとはいいません。当然のことをされたと俺も思っています。でも、逃げ場をなくしたら杉本はたぶん、青大附中の中では生きていけなくなるんじゃないかって、それだけ心配しています」
「よくご存知なんですね」
　上総は頷いた。佐賀はるみは軽く、耳の上のお団子髪を抑え、またうるんだ瞳で上総を見た。
「私は今でも梨南ちゃんのことを友だちだと思っています。だから、そんなことになってしまったら大変だと思ってます。立村先輩、大丈夫です。私もそんなことしません。桧山先生や健吾が何か言い出したら、私が抑えます。安心してください」
　――なんだ、この人いい人じゃないか。
　無意識の気持ち悪さは気のせいだったんだろうか。直感が間違っていたのかもしれない。少し力が抜けた。安心したのか自分でもかなり軽い言葉が出てきた。
「ありがとう。杉本は決して悪意でやったわけじゃないけれども、佐賀さんが迷惑をかけられているのは紛れもない事実だから、なんとかしたいと思っていたし」

「私、梨南ちゃんがどうしてそんなことするのか、理由わかってます。友だちだから当然なんです」
「その理由って、もしよかったら聞かせてもらえませんか」
　やはり敬語が消えない。瞳を逸らさずに続けた。
「梨南ちゃん、好きな人と仲良くなるとかならず意地悪するんです。好きになればなるほど、そうなんです。赤ちゃんみたいに」
　もう一度、今度は頬に片手をやった。色は白いが、ほんのりと赤らんでいる。唇に指を触れるようなしぐさをした。手の形がしなやかだ。上総が観察しているのを気付いているのかもしれない。
「新井林くんや、小学校の時の先生とか、他の人たちにもいつもそうでした。みんな梨南ちゃんがどうしてそういうことをするのか、わかってたんです。でもみ んなそんなことされればされるほど、梨南ちゃんを嫌いになっちゃうんです。梨南ちゃんが大好きだって子もたくさんいたけど、あの子すぐに気付いて、いやな こと言ったりするから、すぐに嫌われちゃうんです。好きになられるのがいやなみたいなんです」
　まばたきして、またきゅうっと瞳を凝らした。杉本にはないほのかな大人っぽさだった。
「自分でわざと嫌われるようにしているって？」
「そうなんです。今までそれで仲良くしていられたの、私と、立村先輩くらいです」
　――なんで俺に話を振るんだ。いきなり。
　動揺したのを隠して、静かに上総は尋ねた。
「あれだけ嫌がらせされて、どうして佐賀さんは杉本をまだかばおうとする？」
「だから、梨南ちゃんは、私に嫌われたら誰も味方がいなくなっちゃいます。今は二年の先輩たちが梨南ちゃんをかまってるけど、でも」
　また言葉を切って、顎のあたりに人差し指を当てた。
「きっと、梨南ちゃんまた嫌われようとします。私、小学校から一緒だったのでいつも見てたんですけど」
　首を傾げた。過剰な動きにだんだん見るのが疲れてきた。早く話してほしかった。
「梨南ちゃん、小学校の頃、ちょっとふつうとは違う感じの子たちからすっごく人気があったんです。本当は特殊学級に行かなくちゃいけないって言われてるのに、普通のクラスに入っているような人いますよね」
　ニュアンスは通じた。頷いた。
「いつも梨南ちゃんにそういう男子たちがまとわりついてきてたんです。他の人にはいつも馬鹿にされていたけど、梨南ちゃんだけはふつうに話をするからなんだと思います。でも、大声で叫ばれて抱きついてこられたり、手を握られたりされて、みんなから笑われてました」
「なんで笑われる？」
「だって、私たちに対するのと同じように話をしてるんです。他の子はみな、ちゃんとそういう子たちにするような言い方で、赤ちゃん言葉使ったり面倒みたり してたけど、梨南ちゃんだけは、ふつうの子と同じ言い方してたんです。梨南ちゃんがそういう子と一緒にいると、なんか、な

じんでいてて、普通に見えるって みんな言ってました」
　――杉本なら考えられるな。
　たぶんはるみとは別の部分で納得し、頷いた。
「だから、よく言ってたんです。梨南ちゃんはああいう男子のことを好きになれば、嫌われないですむのに、って」
「その、ふつうとは違う男子って、そんなに杉本のことが気に入ってたのか？」
「そうです。先輩、今の一年だって梨南ちゃんのことをみんながみんな、大嫌いってわけじゃないんです。あまり口には出さないけど、梨南ちゃんのことを目で追っている男子もふたりくらいいます。新井林くんとかとは大違いって感じで」
　やたらとこの子、「感じ」という言葉を使う。上総はコートのポケットに手を突っ込んでなんどか「むすんでひらいて」を繰り返した。
「そうなんだ。みんながみんな、杉本のことを蛇蠍のように嫌っているってわけじゃないんだ」
「そうなんです。だから私」　佐賀はるみが唇をゆっくり開き、息をふうっと吹いた後、言い切った。
「梨南ちゃんはそういうぴったり合ったタイプの人を好きになればいいんです。新井林くんのようなタイプよりも、そういう男子の方が梨南ちゃんには合ってますから。小学校の先生も、他の友だちもみんな、言ってます」　しゃあっと背中に寒気が走った。

　杉本がいわゆる、「ふつうとは違った感じ」の子たちに好かれるのはわかるような気がする。上総自身が診断書つきの障害を抱えているからなおさらそう感じ る。言葉はきつくても全く刺さらない、何かがあるのだ。他の友だちが同情めいた見下す態度を示すのとは、また違ったものが。
　杉本の場合、相手に対しては「男」と「女」以外の先入観を持っていないようすだ。もしくは「私をいじめる人」「いじめない人」の二者択一で人と接している。
　あくまでも想像だが、杉本は周りから浮いている子たちに対して、自分の物差しでもって話をしたのだろう。保母さんのようなまなざしを向けずに、ごくごく 普通の相手として。正しいことは正しい、間違っていることは間違っている、とげたを履かせることなしに接したに違いない。そういう子だ。杉本の持つ「友だ ち」「いい人」の概念にはまれば、周りから浮いている子も当然仲良しになるだろう。これこそ「ふつう」の友だち作りとおんなじだ。
　しかし周りの連中……佐賀はるみや新井林健吾を含む……は、自分の同級生たちと同じように接することはできなかったのだろう。変わった言葉や行動をたし なめたり、面倒を見たり、世話を焼いたり。いわば「先生」のような振る舞いをしていたのだろう。自分らよりは格下の存在として、「思いやってあげる」存在 として。杉本梨南の接し方とは微妙に違っていたのだろう。
　あまり人が近寄りたがらない一年Ｂ組の不良娘花森なつめを大の仲良しにしているところからして明白だ。

　佐賀はるみの言葉を辿るに、どうも「杉本も同じ穴のむじな」と思われてしまったらしい。

同じ、いわゆる「普通でない」子ども、と重なるものとして捕らえ られたのだろう。ちょっと特別な対応を必要とする子どもたちと同類扱いされたのだろう。間違ってはいない。共通するものは確かにあったに違いない。
　でも、もし佐賀はるみや新井林が、違った目で自分のことを見ていると気付いたら杉本はどうするだろう。自分の友だち、ひそかなるローエングリン、彼ら、彼女らが、自分のことを思いっきり「格下」扱いしていると知ったら。人一倍敏感な杉本のことだ。気付かないわけがない。
　――この人、すごいこと言ってるよ。
「つまり、杉本には、ちょっとずれた感じの奴がいいということか」
「そういう人なら梨南ちゃんのことを本当に好きになってくれると思うんです。でも、梨南ちゃん、そういうこと言うとものすごく怒りました。馬鹿にしてるの かって、言いました。みんな思ってます。梨南ちゃんはふつうの人を好きになっても、嫌われるだけだから、そういう人の方がいいんです。いくら意地悪しても そういう人だったら嫌いにならないから」
　――そんなこと言われたら、そりゃあ怒るよ。
　――それって見下し、って奴じゃないか。

　これ以上会話を続けたくなかった。どうしてかわからない。いくらお団子髪に片手をあげ、あどけないまなざしを投げられても、唇のほのかな赤さに見とれた くても、がっちりと張り巡らされている自分の中の壁。壊せなかった。アイドル鈴蘭優に良く似た愛らしさなのだろうが、上総には受け入れられないものの集大 成だった。
「わかりました、これ以上佐賀さんには迷惑をかけないようにします。安心してください」
　あらためて敬語に戻し、上総は背を向けた。言い忘れた言葉は振り返って告げた。
「佐賀さんに比べたら、杉本はどうしようもなく弱いんです。その点だけ、わかってやってください」
　唇を形良く整えて、佐賀はるみは微笑んだ。たぶん、新井林あたり即、気絶しそうなあどけない笑みだった。

　時間がかなり迫っていたこともあり、尋ね損ねたこともあったが、それはまた後にしよう。新井林との決着をつけないと話にならない。上総は急ぎ早、茶室に向かった。時計はちょうど三時半を回ったところ。佐賀はるみとは十分くらい立ち話をしたことになる。
　いったいどうして、佐賀はるみは杉本に対してこうも余裕のある態度を取るのか、理解できなかった。上総が佐賀の立場だとしたら、きっと耐え切れなくなっ て教室で泣きじゃくっていただろう。それを、相手が「赤ちゃんだから」という一言で許し、「梨南ちゃんはもっと好きになってくれる人がいる」と観察してい る始末だ。六年以上の付き合いゆえ、それは正しいのだろう。途中、なんどか頷いたところもあった。あれだけの容貌を持っている杉本のことだ、男子たちが百 パーセント嫌うこともないだろうとは思っていた。
　――そういう男子たちがいるってわかったら、何気なく笑顔を見せてやったり、挨拶したりするだけでも、だいぶクラスの雰囲気変わるだろうに。

　でも、杉本はそういう男子が苦手だという。
　そりゃそうだろう。理想の相手はローエングリン新井林なのだから。
　佐賀はるみはすでに新井林と熱いお付きあいをしている。それゆえの余裕だろうか。いくら杉本が意味不明のやり方でばたばたしても、新井林の想いは自分のもの、動かない。だからこそ情けをかけてやっている。
　――情け、か。
　唇に乗せてみる「情け」という言葉。
　杉本にとっては屈辱的だろうが、上総から見れば幸いと映る。
　新井林がこれ以上「いじめ」というやり方で杉本を締めないと断言しているのだ。報復処置を佐賀がしようとしないならば、杉本を叩くのは桧山先生ひとりだけだ。それでもしんどいだろうが、三つ巴で技をかけられるよりはましだ。

　茶室前の門をくぐる前に大きく深呼吸をした。だいぶ石畳の上は濃くぬれていて、足下の土もどろどろだった。飛び石の陰に所々雪が残っていた。
　――好きな奴に嫌われない方法が分かれば、楽になれるんだ。杉本は。
　決まった。こぶしは作らない。上総はゆっくりと石畳を踏みしめた。

「待ってたぜ」
　新井林はすでに、首を洗って待っていると言いたげだった。上総の姿をじろじろ眺め、鼻を膨らませた。
「すまない」
「今なら誰もいねえぜ。さ、好きなように料理しろ」
「新井林、そういうんじゃないんだ。少し話そう」
　咽が冷えて咳がひっかかった。肺の方から息が出てくる。下準備の終わったローストビーフってこう言う顔しているんだろう。新井林に向かって上総は左手を差し出した。和解を求めた。
「俺も、あの時感情で口走ったことは悪かったと思っている。でも納まったっていうんだったら、もう遺恨なんてない。これから先は長いんだ。だからもう一度あらためて話をしたいんだ」

「けっ、何いきなり尻尾巻いて逃げる気でいるんだ？　あんた、男だろ。男としての約束を守れないでなあにが」
　つばを足下にぺっと吐いた新井林。そのまま真っ正面から上総を見据えた。腹をくくっている。こいつのことだ、逃げはしないだろう。上総は首を振り、もう一歩近づいた。
「殴ったっていやな思いするだけだ。それより、これから、新井林と佐賀さんがどうすればいやな思いをしないですむか、それを話し合いたいんだ」　穏やかに、興奮させないように。全く新井林には効果がない。べらんべえ調で言いかえされた。
「しつこいぜ。俺たちがすっきりできるのは、あの女が青大附属を出て行くことだ。そうしない限り、どんなことがあったってすっきりさわやかって気持ちになんてなれねえって、何度も言っ

ただろうが」
「それはできない、けど」
「ははん、あの女を退学させることができなければ、俺はあの女を許すことなんて永遠にねえだろうし、あんたを認めることだってたぶんできねえだろうな。け どな、あんたは俺のできなかったことをあっさりやってくれたんだ。クラスの平和があの女のいないってことだけで保たれるってことを教えてくれたんだ。悪い があんたと違って俺は、間違っていることは堂々と認めるし頭も下げる。恨みだってあっさり捨てる。評議委員長としてのあんたを認めるぜ。その誠意を見せた くて、今こうして、ほっぺた差し出してやるってんだ。さ、三発くらいさっさとやっとくれ」
　地べたに勢い良く座り込み、新井林はあぐらをかいた。両腕を組んだまま、ぎろっと眼を見開いた。
　上総は自分の腕から力が抜けてしまったような気がした。和解交渉失敗。頭の中に浮かんだ言葉をひとつひとつひとつ拾い上げていった。
　新井林の言葉通りならば、杉本への嫌悪感というのはどうしてもぬぐえないものなのだろう。小学校時代の杉本が佐賀や新井林にしてきたことは、どんなに土 下座して謝っても許しがたいものなのだろう。佐賀はるみが杉本を見下すことにより気持ちを処理しているのとは違う。杉本の存在そのものが不快であり、教室 で同じ空気を吸うことだけでも耐えられない。杉本が二酸化炭素の代わりに毒ガスを排出しているようなもんなのだろう。
　だが、上総のやり方により、杉本との接触を最低限に押えることができた。それを新井林は認めてくれている。評議委員長としての上総を認めようとしてくれている。そのための落とし前ってとこだろう。
　――本条先輩だったらどうするだろう。
　ほとんど口を利いてもらえない本条先輩のことを思った。
　――男同士の落とし前だ、殴れっていうんだろうな。
　――けど、そんなんじゃ、杉本の立場は一層惨めになるだけだ。
　――俺も一緒に見下してると同じことになる。
　上総は新井林に近づいた。立ったまま、思ったまま続けた。
「新井林、俺はお前がどうして杉本を嫌うのか、そこまでは想像がつかない。けれど佐賀さんに杉本がしたことを許せないというのだけは共感できる。どんなに 杉本がお前たちと友だちになりたくてしたとしても、許せないことは絶対に許せないだろうし、責められないことだと思うんだ」
「つべこべ言うな。繰り返しだぜ」
　相手にしてくれない。でも言うしかない。
「頼む聞いてくれ。でも、杉本はどうしてもその気持ちが理解できないんだ。本当はお前や佐賀さんとうまくやりたいと思っているのに、どうすれば喜んでもらえるかが想像つかないんだ。言い訳だと思われるかもしれないけれど、かなりの確率で俺はそうだと踏んでいる」
　聞く耳持たず、微動だにせず新井林は、斜に上総をねめつけている。一呼吸置き、まずひとつ

めの誤解を解こうと決めた。
「桧山先生が俺のことを引き合いに出して病院に行けって言ったのは、新井林や佐賀さんが杉本のしていることでどれだけ傷ついているか、少しでもいいから理解してくれってことを言いたい、それだけじゃないかって」
「はあ？　なに女々しいこと言ってるんだ？」
　もう一歩踏み出した。近づいた。少しかがんで新井林に語りかけた。
「杉本だってしたくてしてるんじゃないんだ。どうしてもそう思えないから自分のしたいことをするしかないんだ。どうして男子連中がこんなに自分を嫌うのか わからないし、どうすれば嫌がられないですむか想像つかないんだ」　佐賀はるみと話をしたことを言うべきか迷い、やめた。「好きな人には必ず意地悪するん です」と、こいつの愛しい相手は断言している。でも、いくら口にしても新井林を意固地にさせるだけだろう。
「俺が今杉本にできるのは、どうすれば周りの人が嫌がらないですむか、そういう言い方を教えたり、佐賀さんが辛い思いをしないで杉本も傷つかないですむに はどうすればいいか、それを考えることくらいだ。俺だって頭が悪いしたぶん、新井林よりはうまくできないかもしれない。でも、せめてお前たちがむかつかな いようにするために、杉本をクラスから引き離すことくらいはできる。俺ができるのはそのくらいなんだ。だから」
　かばんを持ち替えた。右手を差し出した。
「頼む、杉本に情けをかけてやってくれ」
　手を取ってはくれなかった。鼻息をふっとかけるようにして返事が返って来た。
「情け、かよ。御託並べてるんでねえよ。なあにが『杉本だってしたくてしてるんじゃない』んだ？　『友だちになりたくて』だ？」
　新井林の瞳は一層凍り付いていた。石の下に残る雪のように、堅く、ぱさついていた。
「あのな、ずっと聞いてればあんた、あの女のことを隠れ蓑にして、好き勝手に言いたいことわめきちらしてるだけじゃねえか？」
　思わずひいてしまったのを見られてしまった。新井林の口元にかすかな侮蔑の表情が浮かんでいた。
「『杉本』をあんたの名前に置き換えてみろよ。要するにあんたがどうして清坂先輩や羽飛先輩におべっか使っているかを言い訳してるだけだろ。たまたまあの女がいたから、正義の味方面して俺を開いてにべらべら言いまくってるだけでな。けっ、やり方汚ねえな」
　割り込めず、言葉が出なかった。
「せめてやるなら、精一杯あの女をかばえばいいじゃねえか。本当は惚れまくってるから、守ってやりたい、守ってやりたいから俺につっかかる。それだけのことじゃねえか」
　息継ぎをしている。また言葉を挟もうとしてみた。でもだめだ。咽に硬いものがつまったようで声が出ない。勝手に身体が震えるだけだ。
「俺だって惚れた女がいる。あんたが杉本をたまらないほど惚れぬいているっていうんだったら勝手にしろってんだ。俺とは関係ねえよ。だがな、俺と佐賀はあ の女のせいで六年間、ひどい目にあわせられてきた。それも事実だ。だから戦うそれだけだ。あの女のせいで町を追い出された

奴だっている、悪口言われて学校 辞めさせられそうになった先生だっている。これ以上俺の大切な奴をあの女の餌食になんてされたくないだけだ」
「わかってるだから」
　余裕があるのは明らかに新井林の方だった。杉本をかばおうとしたいのに、自己防衛本能の方がうごめき、言い訳したくなってしまう。そんなんじゃない、違うんだ、そう叫びたい。心臓の音も破裂寸前だった。一気に血が昇って死にそうだ。
「わかってねえよ。あんたなあ、自分でどんな顔して言ってるのかわかってるのかよ」
　――わかってるさ。だから。
　せせら笑う新井林の口元がゆがみ、攻撃のミサイルを放った。
「あんたは自分を清坂先輩の彼氏でいるってことで安全地帯作って、その上でのそのそあの女を守ろうとしてるってわけだ。たとえ俺がここで、あの女を許すっ て言えば、ほっとして清坂先輩といちゃつくんだろうな。今あんたが言ったみたいなことを清坂先輩たちに言って、『情けをかけてやってくれ』って訴えて、仲 間に納まろうとするってわけだ」

　どうして言い返せないのか。
　自分がしてきたことに自信がないからか。
　逃げ場がないからか。
　自分は曲がりなりにも新井林の先輩なのだ。いくらでも言い返して、それこそぼこぼこにしてやる権利がある。うまい言葉が見つからなくても、「先輩に対してなんだその態度は！」と罵るだけの権利はある。
　でも、それができない。
　――清坂先輩の彼氏でいるってことで安全地帯つくって。か。
　いまだにつきあいを続けている、一番の理由はそこにあると、気付かない振りをしてきている。
　いや、恋愛感情に疎いからごめんなさい、とごまかしてきていた。
　でも、すでに新井林の眼に上総の戦略は見抜かれている。
　自分の身を守るために、美里にも杉本にもいい顔をして、自分だけのハッピーエンドに持っていこうとしている。
　――そうだ、その通りだ。新井林、お前は鋭いよ。
「けっ、汚ねえな。あんたの顔、今にも泣きそうだぜ。こういう顔してたぶん小学校時代もすごしてきたんだろうな。本品山の浜野さんにも同じ顔して訴えてき たんだろうな。俺だったらあんたを息の根止めるほど殴りつけてやっただろうけど、あえて許してくれた浜野さんの恩も忘れてか。最低だなああんた。けどそれ とこれとは関係ねえよ。俺はただ、あんたがあの女を迷惑にならないようにしてくれたから殴ってもいいぜ、って言っただけだ。あんたが男だったらそのくらい の仁義は持ってるだろ。そっか、あんたは殴ることすら怖いのか」
　目が合った。逸らさずに力をこめてにらみつけられた。
　――こうなったら、破れかぶれだ。

　すべてをつぶしてやりたかった。目の前に並んでいる軽蔑の瞳を泥にまみれさせてやりたかった。
　冷静沈着なんてくそくらえだった。自分の知っている外国語のスラング……いわゆる「ファックユー」の類が何ヶ国語もの形で浮かんだ。
　座っている奴の襟に覗くグレイのネクタイ。すっかりたるんでいる。上総は片手で新井林の襟を握りこみ、ネクタイを引っ張り出した。少し顔の角度が持ち上がって、たこっぽく見えた。その顔にもう一度語りかけた。
「本当に殴られるつもりでいるのか」
　返って来た息は熱かった。
「あんた日本語わからねえのか」
　握りこぶしを見えないほうの手でこしらえた。
「殴られたら痛いんだ、そんなことされたいのか」
　完全に新井林の眼は軽蔑一色だった。
「気持ちいいんだったらマゾだろ」
「新井林、お前」
　――本当にこいつ、怖くないのか。俺は殴るかもしれないんだぞ。
　にやっと笑いとどめの一言。刺さった。
「そうこなきゃうそだな。あんた、いいかげん大人になれよな」
　対峙。しばらく静かな時が流れた。お互いの息で水蒸気が顔にかかった。
　――大人になりたい。最低だ。

　大人になれと何度も言われつづけてきた。本条先輩も、菱本先生も、両親もみな。
　精一杯その形に合わせようとしたけれども、相変わらず自分は「あんたガキなんだから」のままだ。
　貴史も美里も南雲もこずえも、そして新井林も佐賀も。
　みな、年齢相応の「大人」として歩いている。上総や杉本が激しく嫌悪するものを「そんなのあたりまえじゃない」とばかりに流している。
　そんなものたいしたことじゃないじゃない。どうして立村くんそんなこと気にするの？　梨南ちゃん、好きになってくれる人いるんだったら別の人にすればい いじゃない。こんなこと気にするからあんたはガキだっていうのよ。まったく新井林を認めることできないんだから、お前はガキだっていうんだよ。あんた、い いかげん大人になれよな。
　上総が身を守るために人の顔色ばかりうかがっているのと反対に、杉本は自分を守るための鎧を身に付けてぎりぎりのところで戦っている。本当は上総も同じ ことを言いたかった。本当は上総も杉本と同じように、自分を「ガキ」扱いする奴らに噛み付きたかった。でもそんなことをしたら、杉本と同じように敵だらけ になることがわかっている。だから耐えていた。そうすれば大人になれると思っていた。
　――けど、殴ったら痛いに決まってる。苦しいに決まってる。惨めに決まってる。

　目の前の新井林が顔をゆがめる場面が目に浮かぶ。
　――こんなこと考えないで殴れる奴が大人なのかよ。
「ほおら、やれねえのかよ」
　ネクタイを握り締めたまま上総は片膝ずつ付いた。
　王子にひざまづく、騎士のように。

「ああ、できないさ」
　うつむいた。ネクタイから指を滑らせた。完全に指がこわばった。
「お前の勝ちだ。新井林。最初から勝負はついていたのにな」
　新井林はちらっと上総の指先に目を留め、思いっきり鼻を鳴らした。やんちゃだが、凛々しく誇り高い王子の姿が上総の目には映っていた。

「よおし、わかったそこまでだ。立村、新井林」
　条件反射で身体が浮いた。聞き覚えのある声だった。
　新井林も一緒に上総の頭をじゃまっけにしながら顔を上げた。
「本条先輩……」
　一礼しているのは新井林。上総はじっと、白いジャンバー姿の本条先輩を凝視した。
　息が白い。走ってきたのだろう。裾に泥はねが残っていた。いつもかけているめがねがなかった。いつもに増して凄みが、顔の陰影によく出ていた。かっこいい、と思う表情だった。何を言いたいのかはわからない。つま先で足下の石を蹴飛ばした。上総の目を見て、一歩近づいた。
　――なんで来るんだよ、先輩。
　口を開きかけた瞬間、視界が黒く染まり、息が詰まった。片ひじをついて倒れそうになるのを必死にこらえた。手に泥がついて、しみた。初めて本条先輩に手をあげられた。
　本条先輩が上総を無視して新井林に優しい笑みを浮かべたのをぼんやり見つめていた。
「新井林、大丈夫か。しんどかったなあ」
「何でもねえっすよ。たいしたことじゃねえ」
　おだやかに本条先輩はねぎらっている。こんな風に柔らかく上総を見つめてくれたことが、十一月以降一度もなかった。冷たく罵るか、嫌味を言うか、新井林と比較するかのどちらかだった。
　――どうせ、そういうことか。そうだよな。何俺も期待してたんだか。
　突然こみ上げそうになった。まずい。壊れる。立ち上がった。
　本条先輩は上総を厳しい声で呼び止めた。
「いいか立村。お前がこれから何をすべきかは、わかってるんだろうな」
　答えたらまた醜態をさらすはめになる。唇をかんだ。答えられなかった。
「全く、だからお前はガキだっていうんだ。いつまでも甘ったれるんじゃねえ。悔しかったら新井林が納得するように完璧に片をつけてみろ。それができるまで、俺はお前と一切縁を切る。聞いてるのか」

――最初からそうしてくれればよかったんだ。何を俺は期待してたんだろう。
風がさっき叩かれた頬に染みた。片頬だけが腫れた感じだった。膿がたまっているようだ。本条先輩と、次に新井林を見下ろした。目が合った。動揺など消えたままの、堂々たる男のままで座っていた。
――ふたりとも、完璧な男なんだ。俺なんかとは違う。
「わかりました、失礼します」
背を向けたとたん、背中に氷のシャッターが下りたような気がした。茶室の門を走り抜けた。
「おい、りっちゃん」　すれ違う男子女子の中に、たぶん南雲が混じっていたのだろう。軽やかな声が聞こえた。
――なぐちゃん、悪い。今日だけは気付かなかったふりさせてくれ。
なにかが緩んだ。自転車置き場にたどり着いた時にはもう、押えられずにうつむくしかなかった。曇る視界の中で上総は、しゃがみこんでいた本条先輩と新井林の姿を肖像として見つめていた。
――完璧すぎるってわかってるだろ。勝ち目ないって。

その１０　疾風怒濤に揉まれて

　コートを着たまま埋もれていた。部屋の中で散らばった本、本、本。
　整理整頓に神経質な上総がこれだけ散らかしたのは初めてだった。
　電気をつけずに、暖房も入れずに、ただものを投げつけていた。
　本棚の中はほとんどからになった。表紙が広がったまま落ちている文学全集一冊、すっかりページが折れているものもあるだろう。知らない人が見たら、大地震の直後と思うかもしれない。
　泣くだけ泣いた。わめくだけわめいた。身体の中に嵐が吹き抜ける。
　カーテンを締めたまま、空気の凍った中でひとり。

　もうだいぶ時間が経っているのだろう。父はまだ戻ってきていないだろう。母の眼がないだけまだましだ。いきなり「上総、なによその顔、また誰かに泣かされてきたわけ！　まったくだらしないわねえ。もう少ししゃきっとしなさいよ、いくじなしが！」と怒鳴られることもない。
　上総は床に投げつけた本の上に身を横たえた。
　カーテン越しにかすかな街灯の光が刺さる。
　一年の春だったか、本条先輩が泊りにきてくれたことがあった。
　やはり、父が出張でいない夜だった。
　その後何度か同じことの繰り返しで、いろいろ悪さもした。酒、エロ本、合成着色料のおやつ、本物のコンドーム、ビデオテープ。すべてに触れたわけではないけれど、本条先輩の手ほどきでほとんど初体験させてもらった。
　今のように、散らばった状態ではないから、十分横になるスペースもあった。レコードもいろいろかけた。上総の知っていることと本条先輩の経験しているこ ととは天地の差があり、いつのまにか聞き役に回っていた。黙っていると何度も頭を小突かれて、「全くお前はガキなんだから、ったく、俺がいなくなったらど うするんだよ」とささやかれていた。
　――いなくなったらなったでかまわないってさ。どうせ本条先輩にとって俺はそういう存在でしかないんだからさ。
　手の甲で何度も眼をこすり、上総は本の表紙に頬をつけた。
　本は大切にあつかわねばならないと母に口うるさく言われている。
　――かまやしない。たかが物じゃないか。
　猫だったら爪とぎにしているかもしれない。
　研がないかわりに、かみつこうとしてみた。さすがにばかげていてやめた。
　ひとりで暴れていた時は寒さを感じなかった。横になると一気に汗が冷えて冷たくなってきた。コートを着てても寒かった。無理やり起こされたような気がし た。もう一度ぺたりと座り込んだ。灯をつけたらいやおうなしに片付けに入らねばならない。もともと部屋が散らかっていると身体が勝手にお片づけマシーンに はや代わりしてしまうのだから。

　家の中で両親に暴力をふるおうとしたことはない。ましてや友人や先生になんてとんでもない

。新井林に言われたような、殴り合いなんてほとんど経験がなかった。したくないことをしなかったと割り切れればよかったのかもしれない。
　でも、自分の部屋に戻った瞬間、何かが壊れた。自制していたはずの感情が押えられなくなった。ただひたすら手当たり次第ものを投げつけ、わめき散らしていた。日本語だけではなかった。さっき新井林に口走りそうになった各国のスラングを、口汚く罵っていた。
　怒鳴り疲れるまで本を叩きつけ、気が付けばこの有様だ。BR>　時間はかなり、たったのだろう。
　上総は右手に触れた本を膝に乗せ、腹ばいになりうずくまった。
　何も見たくはなかった。

　もう、評議委員長交代は三月あたりに発表されるだろう。一度は噂も流れていたのだ。それほど問題なく話はつくだろう。上総が覚悟を決めれば、本条先輩もこれからすぐに手を回して、新井林次期評議委員長を立てるための準備に取り掛かるだろう。
　――これから俺はどうなるだろう？
　曲がりなりにも十月の「次期評議委員会お披露目」を学校祭、合唱コンクールで終わらせて、あとは正式決定の三月を待つばかりのはずだった。上総の知って いる限り、間の半年間で次期評議委員長は一通り仕事を覚え、二月中から行動を開始する。同時に、目星つけておいた一年をひとり選んで、自分の右腕にすべく 行動を共にする。
　――別に、無理に杉本をそうしたかったわけじゃないんだ。
　杉本梨南が評議委員長として不適格だと気付いたのは、九月に入ってからだった。杉本の小学校時代やクラスでの状況、および、新井林、佐賀との折り合いな どを耳にするにつけ、共同作業のできる人間ではないことを感じさせられていた。もちろん上総の言うことだったら、一言二言文句は言ってもすぐに手伝ってく れるだろう。二、三年女子たちが指示したことだったら無条件で手腕発揮するだろう。きっと女子だけの委員会だったら活発に動いてくれただろう。
　でも青大附中評議委員会は、男女が一緒だ。
　男女ともに動かなくては、船が出ない。
　杉本が船のこぎ方を覚えない限り、彼らは手伝ってくれはしない。
　口には出さなかった。上総は別の評議委員長候補を探さなくては、と考えていた矢先だった。
　――新井林でもいいけど、杉本ともっとうまく付き合いしてもらえればあきらめもつくよな。
　上総なりに考えていたのは、新井林と杉本を仲直りさせて、改めて評議委員長を分け合ってもらうことだった。頭脳的にはふたりともイーブンだ。行動力を発 揮すると強い新井林と、計画を綿密に立てて実行させるのが得意な杉本。もしこのふたりがコンビを組んだら、さぞや強力な組織になるだろう。特に最近は「部 活最優先主義」が謳われつつあるこの頃だ。次期バスケット部キャプテン兼評議委員長。これぞ教師連中を黙らせるにはふさわしい。
　もっというなら、杉本はひそかに新井林へ好意を持っているはずだった。
　佐賀はるみに言われるまでもなく、杉本の行動がすべて「愛の裏返し」だと見抜いていた。男としては、どんなに苦手な子であっても、愛情をもたれていたら ついふらっとしてしまうんでは

ないか、と安易に発想していた。上総自身も正直なところ、付き合い相手の居ない状態で、顔を知らない女子に告白されたらふら ふらっとするに違いない。男の本能ってそういうもの。
　――甘いよな、俺もな。
　世の中には、どうしようもなく嫌悪感溢れる相手が存在して、どんなに土下座して謝られても受け入れられないものがあると、知っていたくせにだ。自分がで きないことを、どうして新井林に求められただろう。杉本の方がまだましだ。杉本は自分を意識していないだけで、本当は新井林、佐賀が折れてきてくれれば素 直に言うことを聞くだろう。本心は恋、そして友情なのだから。誰も気付いていないのだろうが、杉本はただ、一途過ぎるだけなのだ。ひたすら人を思えば思う ほど、裏返っていく。憎しみや嫌われ言葉を口にすれば、人は寄ってきてくれる。叩いても罵っても近づいてきてくれる、離れない。そう思っているだけなの だ。
　――佐賀さんは鋭いな。
　佐賀の言うとおり、杉本はまだ赤ちゃんだ。どうしようもなく子どもだ。
　だから佐賀は懸命に杉本をあやそうとしているのだろう。見下すというよりも、母性愛だろう。良心的に受け止めようと思う。赤ちゃんが母親と対等になるこ とはできない。どんなに同じ立場で話をしたかったとしても、最初から立った土俵は違っているのだ。しかたないことだ。上総が口すっぱく「もう勝負はついて いる」と口にしたのはそういうことだ。

　どうしようもない嫌悪感。
　存在するだけで吐き気がする。
　ゴキブリのような存在。
　杉本はそこまで嫌われていることを、たぶん自覚していない。
　心の奥で、いつかふたりが頭を下げて
「杉本、ごめん、俺は決してお前を嫌いでなかったんだ」
「梨南ちゃん、許してね。私を守ってくれた大切な友だちだから」
と謝ってくれるのを夢見ている。
　なんて惨めだろう。決してそういう夢のような結末なんて来ないって分かっているのに。杉本が懸命にひざまづいて頭を下げ、「許してください。私はすべて を壊しました。もう一度、私を好きになってください」と言わない限り、受け入れてもらえない。いや、ほとんどは受け入れてもらえないだろう。杉本の愛情表 現は、新井林や佐賀にとって憎しみや軽蔑を生むだけのことだったのだから。謝って許されるなら、警察なんていらねえよ、てとこだ。

　杉本を傷つけないようにして、新井林や佐賀を納得させた上でどうすれば、平和に収まるのかわからなかった。上総は自分の持つ能力をすべて発揮して走り 回ったつもりだった。考えられることはすべて手を尽くしたつもりだった。でも、本条先輩には縁を切られた。新井林には鼻を鳴らされた。結局は、自分のひと り相撲で終わってしまった。

「どうせお前、前からそうなるだろうって思ってたんだろ？　なあ、いつもそうだろ。悪いこと

、悪いことを先回りして考えておけば、いつ最悪の事態に陥っても落ち込まないですむもんな。本を叩きつけるだけですむもんな」
　いつものように、耳に響く影の声。額を床につけてさらに聞いた。
「本条先輩にいつも、『お前ガキだからなあ』って言われるたびに、ぐじぐじ悩んでいたのはどこの誰だったかな。一年の時は仕方ない、って思ってたけど、二年になってからも新井林たちの前でそう言われると、やっぱ堪えるよなあ」
　一種の愛情表現だとはわかっているつもりだった。誰よりも可愛がってくれて、どうしようもなく苦しい時は自然に助言をしてくれた。美里に告白され、つき あい方について悩んでいた時も、本条先輩はすぐに背中を押してくれた。心ない噂でいろいろ傷ついていた時も、本条先輩は何も言わずに自分の側において、次 期評議委員長候補の勉強をさせてくれた。
　――この人みたいになれれば、きっと俺は認めてもらえるはずだ。
　そう思って毎日、全身アンテナ状態で走り回ってきた。
　本条先輩の読んでいる雑誌や本、音楽やビデオ、すべてを教えてもらって後追いして読んだ。わからないところだらけだったけど、きっといつかわかる日がくる、そう信じていた。
　――完璧な評議委員長になれれば、きっと本条先輩は俺を認めてくれる。
　命綱だった。

　本条先輩が、家庭の事情で青大附高に進まず、公立のトップ高校青潟東に進学を決めたと知ったのが、七月の末だった。
　スケベ話でしばししょうもないことをさらけだしたりしていた。その頃からやたらと説教くせが、菱本先生ばりになり始めていたのは気になっていた。特に上総に向かって、
「お前、二年の連中とうまくやってるのか？」
としつこく尋ねられるのに閉口していた。
「二年とうまくやれよ。あいつらの『あれ』のサイズくらい測らせてもらえよ」
とからかわれてむっときたりしていた。当時上総は、同学年の野郎連中と一線引いた感じで付き合っていたからなおさらそういわれたのかもしれない。二学期以 降はだいぶ、軽い感じでしゃべることができるようになったけれども、それも本条先輩の命令があったからこそ。本条先輩に「ああしろこうしろ」と言われない 限り、自分のしたくないことは決してしなかっただろう。上総に命令できるのは、本条先輩ただひとりだった。本条先輩が「大人になれよ」と言ったから、上総 は必死に背を伸ばそうと努力した。本条先輩のように一年たちを手なづけようと頭をひねった。新井林といい関係を作ろうと努力した、つもりだった。
「なあに、要するにそれは『つもり』だったってだけだろ。馬鹿だな。お前、新井林なんてほんとはしゃべるのもいやだったんだろ。いいかげん認めろよ」
　――だから認めてるじゃないかよ！
　自分で自分をいじめて何になると、本当に思う。でも自分の身をかじらずには入られない。
「お前はもともと立村上総でしかありえないし、本条先輩みたいにはなれない奴なんだって、もっと前から気付いていただろ？　クラスで相変わらずお高く留 まって、性欲なさげな顔を通して

いるのも、やたらと難しい本を読んで踏ん反りかえってるのも。本当の立村上総はどうしようもなく泣き虫で、ちょっとしたこ とですぐ傷ついて、大好きな先輩に嫌われたら人生が終わったみたいに嘆き悲しむ、女々しい馬鹿野郎だってな。全く、見てて情けねえよ。いくら努力して背伸びしたって、お前の背は伸びないんだって、いいかげん認めろよ」
――だから認めてるだろ！　わかってるって。
耳をふさいだ。妄想だと分かっていても、打ち消せない。咽の奥から耳栓代わりの声を出しうなった。「新井林にも言われただろ。所詮お前は自分の身の保身 ばかり考えてる奴だってな。影でびくびくしながら、清坂、羽飛のふたりにくっついているってわけだ。いつ自分がハブにされるかもしれないとびびりながら な。おい、聞いてるのかよ」
――聞いているって。だけどそれがなんだっていうんだよ。俺だってこの学校で生きていくためにはそれしかなかったんだって！
「じゃあさ、なんで杉本梨南をあそこまでかばうわけだ？　本条先輩にもずーっと聞かれてただろ？　他の女子たちからも言われただろ。清坂さんと付き合って いるくせに、なんであそこまでってな。あの子をかばいすぎたら、お前どうなる？　評議委員長を取られるだけならまだしも、今度はお前自身がもとのいじめら れっ子に戻るかもしれないんだぞ。うざったい女のことばかり味方して、変態だとか言われてな。どうしてあんな女を守るんだ？」
――それは、簡単だよ。
自分を攻め立てる影の声にはっきり返事ができたのは、これが最初だった。上総はゆっくりと身を起こし、はっきり、自分の声でつぶやいた。
「本当は俺がしたかったことを、している相手、守ってどこが悪いんだ！」

通信がぱたりと途絶えた。完全にひとりだった。
上総は座り込んだまま、影の声に向い、心臓の奥で答えた。

――ああわかったよ。お前らがいう普通のことを俺も杉本もできないんだ。普通の連中が出来ることを俺はむかむかして何にもできないんだ。それが悪いか。 でも悪いんだな。杉本みたいに、自分を受け入れてくれそうな手を全部引きちぎるように、俺だってクラスのうっとおしいもんを全部縁切りたいとおもったこと だってあるさ。でも、そんなことしたら俺が作ってきた場所を全部取られるってわかってる。だから猫を被ってるさ。でも、杉本は一度も猫を被らないで、ただ まっすぐ走って引っかいている。どんなにそうしたかったかわかるかよ。俺だってそうしたかったさ。尻尾と耳をつけたまま走り回りたかったさ。でもそれが叶 わないならせめて、杉本を守ってやりたいと思うことのどこが間違ってる？
たぶん、間違っているんだろう。自問自答して続けた。
――そうだよ、間違ってるよ。お前らはみな、自分らの『普通』に邪魔しなければ、普通じゃなくても許してくれるんだよな。わかったよ。評議委員長なんてくれてやる。

評議委員長の座へのこだわり。

指名された夏休み以来、本条先輩のようになろうと決めていた。
思いつめていた氷柱のようなものが、ぽきんと折れて消えた。

――本条先輩、先輩の望む通り、次期評議委員長を新井林にすることに決める。俺をどうするかは本条先輩が決めることさ。そんなのはどうだっていい。ただ 俺の感じ方や杉本の思いを、無神経に切り裂くことだけは許さない。俺は俺の感じ方を忘れやしない。杉本を無理やり土下座させて仲間に入れさせようなんてさ せやしない。自分で望んで変わろうとしない限り、他人に手なんて出させはしない。感じ方を同じくできないってことで罵られたり馬鹿にされるなら謹んで受け るさ。

なぜジーンズが嫌いなのか、なぜオペラが好きなのか、なぜバラエティ番組を見るのが苦痛なのか、なぜささいな言葉が耳に突き刺さってくるのか。どうして「付き合い」をする時に恋心が沸かないのか。
理由がわからなかった。今でもわからない。
そういう自分が悪いんだと思い込んできた。必死に直そうと思ってきた。
でも、杉本は周りを蹴散らしながら、自分の感じることばを守りつづけている。やりすぎで、このままでは成敗されることが目2見えているのに、それでも戦 いつづけている。上総がやろうと思ったらできたことだけど、あえて放棄してきたことばかりを、杉本梨南はしてくれている。
所詮お前たちふたりはガキだから、と言われるだろう。
自意識過剰と笑われるだろう。
――他人様の迷惑にならないようにはするさ、けど。
――感じたことばを奪わせはしない。

影の声が消えた後、上総は立ち上がり灯をつけた。
闇の中では意味ありげな山々に見えた床も、光のもとではただのわんぱく坊主がおもちゃを散らかした後と同じだった。しばらく見下ろしているうちに身体に 冷えが襲ってきた。寒い。すぐに暖房のスイッチを入れた。温風が回り始めたと同時に、「お片づけマシーン」化してきた自分がいた。
――とにかく片付けることにするか。今度うちの母さん来た時には、本を汚したとか痛めたとかで文句言われないといいな。
明るい部屋の中で本を並べ直している間、上総は明日の案をもう一度考え直すことにした。

本の被害は幸いわずかですんだ。なんとか生活できる状態まで持っていき、制服のまま食事準備に取り掛かろうとした。時計を見た。ついでに居間を覗き込み絶句した。
「上総、落ち着いたか」
「父さん、いつ帰ってたんだよ！」
すでにリラックスした格好で、しかも風呂あがりらしく髪の毛が濡れている。タオルを肩にか

けて父がテレビを観ていた。もちろん、部屋の暖房はがんがんついている。湯冷めの心配はない。
「もしかしてもう、風呂、焚いてたとか」
「当たり前だ。もう十二時近いぞ」
　慌てて時計を見直す。六時くらいだと思っていたが、完全に時間の感覚が狂ってしまったらしい。六時間近く、部屋の中にこもっていたことになる。
　落ち着いたか、と尋ねてきたってことは、落ち着いていない状態を知っているってことでもある。恐る恐る上総は父の表情を伺った。
「さっき、電話が二本入っていたぞ」
　知らない。電話が鳴っていたらすぐ気付くはずだ。思わず首を振った。
「電話の音聞こえなかったけど」
「一本は難波くんからで、明日連絡くれとのこと。もう一本は、南雲くんと名乗っていた」
「どうして呼んでくれなかったんだよ！　部屋に俺が居たことくらい気付いてたよな」
　父はにこりともせず、静かに答えた。
「話せる状態じゃなかっただろう」
　気まずすぎて何もしゃべりたくない。ありあわせのご飯に卵をかけて書き込んだ後、大急ぎで風呂に入った。すっかりぬるま湯状態。風邪を引きそうだ。お湯を注ぎ足しながら湯船で一通り考え直すことにした。

　評議委員長うんぬんかんぬんの問題については、結局本条先輩が決めることだからどうでもいい。おそらくひと悶着あるだろうが、そんなのも知ったことじゃ ない。一応は三月一杯まで、「立村次期評議委員長」という体制が続くだろうから、それまでにやりたいことをどんどん進めて置こう。四月以降新井林に取られ たら、それはその時考えればいい。
　新井林の納得がいく決着。本条先輩の要求だが。
　今まで上総は、杉本を中心に物事を考えていた。杉本にあわせてふたりがうまく動いてくれるよう頼み込んでいた。もちろん杉本を説得したりもしていたけれども、どっちつかずのままだった。

　発想を転換して、新井林を中心にしてみたらどうだろう？
　単純明快、暴力的なところもあるが、先生や同学年からは評価が高い。評議委員の中では二年と相性が悪い以外、特別に問題があるわけでもない。なによりも 「青潟大学附属中学スポーツ新聞」を無断発行し、とうとう学校内に「体育部重視」の動きが目立つようになったこと。佐賀はるみのためにならどんなにからか われても態度を変えないところ。何よりも先生たちから高い評価を得ているところ。他の一年評議連中を見るにしても、これほど完璧な行動の出来る男はそうい ない。
　新井林と対立しているから今はいざこざも目立たない。問題は来年以降の杉本の居場所だ。上総たちの代が現役のうちはよい。新井林評議委員長体制に進んだ 段階で杉本はもう、敗北者とし

ての扱いを受けることになるだろう。味方も誰もいない状態で。さらに、杉本の性格上、個人的感情を無視して新井林に協力する とは思えない。新井林が妥協案を出せば別だが、杉本の方から腰を折ることはよほどのことがない限りありえないだろう。また、他の評議連中も杉本を受け入れ るだけの余裕はないだろう。
――要は、新井林の迷惑にならないところで固まってろってことだな。
――眼に入らないところにいれば、何をしても平気ってことだよな。
ごもっともだ。新井林も、佐賀はるみも言っていたではないか。
――それなら、そのご希望かなえてあげようか。

上総は湯船のふちに頬を載せて、横目で鏡を覗いた。自分の瞳でないみたいだった。微妙にゆがんで残酷そうに見える。
一風呂浴びると、今度こそ落ち着いた。南雲が電話をかけてきたというのは、やはりすれ違った時になにか気が付いたのだろうか。まさか涙ぐんでいたところ を見られたとか言わないだろうか。本条先輩と後で顔を合わせてすべてばれているからなんて言わないだろうか。すでに明日の朝、クラス全員に上総と新井林と の情けない決着が情報として流れているなんて言わないだろうか。
影の声に罵られるのはこういう時だった。
――そんなの、どうでもいいさ。
もう一度自分の部屋に戻り、闇の中で眼を凝らした。
いつ首を切られるかはわからない。しかし来年の三月までは上総自身も次期評議委員長としての活動ができるはずだ。半年あれば十分だ。
――俺と、杉本の逃げ道はある。

睡眠はかなり削られた。かろうじて遅刻すれすれでもぐりこみ、急いで教室に入った。
「あ、りっちゃん、おはよ」
特段悪口が飛び交っている様もない。南雲にどう声をかければいいか考えていたけれど、顔を見たとたん忘れてしまった。挨拶交わすだけだ。
「昨日、うちに電話くれたんだってな。ごめん、出れなくて」
「いいよいいよ。それよかさあ」
いつものようにカセットテープを差し出された。前にダビングを頼んでいた奴だった。
――よかった、気付いてないな。
上総はありがたく受け取り、ポーカーフェイスを通すことに決めた。
たぶん本条先輩とも顔を合わせてないようだし、新井林との対決は誰にも気付かれずにすんだようだ。しかしなんで本条先輩があの場に現われたのだろうか？　新井林がすでに話していたのだろうか？　上総は一言も話していないし、新井林が話をしない限りはばれないはずだ。
よくわからない。本条先輩に張られた頬が少しいたんだ。膿が残っているのかもしれなかった。

「ところでりっちゃんは、冬休みどこか行ったりするんか」
「しない。ずうっと、評議委員会のビデオ演劇撮影に費やす予定」
　口に出して思い出した。そうだ、南雲以外にも電話もらっていた。評議委員同士でそろそろ話をまとめて一年に意見を請わねばならないことを。この辺は二年 だけで話を進めればいいけれど、冬休み前には片付けておきたかった。いつどうなるかわからないのだから、できることだけでも早いうちにだ。
「じゃあ、そろそろ頼もうかな。衣裳のこととか」
「まかしておきなさい！　早く台本くれると助かるなあ」
　上総は簡単にまとめておいた衣裳の内容を南雲に渡した。これでひとつ、することが終わった。
　次だ次。

　時間がどんどん過ぎていったけれども、誰も上総に対して意味ありげな視線を送る人はいなかった。ありがたかった。たぶん新井林と喧嘩して精神的なぼろ負けを喫したことはばれていなかったのだろう。　唯一の通行人、南雲が何も言わないのなら、たぶんそうなんだろう。

　昼休み、いつものように図書館へ寄ろうとしたが、本条先輩とその仲間たちが入り口付近のテーブルで騒ぎまくっているのを聞きつけ、入るのをやめた。本を借りたり返したりするのは急ぎじゃないけれど、昨日の今日で本条先輩と顔を合わせるのは、やっぱりいやだ。
　――どうせ、俺と縁を切るって言ってたもんな。
　きびすをかえし、次の行動に出ることにした。
　本条先輩よりも動かしやすい駒の彼に会った。

「桧山先生、今、よろしいですか」
　英語科の机が集まっている場所まで行く。期末試験の採点関係も終わっているせいか職員室の中も空気が和らいでいた。単に空気が暖房の熱気で息ぐるしい。 桧山先生はひとり、教科書サイズの写真集を開いて眺めていた。天文学関連の本らしい。ちらっと見た感じだと、英語の説明文がびっしりだった。
　　上総の方にちょっと気まずげに咳払いし、頬の上だけ笑った。
「立村くん、久しぶりだなあ」
「先日お借りしたものを、返しにきました」
　心なしか、他の先生たちの席はだいぶ空いていた。別に先生同士で仲間外れにすることもないだろう。上総はすばやく封筒から、黒表紙の卒論を取り出した。
「どうもありがとうございました」
「読んでみてどうだった、ご感想は」
　冷やかすように尋ねる。素直に言うこともできない。まさかこれが、全部担当教授の講義や論文の丸写しじゃないかってつっこむなんて、さすがに中学生の上総にはできなかった。

「大学って、勉強、大変なんですか」
　まずは話を逸らした。
「いや、入ってしまえば楽だぞ」
　――こんないいかげんな内容でも卒業できたのかよ。
　決してハーディーの「テス」という作品が読みやすいとか、はまって抜けられなくなる「砂のマレイ」みたいな内容だとは思っていない。文学は文学だ。ある 程度歯ごたえがあって当然。好き嫌いがあってあたりまえ。桧山先生は、この「テス」という作品に思い入れがあまりないのだろう。紋切り型の説明文と引用ば かりの内容は、上総も資料そろえれば一日で書き上げられそうな気がした。
　何も言わないでいるのも、卒論を理解できないせいだと誤解されるだろうから、急いで言った。
「あの、『テス』の後半だったと思うんですけど、クレアがテスのもとを離れてから、お金に困ってクレアの両親のうちに行く場面があります。あそこなんです けど、もしあそこで、テスがクレアの両親に会って助けてくださいといえば、すべては丸く収まったはずなんだなって、いつも思います」
「そんなところあったっけか」
　――読んでないよ、この先生。

　いろんな助けの手が差し伸べられようとしていたのに、女主人公テスは気付かずに通り過ぎてしまう。必死に自分の能力と努力で、与えられた苦難を乗り越え ようとしている。生活苦のためプライドを捨て、夫クレアの両親へ助けを求め出かけるが、クレアの兄たちの心無い言葉を耳にしておじけづき、結局会わずに 帰ってしまう。その後も何度か救われるチャンスがあったのに、テスはそれを掴むことができなかった。人をあやめて絞首刑になる前に、もっとなんとかできなかったのか、というのが上総の正直な感想だった。テス自身は前向きに必死に生きているのだからしかたないにしても、周りがもう少し手助けしてやればよかっ たのに。気付いてやればよかったのに。
「でも、助けを求められなかったテスの立場は、わからなくもないです」
　上総は言葉を切って桧山先生を見下ろした。もちろんにらみはしない。いつものように、こわごわとしたまなざしを保ちつづけた。お得意だ。
「たぶん、どうすればいいか、わからなかったんだと思います。つるし首になる前に、もっといい方法があることを、気付いていても自分ではどうしてもできなかったんだと思います。だから、そういう時は周りの誰かがなんとかしてやらないと駄目なんだって、思いました」
　先生と名のつく人々には非常に効果的なしゃべり方だった。十四年間生きてきてマスターした方法だ。通用しないのは上総の両親のみだった。
「そうか、誰かが助けてやらないとなあ」
「あの、それで」
　あらためて卒論を両手で渡しながら、上総は上半身をかがませた。耳を向ける桧山先生。近寄

ってみると、ひげが濃いことに気が付いた。
「お願いしたいことがあります」
　言葉にする前に上総は、思いっきり歯を食いしばった。
　杉本梨南の、上総を見上げた時の震える瞳がちらついた。星の光のように光って刺さった。
「次期評議委員長として今後のために、杉本を来年の評議委員から、外してもらえませんか」
　無言のまま、桧山先生は卒論の表紙をこつこつ叩き、何かを発しようとした。
「立村くん、それはどうしてだ」
　――つるし首にしたくないからだって。

　「テス」の例え話が全く通じていないようだ。この先生、「テス」のあらすじ、全部忘れていると思う。賭けてもいい。あえて上総は言葉を飲み込んだ。桧山先生の唇に少しずつ和らいだものが溢れだした。「やはり、評議委員会でも、杉本は扱いづらいのか」
　上総は答えなかった。無言で桧山先生に視線を送った。顔だけ小学生に戻ったような顔をして見下ろしつづけた。情けない顔を、いつしか必要な時に作れるようになった。わが身を守るための手段として、演じることができるようになった。隠れ演劇部評議委員会で覚えた技だった。
「そうか、そうだよなあ。新井林ならともかく、杉本は上に立つものとして、迷惑だよなあ。わかったよ。まだ先のことだが、考えておくよ」
　分かり合った男同士の会話、と言いたげに微笑んだ。
　本人だけがそう思い込んでいるだけだとも気付いていない。
　上総はもう一度礼をした後、職員室を出た。
　――切り札だ。

　涙で顔を汚すだけ汚し、本に埋もれてスラングで罵りつづけたあの夜。
　真っ暗闇の中でも、カーテン越しの街灯の灯ははっきりと浮かんでいた。
　部活動と違って委員会活動は、クラス男女各一人と制限され、毎回確実に選ばれるという保証もない。　結城先輩と本条先輩の尽力により出来上がった「青大 附中委員会最優先主義」の評議委員会だが、だんだんほころびた部分が見えはじめている。新井林が強引に発行した「青潟大学附属中学スポーツ新聞」が委員会 を無視して運ばれ、全校のものになろうとしているのがひとつの理由だ。なによりも委員会の辛さは面子が必ずしも毎回同じではない。部活動のように好き勝手 にやめるわけにもいかない。いくら次期評議委員長を指名されても、クラス改選時の諸事情で落とされるとも限らない。来年、Ｄ組の評議委員が立村上総・清坂 美里のコンビで決まる可能性は高い。しかし絶対ではない。もし上総が何かとんでもない悪さをしでかして、クラス男子の信頼を失ったとしたら評議に選ばれる ことはまずにだろう。
　委員会とは、足場のゆるい場所に立った、不安定な場所だ。

　もし、このまま一年Ｂ組の評議委員が杉本梨南と新井林健吾のままだとしたら。
　クラスは阿鼻叫喚だろう。新井林はともかく、杉本への信頼関係はゼロに近い。

しかも現在は桧山先生が男子連中の絶対的味方としてついている。杉本に逃げ場所はない。
仮に女子たちの圧倒的支持で評議に選ばれたとしても、クラス運営には支障が出るだろう。もっというなら、女子たちまで桧山先生が懐柔した場合、純粋に杉本に付こうとする子がどのくらいいるだろうか。
人間は所詮自分の身が可愛い。同じ「佐賀はるみいじめ」の共犯者として扱われるくらいなら、すぐに寝返るに違いない。そうなった場合、クラスの代表たる評議委員に、杉本が選ばれる可能性は究めて低い。

また、このまま杉本が伝統にのっとり二年以降も新井林と評議に選ばれたとしても、修羅場は避けられない。かなりの可能性で新井林健吾が評議委員長に任命 された場合……もちろん新井林が評議委員から外れる可能性もなきにしもあらずだが……、杉本が協力するとは思えなかった。上総が評議委員長として最後まで 勤めるならまだしも、現在は新井林が四月から任命される可能性だってあるわけだ。　そうなった場合、杉本梨南は冷静でいられるだろうか。
裏切りを知り、佐賀はるみに対してしたことを繰り返す可能性がある。
評議委員会にとってはマイナスな行動を、自分の真実によって行うかもしれない。
気持ちはわかりすぎるほどわかる。そうしないと自分が壊れてしまうから。お前には価値がないと罵られたら、どうやって自分を守ればいいのだろう。必死に 杉本が鎧を身につけぎりぎりのところで戦ってきたことがわかるのに。でもそれは、評議委員会を守るためには許されないことだ。
立村上総が評議委員長として、これ以上の混乱を避けるためにはどうすればいいか。
杉本へのいとおしさ、新井林への惨めな気持ち、すべてとっぱらい、駒として観るならば、本条先輩だったらどうするか。結論はすぐに出た。
――引き離す。これしかない。
簡単な引き離し方とは。
――圧倒的多数派の新井林を生かして、評議委員会にマイナスになるだろう杉本を捨てる。
裏の手を使い力技でやるのが本条先輩のお得意だ。
もう、逃げられないところまできてしまった。

ポケットに手を突っ込みながら、もう一度図書館に向かった。戸を開けた時目が合った。すぐに無視された。挨拶を受け付けないとの言葉通りだった。
仲間たちとはしゃいでいるところを見ると、たぶん期末試験の結果が良かったのだろう。
もう一度視線がかち合ったけれども、思いっきり跳ね除けた。会釈だけして本棚の影に隠れた。
――次期評議委員長としては新井林を中心に置け、という本条先輩の流儀に従う。でも。
上総は手帳を引っ張り出した。来年以降の各委員会長名がメモしてあった。住所と電話番号、学年、クラス、プライベートデータがすべて記入されている。顔を知っているのも知らない奴もいる。

――とりあえず本条先輩が下ろすと決断するまでは、次期評議委員長としての権限、とことん使わせてもらおうか。
早く動けばその分、付き合いが増える。付き合いが増えれば平の評議委員に戻されたとしても、繋がりは残る。繋がりのわだちが残っていれば、上総は杉本を連れてそこを渡って逃げられる。
――逃げ道はあるさ。

その１１　追い風に躓きかける

　残された猶予は半年だけ。
　――それまでは俺も評議委員長の顔していられるはずだ。
　どういう展開が待っているのかはわからない。本条先輩の胸三寸にかかっている。クラス評議に選ばれるだけならたやすい。クラスの連中に応援してもらえば すむことだ。委員長は外されても評議委員としては残れるかもしれない。でも、他力本願なやり方を期待したってしかたない。
　半年。期間を区切った。
　――それならまずは、さっさと動くか。
　他の次期委員長候補たちと連絡を取り、電話番号とクラスを控えてきた。
たぶん他の評議連中は知らないデータだろう。手帳にボールペンで清書した。控えにもう一ページこしらえた。

　普段よりも一時間早く学校に向かった。切り付ける風に顔を向け、ざくざくと自転車で切り裂いていった。学校に到着した時にはすでに、部活動関係の連中が ジャージとジャンバー姿でうろうろしていた。挨拶しつつ、まずはコピー室に向かい、ビデオ演劇用台本「奇岩城」の第二稿を製本した。二つ折りにして、一枚 一枚重ねていき、ステイプラーで留めた。ひとりで紙を折るのに集中していると、ひとり気配がした。
「立村くん、おはよ。手伝おうか」
　美里だった。白い手袋をコートのポケットにしまいながら、コート姿で入ってきた。
「暑いね、暖房効きまくってるって感じ」
「ごめんな、手伝い頼んでしまったみたいで」
　前もって昨日のうちに、美里へ電話を入れ、製本作業を手伝ってもらうようお願いしたのだった。ひとりでコピー機と格闘していたら、いつまでたっても終わらない。その点、要領のいい美里が手伝ってくれると、労働時間が三分の一程度ですむ。
　コートを着たまま美里は、まだ一枚紙のままのコピー紙を、まとめて折り、ぱぱぱっとほぐした。もう一度丁寧に手押しの折り目をつけた後、もう一度束にした。繰り返し、あっという間に出来上がった。
「やっぱり早いよな。すごい」
　上総の持っている分もひったくられ、片がついた。あとは作業台にずらっと並べ、上から一枚ずつ綴じることができるようにまとめていった。一冊ずつ十字に 重ねてゆき、あっという間に今度はステイプラーで綴じ始めた。さすがに枚数が多くて、力が要りそうだ。ここでやっと上総の出番だった。美里を隣りに座らせ て、ひたすら大型ステイプラーと格闘した。疲れた。
「ごめん、俺ひとりだったらたぶんできないと思ったからさ。無理言って悪かった」
「立村くん、いいよ。こういうのはね、得意な子がやればいいのよ」
「清坂氏、ありがとう」
　まだ八時になるかならないか。二十分くらいここにいても大丈夫だろう。上総も美里の隣りに

直角になるよう椅子を持ってきた。出来たての台本を両手で捧げ持った。
「やっぱり、学校の中を使って撮影するの？」
「うん、やっぱり『奇岩城』だから。廊下でイジドール少年が格闘したり、走りまわったりして台詞を言ってもらえれば、あとは教室を一部屋借りるだけですむしさ。できるだけ楽に終わらせられるようにしたかったんだ」
　「奇岩城」の後半は主に、冬休み中の校舎を使用することに決めていた。できれば一月のお正月休みが明けたらすぐに教室を借りて一気に撮影を終わらせた い。家庭用ビデオとビデオテープ、あとはバッテリーくらいだろうか。どうせ台詞は紙に書いてその場で読み上げてもらう形式だ。暗記してもらう必要はない。 あとは冬休み明けにその他のシーンを適当に撮り、二月には完成させる予定だった。あとは結城先輩にビデオデッキを貸してもらい、とびとびで撮ったものを順番通りにダビングし、話が通るようつなぎ合わせてもらう。去年の「忠臣蔵」も同じ形で製作した。去年と違うところは、衣裳にも背景にも凝らず、ありのまま の教室や廊下を使用して、イメージを膨らませていく形を取っているとこだろうか。よく言えば「前衛的」「モダン」だし、悪く言っちまえば「手抜き」だろ う。

　内容については特別何も言わず、美里は一ページ、配役のページをまじまじと眺めた。
　まだ決まっていないので、役名が載っているだけ。下は空欄だ。
「私、ルパンの乳母なのよね」
　最後に出てくるキャラクターだ。怪盗ルパン最愛の乳母を今回あえて、美里にあてがった。出番をあまり増やしてほしくないという願望があったのと、やはり 周りの「立村ホームズの見せ場はラストなんだから、そこに清坂ちゃんがいないとしゃれになんねえだろう」という意見に押し切られたのが事実だ。勝手にしろ と言いたい。
「で、小春ちゃんがレイモンドで」
「ルパンが天羽、とＡ組コンビでまとまるってわけだな」
　ここだけの話、二年Ａ組評議コンビがそろそろ、お付きあい秒読み状態らしいという噂が流れている。関西ギャグマニアのＡ組男子評議がうらやましそうに上総と美里を眺めていたのは気付いていた。二年男子連中の間でも、
「そろそろあいつ行動に出るよな」
との観方が大半だった。
「いろいろあるよな、人間として」
　あまり触れず上総は自分の台詞部分を赤ボールペンで線引きした。
「衣裳考えないでいいから楽よね。立村くんはマント着ていればいいだけだし」
「出るのもほとんど、ラストの場面だけだからな。楽と言えば楽」
「私、立村くんに最後捕まってピストル突きつけられるのよね」
「清坂氏、『奇岩城』読んだことあったのか」
　意外に思えて問い返した。当然と言った風に大きく頷いた。
「頭を使う推理小説って大好きだもん。学校の図書館で大きい文字になってるので、ルパンや江

戸川乱歩とかは読んだのよ」
　――確かに、言えてるな。
　本の好みについては問わずにおこうと改めて思った。
「それはそうと立村くん、イジドール少年はどうするの？」
　決めておいたとおり答えた。
「イジドール少年は、新井林しかいないだろう。受けてもらえるかどうかはわからないけどさ」
　教室の後ろ、ロッカーの前。美里は手もとの台本に目を落とした。
　上総の筆跡で「青潟大学附属中学評議委員会・ビデオ演劇・奇岩城」とだけ筆ペンで綴られている。
「新井林くんかあ。いいかもね」
　言葉が重たかった。
「でも、杉本さんにはなんの役も振らないのよね。どうするの」
「どうするって」
　まだ桧山先生以外に、今後の評議委員人選について伝えてはいない。美里にももちろん口にしてはいなかった。曖昧に答えるしかなかった。
「杉本は、音楽担当と、あと台本の最終見直しをしてもらおうと思ってるんだ。やはり、構成関係は杉本の方が向いてるからさ」
　今回美里の担当が、ラストに登場するルパンの乳母役と衣裳関連なのは納得しているはずだ。もう少しいい役あげた方がよかったのだろうか。男装とかさせて。かなり不満が残る顔をしている。
「うん、それならいいけど、立村くん、おおっぴらじゃない私の担当、知ってる？」
「なんだよおおっぴらじゃないって」
　美里はぎりぎりまで上総の肩に近づいた。耳に吐息がかかるくらいだった。
「立村くんの愚痴を聞く役よ。担当だからね」
　――俺がそんな愚痴っぽいこと言うかよ。
　目の前にいる美里の、きりっとしたまなざしには文句を言えなかった。
「ありがとう、いざとなったらよろしくお願いします」
　愚痴をこぼしたくないからせかせか動き回っていた。立ち止まるとすぐ落ち込んでしまう。できるだけ考えないですむよう「奇岩城」準備に没頭した。もっと もほとんどの実務は二年男子評議連中が手分けしてやってくれている。上総がするべきことはその他、交渉ごとくらいだった。

　すでに桧山先生への話はつけてある。四月以降にちゃんと手を回して、杉本梨南をクラス選挙で落選させるように仕組むだろう。黙っていてもそうなるかもしれない。男子たちの圧倒的多数派および、女子の寝返り組の指示を得られれば、たぶんあっさり決まるだろう。
　確実なのは、杉本は確実に傷つくこと、一点だった。
　――あと半年のうちに、俺も動かないとな。時間が惜しいよ。
　案はある。たんとある。評議委員会という枠の中では限界が見えているかもしれないが、青大

附中にはまだまだ抜け道が用意されているのを上総は知っていた。
　――本条先輩の教えを二年間受けていたとこを見せてやるさ。

　三時間目前、職員室へチョークと教科書を持って行った帰り、生徒玄関を通り過ぎようとした。
　雪が降ってるっていうのに、グラウンドでサッカーやっていたらしい。ジャージ姿の青い集団がわさわさ駆け上がってきた。いきなり靴箱前のすのこでとんびを切った奴がいた。一瞬立ち止まって眺めた。見事な技に拍手喝采だった。
　やった相手の後ろからけげんそうな視線を投げている奴と、目が合った。新井林健吾だった。
　すぐにそらされた。思うところありか。雪まみれのスニーカーをめんどくさそうに脱ぎ、靴箱に放り込んでいた。どろんこの空気が玄関いっぱいに溜まっていた。
　上総は待った。じっと視線を送り続けた。
　濡れた手を振り払いながら新井林は上総の前に立ち止まった。
　話する気は、あるのだろう。
「あのさ、新井林」
「なんか用っすか」
　なんと新井林、丁寧語を使った。
　けたたましくのど元まで心臓の音が聞こえるがこらえる。搾り出した声でまずは言うべきことを伝えた。
「この前は、悪かった」
「別にあやまってもらうようなことはないけど」
「もう一度だけ、頼みたいんだ。図書室に来てもらえないか」
　新井林は時計を覗き込んだ。腕時計の脇を少しいじって、デジタルの文字を緑に光らせた。着替える時間を気にしているのか。めんどくさそうに返事が返って来た。
「練習これ以上さぼりたくねえけど」
「昼休みでいい」
　もっと言いたいことがあるはずなのに、新井林を目の前にすると怖気づいてしまう自分がいた。あの日、ネクタイを握って手を挙げようと迷った時もそうだった。自分を叱咤した。
　少し間を取って新井林が上総の目をじろっと見た。続く言葉は、またしても丁寧語だった。
「わかりました。すぐに図書館で」
「二人がけの椅子で待っているから」
　わずかに上半身を傾け、上総は目を伏せた。
　自分の腕時計に目をやると、あと一分ほどで三時間目が始まる時刻だ。新井林の視線を背中で感じる間もなく、上総は階段を駆け上がった。
　給食終わったら、次の手の準備だった。先輩だから分かることはたくさんあるのだから。

　午前の授業を適当に流し、昼休み上総は図書館へ向かった。

「どうしよう、ビデオの予約入れるの忘れてた！」
「あ、あとでダビングしてやるよ」
　すでに図書室カウンターでは、図書局員たちがやたらと明るくアニメ話で盛り上がっていた。古川こずえはいなかった。二人がけの椅子を占拠した。
文庫本を書棚から引っ張り出した。うまくページがめくれなかった。
　両膝に手を置き唇をかみ締め、えいやとばかりに身を起こした。
　落ち込んではいられない。もう一度自分にステッキを入れる。
　新井林の口調が妙にやわらかかったことだけがひっかかっていた。
　ごたごたした後だ。本条先輩とあの後何を話したのかは知ったことじゃない。本条先輩と新井林ふたりの問題だろう。
　自分の中で、もう整理はついていた。
　背中からかすかな冷えが昇ってきた。振り返ると一抱えある氷柱が窓辺から顔を出しているのが見えた。

　図書館の扉が開く前から気付いていた。戸を蹴飛ばす感じで足跡も響く。
　新井林健吾は上総に視線を留め、そのまま近づいてきた。側まできて、もう一度上総をにらみつけた。
　――全く変わってないな。
　腹が据わった。
　言いたいことを言おう。
　すべてをさらけだして、評議委員会から未練を断ち切ること。
　必要なのは、それだった。

「すまない。無理言ったな」
「なんか」
　口篭もるところが、妙だった。今日の新井林はなんかおかしかった。どう答えるべきか迷っているといった感じだった。
「ここでは人がいる。向こうに行こう」
　指差してやった。人のいない図書館の穴場だ。百科事典置き場だった。この前こずえに相談を持ちかけた場所だった。
　奥に進むにつけ、ほこり臭さでむせそうになる。脚立が放り出されていたのは、そろそろ冬休みに向けて蔵書整理でもするのだろうか。できるだけ人気のない場所に入り込みたかった。新井林はどこにもぐりこんでもオーラが出て目立つだろう。静かに越したことはない。
　脚立の踏み台に手をかけた。上総は健吾を静かに見返した。
　本条先輩に張られた頬の痛みを思い起こした。
　――もう悔いはないさ。
　ブレザーのポケットから手帳を取り出した。生徒手帳ではなかった。父からもらった黒皮の表

紙ものだった。そろそろ書き込む空白も少なくなっていた　知ら れたらまずい機密情報も記入されているけれど、ほとんどはフランス語とドイツ語のちゃんぽんで綴っているので、まず見られても大丈夫だ。

一　青大附中内の委員会と部活動の関わりについて

評議委員会……演劇関連と学外渉外関連（来年以降の予定）
規律委員会……美術関係および写真関係（青大附中ファッション通信の発行など年四回）
音楽委員会……文字通り音楽関係。音楽関連の大学を目指す人向け。
保健委員会……医療関係および病院関係、また医学部を目指す人の溜まり場
体育委員会……体育系部活動関連を一通り網羅。
学習委員会……文芸部と理科系の部活動を兼ねる。

その他、文集委員会、美化委員会、図書局、放送局など。
生徒会は主に渉外活動中心だが、来年以降は評議委員会にも渉外関係の活動を求める予定。

――来年、ってあるのかな。
ちろちろと頬が痛んだ。新井林が火種。唇を痛くなるくらいかみ締めた。なめると血の味がした。新井林へしっかと身体を向け、背筋を伸ばした。
「今回のことは、俺が一方的に新井林へ迷惑をかけたようなものだ。すまなかった。いくつかのことについてできることはみな片をつけておいた」
――まだ俺は、新井林に先輩面する権利があるんだ。
いつもの自分だったらここで弱気になってしまうだろう。卑屈なくらい腰を曲げるだろう。立村上総の保身だけなら、そうする。ためらうことなく卑屈になる。
でも今の上総には、杉本梨南がいる。おびえた瞳で隠れている。
――本条先輩。これが立村上総の、評議のやり方です。

「片ってなにを」
新井林が口を尖らせた。
「たぶん、桧山先生がそのことは、すると思う。それに任せておけばすべてが終わるだろう。そして新井林、お前が俺について聞いてきたことはすべて本当のこ とだ。先輩と思えないのも当然だ。だからせめて俺のできることだけ、こちらにまとめておいた。俺がお前に提供できるのはこのくらいだから」
書き込んだ委員長関連の部分を破り取った。きれいにはがれた。そのまま新井林に差し出した。
手でもてあそびながら新井林は目を落とし、いぶかしげに返答した。
「これってどういう」

「現在の青大附中委員会活動の流れみたいなのをまとめておいた。これからの参考にしてくれないか」
「これからの参考って、いったい」
　声を大人びさせた。新井林と違って、上総の場合声代わりがほとんど気付かれない程度に終わっているようだった。少しだけトーンが高い。
「来年以降は俺が評議委員会を仕切ることになるが、たぶん学校内よりも学校外の活動が中心になると思うんだ。これにも書いたけれど、生徒会と一緒に他の公 立中学との交流会を活発に行おうとか、それこそ部活動との兼ね合いも考えようとか、いろいろな案が今出ているところで、俺もちょうど検討してたところなん だ」
　――言いたいことを言ってしまえばいいんだ。今のうちに。
「新井林、今作っている『青大附属スポーツ新聞』のことなんだが、お前ひとりで続けていくのは正直なところ、かなり困難だと思う」
　先輩面するのは気が引けるけれども、たぶん最後の機会だろう。上総なりに感じた「青大附属スポーツ新聞」についても続けた。
「この紙にある通り、体育系の部活動については体育委員会がかなり詳しい。お前が駈けずりまわって探しまくる情報を、早い段階で手に入れていることが多い らしいんだ。俺も知らないけど。それから写真なども規律委員会にかなりプロはだしの奴がいると聞いた。あそこは実質美術関係についてなら逸材のてんこもり だからかなり面白い面子が揃っているはずだ。それから音楽委員会。合唱コンクールの時くらいしか出番がないと言われているけれど、暇な時にはバンドとかコ ンサートとか、いろいろ練習していると聞いたことがあるんだ。臨時吹奏楽みたいなこともやりたいと話していたのを聞いたことあるんだ。だから、もし応援な どでそういうのが必要だったら、音楽委員の誰かに声をかけてみるといいかもしれない」
　息つかず畳み掛けた。しんどくなってここで息継ぎした。
「あとで次期委員長の名前とクラスもこちらで用意して渡すから」
「なんで、俺に？　なんでそんなこと俺に言うんですか？」
　――こいつ丁寧語使ってるよ。
　手帳を閉じ、呼吸を整えた。相手の動揺がかすかに伝わってくる。新井林の瞳を逸らさないようにして告げた。
「再来年の評議委員長は、新井林、君を指名したいからだ」
　明らかに動揺している。付け焼刃の敬語が消えている。
　一瞬ぽかんと口を開け、新井林は目の玉が丸くなるくらい見開いた。
「評議委員長、っていったい」
「今の一年の中で評議委員長としてふさわしいのは新井林だけだと判断したってことだ」
「けど、あんたそれでいいのかよ！」
　何かことばを発しながら、上総に真正面から一歩近づいた。身をかがめるようにして、どすを利かせて言葉を吐きかけた図書館の中は静粛にするのが決まりだ。場所が目立たないから気付かれていない。

胸の奥で、ことりと何かが納まった。
ひとりだけ宙を浮いて、図書室の天井から見下ろし眺めているような感覚が残った。背中に感じるのは本の持つ体臭のようなもの。かぎ慣れた咽のいがいがし そうな空気。いつもひとりでいる時、ここで本をめくっていると落ち着いてくる。友だちとしゃべっている時よりも楽な空間だった。過去に触れた本のオーラが 上総を包んでくれているようだった。
目の前の新井林がすっかり動揺し、わめくのを上総は抑え、話を聞いた。
「あんた俺を嫌ってるだろ、あんた俺を殴りたかったんだろ。俺よりもあの女の方を本当は気に入ってるんだろ。なんでだよ、今度はそれでだまし討ちしたいってのかよ」
「違うよ。新井林。俺の判断で、杉本よりも君の方が評議委員長としてふさわしいと思った、それだけだ。まだ俺も正式な評議委員長として任命されてないし、 来年果たして評議委員が元のままかどうかもわからない。状況はかなり揺れ動いてる。でも新井林を俺の次にしたいってことははっきりしている。君なら一年連 中をまとめるだけの力を持っているし、俺なんかと違って女子受けもいい。新しいことをどんどん切り開いていくだけの能力もあると、俺は思っている。それ に」
言葉を切った。まだ誰にも話していないことを思い切って口にした。
「来年以降、俺としては評議委員会を学内だけではなくて外に出して活動させる方向を取りたいんだ。できれば生徒会とか部活動とかともうまく繋がっていける 形にしたい。本条先輩のように強引なくらいひっぱっていくだけの力が俺にはないから、これまで通りのやり方では評議委員会が持たないと思う。学内関係は部 活動と一緒に協力して、人数集めて盛り上がっていく方がいいんじゃないかって、前から思っていた。新井林の企画した『青大附中スポーツ新聞』は、いいタイ ミングだったし、俺も全面協力したい気持ちはある」
たぶん半分以上耳から筒抜けだろう。新井林の話はしっかり一年Ｂ組問題に戻ってきている。たぶん、委員会よりも自分のクラス問題の方でしか、判断つかないのだろう。一年の頃は自分もそんなものだった。
上総は落ち着いて受け止めた。
「最初は杉本を指名するつもりだったって、それがどうしてだよ」
「半年以上それぞれの性格を考えて、決めたからだ。俺なりに判断したってところだ」
「俺はあんたに相当ひでえこと言ったけど、そんな恨みも捨ててかよ」
「新井林の言うことは、すべて本当のことだ」
――お前の方が「ふつう」に感じる人の中では、きっと正しいんだ。
ひがみではなく、そう思った。
一年後、二年後、今の上総と同じ立場に立ったとしたら、きっと自分以上の手腕ですべてをまとめていくだろう。自分が一年の頃、ここまで自分のやりたいことをひとりで推し進めていくだけの力はなかったのだから。先は恐るべし。本条先輩の言う通りだった。
やりたいことを「委員会」のかさなく自分から進めていって、成功させる。行動こそ力。上総は今まで、評議委員長にならない限りやりたいことはできないと 思い込んでいた。だからずっと

評議委員長という座にこだわりつづけていた。なんて馬鹿な頭なんだろう。本当にやりたいと思ったら、新井林のように、自分か ら初めてしまえばよかったのだ。本条先輩がそういう上総を見捨てるのは当然のこと。悔しいが、自分にはそこまでつっぱしるだけの力はない。
　でも、新井林のやり方を少しだけつまみ食いすることはできる。
　新井林が「青潟大学附属中学スポーツ新聞」をたったひとりで打ち立てたように、上総はこれから、学外交流関連の活動をひとりで準備することができるはずだった。そのための半年間。評議委員長という肩書きを取り上げられる前に。

　表には出さないことがプライドだった。反り返るように返事を待つ新井林へ、上総はゆっくりと言葉をつなげていった。
「ただふたつだけ頼みがあるんだ。たぶん、このことが判明したら、杉本は冷静ではいられないだろうと思う。俺もかなり気を持たせる言い方ばかりしてきたから、当然だと思う。もしかしたらまた新井林や佐賀さんに、辛い思いをさせるかもしれない」
「そうだな。確かにな。あんた正しいよ」
「桧山先生もあの調子だと手加減をしないだろう。先生たちのやり方には口出しできない。俺も一年のことについては、今のやり方が限界だ。だからせめて、お 願いだ。杉本が一年Ｂ組に卒業までいられるよう、せめていじめられないようにしてやってもらえないか。仲良くしてくれなんて言わない。ただ、男子連中が無 視するだけでいい。存在しないものだと思うだけでいい。手出しだけはしないでほしい、それだけなんだ」
「俺たちにそんなことできるってか」
「今、新井林が一年の野郎連中に対して『杉本に一切手を出すな』っていうあれだ。三年間、有効にしてやってほしい。無視される辛さとか惨めさを味あわせる なとは言わない。ただ、実力行使だけはやめさせてほしいんだ。今、近所では杉本の家を村八分にするような運動が起こっているとも聞いている。もう完全に杉 本は制裁を受けているんだ。自分がおかしいんだということをいやというほど言われつづけているんだ」
「じゃあ反省しろって言いてえな。第一あんた、どうしてそこまであの女をかばうんだよ」
　好きだからとか、惚れてるとか、そう言う言葉を求めているのだろうか。　新井林にはどんなに言葉を尽くしても、上総が杉本梨南の想いを感じ取る理由を説 明できそうになかった。見えているのは、ただ杉本が新井林への横恋慕ゆえにライバルで親友だった佐賀はるみを無視しているということ。それが女子たちのい じめに繋がっていったということ。杉本をかばうことは一切できないということ。それでも手を下さない新井林を認めなくちゃ嘘だということ。最低女を守りた いということは、恋愛感情が存在しない限り、できないであろうということ。
　――そういうんじゃない。
　――俺はただ、わかるだけなんだ。
　――杉本がどんなにお前や佐賀さんにかまってほしがってるかってことが。
　――嫌われても、馬鹿にされても、しがみつくしかないってことを。
　静かに上総は答えた。

「俺が杉本について言ったことはみな、俺が毎日感じてることばかりなんだ」
　新井林の肩に少しだけ綿ぼこりが落ちていた。隣りの本棚に視線が向いた。おそらくほとんど棚から引き出されたことがないであろう、旧かなづかいの書籍がずらっと並んでいた。自然と言葉がこぼれた。指差した。
「今棚に並んでいる本、これを数えてもらえるか？」
「はあ？」
　訳がわからない風に顔をしかめ、それでも新井林は数回瞬きをし、指を使わずに本の背を追った。十秒くらいだった。ものすごいスピードだ。
　もう一度、自分の胸奥でかちっと鳴った。
「早いな」
「あたりめえだろ」
　――当たり前じゃないよ。すごいことだ。
　上総はそっと指を本棚の埃の上に滑らせた。
　小学校の頃から、ものを数える作業でいい思い出は残っていない。班ごとにプリントの枚数を数えて持っていくのを頼まれた時、いつも数が合わずに叱られ た。大人がいる時だったらまだよかったけれど、同級生同士だと「きっとわざとやったんでしょ！」と罵られて泣いてばかりいた。今は美里に点呼とかプリント の枚数あわせとかほとんど任せているけれども、たまにしくじって自己嫌悪に陥ることがある。
　たぶん、新井林にはそういう記憶がほとんど残っていないのだろう。
　残るほどのことも、ほとんどないのだろう。
　指先で本の背を触れ、自分の口でひとつひとつ数え、どこまでいったかを忘れないようにしなくてはならなかった。新井林の視線が針のように刺さり、思わず 一つ飛ばしてしまった。慌てて数え直す。鼻息で「こいつなに考えてるんだよ」と言わんばかりの軽蔑が伝わってくるようだ。どきまきする。
「いち、にい、さん、しい……ええと四、五、六……」
　――新井林は二十冊って言ってたよな？
　口では「にじゅう」とつぶやいたはず。でも、数えている途中で指先で一冊飛ばしてしまったような気がする。みぞのところをずずっと滑らしてしまったような感じがする。落ち着かない。変だ。ずれている。
　そっと顔色を伺い、新井林に確認した。
「十九冊じゃなかったよな？」
　あきれはてたまなざしで、新井林は肩をすくめた。
「何考えてるんだよ。二十冊に決まってるだろ」
　――じゃあ、やはり口で言った数の方が正しいのか。
　新井林はもう一度反り返った格好で視線のみ、計算し直してくれた。
　上総も指で、さっきよりもスピードを落とし、本の背を人差し指と親指でつまみながら数え直した。こうすると本を飛ばして数える恐れがない。最初からそうすればよかったのだけど、変な

プライドが邪魔しただけのこと。
　もうばればれの事実を隠しても、しょうがない。埃が指先に溜まり、爪まで黒くなった。
　他の子たちがさっさと終わらせている時、いつも上総はひとりで残されて何度も数を数える練習をしていた。その時もいつも、指が真っ黒いままだった。小学校の頃の記憶は指先で、ひとつひとつ蘇った。埃が身体にまとわりつきそうだった。
「俺はものを数えることが苦手というより、どうしても普通にできないんだ。途中でかならず数字が違ってしまう。遠足の時の整列でも、点呼を取る時に一度も 数字が合わさったことがない。だから点呼はいつも、人の肩に手を置いて、どこまで数えたかを忘れないよう口で言いながら数えている」
「それでも自分で言った数字を忘れるってなんだよ」
「そういうことなんだ」
　上総は新井林を静かに見返した。
「いくら自分ひとりでやろうとしても、うまくいかない。普通に数えて普通にあわせようとしても、どうやればいいかが、俺はわからないまま今まできた。だから杉本が、新井林たちの感じる普通というものがわかんないのも、なんとなく俺には通じるんだ」
　鼻を鳴らされた。
「けっ。それが言い訳だってんだ」
「その通りだと思う」
　繰り返し、自分の中ではあきらめ。
「自分がおかしいから、自分の感じ方が普通じゃないからといって言い訳するのは、きちんとした感じ方をする人たちに迷惑だって俺も思う。だから、毎日どう すれば、周りの人たちの迷惑にならないか、どうすればいいかを考えてる。勘違いばかりしてるし、毎日数え間違いを繰り返しているけれど、そうしないと受け 入れてもらえないとわかっているから、なんとかしようと思っている。けど、きっと杉本も同じなんだって、思うんだ。どんなに数えても二十冊にならない理由 がわからないんだ」
　新井林はしばらく無言だった。上総の指先をちらっと眺め、唇をへの字に曲げそのままでいた。
「きっと杉本は、新井林とふつうの話をしてみたかったんだろう。佐賀さんとずっと友だちでいたかったんだろう。でも、どうすればいいのかが今だにわからな いんだと思う。他の人たちに迷惑をかけている以上、杉本が制裁を受けるのは当然のことだろう。それをするなとは言えない。ただ少しだけでいい、杉本に情け かけてやってもらえないか？」
「情け？」
「俺のような数え方をする奴と新井林たちとは、勝負付けが終わっているんだから」
　自然と、頭が下がった。悔しさでもない、惨めさでもなかった。
　新井林と重なって、おぼろげに本条先輩の姿が浮かんでいた。
　――本条先輩、これが俺の精一杯の答えです。
　新井林はしばらく黙っていた。じっと上総の姿を見下ろしていた。

　完全に声変わりしている。がさがさした言葉が続いた。上総が顔を上げると、敬語なしの穏やかな口調に変わっていた。
　――何が起こったんだ？
　新井林の周りにも、埃っぽい空気が漂っていた。

「あんた、前から言ってたよな。杉本は精一杯なんだってな。必死に努力して、懸命に俺や佐賀と仲良くしたいから、ああいう嫌がらせをするってな。俺とした らたまったもんじゃねえが、やっとわかったよ。あんたも同じことしてたってことだよな。がむしゃらに俺たちと近づきたかったってことだよな。本条先輩や清 坂先輩や羽飛先輩とうまくやりたかったってことだよな」
　頷かないで、ただ新井林の本心を探ろうとしてみた。瞳を見つめるのみ。
「それがあんたの保身のせいだって、この前までは思ってた。ああ、俺もガキだった。噂を鵜呑みにしてたからな。けど、本条先輩から話を聞いて、あらためて 今までのことを考えなおしてみて、あんたもまんざら馬鹿じゃないし、頭切れるしって思った。俺を評議委員長にしたいというのが本心だったというんなら、俺 もあんたを見直したいって思ってる。少なくともあれだけ俺が言いたいことを言っておいて、うらんでないっていうんならな。けど、俺ももうひとつだけ言わせ てもらうってんだ。あんたはな」
　ちらっと横目で閲覧机の方をにらみ、元に戻した。
「人並み以上に、俺たちに受け入れられようとして、努力してるじゃねえか。あの馬鹿女と同じ気持ちを持ってるかもしれないかもしれんけど、本条先輩にも、 清坂先輩にも、羽飛先輩にもちゃんと受け入れてもらってるじゃねえか。青大附属の評議委員会にも、二年の連中にも、みんなにさ。そういう努力をしてくれる 女だったら、俺も杉本を許せたかもしれねえ。けど、あの女は一切近寄ろうって努力のかけらも見せねえ。佐賀に謝る気もなければ、さんざん悪口言われて塩か けられている親のこと考えて頭を下げようともしねえ。どんなにあんたが一生懸命杉本のために走り回っても、ほら、一切あんたを無視したままだろ？　あんた が頭にどういう問題抱えているか知らねえけど、あの女はあんたをかばうどころか自分の武器にして桧山先生を責めたんだぜ。あんた、杉本のどこが気に入って かばいまくってるんだよ。あの女の性格が悪いことを、わかっていてなんでだよ」
　――新井林、お前。
　染み入る。すべてが逆転していた。
「俺が徹底してむかつくのは、自分が他の奴と違うことを正当化して押しまくる奴であって、受け入れられる努力をしている人間じゃあないんだ」
　かっちりとした表情、自信を内に込めて、しっかりと踏みしめるような口調。わめくのではなく、穏やかながらも火を抱え持った言い方。
　――本条先輩と、おんなじだ。
「評議委員長のどうたらこうたらはまだ先のことだよな。だから、今の話は後回しにしとく。けど、これだけは言っとく。あんた、自分で思ってるほど馬鹿じゃねえし、俺が今まで言い放ったような最低馬鹿野郎ではないってな。立村さん」

タイミングよく鐘が鳴った。唇で小さく笑みをこぼし、新井林はぴんと背を伸ばしたまま、図書室を出て行った。

――新井林には勝てないか。
すでに「静粛」なんて言葉が死滅した図書室の隅で、上総は踏み台の二段目に腰掛けた。手帳をページを眺めていた。
言いたいことは言った。話はついた。新井林もなんと、前代未聞の、「立村さん」という言葉で敬意を表してくれた。
新井林の方からは評議委員長の座を奪おうとはしないだろう。自分以上に新井林健吾は大人だった。杉本に対して最低限の礼儀を守ることは約束してくれた。 自分よりはるかに出来の悪い二年の先輩に対して、「さん」付けで呼んでくれた。殴り合い寸前までいった相手に対して、きちんと筋を通して水に流してくれ た。
――そういうとこを、きっと本条先輩は認めているんだ。
――俺にはできなかったことを。
杉本もこんな風に自分から新井林にあやまることなんでできないだろう。佐賀はるみに改めて友だちになってもらうよう頼むことはできないだろう。もう一度 仲良くしてほしいなんていえないだろう。自分の痛みだけで精一杯。どんなに新井林や佐賀が筋を通してくれても、完璧な友情と愛情だと感じない限り受け入れ ようとしない。自分に与えられるにふさわしいレベルの感情で満足しようとしない。
佐賀はるみの言う通り、杉本梨南はわがままな赤ちゃんなのだろう。

――俺と同じだ。
本条先輩から求めた百パーセントの信頼。
上総が二年間、本条先輩に求めてきたものだった。
新井林健吾は軽やかにそれを手に入れていた。

生徒会室の放課後は静かだった。生徒会長だけがひとり、スチール机の上で給食の残りパンをむしっていた。見るからに馬面。のほほんと笑顔。角刈りだが怖くはない。
他の生徒会役員たちは来ていなかった。ひとりで食うことが慣れているのか、淋しげではなかった。
「立村、追試全部片付いたか」
「なんとかな。冬休みにあとは突入てとこだな」
一応は次期評議委員長としてのお付き合いをさせていただいていた。話すようになったのは生徒会関連のことがきっかけだけど、実際は次の授業で忘れ物をし た時なんかに教科書やリコーダーの貸し借りしたり、メンバーが足りない時はバスケの試合に付き合うとか、そんなお付きあいだ。くそまじめではない。
緑色の壁。窓のない真四角な部屋。茶室よりは広いが教室よりは狭い。ちゃんと鍵もかかるよ

うになっている。誰が手を伸ばすのかわからないくらいでかい棚 には賞状入れの筒が詰まっていた。天井には学校祭や運動会の時にのみ使用される校旗が張り巡らされている。合宿か遠征かわからないが、スナップ写真の集団 も小さく自己主張していた。
　パンくずを散らかして食べている会長の顔を覗き込んだ。
「ひとつ提案なんだけど、いいかな」
「食うまで待てよ」
　生徒会長がすべて腹の中に納めるのを待った。
　十月の生徒会改選で、何となく先生たちが手を回してくれて出来上がった組織だ。当然、のんきで取り立てて何かをしようという意欲も感じられないところ だった。生徒会のうらやましい点は生徒会室を占拠できるところだ。委員会活動では空いている教室を借りるしかない。溜まり場があると、いざという時に逃げ 込める。これはいい。
　まずは最初に、手に入れている情報の確認を取ることにした。
「三学期に、他の学校との交流会、やる予定あるんだろ」
「話がつけばできるかもしれないけど、でもなんで」
「評議委員会もその場に参加させてもらうってできないかな」
　上総は空いているパイプ椅子に腰を下ろした。会長に向かい合うよう椅子をずらした。
「でも生徒会同士のとこにどうやって混じるって」
「うちの学校って、公立の中学と交流すること意外と少ないだろ。留学生とかは結構くるけどさ」
「去年は泊りがけで生徒会同士の交流会に参加したぞ」
　胸を張らなくてもよかろうに。上総は穏やかに続けた。
「公立って委員会活動とかあまり活発でないみたいだからさ。俺も青大附中のやり方しか知らないし、一応俺の立場として」
　言葉を止めた。にんまりと生徒会長が笑う。
「一応、次期評議委員長様だもんな、立村は」
「そういうこと」
　和んだところで、展開開始。
　両肘をテーブルにつけ、前かがみになった。斜めになるので、ちょっと無理なポーズだ。
「俺も本条先輩にはいろいろ教えてもらったりしてるけど、やはり現在の委員会最優先主義には、ちょっとしんどいなあって時、結構あるんだよな」
「ほうそれは」
　青大附中生徒会のわびしい現状を知っているのだろう。生徒会長も頷いた。もう口にはなんも入っていない。
「なによりも、委員が必ずしも変わらないとは限らないだろ？」
「まあなあ、半年ごとに変わるし」
「今はそれぞれの委員が暗黙の了解で持ち上がっているけどさ、俺もいつどうなるかわかんないよ。それこそ、来年規律に回されたりしたら、どうしようかって思うもんな」

「生徒会と違って不安定だよなあ」
　ふんぞり返りつつある生徒会長。彼もかわいそうな奴だ。成績がいいというだけで生徒会へ引きずりこまれ、先生たちに説得されていつのまにか、なのだか ら。当然信任投票で一発当選。学内では現在「委員会最優先主義」のとばっちりを受けている状態である。楽と言えば楽なのだろうが、やる気なくしそうな立場 というのも分かるような気がする。
「だから、俺が考えてるのは」
　上総はゆっくりと言葉のテンポを落とし、先をささやき声で続けた。
　廊下に聞こえないように。
「委員会がいつ、他の中学みたいなどうでもいい存在になる前に、できるだけやりたい連中を集めてやりたいことができるような繋がりを作りたいんだ。ほら、 委員会って今さ、規律ではファッション関係、評議は隠れ演劇部、音楽委員会はバンド軍団、保健はひたすら医学部・看護学校コースって感じだろ？　でも、そ れって他の委員会活動してない奴で、参加したい奴って必ずいるんじゃないかなあ」
「もっともだ、俺もほんとは応援団やりたかった」
　意外な発言に驚くが、心にメモだけ取っておき畳み掛けた。ちなみに青大附中に「応援団」はない。
「もちろん全部が全部じゃないさ。ほら、一年の新井林がいきなり『青大附属スポーツ新聞』とかやり始めただろ」
「知ってる知ってる。あれはフライングだったよなあ」
「部活動最優先主義への革命とか言ってたけど、要は本人がやりたくてやり始めただけさ。けど、やっぱり運動部とか先生たちには大受けしたろ。たぶん来年あたりには、新聞部あたりと共同で発行するって形、取らされるんじゃないかな」
　新井林を褒め称えるしかない。
　会長がやたらと頷き続けるのはたぶん、知っているからだろう。新井林健吾、華のある奴は強い。
「ここだけの話だけど、委員会はだんだん肩身狭くなってきている。たぶん今年の一年クラスで、純粋に持ち上がり委員やってくれる奴は少なくなると思うん だ。公立とおんなじような、委員会のひとつ扱いにされてしまうかもしれないんだ。今までここまでやってきたのに、もったいないだろ。俺はあまり演劇好き じゃないけど、ビデオ演劇とかでいろいろ盛り上がったり、集会の時に派手なイベントやったりとか、そういうのを裏でやるのは楽しいと思う。せっかくそこで 覚えたノウハウを委員会の中だけにとどめておくんでなくて、大学のサークルみたいな感じにして伝えていく、ってのはどうかなって思ったんだ」
　一方的にしゃべりまくってしまった。頷きながら聴いてくれている生徒会長。面長の顔が犬っぽい。
「今回、水鳥中学生徒会の交流会に、俺と本条先輩だけでも一度だけ参加させてもらえればいいんだ。あとは有志を募って作って交流サークルみたいなのこしら えてもいいし。学校の公認があった方よければ、学外渉外部を作ってもいい。やりたいことを委員会外のやりたい人がやれるよ

うにしたいんだ。評議委員会、俺 の代ではこしらえたいって思ってる。少なくともビデオ演劇以外のをさ」
「ところでどうなん？　『奇岩城』悪役ホームズ様」
　情報が洩れている。そりゃそうだ。かの「シャーロキアン」Ｂ組男子評議委員のクラスである。
　シナリオ渡すことを約束した。

　生徒会長はしばらく頷き続けた後、こぶしを平手でぽんと叩いた。
「わかった。交流会に評議委員会を参加させられるかを聞いてみる。たぶん、そんなたくさん人が集まるわけでないんだったらＯＫ出ると思うよ」
「ありがたい、恩に着る」
　人がいないからやれる冗談めいたしぐさ。首脳会談後の握手よろしく、両手で手を取り合い激しく振り合った。最後は体育の体操めいた動きになってしまった。
　ほのぼのと生徒会室を出た。
　――俺がやりたかったのは、これなんだ。

　正式評議委員長就任後に評議委員会として交流活動の話を持っていこう。できればその後も正式に交流できるように活動するつもりだった。
　でも今の上総には時間がなさ過ぎる。
　冬休みに「奇岩城」を完成させ、二月に生徒会の繋がりでうまく交流会へもぐりこませてもらい、三月には三年生を送る会を盛り上げる。その程度しか出来そうにない。
　杉本が評議委員として参加できるのも、半年間だけだ。
　――杉本はまだ知らないんだよな。
　決定打が打たれる前に上総は杉本の居場所を確保したかった。
　できるだけ女子の面子が揃った中に置いておけば、杉本も今のような問題をそれほど起こさないと思う。新井林と佐賀はるみから離せば、ほとんど問題は解決 したようなものだ。ごまかしと思われるかもしれない。その活動が将来の評議委員会、生徒会にとって有意義なものだとうまく言い含めたら。杉本だって自分が 嫌われて外されたとは思わないだろう。
　「青大附中スポーツ新聞」をたったひとりで立ち上げた新井林と同じことだ。やりたいことを、上総自身が企画しただけのこと。
　――大丈夫。評議委員長よりも決して劣らないよ。
　杉本梨南は緻密な計画性でもって物事を組み立ててくれるだろう。たぶん、委員会活動の今後についてとか、他の委員会との交流とか、文化祭関係での合同企 画とか、影の企画を立てる仕事をしてくれれば、きっと盛り上がるに違いない。委員会とは別の活動として位置付けしておけばなおよろしい。
　周りの連中を少し集め直して、杉本中心の環境を整えなくてはならないのが面倒だ。そのためには女子関係で誰かよさそうな人を見繕ってもいいだろう。でき ればあの不良少女花森なつめ

とか、古川こずえとか。そのあたりを繋ぎに持ってくるという手もある。男子でも、新井林グループとは外れた相手を振ったら、も しかしたらうまくやっていけるかもしれない。なによりも。

――俺が評議委員長落ちたら、そっちにもぐりこむって手もあるもんな。自分の居場所も確保できる。一石二鳥だ。

伊達に二年間、本条先輩の悪知恵を勉強してきたわけではないのだ。

その１２　か細い悲鳴がつんざく

　「奇岩城」準備は着々と進んでいた。冬休み年内には台本を一年生に送りつけることができるだろう。正月三が日空けてから一度、準備として集合をかけてみようか。もちろん一年を集めて、という前提で。
　上総の計画は予定通り消化されていた。終業式までの一週間、ほとんど授業はおなざりに進んでいた。菱本先生もあきらめているのかご自分も嬉しいのか知らんが、ひたすらクリスマスの予定について語りつづけている。毎度毎度の長たらしいお説教である。
「いいか、お前ら。クリスマスを前に浮き足立ってるんじゃないぞ。ちゃんと今年のうちに真面目に勉強しておいて、正月休みをしっかり取る。日本のお正月を 楽しんで、それから改めて三学期へターボをかける。だから今からちゃんと宿題を片付けるよう、準備しとけよ。まあなあ、俺がお前らくらいの時は、人のこと 言えなかったがな。おい、羽飛」
　貴史が「ほおい」と手を挙げて立ち上がった。
「お前、クリスマスはどうするんだ？」
「うちでケーキ食って、それから友だちのとこで雪合戦」
　小さく「雪合戦なんてださすぎ」との声。女子だ。
「ほお、雪合戦か。清坂とか？」
「あ、誘ってねえや。美里、お前も入るか？」
　いきなり誘われて驚くと思いきや、美里は意外と冷静だった。
「やめときます。だって、貴史……羽飛くんは本気で雪球固めて投げるんだから怪我したらしゃれになりません。先生、知ってますか。雪玉を水でぬらして堅くするんですよ！　凶器だと思いませんか」
「いいじゃねえか、お前だって去年やったろ」
「うるさいわね！　男子連中がそうするから仕方なく」
　笑い声響き渡る。その陰に「なあに、男とべったりしたがってるんだろうね。やらしい」と、女子の一声が混じっていたのを聞き取っていた。

　――クリスマスか。
　あれから南雲には、「彼女もちのクリスマスについて」のレクチャーを受けていなかった。きっと奈良岡彰子がらみで胃が痛いのだろう。一緒に過ごせず落ち込んでいるのだろう。気兼ねしてしまう。
　――クリスマスってプレゼント、用意するもんだよな。
　美里の喜びそうなもの、想像してみたが今ひとつぴんとこない。
　素直に隣りの古川こずえにリサーチをかけた方がいいのかもしれない。
　――だめだ。一発でばれちゃうよな。
　口の軽さは確認ずみ。同じく貴史にも言えること。下手なことは口走らないほうがよさそうだ。仕方ない。自分でなにか考えよう。とりあえずは大人に聞いてみたほうがよさそうだ。

――「付き合い相手」だから、ただの友だちよりも、レベル高いものでないとまずいんだよな。今月は小遣いに余裕があるし。調べてみよう。とりあえず明日にでも、「おちうど」のおばさんに聞いてみようかな。
「羽飛、清坂、ほんっと仲いいなあ。ふたりっきりでデートなんかしないのか？」
「するわけねえだろ、先生。だってさこいつにはこれがいるだろ？」
「うるさいってば！」
　また爆笑。
　――俺の方をじろじろ見るなよな。
　貴史と目が合い、不機嫌にそらした。どうせ周りからは、
「それにしても立村くんなんかとどうして付き合ったんだろうね、美里」
　声が響いてくるのが見え見えだからだ。
　四時間目の鐘が鳴った。
　終業式までの三日間は午前授業が続く。遊び放題。宿題も出ているけれども知ったことじゃない。
「じゃあ、いちゃつく奴は手加減しとけよ。おい、立村、お前もいろいろ大変だろうが、がんばれよ」
　――あんたに言われたかあねえよ。
　毒づくのは条件反射。心の中に納め、他の連中に挨拶して教室を出た。これからしばらくは評議委員としてのの仕事から解放される。本条先輩と顔を合わせないでもすむ。

　扉を開けっ放しにしたまま窓際でコートを着ていると、うっすらと石鹸っぽい匂いが漂ってきた。冷たい空気には似合わない、あたたかい薫りだった。
　振り返ると、真っ赤な唇を震わせながら駆け寄る気配がした。
「あれ、花森さん」
　一年の花森なつめがずるずるのコートをひきずりながら上総の腕を掴んだ。
「立村先輩、ちょっと聞いてよ！」
　今日の爪色は深紅。ちゃんと伸ばしている。両手を握りしめている。赤がちらつく。あいかわらず校則違反の常連だ。いつもならからかってやるのだが、いやな予感あり。廊下の窓辺に呼び寄せ、小さな声で尋ねた。
「どうした」
「杉本さんのこと、聞いてないでしょ。先輩」
「杉本がどうかしたのか？」
「あの馬鹿野郎にひとりで吊るし上げられてるのよ！　なんでなの？」
　――杉本が吊るし上げられているってかよ。
　動揺を隠し切れていないのが自分でもわかる。声が上ずった。
「あの馬鹿野郎って誰だ。また新井林か」
「あいつもそうだけど、桧山よ桧山。何考えてるんだか。ぶっ殺してやりたい！」

「落ち着いて最初から話してくれないか。それと、杉本のことで何があったかをさ」
　目が潤んできていた。花森の顔には頬の所に人工的な赤い線がひかれていた。近くでみると露骨に見える。でもそこをこすりながら、今にもこぼれそうな涙を押えている。化粧が落ちる、というよりも濡れてはがれていく。
「桧山の奴が、杉本さんをいじめの首謀者だと決め付けてさんざん馬鹿にした挙句、評議委員から来年下ろすって言い出したのよ！　私、昨日学校に居なかったから何にも言ってやれなかったの」
　うっと声を詰まらせ、真っ正面に顔を向けたまま。
　両目からしたたるしたたる。
「花森さん、そうか」
　ポケットから上総はティッシュを取り出し、そのまま丸ごと渡した。激しく被りを振って受け取らなかった。
「立村先輩、杉本さんを助けてあげてよ。先輩しかいないんだから。杉本さんはただ、佐賀さんに馬鹿にされたから怒っただけなんだよ。図に乗った他の女子が無視しただけで杉本さんにみんな押し付けるなんて。なによ、ひどい、ひどすぎるよ」
　後からぞろぞろ出てきた二年Ｄ組の奴ら。視線がきつい。一瞥のみですぐ階段に向かうのが幸いだ。
「また立村くん、一年の女子といちゃついてるよね。清坂さんも早く別れちゃえばいいのにね」
　またまた女子の悪口が耳に入る。言い返したくなったけれどもがまんした。
「花森さん、もう一度、分かる範囲内でいいからさ、教えてくれないかな」
　しゃくりあげながらも、分かりやすく端的に花森は答えてくれた。

　いつものように桧山先生は杉本に「佐賀はるみをいじめるのはよくないことだ」と指導したらしい。
　「いじめられていると思い込んでいる自分の身を反省しろ」と叱りつけ、「いじめをする人間は評議委員としてふさわしくない」それゆえ「人間の心がよくわかるように保健委員を勤めよ」と命令したという。
　――こんな早く手を回すなんてさ。
　曇ったガラスを指でかき回し、一言上総は吐き捨てた。
「保健委員イコール人の心がわかるってのが、安易だよな」
「だよ、そうだよ！　先輩、許せないよ！」
　たまたま花森は学校をさぼっていた。もしそこに居たのだったらためらうことなく、桧山先生に暴力一発ふるって退学してやっていただろうと言う。
「花森さんのためには、そこに居なくてよかったな」
「冗談じゃないわよ。それでさ、調子に乗って新井林と佐賀さんの陰険カップルがよけいなことし出したのよ！」
「新井林？　佐賀さんも？」

　ふたりは打って変わっていきなり杉本をかばうような発言を繰り返したという。もちろん新井林が優しくなったわけではなく、単に今まで繰り返した「無視はするがいじめはしない」の延長上にある発言だったらしい。
「どういう風に？」
「来年の段階で杉本さんが反省したかどうかをクラスの男子全員で見極めて、審判下すって。もし、ごめんなさいって言うようだったらお情けで評議委員にして やってもいいけど、もしその気がないようだったら無理やり保健委員やれって言うのよ。何様のつもりさ！　あいつら人を裁けるって勘違いしてるよ！　桧山の 奴、Ｂ組の女子を目の仇にしてるから。男子が馬鹿な女子をかばってやった、騎士道精神万歳だって勘違いしてるのよ。新井林が杉本さんを許してあげたって思 い込んでるの。ほんとはこれでまた杉本さんを物笑いにしようと思ってるくせに！　いっぱい苦しんでるのは杉本さんの方なんだよ、それなのに」
　――そうか、新井林、情けかけてくれたのか。
　花森の思い込みが実は反対だと説明することができなかった。
　新井林は新井林のやり方で、杉本に「情け」をかけてやっているのだということを。
　杉本がやったことは新井林的には許せない。でも、「情け」をかけてやることはできるのだということを。
　――俺にはまだできないんだ。
　自転車で突き落としたことのある浜野のことを思い出した。まだ、今でも傷がうずく。許せない。
「先輩、どうにかしてよ。かわいそうだよ。杉本さんただでさえ、お母さんにすっごくいじめられてるんだよ！　手のひら返したようにひどいことばかり言われ てるって。あのやさしいお母さんが、鬼になっちゃったって。学校ではずっとがまんしてるけど、評議委員から下ろされるなんてことになっちゃったら、杉本さ んもう立ち直れないよ。自殺しちゃうかもしれないよ。私、今から桧山のところ言ってきて、文句言うから、立村先輩も一緒にきてよ！」
　上総は目の前にいるまっすぐな瞳を見つめ返した。
　唇を震わせている。唇の皮が赤くむけていた。
「花森さん、それはできない」
　自分の声が詰まっていた。鼻かぜをひいているわけではないのに、かすれた。
「どうして！」
「杉本を、下ろすように言ったのは、俺だ」
　よく聞き取れなかったのか、花森は口を「オー」の形に丸めたまま動かなかった。
「杉本を、次期評議にしないように桧山先生に頼んだのは俺の判断だ」
　廊下には人通りがわずかだった。コートの襟にしがみつくように花森は身体をぶつけてきた。窓辺に押さえつけられ、首筋から冷たい風が流れた。

　むしゃぶりつかれるのは覚悟していた。
　殴られるのも当然だと思っていた。

花森はひたすら、上総のコートにしがみつき叫んでいた。
「なんで、立村先輩、そんなことしたの。杉本さん、クラスで誰も味方がいないんだよ。私だったらまだいいさ、外で友だちたくさんいるもんね。でも杉本さん 誰もいないんだよ。家に帰ったらお母さんにいっぱい嫌味言われて、外に出たら近所のばばあたちにせせら笑われて、学校では新井林たちに罵られて、これっ て、いじめじゃなくてなんだと思う？」
瞳から流れる涙から、上総は目をそらさなかった。「あの子、私のことを堂々とかばってくれてたんだよ。別にかばってもらわなくたって好き勝手なことする つもりだったからよかったけどさ。入学した頃、彼の車で学校に来た時だって、全然いやな顔しないで彼に挨拶してくれたんだよ。『花森さんとはずっと友だち でいたいので、退学させるようなことはしないでください。とりあえず、避妊はきちんとしてください』って。馬鹿男子連中がさんざんやらしいことばっか言う 時に、そんなこと、覚悟なくっちゃ言えないよ」
――大声で言うことじゃないだろうって。杉本も全く……。
上総の力でも押えられた。そっと片手に触れた。
「もういい、花森さん、俺の話を聞いてくれ」
壁にもたれず、背を正した。唇を曲げたままの花森なつめに告げた。
「杉本は、学校にまだいるのか」
「休んでる。病院に行ったって桧山が言ってた」
「風邪かな」
「そんなの違うって。あいつ、杉本さんに精神科行けって言ってたでしょうが。それなのよきっと。勝ち誇ったように言ってたもん」
そうとは決め付けられないが、杉本がインフルエンザにかかって寝込んでいるという可能性はなさそうだ。
まさかこんな早く桧山先生が「評議委員失格」の烙印を押すという切り札を出すとは思わなかった。そして新井林や佐賀の対処も。見事だ。見事すぎるくらいきちんとした秩序の構築だ。
いじめ問題について、担任たる大人が断固たる反対の姿勢を見せ付け、いじめた本人にそれなりの処罰を与える。同級生たちはそれでもいじめた生徒を許そう と「努力」する。いじめられた生徒も、「広い心」の元、許そうとする。暖かいクラスの輪。ハッピーエンド。学園ドラマのラストだ。その奥に隠れたせせら笑 いを感じるのは、たぶん杉本と、上総くらいだろう。
杉本に与えられた台詞は「私が悪かったんです。許してください。もう二度と佐賀さんをいじめたりなんてしません。反省してます」それだけのはず。あとは新井林の言う通り、四月の審判を待つのみだ。
花森は上総が、杉本梨南を見捨てたと思い込んでいる。
そう思われてもしかたないだろう。
でも。
――誰が見捨てるかって！
目の前の花森なつめが、化粧をぼろぼろにしながら涙を流している。
――大丈夫だ。杉本は、生きていける。

「今から花森さん、杉本のうちに行こう」
「え？」
　いきりたっていたはずの花森が、か弱げに首を振った。もう一度涙ぐみながらつぶやいた。
「無理だよ、私、入れてもらえないよ」
「なんでだよ」
「杉本さんのうち、厳しいんだよ。先輩知ってるよね。お嬢様とかそういう人でないと友だちと認めないんだって。私みたいな格好してたら、入れてもらえないよ」
「じゃあ、家に行ったことないのか？」
　真っ赤な爪にうっすら脱色した髪。でも花森から流れている涙だけで十分、杉本の家に押しかける権利はあるはずだろう。
「でも、心配しているってこと、伝えるなら悪くはないだろう」
「そうしたら、杉本さん、さらにいじめられちゃうよ。お母さん、杉本さんをすっごく責めてるって話だもん。これ以上そんなことされたら」
　言葉にならなかった。花森は杉本のために泣いていた。
　冷静な口調を取り戻すと、上総は少し花森の目線にあわせかがみこんだ。通りすがりの人も好奇の視線を向けていく。上総が次期評議委員長ということも関係しているのだろう。向けられた波動であまりいい噂でないことは感知していた。
「花森さん、落ち着いて。今の杉本に一番必要なのは、花森さんだと俺は思う。大丈夫だよ。杉本の住所は俺も知っているから、一緒に行こう。杉本が今ほしがってるのは、嘘でもなんでもない、本当の味方なんだからさ」
「けど……」
　上総はコートのボタンを一つだけ開け、ブレザーのポケットから手帳を取り出そうとした。かばんを床に置いて、もさもさと探していた時だった。
「私、杉本さんの住所と電話番号知ってるよ」

　花森の視線が上総の肩越しに向かっている。振り返る前に声の主が誰だか気付いていた。
　――清坂氏か。
　さっきから後ろでうごめいていた人の気配。暖かかった。右隣りに来た。
「杉本さんのうち、学校からすぐ側だよ。けど立村くん方向音痴だからひとりでなんてたどり着けないよ。大丈夫。花森さん、私も付き合うからね」
　手を斜めに突っ込んだまま、上総は美里の口をぼおっと眺めていた。早い早い、口を挟む暇なんてない。　まずは、とばかりに美里はノートの白紙部分を破り、壁に当ててボールペンで書く準備をした。
「花森さんの言う通りだよ。もちろん杉本さんにとって花森さんが、一番大切な友だちだっていうのはわかるよ。でも、杉本さんの両親は、なんってっか、先入観持ってる人みたいだよ。今、花森さんが直接杉本さんの家に行っても、誤解されてしまうかもしれないよ」

　口を開きかけたが、目で制された。
「かと言って、立村くんがひとりで杉本さんの家に行ったら、さらに誤解されるに決まってるでしょ」　――清坂氏、鋭い。
　盲点だった。上総もただ杉本の家に行って直接話をしたい、としか考えていなかった。それはそうだ。花森の外見を気にする親だったら、娘の先輩とはいえ男子がいきなり現れて「お嬢さんに会わせてくれ」と言ったって門前払いされて当然だろう。
　納得顔を見てとったのか、美里は少し間を取って、続けた。
「だから、私と立村くんがふたりで杉本さんの家に行くのはどう？　花森さんもそれほど遠くないんでしょ。家で待機しててもらって、杉本さんが落ち着いた頃 に電話で連絡を入れてもらうってのはどうかなあ。たぶん、今の杉本さんは、話を聞いてもらいたいのか、放っておいてもらいたいのかのどっちかだと思うん だ。さっきちょこっとだけ、話聞かせてもらったけど桧山先生もやることひどいよね。あれは許せないわ。学校休みたくなっても責められないよ。責任はどう も、この人にもあるみたいだし」
　じろっとにらまれた。その通りなので言い返せない。
「だから、安心してね。大丈夫よ。ちゃんと立村くんに責任とってもらって、それからいい方法考えるからね。花森さん大丈夫」
　いつのまにか花森の背中に回って、美里はそっと抱きかかえるように背中をさすっていた。用意していたポケットティッシュを取り出して、顔を拭いてあげ た。しゃがみこみ、どこから持ってきたのか細いリップクリームのようなものを手渡していた。微笑を浮かべ、何度も頷いていた。
　花森が横目でもう一度、上総を見上げた。
「立村先輩、杉本さんを見捨てるなんてこと」
「誰が見捨てるかって！」
　立場の弱さが情けなくってつい、吐き出し加減の言い方で返した。
　美里が階段のところまで花森を送っていくのが見えた。何度も振り返り、確認するように頷く花森に、上総は目だけで頷いてみせた。伝わっていると、いいのだが。

　戻ってきた美里の顔は険しかった。花森をなだめている時とは大違い。緊張でぴくりとした。
「あの、清坂氏、ありがとう、あのさ」
「詳しいことはあと。教室に来て」
　腕を引っ張っていき、二年Ｄ組の教室へ引きずり込まれた。美里が自分の席について上総を手招きした。誰もいないのが幸いだ。腹の虫が鳴くのをごまかしながら、美里の前の席に座った。
「詳しいこと、聞かせてちょうだい」
　――観念しろ、ってとこだよな。
　美里の表情を恐る恐る伺った。特段、怒ったという風ではない。一度激昂したところを目の当たりにしたことがあるので、今のところは身を堅くしなくてもよさそうだ。
　真っ正面から上総の瞳を捕まえようとする。その辺逃げられそうにない。

　しかたなく上総は横座りの格好で美里に首だけ向けた。片手だけ机に載せたまま。
「どこまで聞いた」
「立村くんが杉本さんを、評議から下ろしたってとこからみんなよ」
「そうか、その通りなんだ」
　どう説明していいか、皆目見当がつかなかった。
　美里よりも花森よりも、誰よりも杉本にこのことは、自分の口から説明したかった。
　半年の間に、生徒会がらみで他中学との交流組織をこしらえ、杉本の安住の地を用意し、その上で説明するつもりだった。いきなり「お前が新井林よりもレベ ル低いから下ろすのだ」と言われても、杉本が納得するわけなかろう。きちんと杉本の顔を立てて「他中学との交流グループの中心になってほしい。だから、評 議は他の人に譲ってほしいんだ」という風に持っていきたかった。
　杉本をこれ以上傷つけたくはなかったという本音だ。
　――桧山先生のやり方は読めなかった。甘かった。
　口に出せない悔しさを唇に押し込めた。
「なに唇、変にしてるのよ。ちゃんと説明しなさいよ」
　美里の声が尖った。怒られるのかもしれない。身を竦めて小声で答えた。
「だから、杉本を評議から下ろすように、この前桧山先生のところに言いに行ったんだ」
「だからどうして」
　手を握り締め、目を閉じた。美里に言ってもかまわない範囲を探した。
「来年の評議委員長、俺じゃないかもしれないから、なんだ」
　息を少し吐き出す気配あり。じっと上総の目をにらみつけるように、わずかに顔を前に突き出した。
「新井林が評議委員長、やるかもしれないからなんだ。いや、たぶんその可能性が高いんだ」
　両手をふたつ、握りこぶし作り、美里はきちんと揃えた。上総を見据えた。
「だって、本条先輩、評議委員長はあんたしかいないって言ってたじゃない」
「俺よりも新井林の方が上だと、判断したみたいなんだ。それは本条先輩の判断だから仕方ないよ」
「けど、みんな立村くんが指名されたこと、知ってるんだよ。そんないきなり、一年生に評議委員長決めちゃうなんて、そんな変だよ」
　震える声。美里の方がかさかさした声だった。しっかりしなくては。
　声にぴんと張りを持たせた。
「もし俺が評議委員長に指名されたとしても、その次はやはり、新井林しかいないだろうし。杉本と新井林、どちらがいいかずっと考えてたんだけど、今の様子を見ると、やはり新井林の方が向いているって思ったんだ。杉本はそんなこと耐えられないよ」
「女子を甘くみるんじゃないわよ！　杉本さん一生懸命じゃない。新井林くんに委員長取られたって、もしかしたら頑張るかもしれないじゃない！　なんでそんな勝手に決め付けたりするのよ！」

　響かない声で、でも両手を握り締めたままだった。上総は目をそらさずに、ゆっくりと続けた。
「評議委員長にはできないってことだったら、そうしたかもしれない。けど、それだけじゃないんだ」
　美里は怒鳴らなかった。怒ってはいるようだけど、なんとなく言葉に詰まったようすだった。
「評議委員からいきなり外されるってこと、どれだけ惨めなことか、立村くんわかるよね。想像つくよね。あんた失格、って言われたようなもんなんだよ」
「わかってる。だけど、これ以上あの二人が同じ委員会にいたら、まずいんだ」
「喧嘩するから？　男子と女子が仲悪いから？」
　――どう言えばいいんだろう。
　「だから、杉本は本当は……」と言えればいいのだろうが、まだ時期が早すぎる気がした。第一自分で感じているだけであって、杉本はそれを認めていないのだ。このままだと杉本がずたずたに傷つくことを避けたい、それだけを言いたいのに、美里の前では言葉を選ぶ。
　美里はこぶしを二回、軽く打ちつけた。
「いいよ。立村くん、杉本さんを評議から下ろすってこと、したくて決めたってことじゃないことくらい、わかってるもん」
「そうだ。うん、清坂氏の言う通り」
　――でもまだ、今は言えない。
　生徒会長に話を持ちかけた段階の計画を話すわけにはいかなかった。たぶん応援団志望の生徒会長は、一発気合を入れて先生に持ちかけてくれるだろう。ぜひ、交流会に評議委員を参加させてもらえるよう、口を利いてくれるに違いない。成功する可能性は八割、と見た。
　まだ種蒔きの段階だ。杉本にも、美里にも言うことはできない。
「なんか隠してるよね。立村くん、いつものそんな顔してる」
「え、なんだよそんな顔って」
「ほら、ここに出てる」
　微妙に指先が触れる寸前まで、美里は上総の頬に人差し指を突き刺そうとした。手の温度で頬がぬるんだ。思わず頬をこすった。
「いいよ、信じるから」
　あきれた風につぶやき、美里は数回咳払いをした。
「立村くんきっと、杉本さんのために、そうしたんだよね」
上総がふたたび言い返そうとするのを、もういちど人差し指攻撃で制した。
「だから、さっきも花森さんと一緒に杉本さんの家に行こうって話したんだよね」
　触れるか触れないか、ぎりぎりだった。
「私、おせっかいなこと、言ってるかもしれないけど」
「いや、そんなことはないよ」
「だったら聞いて。最後まで」
　――怒ってはないみたいだな。

　コートの襟を立て、足を組み直し上総はそっと美里の方に向きなおした。
「杉本さんの家に行って話をするのは、いいことだと思うんだ。でもね、花森さんも言ってたけど、杉本さんってお嬢様だからうちの人が友だちをすっごく選ぶと思うんだよね。たぶん佐賀さんみたいな子がいい友だちだって決め付けてるところ、あると思うんだ」
　美里の言いたいことはわかる。上総はすでに花森の家庭事情を知っているので、いざとなったらそのあたりを並べ立てればいいと思っていたのだが。やはりパーマとマニキュアっていうのは、学校側からの警告プリント「不良化の兆し」を地で行っている。
「でしょでしょ。杉本さんも、花森さんをうちに連れて行ったことないって言ってたのはそこだと思うんだ。あんな不良とは遊ぶんじゃない、とか言われそう」
「確かにな。人は見た目で判断される」
「よくわかってるじゃない。でね」
　美里はさらに続けた。
「杉本さんのうちに今まで男子が遊びに来たこと、あると思う？　ただでさえあれだけ嫌われてるんだよ。なのにいきなり立村くんひとりで家庭訪問したって、びっくりされて追い返されるのが関の山じゃない。出入り禁止になっちゃうかもよ」
　全く持ってその通り。上総も頷いた。
「だから、私が女子の先輩として心配だから、様子見に来ましたってことにしてね。立村くんが刺し身のつまとしてくっついてくってのはどう？　それだったら自然だよ。二年の評議委員男女コンビってことだもん。それにまだ立村くんは次期評議委員長なんだから」
「そうだな、それは言えてる」
　細かく頷いて上総はつぶやいた。痛い言葉が響く。
「そこで杉本さんと話ができればいいよね。あんたがどういうこと話すつもりなのかは聞かないけどね。でも私がいれば、お母さんも安心して三人だけにしてく れるんじゃないかな。安心して立村くんも、杉本さんに言うべきこと言えるでしょ。私だけお邪魔虫かもしれないけど、そこだけがまんしてくれれば、ね」　ぐ いと上総の顔を覗き込む。目が合うと大きな瞳があどけなく光った。
「清坂氏、けど、どうしてそこまでやってくれるんだ」
「前から言ってるでしょ。私は立村くん担当の愚痴聞き係。それに、女子同士のことは、女子が一番良く知ってるの！」
　すくっと立ち上がり、美里はかばんを胸に抱えた。上総の袖をちょんとひっぱった。
「おなかすいたまま家に行くのは失礼だから、まず学食でなんか食べていこうよ。それから私が杉本さんのうちに電話かけて、今から行っていいですかって聞いてみる」
「そうか、そうしないとまずいか」
「あたりまえよ。いきなり行ったら怪しまれるに決まってるじゃない」
　さすが女子のことは女子が一番知っている。
　素直に上総は頭を下げた。
「すごいよな、やっぱり清坂氏は。もし清坂氏が評議委員長に指名されていたら」

　思いっきり左肩を叩かれた。美里がかばんで思いっきりぶつかってきた。
「いいかげんにしなさいよ！」
　胸に美里のかばんが載ったまま。両手でそれを抑え、美里が再接近していた。
「本条先輩がなんって言おうと、新井林くんが指名されようと、私があんたのこと、絶対認めてるんだから！　今しようとしてることだって、他のことだって、 みんな、あんたしか出来ないことしてるんだからね！　いい、泣き言なんて絶対言わないで！　評議委員長じゃなくたって、そうなんだから！」
　手をぶらんとさせたまま、上総は黙って美里の言葉を聞いていた。
　――泣かしてる、か？
　目が潤んでいるように見えたのは錯覚だろうか。もう一度軽く突き飛ばした後、美里は跳ね返るボールのようにたったと扉を開け放して出て行った。追いかけ ないとまずい。美里がいないと、たぶん上総は杉本梨南のうちにたどり着けないだろう。どうしようもない方向音痴だってことを、美里は長い付き合いゆえにす べてわかってくれている。

　言われるままに大学の学食へ寄り、軽くおにぎりを並んで食べた後、上総は電話をかけに走った美里を眺めた。何度もこくこく頷きながら緑色の公衆電話にか じりつき、時折上総の方を見やる美里。受話器を置いた瞬間、両手でピースサインを出してを見せた。ＯＫ、即、杉本家へ向かえってことだろう。
「覚悟は、いいわね」
　もう一度上総に問いただす美里。
「ああ、もちろんあります」
　雪がちらついてきた。夕方は大降りだと聞いていた。まだ二時十分前だ。
「すぐ近くだから、私の後ろにくっついてきてね」
「わかりました。清坂氏にお任せします」
「ほんと、私を信じててよ」
　美里の言葉を聞き流しながら、上総は空を仰いだ。まつげに冷たいものが乗っかったようだった。かすかな重み。細かい雪。目をこすりながら、上総はもう一度自分に覚悟を求めた。
　――俺は杉本を見捨てはしないって。

　美里の横顔にもう一度、礼を送った。
　――清坂氏と同じことを、するだけだ。
　立ち漕ぎしていた美里には気付かれなかったようだった。

その１３　ローエングリンが見下ろす

　美里の言った通り、杉本の家は学校から程近い場所だった。主に青潟市外から下宿して通っている生徒たちが住まうアパートや下宿が立ち並んでいる。かわい らしい感じのマンションあり、木造築二十年くらいの薄暗い建物あり、びっしりと密集している。雪が降っているのになぜか洗濯物は出しっぱなしのベランダも しょっちゅう見かける。建物の間、ところどころ挟まっているのが、ラーメン屋と定食屋。「カツどん定食５００円」「さば定食４６０円」など学食よりはちょっと高めだけれども量は多そうな料理が並んでいた。
「こっちで食べるってて手もあったよね、立村くん」
　大学生たちで混みあった小路を通り、自転車から降りた。すれ違うのもやっと、肩も触れた。ほとんど美里の案内に頼りっぱなしだった。
　白い息を吐きながら、美里に尋ねた。
「杉本の家ってこんな奥まったとこにあるんだ」
「住所もっかいチェックするね」
　ノートの切れ端をひっぱり出し、さっきメモした杉本梨南の住所を読み上げて直した。聞かされてもさっぱりわからない。
「たぶんあの辺りだと思うんだ。どのうちだと思う？　当ててみて」
　自転車のハンドルを握ったまま、上総は美里の指差す方向を見上げた。目の前には三軒ほど、二階建ての四角い建物が並んでいた。白、灰色、地味な色合いで、町の雰囲気にはなじんでいる。薄暗い雰囲気だけど、灯りがつけば空気も和むだろう。
　目になんとなく、ぴっとくるものがあった。
　もう一度、斜め右の建物に目をやった。
「たぶん、あれかな」
「私も、そう思うんだ」
　観た感じ、一目で杉本梨南の家だと感じるものがある。
　焦げ茶の三角屋根に、親指大の煙突が覗いている。壁は白く見えるけれども、窓はぴったりと閉じられている。背の高い草木で覆われている。よくよく見ると、鉄柵で遮断されている。
「ああいう家、どっかで観たことなあい？」
「ある。子辺町の修道院」
　煉瓦で固められた、きれいなんだけど他者が入ることを拒絶する、テレビや本で読むヨーロッパの寺院、という感じだろうか。
「教会ってこういう感じなんだよな」
　美里にはぴんとこなかったらしい。首をちょこっとかしげた後、すぐに、「ふうん、じゃあ門のとこまで行って、住所だけ確認しようよ。やっぱり杉本さん、お嬢様だったんだね」
　奥に進めば進むほど足下がぬかるむ。所々、雪で靴の裏をこすりつけてきれいにし、また進む。
「ほんっと、目立つうちだよね」

門の前でもう一度美里と顔を見合わせた。
「ほら、本当に十字架が、くっついてるよ」
鉄柵には雪がふわっと積もっていた。鍵はさすがに外れているけれども、正面に見える建物はまさに、いかにも教会といった雰囲気のものだった。翼をたわめ た白い鳥が、くちばしをつんと天に突き出したまま家に化けた感じだ。外壁は真っ白、玄関の真上にはいかにもの十字架が取り付けられている。
「杉本のうち、クリスチャンなのか」
「イメージぴったり」
意を決して、上総は鉄柵を押して入ることにした。美里も自転車に鍵をかけた後、後を追ってきた。
両脇には小ぶりの庭が雪化粧したまま待ち構ええていた。あらためて玄関の呼び鈴を押した。
白い扉がかすかに開いた。顔を二十センチくらい覗かせて、年配の女性が無表情で現れた。あわてて美里を自分の肩近くに寄せた。
「あの、先ほど電話した」
「青大附中評議委員会の清坂です」
美里がすぐに言葉を引き取って名乗ってくれた。すぐに得心したのか、女性はかすかに微笑みながらドアをさっきの二倍程度開いて、深々と礼をした。 「ありがとうございます。遠くからわざわざ、うちの梨南ちゃんのために」
――ちゃん付けして呼んでるのか。
玄関に通された。やはり想像していた通り、ちりひとつ落ちていない、生活臭が漂っていなかった。
白い靴箱の上に、大輪の芍薬が桃色に自己主張している。
「足、きれいにしてきた？」
美里がささやく。そんなこと人前で答えられるわけはない。
ちゃんと二足、スリッパも用意されていた。ふかふかの茶色い毛皮で覆われたものだった。靴下に多少穴があいていても気にすることないだろう。
「では、こちらへどうぞ。ゆっくりなさってくださいね」
先に美里を先頭に行かせて、上総は廊下、壁、すべてをちちっと観察した。壁も白く、傷みもない。床も艶やかで滑りそうだ。ところどころ銀色の枠に包まれた油絵が飾られている。
「こちらのお部屋でお待ちくださいね。お茶を用意しますから」
「あの、杉本さんは」
おずおず、美里が切り出した。
「ほんの少しだけ、お待ちくださいませ」
また一礼をして、杉本の母らしい婦人はふたりを応接間らしき部屋に案内してくれた。柔らかいスリッパでつんのめりそうになりながら、上総はふと、階段を見上げた。暗い臙脂の、スカートの裾らしきものが上にちらりと覗き、用心深く扉を閉める音がした。

　てっきり杉本が応接間で待っていると思っていたのだが、すかされた。
「ねえ、立村くん。本当に杉本さんいるのかなあ」
「いるよ、これから来るよ」
　たぶん真上でちらちらしていたのは杉本だろう。様子をうかがっていたに違いない。
「直接電話で、杉本と話したんだろう」
「うん、『わかりました、待ってます』って答えてたよ」
「俺が刺し身のつまだってことも話しているんだろう」
「一応ね。来るな、とは言わなかったよ」
　美里は短く答えた。
「で、立村くん、あのこと、どう話すつもりなの」
　答えるのが難しい質問だった。上総はもう一度、濃い紫色のカーテンと、何も描かれていない白い壁、その上に飾られた上品な絵画。すべてを眺めてみた。と りたてて何が、というわけではないのだが、妙に広々していて寒々しい。ソファーの真ん前には、木目調のステレオデッキがどんと居座っていた。
「あ、わかった」
「何が？」
「なんか落ち着かないなあって思ってたんだけど。テレビがないのよ。それなんだわきっと」
　指摘されると確かにそうだ。
「きっとステレオが替わりなんだよ」
「ええ？　でも、ふつうのうちならテレビ、あるよね！」
　きっと美里にはテレビを観ない生活なんて考えられないのだろう。杉本から聞いたことがあるけれど、いわゆる低俗な番組などは一切観ないで育ったそうだ。 上総も似たようなものなので、納得はする。たぶんクラシック音楽の番組か、オペラくらいだろう。観る必要がない環境なのだろう。

　隣りでひたすら、白い部屋の空気になじめずささやきつづけている美里。
　――どうすればいいのかな。
　自転車に乗りながら考え、玄関に入ってから口でもごもごさせ、部屋の中で熟成させている途中。
　たぶん、杉本は上総が来ることを知っているはずだ。
　さっきも二階から様子をうかがっていたことからして明白だ。
　隠れることはしないだろうが、でも今、上総とは絶縁状態だ。美里がいるからしかたなく、というのが本音なんだろうか。
　――どっちにせよ、俺は話さなくちゃいけないんだ。
　美里に問われるまでもなく、決めていた。
　――俺が引導を渡さなくっちゃいけないんだよな。
　答えは決まっていた。問題は、切り出し方だ。

どんなにやわらかく言葉を選んでも、結論は同じなのだから、情け容赦なくはっきり告げたほうがいいのかもしれない。新井林を評議委員長にする以上、協力しそうにない杉本は外す。単純にまとめればそういうことだ。そして、決めたのは上総本人だということも。
――殺されても文句言えないよな。
もっと時間があると思っていた。順番がひっくり返ってしまった以上、杉本を傷つけないですむ方法は見つからなかった。とことんとどめを刺し、すべてをあきらめさせるほうがいいのかもしれない。
――残酷だけど、それしかないのかな。
まだ、別の道を探したかった。でも言い訳だけはしたくなかった。
「立村くん、杉本さんのためにしてあげることなんだからね。きっとわかってもらえるよ」
無言で頷いた。
「いい？　まかり間違っても、杉本さんを責めるようなこと言ったらだめよ。ただでさえ杉本さんずたずたに傷ついているんだから。あーあ、できればお母さんと一緒に話するなんてことにならなければいいんだけどなあ」
――もっともだ。
お茶はまだ出てこない。後ろで石油ストーブががんがん燃えている。ちりちりと燃える音が聞こえた。汗ばみそうだったので、コートを脱いだ。
ふたりっきりで取り残されると、普段どおりの会話すらぎこちなくなる。
別に黙ったままでも平気なのだけれども、隣りの美里が沈黙を嫌うように話し掛けてくる。
「ねえ、遅いよね」
「そうだな」
短く答えると、不満そうに口を尖らせる。気に障ること言っただろうかと顔を覗き込むと、すぐにほっとした顔になる。静かなのが苦手なんだろう。
杉本のお母さんが再び現れたのは十分近く経ってからだった。優しい笑みをたたえていたけれども、頬が少しそげているせいか、淋しげだった。
「お待たせしてしまってごめんなさいね。梨南ちゃんのお部屋は二階なんですよ」
「あ、あの」
上総が口篭もると、杉本のお母さんは無言で見据えた。ほんの一瞬だけだった。すぐに微笑み直し、
「立村さん、とおっしゃるのね」
「はい」
「梨南ちゃんを、可愛がってくださって、本当にありがとうございます」
また、頭を低く垂れた。困る。美里につつかれてすぐに頭を下げ返した。
――俺のこと、知ってるんだ。
考えられるのは、杉本が親に評議委員会のことについて逐一報告しているのでは、ということだろう。

　コートをひっかかえ、今度は上総が美里を従える格好で案内されていった。階段は比較的急勾配で、杉本のお母さんは息が上がっているようだった。上まで行くと、アパートの感覚で扉が閉まっていた。壁は白かった。同じく、扉がわずかにとろみのかかった白だった。
「梨南ちゃん、お連れしたわよ」
　返事は無かった。戸がすっと開いた。
　長く髪をたらしたまま、黒目勝ちの瞳と臙脂色の長いドレスを纏った姿が覗いていた。

　杉本梨南が無表情のままじっと上総を射た。肩越しに美里を見つけたのか、小さく頷いた。最後に母親へきっと視線を向け、
「結構です。あとはこちらですべてします」
　まっすぐで、有無を言わさぬ声だった。
「そう、おふたりとも、ゆっくりなさっていってくださいね」
　無理にやさしくしたような、上ずった声で杉本のお母さんはまた一礼し、階段を下りていった。
　足音が一階に消えるまで、杉本は扉を閉めようとはせず、一切身体を動かさなかった。静まり返り、本当に何も聞こえなくなったのを確認して、美里に向かい、
「お待たせいたしました。清坂先輩」
　――俺には何もないのかよ。
　少々不満がないわけではないけれども、入室を許可された。美里に背中をつつかれ、上総は招かれるまま杉本の部屋に足を踏み入れた。

　――美術館みたいだ。
　真向かいのカーテンは、学校の暗幕めいた重さだった。色を重たい臙脂にしているのは、冬だからだろう。じゅうたんは淡い灰色で、ごみが落ちても気にならない。机、ベット、本棚、そしてお茶とお菓子がセットされている丸いテーブル。色合いがみな焦げ茶。どの家具にも花模様の彫刻が施されていた。ヨーロッパの映画などに出てくる、古い家具、いわゆる「アンティーク」と呼ばれるものに近いような気がした。傷ひとつない。丸テーブルにはちゃんと、白いティーポットとカップ、お菓子として手の込んだチョコレートが皿に散らばっていた。机の上には一輪、玄関にかざられていたのと同じ芍薬が活けられていた。
「うわあ、杉本さんって、センスいいよねえ」
　感嘆の声を上げるのは美里だった。杉本に案内されて、一番奥の椅子に招かれた。一切、上総を見はしない。当然、扉側の椅子に腰掛けることにした。「これから紅茶を入れます。アールグレイです」
　淡々と述べた後、杉本はティーポットを持ったまま出て行った。
「ねえねえ、なんかわかんないけど、すごいよねここ」
「いかにも杉本らしいよな」
　美里はじっと、星とハート型が交互に混じったチョコレートを見つめていた。和菓子を小ぶり

にしたようなデザインだった。ばらの花があしらわれたホワイトチョコレートなども混じっており、食べるのに罪悪感を感じそうだった。
「これだけ用意してくれたってことは、俺たちのことを歓迎してくれた、と見ていいよな」
「そうよねえ」
　何も考えずに楽しくおしゃべりができれば、どんなにいいだろう。カーテンで仕切られ、昼なのに淡いライトがともされている室内。どことなく夕暮れの空気 が漂っていた。美里がどう思っているかはわからないけれど、上総にとってはほっとするものばかりだった。見慣れている、という方が近いだろうか。
　――母さんがいたころの、家の中に似てるな。
　お茶飲みながらぼおっとしていたかった。
　できれば美里も同じように黙っていてほしかった。
　でも、美里はやはり美里だった。
「ねえ、立村くん、なにぼおっとしてるのよ」
「あ、ごめん」
「今のうちに言っとくね」
　忘れてはならないことを美里は思い出させてくれた。ありがたいのか、疲れるのかわからなかった。上総も改めて向かい合った。
「杉本さんにどうしても話をしなくちゃいけないんでしょ。あんた。私がずっといた方がいいの？　それとも、ちょこっと席を外してふたりっきりで話したほうがいいの？　どっち？」
　――困った。そうなんだよな。
　空のカップを見つめながら上総は言葉を捜した。
「清坂氏に隠す必要ないよ」
「でも、杉本さんはどう思うかわかんないでしょ。私がいたら言いづらいようだったら、トイレに行く振りして部屋から出るよ。合図してくれればいいからね。遠慮しないでね」
　――それの方がいいかなあ。
　心が動き揺れる。でもやめた。
「いや、その必要、たぶんない。清坂氏には、いてほしい」
　言った後で小さく頷いた。美里の顔に安堵感と不安とが入り交じり、泣き笑いみたいな皺をこしらえた。
「いいよ。無理しなくたって」
　ドアノブが軋む音がした。振り返ると杉本が、ポットに紫のカバーをかけて戻ってきた。
　美里に向かい、ゆっくりと、
「これから注ぎます」
　上総に視線を一切向けず、白い器に紅茶を注いだ。もちろん、上総の方にも交互に注いでくれたが、最後に残った「黄金の一滴」は、美里のものだった。

「清坂先輩がいらっしゃるということだったので、よかったらお持ちになってください」

　にこりともせず、杉本は裾を翻して洋服ダンスを開いた。
「一度も袖を通していないのですけれども、お気に召したら」
　洋服が大好きなのは上総も永年のお付きあいで重々承知だ。美里の眼の色が変わっている。
「え、杉本さん、お持ちにって、もしかしてくれるってこと？」
「はい、私、こういうの好きではないので。でも清坂先輩にだったら似合うと思ってました」
　――女子ってこういうことしたがるのかな。
　上総も服にこだわらないわけではない。男子同士ではあまりネタにはしない。南雲を相手にちょこっと話す程度だろうか。貴史は身なりにこだわる奴をとことん軽蔑しているのを知っている。
「三着ほどあります。よかったら隣りの衣裳室でどうぞ」
　――衣裳室？
　同じく仰天したのは美里も同じらしい。思わず顔を見合わせた。
「衣裳室っていったい」
　言葉を発したのは、上総の方。美里は何も言えず固まっている。杉本は上総を一瞥した後、すぐに美里に近づき、ハンガーにかかっているワンピースを三着取 り出した。白いベットカバーの上に、一枚ずつ広げていった。手馴れている。皺ひとつなく、一番きれいに見えるように重ねていった。
　一枚目は、赤と白の市松模様が細かくあしらわれている、膝丈くらいのワンピース。
　二枚目は黒地に白い刺繍で二匹の猫が寄り添っている様を縫い上げた、真っ直ぐなラインのもの。
　三枚目は蛍光ピンクのトレーナーと、チューリップ型につぼまったスカートのセットもの。あったかそうだ。胸に大きく、チワワの模様がプリントされている。
「うわあ、可愛い！」
　思った通り、美里の声が甘くふくらんだ。手を伸ばそうとして、一度杉本にお伺いを立てた。
「このワンピース、冬でも着られるのってあったんだね。わあ、いいなあ。こっちのワンピースもいいな。猫ちゃんすっごく可愛い！　あ、トレーナーっぽいのも可愛いなあ。これだったらタイツを色おそろいにしてもいいなあ。いいなあ、杉本さんっておしゃれだよ！」
「清坂先輩には似合いますが私は好きではありません」
　冷たい言い方を変えず、ハンガーを手に美里へ近づき、そっとあわせてみる杉本。いかにも、洋服屋店員のようである。すぐに立ち上がり、美里も　美里が受け取り杉本と顔を見合わせた。
「鏡、見ますか」
「あ、嬉しい、ありがとう」
　上総はすでに存在を一切ないものとして扱われている。仕方ないのでティーカップを持ち上げ、すするふりをしながら二人を観察した。美里とこずえ、というパターンだったら何度かみたことがあるが、杉本と美里、というのはかなり意外で、でも愛らしかった。
「でも、悪いよ。だってこれ杉本さん、一度も着てないんでしょ。もし着てみて気に入らないってのだったらいいけど、新品じゃない！　この前雑誌にも載ってたけど、このワンピースすっご

く高いよ。私、母さんに頼んだけど買ってくれなかったもん」
「いいんです。私が好きでないんですから」
鏡を美里とふたりで見つめながら、杉本は寄り添い続けた。
「私には今着ているようなワンピースが一番似合います。自分の好みは知ってます」
「でも、どうして今こういうのを買ったの？　杉本さんが選んだんじゃないの？」
「親に押し付けられました」
　鏡の中に映る、臙脂色のドレス姿。裾を直すしぐさをし、美里にきっと向かった。
「先週いきなり私に着るようにって命令したんです。私がこんなのを嫌っていることを知ってて こういうことするのですから」
「知ってて って？　お母さんが？」
　恐る恐るといった風に、美里はハンガーを受け取り赤白市松模様のワンピースを撫でた。
「そうです。こういう服を着ると、佐賀さんと同じ『ふつうの子』になれるからだそうです」
　言葉を少し怒らせて、杉本は襟を直しながらつぶやきつづけた。
「よくわかりませんが、『ふつうの子』でなくてはいけないそうなので、今私が着ているような気品のある服は、着てほしくないそうです。『ふつうの子』が好 きなものをもっと聴きなさいってことで、せっかくクリスマスに聴きに行くつもりだった第九のコンサートも行けなくなりました。佐賀さんみたいな『ふつうの 子』が好きな、下品なアイドル歌手のコンサートに行けと言われました。冗談じゃありません。個人の侵害です。許せません」
　――『ふつうの子』か。
　たぶん杉本には、美里に似合う服など一切似合わないだろう。
　なんとなく確かめたくなった。上総は言葉を挟んだ。
「清坂氏、一度、着せてもらえばいいよ」
「え？　立村くん」
「清坂氏が着たとこ、なんとなく、見たいなと思ったんだ」
　言葉は軽いけれども、意志を込めた。
「清坂先輩、よかったら隣りのお部屋でどうぞ」
　一切上総の方を見ない。露骨に勢いよく背を向け、美里の背を押していった。そこまで嫌わなくてもよかろうにと、上総はほんの少し、ため息をついた。ひとり取り残された。

　部屋の住人の前ではそうじろじろ眺めるわけにもいかなかったが、ベットにかかったレースの厚みや、手を滑らせて感触を楽しみたいビロードのカーテンと か、化学雑巾を使って磨いているであろう……単に上総のうちがそうだったからでもあるが……椅子に浮き出た木目、ひとつひとつが身体に添ってきた。男子の 友だちとはよく部屋で遊んだりしたけれども、上総の日常とは異なる空気やつくり……兄弟姉妹の存在とか、漫画本の山とか、アイドル歌手のポスターとか……に戸惑い、落ち着けなくなることが多かった。親戚のお姉さんの部屋も覗いたことがあるけれど、やはり同じ安っぽい雰囲気は否めなかった。どうも、匂いが合 わないのだろう。
　杉本の部屋が迎えるものは、みな、上総の日常と同じ空気だった。

もちろん怪しい写真集とか、数学の追試答案とかなんとか、男子の日常品とは異なるだろう。色合いだって全く違うだろう。もっと上総の部屋は殺風景だ。少 女趣味という言葉そのものの杉本の部屋で、なぜこんなに落ち着けるのかわからない。ただ、座っている椅子は腰に優しいし、さっきひとつつまんだチョコレー トは濃くておいしいし、紅茶も少し冷めかげんだったけれど上総の味わい好みだった。

――清坂氏の部屋ってどんなんだろう。

たぶん正反対だろうとは思う。さっき美里が「かわいい！」と連呼していた赤と白の市松模様ドレス。似合うだろうな、と過去の美里の映像をめくってみてそ う思う。ただ、あの服を着た杉本梨南の姿は一切想像できなかった。似合わない、というよりも、この部屋にきっと合わない。

――やっぱり杉本は、人形になるべきだったんだ。

ほどいたままの長い髪。きれいに揃えられていて、市松人形に似ていた。

規則正しく、少しロボットのような振る舞いをするしぐさも、みな、つくりのしっかりした人形のよう。

――この部屋が、着せ替え人形の部屋みたいなものだったら、まさにぴったりだよな。

隣りの部屋で何を語り合っているのかはわからない。聞こえないのは防音がしっかりしているからだろう。上総は紅茶を飲み終えて、何気なく天井を見上げた。上のシャンデリアが自宅と似ていると思いながら。

――あれは、いったい。

ベットの枕側。真上。

額縁のようなものがたくさん、貼り付けられているのが見えた。立ち上がり、ベットの側からもう一度見上げた。正確な数はわからないが、だいたい六枚ほど同じ男性のポーズが続いていた。ドイツ語で「ローエングリン」と読めた。背伸びしてもう一度読んでみた。

――ワーグナーの「ローエングリン」だ。

一枚は日本の雑誌から切り抜いたものだろう。右端にわずかながら、日本語の活字が残っていた。二枚目は大きく、同じ男性オペラ歌手のポーズだった。天を 仰ぐようにして、口を大きく開いている。どの写真も同じ歌手のものだった。ちょうど、枕から見上げることができるように、張り巡らされていた。

――ドイツ版「鶴の恩返し」って話だよな。

――ローエングリン様、ってこの歌手のことなんだ。

スリッパを履いたまま爪先立ってもういちど顔を覗く。杉本の惚れぬいた夢の恋人だというのは、本人の口から直接聞いていた。ローエングリン様以上の男子 はこの世にいないのだそうだ。ローエングリン様のレベルからすると、上総のルックスは下の下だという。別に腹も立たないが、どういうレベルなのかは見極め ておきたかった。

じっと見据える。にらんでみる。繋がった。

――やっぱりそうか。

たぶんドイツのオペラ歌手だろう。顔かたちはくっきりとして、目鼻立ちもよく、身体つきも敏捷そう。がっちりした体格だ。目の色は濃い茶。まだ二十代か三十代の前半だろうか。怒りに

満ちた表情はどこの場面だかわからないが、いつか見た誰かの姿に生き写しだった。
　――杉本、毎日こうやって見上げてたのか。
　――ローエングリン様を。
　白いレースのベットカバーが、枕の方だけこんもりと膨らんでいた。そっと触れた。撫でた。もう一度見上げると、ローエングリン一枚からじっとにらみつけられた。
　どうしようもなく苦しかった。
　天井のローエングリンを全員額縁から引きずりだしてベットに菱本先生ばりに正座させて説教してやりたかった。

　じっとにらみ合っている間に、美里のお着替えは終わったらしい。ノックなしで戻ってきた。

　慌てて椅子に座ったが杉本には冷たい一瞥を食らわされた。
「ごめん、つい」
　無視の姿勢は一切変わらず、杉本は壁に埋め込まれた大鏡に美里を案内した。
「やっぱり清坂先輩はこういうお洋服が似合います。私は着ませんからどうぞもって帰ってください」
「そんなのできないよ！　だって、後輩から高いものをもらうなんて悪いよ」「いいえ、私が嫌いなものを差し上げるのですから、感謝しなくてはならないのは私の方です」
　また遠慮と押し付け合いのシーソーゲームだ。口出しはしない。横目で美里を眺めた。思ったとおり、赤が映えてどことなくかわいらしい感じがした。いかに もお出かけ、といった風の格好よりも、ちょっと砕けた感じの普段着の方が合いそうだと、前から思っていた。良く見るとスカートの裾には一握りほどのフリル が施されている。杉本だったら、もっと長く、たっぷりとしたものを好んだろう。
「わあ、ほんと可愛いよね。でもでも、杉本さん。これはもらえないよ」
　再度、きっぱり美里は告げた。
「お母さんが買ってくれたんだもの。友だちに押し付けたら傷ついちゃうよ」「今は敵ですから」
　全く響かない声で、淡々と続ける杉本。波がなかった。上総をちらっとうかがった後、鏡に向い発砲した。
「私の頭がおかしいと思って、無理やり病院に連れて行ったり薬を飲ませようとする人間を、信じることはできません」
「杉本、病院って」
　思わず声が出た。聞かねばと、気持ちが焦った。
「私はおかしくありません。自分が良く知っています。でも薬を無理やり飲ませようとする人を信じなくて、何が悪いんですか」
「病院に、行ったのか」
　静かに杉本が上総へ向き直った。感情を無にしようとして失敗している瞳だった。

「行きました。でも私はおかしくありません」
「薬が、出たんだろう」
「医者も誤診することがあると聞いてます」
「杉本、俺は別にお前を攻めてるわけじゃないけど、でもさ」
「私は狂ってなんかいません」
　声がかすかに、本当に微妙な程度、尖った。

　上総はこれ以上言い返さず、視線を美里ひとりに絞った。
　こういう時南雲だったら「わあ、似合う似合う」と拍手するのだろうし、貴史だったら「けっ、いくら美里が化けても鈴蘭優ちゃんにはかなわねーよーだ！」と鼻で笑うだろう。上総はただ、気持ちだけ満足した顔でにやにや眺めるだけだった。
「でも、着せてもらうだけでも大満足！　ね、ちょっとここでひとりはしゃぐのも恥ずかしいから、あとの二着、向こうで着せてもらっていいかな。ちょっとひとりで楽しみたいんだ」
　上総に全身向けて、くるっと一回転した。小さい子がスカートを膨らませるのを楽しむように。
「まだ着る服、ありますよ」
「ううん、ちょこっとだけひとりで、見たいんだ。杉本さんごめんね。ちょっとだけ、着せてね」
　にっこり微笑み、美里は上総へ真面目な視線を投げた。すぐに笑いでごまかすと、ベットの上に投げ出したままのハンガーを持ち、いそいそと部屋から出て 行った。杉本の返事も待たなかった。別に止めなかったのは、杉本もかまわない、と判断したからだろう。いくら後輩とはいえ、我が家のように衣裳部屋を利用 するのは、どうかと思う。
　背を向けていた杉本が、ゆっくりと上総を見据えた。言葉はなかった。
　ふたりっきりだった。

　予定外のふたりっきり。もっと息が詰まるかと思っていた。
　椅子から動かずに上総は言葉を発した。
「杉本、話したいことがあるんだ」
「私は先輩ともう話をしないと決めました」
「今だけだ。清坂氏が戻ってきたら、もう話さないから、聞いてほしいんだ」
　返事を待たなかった。目を再び鏡に向け、背を伸ばした杉本に、上総は近づいた。さっき美里とふたり映しあっていたような感じで背中に向かった。
　杉本は逃げなかった。背を向けて一点を見つめていた。
「評議委員を下ろされることは、もう聞いたよな」
「大丈夫です。来年四月になったら元に戻ります」
「いや、戻らない。もう決まっていることなんだ」
「どうしてそう断言できますか」

視線を鏡で重ね、正面を見据えながら上総は言い切った。
「俺が、桧山先生に、杉本を評議から下ろすように頼んだからだ」
答えはなかった。ただ、じっと鏡で自分の顔をにらみつけているだけだった。上総を片隅でちらと覗き、ふっと唇で息を吹いた。
「そうですか」
「でも、もし今から俺の条件を飲むことができるのならば、もう一度桧山先生に交渉して、杉本を評議に戻してもらうように話すことはできるんだ」
鼻で笑うだろう。思った通り杉本は冷たく吐き捨てた。
「頼み込んでまでしたくはありません。選ばれてこそです」
「無理なんだ。最後まで聞いてくれ」
鏡に映る自分の姿は、無理して虚勢を張っているのが見え見えだった。杉本にもそれは丸見えだろう。分かっていても、杉本の背がぴんと伸びているから無理 してしまう。どんな時にでも、杉本は自分を乱さぬよう、必死にこらえているはずだ。上総が事実を告げた時も、他の子だったら泣き崩れるか噛み付くかのどち らかだろうに、しっかと立ったまま冷静を保っていた。
思いっきり、泣かしたかった。
「もし、杉本が来年以降、新井林を中心とした評議委員会に協力することができるかどうかが条件のひとつだ。できるか？」
「なんで新井林中心なんですか。私が頭を下げろというのですか」
「もうひとつの条件は、新井林と佐賀さん、それと桧山先生に頭を下げて、許してもらうように頼むこと。それもできるか」
「私はなんも悪いことしてません。なぜあやまらなくてはならないのですか。先輩が所詮ばか男子のひとりだとはわかっておりましたが」
声がだんだん震えでこわばってきている。おそらく他人には読み取れないくらいわずかだろう。
「杉本が謝らないのだったら、評議委員会としては、受け入れることはできない。新井林中心の体制を、杉本がしっかり受け入れて、一緒に手伝う覚悟があるかどうかってことなんだ」
「だからなんで、私が新井林なんかに謝らなくてはならないんですか！」
振り返り見つめあった。上総の顔をじっとにらみつけた。鏡を通してではなく、一対一で真っ正面から。表情はぎりぎりこらえているけれども、崩壊するのは時間の問題だ。息が詰まりそうだった。
「新井林も、佐賀さんも、今のやり方では一切相手にしてくれやしないんだ。ほんのわずかでも、あの二人に受け入れてほしいんだったら、あの二人に合うよう に自分を作り変えるしかないんだ。桧山先生に許してもらって融通利かせてもらうしかないんだよ。もしそれがいやだったら」
大きく息を吸った。自分の眼に涙がたまりそうだった。こんなところで泣いたら恥だ。杉本の大きな瞳は針のような鋭さを持っていた。
「評議委員会から外れて、別のところで迷惑かけないようにするしかないんだ。杉本が評議委員

会以外で楽になれる場所を作るつもりでいるよ。でも、評議委員会の中だけはだめなんだ」
　呼吸が苦しくて、心臓が跳ね上がりそうで。言葉が途切れる。
　相変わらず杉本は冷たい瞳のままだった。
「ばかばかしい、立村先輩、いったい何をわけのわからないことをおっしゃていらっしゃるのですか」
　無言で杉本は席に付いた。すっかり冷めたであろうティーカップを静かに口元へ近づけた。上総の斜め向いで、ベットを真正面に置いた状態でいた。
　どうしようもない。どんなに言葉へ砂糖をまぶしても、答えは一緒。
　口に出していくうちに、考えがまとまり、結論を出していくだけだった。
　――杉本にこれ以上、憎ませてはいけないんだ。
　上総へ激しい怒りと憎しみでもだえている最中に違いない。杉本の瞳の色を読むのはたやすい。心の中の声も、指先と咽元と、かすかなしぐさですべて読み取ることができた。杉本に対してだけだった。
　――俺がローエングリンだったら、もっと別のやり方もあっただろうに。
　そっと天井を見上げ、すぐに戻した。
　――せめて、新井林の顔と身体と背丈があれば。
「来年、評議委員長になるのは、新井林だからだ」
　天井のローエングリンにつぶやいた。
「俺がお前の兄だとしたら、新井林の下にお前を置いたりはしたくない」
　頑なな瞳と唇がきりりと引き締まっていった。言葉が出ないままだった。
「このことを決めたのは俺ひとりだ。新井林も本条先輩も、佐賀さんも桧山先生も関わっていないんだ。だから、俺だけを憎め」
　最後に、一言告げた。
「俺だけは杉本を嫌いにはならないから」

　美里が戻ってきてからは、ふたたび一切無視の状態が続いた。洋服のネタでよくこれだけ続くかと思ったが、ある程度落ち着いたところでいきなり杉本が机の 引き出しに近づいた、いわゆる学習机ものではなかった。ひっぱるところにも細かな花模様が掘り込まれている年代ものだった。
「清坂先輩、ごらんになられますか。私の愛する人を」
「え、杉本さんに彼氏いたの？」
　すっとんきょうな声を上げた。彼氏、というのが似つかわしくない。やはり笑わずに引き出しを開いた。一冊、ファイルを取り出した。
「現実の男子は立村先輩を含めて馬鹿ばかりですので相手にはしません。こちらをごらんください」
　――馬鹿か、しょうがないよな。
　テーブルに戻り、クリアファイルを開いてすっと美里に差し出した。チョコレートはだいぶ減

っている。あわてて最後の一つを美里は放りこみ、ファイルを受け取った。上総にも見えるよう、ページをめくった。
「うわあ、外人さんばっかり！　切り抜きでしょ。これみんな」
「そうです。小学校の頃から集めていました。この人以上に美しく素晴らしい人はおりません」
　ちろっと上総に視線を向けた。どことなく、意識的だった。上総も受け止めたが言葉にはしなかった。
「ねえねえ、これはこれは？　英語の記事まで取ってるの？」
「はい。この人の活動拠点は主にドイツですが、よくアメリカ公演にも参加されるんです」
「ひゃあすごおい。杉本さん、はんぱじゃないね。貴史の鈴蘭優ちゃんファンなんて、目じゃないね」
「七歳の頃から集めてますから」
　誇り高くつぶやいた。またちろりと視線を向けられた。今度はあからさまに、見据える感じだった。
　――そうか、そういうことか。
　ひとりごちた。佐賀はるみの言葉を思い出し、苦笑した。

　――梨南ちゃん、好きな人と仲良くなるとかならず意地悪するんです。好きになればなるほど、そうなんです。赤ちゃんみたいに。

　恋愛ではないだろう。外見ですでに上総は対象外だったらしい。でも、懐いてはくれていただろう。自分の味方だと信じてくれてはいただろう。
　今でも上総は杉本を見守りたいと思っている。それは変わっていない。
　でも、杉本にはそれが通じないだろうということも、覚悟していた。
　――俺に裏切られたと、きっと思ってるな。
　――きっと新井林も、佐賀さんも同じことされたんだろうな。

　深いことを考えずに受け止めれば、どう考えたって嫌がらせ以外のなにものでもない。手のひら返した相手に対して、意趣返しをしているようにしか見えな い。なんらかのきっかけで杉本が、新井林や男子たちにそういう振る舞いをするようになったのだろう。新井林もたまったもんじゃなかっただろう。杉本の本心 がどこにあるかは別として、不愉快でならなかっただろう。同じく佐賀も、同じこと考えただろう。赤ちゃんのすること、と理由付けする事以外見つからなかっただろう。
　上総も、もし杉本以外の相手にされたことだったら、真っ向から憎むだろう。かすかな悲鳴のようなものを感じなかったら、罪悪感一切なしに杉本を評議から下ろし、言い訳もしないでいただろう。
　上総にそれはできなかった。
　出会った時から、聞こえていた。

　追い詰められておびえている野良猫のような瞳と、爪のしまい方を知らない前足を知っている。

「じゃあ、いきなり来ちゃってごめんね。また来るね。今度はひとりで！」
　美里の切り上げ文句で、上総も慌ててコートを外した。
「その時は今度こそ、洋服を持っていってくださいね」
「うん、その時はね！」
　明るい。上総ひとりだとよどんでいた空気が清浄化されたみたいだった。
　杉本は部屋の戸口まで案内してくれた。階段を下りようとはしなかった。
「あ、ちょっと、お手洗い借りていい？」
　美里がトイレに立った隙に、上総は杉本を無理やり捕まえ、ささやいた。
「花森さんがお前のことをものすごく心配している。だから、すぐに電話かけてあげたほうがいいよ」
「わかってます、そんなこと」
「それと、これなんだけど」
　渡しそびれたものをかばんから取り出した。
「これを、冬休み明けまでに、チェックしてほしいんだ」
「どういうことですか。まだ私に用があるのですか」
「あるよ。俺も、三月までは評議委員だ」
　含みを持たせた。茶色い封筒の中から、一冊、「奇岩城」のシナリオを取り出した。
「一月から撮影始めるから、それまでに、おかしいとこないかどうか、ざっとチェックしてほしいんだ。あと、これは『奇岩城』の原作な。読み比べてみて、杉本として音楽とかどういうのがいいか、こっそり教えてほしいんだ」
「どうせ私を評議から下ろすとおっしゃられたのに」
「下ろされるのは杉本だけじゃない。評議委員なんて、いつどうなるか、わからないんだ」
　たぶんわからないだろう。それでよかった。
「俺は、杉本の感覚を信じてるんだ。それだけだ」
　服を調え戻ってきた美里とふたりで階段を下りた。途中で見上げると、臙脂の裾がちらちらと覗いていた。

　お母さんはまた、ふかぶかと頭を下げて見送ってくれた。
「変わった娘ですが、どうかこれからもよろしくお願いいたします」
　美里と、次に上総へ眺めに視線をとどめた。
「こちらこそ、どうもごちそうさまでした」
　明るく答える美里を横目に、上総はお母さんの瞳にどんよりした色を見た。すっかり疲れ果てた風だった。この人が桧山先生に呼び出されてショックを受け、 近所の人に土下座して謝って廻ったという話。きっと本当だろうと思えた。杉本が追い詰められて壊れそうになっているのは、

きっとその繋がりなのだろう。ど うか、これ以上杉本を壊さないでほしかった。
　杉本の味方は、花森なつめとローエングリンしかないないのだ。

「ね、立村くん、杉本さんとはうまくいった？」
　終日笑顔で振舞った美里。突然かくんと大人しい口調に変わり、あせった。
「うまくいったって、なにを」
「私が着替えてる間、真面目に話してたでしょ」
「聞いてたのか」
「聞こえたよ。だって、すぐに声が聞こえるんだよ」
　――なんだ、防音されてなかったのか。
　拍子抜けした。それほど大きな声で話した記憶はないけれどきっとそうなんだろう。
「話したよ。評議委員のことと、それと」
　ローエングリンのことを言う前に、美里は遮った。
「さっき衣装室に連れてってもらったでしょ。その部屋にはね、写真がいっぱい貼ってあったんだ」
「写真ってどんな？」
「ファイルに挟んでいた、オペラ歌手の外人さんよ。見てて思ったんだけど」　言いよどみ、周りを見渡した。別に知り合いがいるわけでもないのに妙である。
「新井林くん、そっくりだね。どの写真もみんな」
　はにかむようにうつむき、唇を噛んだ。
　――清坂氏、気付いたんだ。

　あらためて思った。美里と別れて杉本と付き合い、新井林と交渉しないでよかったと。
　天井の「ローエングリン」コレクションを一目見て、上総はすべて理解した。
「ローエングリン」と言う名はすべて、たった一人の男を表している象徴のようなものだということを。
　――新井林健吾、あいつだ。
　何度も確認していたとはいえ、明らかな証拠を目にするとやはり心がひび割れる。美里が見たらきっと同じことを思うだろう。こずえがきたら、やはり天井の「ローエングリン」を発見するやいなや叫ぶだろう。
「これって外人版新井林って感じだよね」と。
　ローエングリン様とつぶやき、寝る前には天井を見上げ、愛するローエングリン様の写真に思いをかけて眠る。目覚めるといつも、大好きなローエングリンが見下ろして、微笑んでくれる。
　杉本が恋することのできる、たった一人の男性だ。
　ローエングリンの似姿ではなく、新井林健吾の似姿。
　きっと杉本は気付いていないに違いない。まだ自覚もないだろう。新井林へかすかな想いを隠しているなんて、絶対に認めはしないだろう。新井林も佐賀も、 みな丸見えなのにだ。でも杉本

はひたすら、想いがローエングリンひとりだと信じきっている。ローエングリンを通して、ひたすら白鳥の王子を追い求めている わけだ。そんな深い思いを、いくら嫌われたからといって簡単にあきらめることはできない。
　ローエングリンでなくては、だめなのだ。
　なよなよとして不細工で、蹴りを入れたら一気に骸骨化して崩れそうな、立村上総ではお呼びではない。
　――ローエングリン。あの子を、守ってやってくれ。

　守られている自分を思い出し、上総は美里に尋ねた。
「清坂氏、ありがとう、何か俺にできることあったら言ってほしいんだけど」
　ローエングリンを求めなくても、いつも側にいてくれた美里。
　求める想いを返してやれない自分が歯がゆかった。
　――やっぱり、クリスマスかな。
　驚いた風に美里は上総を真ん丸い瞳で見つめた。手袋を指先軽くもみ、自転車を引きながら道路に出た。まだ自転車には乗らなかった。
「出来ることって、なんかとんでもないことお願いしちゃうよ」
「月に連れてけとか、宝石が欲しいとか、そういうんだったら困るけど」
「ううん、やだ、変なこと想像してたでしょ、立村くん」
　ほどけた微笑みで、美里が上総のハンドルに手をかけた。耳もとでささやかれた。耳を疑った。
「それなら、品山に連れてって」

　美里と手を振り分かれた後、上総は自転車のスピードを全開の上、「おちうど」へ向かった。あそこのおかみさんは女子が好きそうな和風の小物を安く売ってくれる。変なものをプレゼントするよりは、やはり大人の人がきっちり確認してくれたものの方がいいはずだ。
　――うちに帰ったら次はスーパーで買出しだな。時間はまだあるから大丈夫か。料理は俺ひとりでつくるからいいとして、父さんはうちにいないからまあいいか。終業式まであと三日。徹夜だな。

その１４　オペラグラスをたたむ

　部屋の掃除や買出しや、家での仕事は山のようだった。いきなり部屋の片付けを始めた上総に、父もいぶかしげな顔をしていた。特に何も言わなかった。一足 早い年末大掃除だと思っているのだろう。正月になったら母も泊りにくるから、かんしゃく起こされないように、と先回りしていると思っているのだろう。そう 思わせておけばいい。
　――どうせ、二十四日は父さん、仕事だし。
　ちょっと不安だが、美里へのプレゼントも「おちうど」のおかみさんに見繕ってもらい手に入れた。抹茶色に金粉のぼかしがかかった、ちりめんのふくさだっ た。なんでも先日、とある日舞の会で蒔物用にもらったという、なかなか高級なものらしい。もう少し美里には派手な方がいいのではと本当は思った。なにせ赤 と白の市松模様ドレスがお似合いの相手だ。もう少しでそう言うところだった。
「あら、いつも連れてきているあの品のある女の子でしょ。かあさくん」
　――完全に勘違いしてるよ。
　どうやら、杉本梨南に渡すものだと思い込んでいるらしい。ここで妙な言い訳をしようもんなら、母にばれて何を言われるかわからない。二股かけていると思われてもしかたない。口をもごもごさせているうちに、おかみさんにあっさり説得されてしまった。
　――しょうがない。清坂氏が気に入らないなら、あの人のことだ、はっきり言うだろう。
　とにもかくにも、プレゼントは引き出しの中。あとは二十四日用の料理を見繕うことにしよう。外で大人のように、高級なディナーなんて用意できるわけな い。かといって、知り合いの多い自分の町でうろうろして、後々噂になるのも面倒だ。それなら家の中に連れてきて、ゆっくり話をしたりするのが一番、楽しい ような気がする。
　――品山に連れてって、か。厳しいこというよな。
　ごみを出しに玄関を出て、空を見上げた。街灯の光がまあるく広がり、時折瞬いていた。
　――クリスマスは、あさってだ。

　学校内の飾り付けは、主に各クラスの規律委員が仕切っていた。当然、二年Ｄ組は南雲の指示により、休み時間および自習時間……午前中の授業はほぼそう だった……を利用して行われた。ペーパーフラワーのひいらぎとポイントセチアを大量にこしらえ、背の高い男子連中が廊下と教室の壁際にどっさり貼り付け た。金色のリボンをぐしゃぐしゃに巻き付けるのもなかなか、しゃれていて見栄えがした。
「いかにもクリスマスムードって感じだな、けどな」
　次期規律委員長・南雲秋世のお言葉は続く。
「俺はどうせ仏教徒だ。祝うべきは正月だ」
　――今年のクリスマスだけの話だろ、どうせ。
　隣りで聞かされた上総は言葉に出さず頷いた。
　南雲の愛しい恋人・奈良岡彰子とが、同情すべき事情によりクリスマスイブを一緒に過ごせな

いという事実をすでに聞かされている。
　上総はポケットから、ＦＭラジオでエアチェックしたテープを取り出し、机の上から南雲へ滑らせてやった。もちろん、曲名とその由来に関する上総直筆のライナーブックもセットでだ。
「うわあ、ありがとさん！」
「一足早いクリスマスプレゼントってとこかな」
「俺の気持ちをわかってくれるのは、りっちゃんだけだよ」
　四時間目が終り、クラスの連中はだいぶ散らばっていた。女子グループがまだ固まって、不穏な会話を交わしている。いろいろ事情があるのだろうが、男子と しては関わらない方が身のためだ。目でその意味合いを伝え、ふたり、生徒玄関手前のクリスマスツリーに近づいた。かなりどでかいもので、天井まで届きそう な代物だった。こういうところに設備費を使っているのだろうかと思う。「おいおい、勘違いしてるぜみんな。これは七夕の笹じゃないんだって。なあ、りっ ちゃん、願い事書いてつるすなんてなんか違うよな」
「それもまた一興、って奴だよ」
　小さい紙に「成績がよくなりますように」「好きです！」などなど、短冊ののりで細かい葉の間にはさみこまれている。
「来年はそれでいくか。クリスマスツリーに願い事を書いておくと、かないますよってさ」
「それいいかもな」
　南雲は「ジングルベル」を口笛で吹きながら、かかっているオーナメントに手を伸ばした。
　真っ赤なフエルトで愛嬌たっぷりにこしらえたサンタクロースのマスコットや、ビーズで細かく細工を施した長靴など、いろいろだった。指先で撫でているのは、目を閉じて微笑んでいるお下げ髪のサンタさんマスコットだった。
「これ、彰子さん好きそうだよなあ。もし二十四日がＯＫだったら、こういうのを後輩に頼んでたくさん作ってもらってさ、プレゼントしようって思ってたんだ。規律の一年に、手芸得意な子がいてさ、いくらでも作ってくれるって話してたんだ。だからさ」
　――こういうのでよかったのか？
　あらためて、自分の選んだプレゼントを思い起こす。
　根本的に間違っていたんではと、あらためて思う。
「ところでさ、りっちゃん、ちょっとだけ付き合ってもらえないかなあ」
「どこにだよ」
「三年Ａ組に」
　顔がひくついたのを気付かれないようにうつむいた。足下をぐりぐりさせて何気ないふりをした。
「何かあるのか」
「うん、二十四日以降の後片付けをいつにするか、日取りを決めるんだ。それで相談に。本条さんと違って、規律の先輩たちは素直に青大附高へ進学だから、いくらでも手伝ってくれるってさ」
　後片付けは冬休み中に行うということらしい。そうでないと困る。一月以降の「奇岩城」ビデ

オ撮影に、クリスマスオーナメントが残っていたらしゃれにならない。
「俺は廊下で待ってるよ」
「あれ、本条先輩とは、いいのか？」
　ちくりとする言葉だ。
　――いやだよなんて言えるかよ！
　できるだけ廊下で顔を合わせないようにしてきたつもりだった。新井林との対決後に一発やられてから、約束どおり一切口を利いていない。避けているわけではないけれど、そう言いたいけれど。　南雲の口調に邪気はなかった。さりげなかった。
「じゃ、つきあってちょうだいよん。りっちゃんさまあ」
　女子っぽく、甘えた声を出す。
「わかった、それなら廊下にいるよ」
　繰り返し、三階に上がった。行きつ戻りつしていた三年Ａ組の教室だった。

　教室扉は開け放たれていた。まだ十人くらい教室でだべっている。響く声で、本条先輩がいるのはわかった。
　三年Ａ組名物の「クラスメートひとりひとりのポートレイト」がずらっと張り巡らされているのとか、赤いペーパーフラワーが口に全部貼り付けられているとか。やはり、本条評議委員長のやることは、一味違う。夜中、ひとりで教室にはいたくない、怖い雰囲気だ。
　南雲ひとりが教室に入っていった。戸口の側でちらっと覗くと、お化粧道具を持ち出してぱたぱたやっている女子が数人混じっていた。南雲はそのひとりに礼 をして、二言三言、話をしていた。片がついたのか、また一礼し、次に本条先輩の側に近づいた。礼はしないですぐ、本題に入ったようだ。
　――見つかりませんように。
　上総は窓辺付近に張り付いた。ここだと、うまい具合に様子をうかがえるし、姿も目立たない。
　自分の中でも、本条先輩に今まで自分のしたことを、どう説明したらいいのかが判断つかなかった。
　すべきことはした。本条評議委員長体制から新井林体制へすんなり移行できるよう、邪魔者……と、思われているのだろう……は上総の責任ですべて除去した。「評議委員会」の中にとどめるにおいて、上総の思いつく限りのことは、確かにした。
　杉本を切り、新井林を評議委員長候補に仕立てるという方法で、本条先輩の求めている評議委員会を守るよう、形を整えた。本条先輩の望むものを、上総は精一杯写し取り、実行したつもりだった。
　――本条先輩が俺を認めることは、たぶんない。
　やり方そのものを統一することはできる。
　大多数の「ふつう」の人たちの迷惑にならないように。
　でも、日々杉本が感じている言葉や感情を、嘘だとは言えない。

杉本と上総が日々、針のような視線を突き刺され壊れそうになるあの傷みを。
伝え方がわからなかった。また、張られた頬の痛みが蘇り、奥歯をかみ締めた。

教室から出てくる三年男子のひとりが
「おいおい、本条の『弟』がいるぜ」
とわざわざ大声で知らせていた。あわてて隠れようとするが、タイミング悪く、南雲と話をしちえる本条先輩と目が合ってしまった。
めがねを外したまま、横目でちろっとにらんだ感じだった。
すごんでいるのかもしれなかった。笑みはない。
呼吸を止めて、ぴくんと上総はうなづいた。
一応、礼のつもりだ。
一瞥された。すぐに本条先輩は南雲に向かい、二言、三言話し掛けていた。

「りっちゃん、おまたせさん」
階段を逃げるように降り、心臓が高鳴るのを押えるため呼吸を整えた。
「本条先輩と、話、してたよな」
「くりゃあいいのに」
南雲には、本条先輩とのいさかいについて、詳しい事情を話していなかった。
決定的に泣く寸前の場面は何度か見られているけれど、何がどう起こってどういう出来事に発展したか、などは全く説明していなかった。南雲も聞いてこなかった。気付いているかどうかは疑問だが。他の連中のように、そういうところ鈍感であれと祈るのみだ。
――気付いてないよな。
南雲はジャンバーを羽織りながらぶるぶるとひとふるいした。
「でさ、りっちゃんに本条先輩の伝言なんだけど」
あいかわらず、さっぱりした笑顔だった。たくらみごとはなさそうだ。
「今日の五時半に、青潟駅前に出て来いってさ。もちろん、私服着用のこと」
完全、身体が氷柱と化した。
指先が冷え切る。

「俺にか？」
言葉が震えそうだった。自分でもわかるくらい、背中ががくがくきている。南雲の顔に、気付いた形跡はない。そのままさらりと続けた。
「そうだよ、行くんだろ？」
どうする行くのか？　という疑問ではない。南雲は上総が「駅前に行くもんだ」と思い込んでいる。上総が本条先輩に「これからお前とは口を利かない」と宣告されたことを、たぶん知らないはずだ。こういう誘いには、尻尾を振ってついていくのが上総だったのだから。
「行っていいのかな」

「そうだよ、いきゃあいいじゃん」
　顔を覗き込み、次に南雲は切々と、「クリスマスイブを奪われた彼氏の哀しみ」について、さらさらと訴え始めた。さっき教室にいた時に聞かされたことと同 じ話題だ。なんでそこまでくりかえすのかが謎だったが、それだけ失意のどん底なんだろう。南雲がこうもぐちっぽくなるのは、奈良岡彰子のこと以外ではあり えなかった。
　――いい奴だよな。
　またかよ、という顔を一切見せず、上総は初めて聞いた時と同じ相槌を打った。
　あらためて悔いた。
　――やっぱりクリスマスの過ごし方は、なぐちゃんに前もって聞くべきだった！

　教室に戻ると、思わぬ来客あり。
　たぶん帰りを待っててくれていたであろう美里。それは嬉しい。
　でももうひとり、ポニーテールの振り子が揺れる、ロングコート姿の君がひとり。
「杉本さん、やっぱりこれ、ねえ、ちょっとまずいよ」
　笑顔は消さず、それでも顔を真っ赤にしているのは美里の方だった。上総と南雲が戻ってきたのに気付いて、さらに早口になっている。まずいことしたんだろうか。
　対する杉本は冷静沈着、抑揚のない言い方だった。
「私は清坂先輩のために、このラストを捧げたいのです」
「そ、それは嬉しいよ。杉本さん、すごいなって思うの。でもね、でもね」
　コートを着込み、首には白いマフラーを巻いている。端の丸いボンボンを握り締めては離し、揺らしている。動揺真っ最中らしい。
「杉本さん、あのね、すっごく感謝してる。そういう気遣い、杉本さんにしかできないってのもわかるよ。でもね、でもでも、これはちょっと」
　言葉は全く揺れない杉本。
「清坂先輩、ああいう相手とおつきあいなさるのでしたら、こちらから先制攻撃をしなくてはならいません。必ず、相手にそういう感情を起こさせるように『行 動』させなくてはなりません。いくら頭が悪くて不細工で男らしくない人であっても、人は行動することにより、自然に感情がついていくと、百科事典の心理学 のところに書いてありました」
　杉本のお得意だ。百科事典を愛読しているだけある。
「なにか不穏だな。じゃあ、俺先に帰るわ」
　南雲が耳もとにささやいて去っていくのもわかる。そりゃあそうだろう。修羅場寸前だ。杉本はちらっと南雲に目を向けた後、露骨に上総を無視して続けた。
「清坂先輩、もし、あの方が文句を言われるのでしたら、私は徹底してお手伝いします。私は清坂先輩や古川先輩のように、私を必要とする方のお役に立ちたいのです」
　今度は扉でぼんやり聞いていた上総をじいっとにらみつけた。
「私は、先輩と口を利くつもりは一切ありませんから」
　笑いをこらえ上総は声をかけた。

「また、あしたな」
　当然振り返らない。杉本はポニーテールの先っぽがちょうど、上総のネクタイにぶつかるよう、軽く振って階段を駆け下りてしまった。
　――口、利いてくれてるのに。

　教室の中は二人きりだった。
「なにかあったのか。杉本とまた」
　言いかけたが言葉を切った。顔の赤みが退かない美里。何度もボンボンの先でほおを叩き、上総の方を見てはすぐにうつむいたりと、細かな動きを止めなかった。
　ふたりきり。こういう時、自分たちは二年Ｄ組公認のカップルだと思う。美里の机には、大きめの白い封筒がおいてあった。ちらりと「奇岩城」のシナリオが覗いていた。
「これ、杉本さんが立村くんに渡してって、持ってきてくれたの。立村くんとは口利きたくないからって。怒らせちゃったね。困ったね」
　ぶっきらぼうに、顎で差した。
　たぶん杉本の家で渡した、訂正用の「奇岩城」シナリオだ。
　一日で手を入れてくれたのだろうか。それともつき返すつもりだったのだろうか。
「シナリオの最終チェックを杉本に頼んだんだ。きっとそれだな」
「一緒に『奇岩城』の文庫本も入ってるよ」
　まだ落ち着かないようすで、早口につぶやく美里。
　手を伸ばし、上総はシナリオを取り出してぱらぱらめくってみた。一ページ目からすでに、赤ボールペンで、細かな直しが入っている。上総の数学の答案のよ うに、ひとつの言葉に対して一行以上の説明および訂正理由が綴られている。ざっと読んでみるに思うのは、やはり杉本はすごすぎる、ということだった。
「すごいよな、一日でやったんだろうな。これ。でもさっき、清坂氏がなんか言ってただろ？　ラストがどうのこうのって」
　後表紙をめくり、問題の個所を探そうとした。いきなり美里がそれをひったくった。
「いいよ、そんなの見なくていい！」
「見なくてって、でも清坂氏は困るんだろう。言いづらい台詞とかそういうことかな」
「違うってば。もう、やあよ！」
　慌てて美里は手を引っ込めた。また真っ赤に頬が染まる。
　とりあえずは一言、断って。
「読んでいいかな」
「いいに決まってるでしょ！　あんたに杉本さんが持ってきてくれたんだもん！」
　矛盾しているが、まあいいか。上総は窓辺の縁に腰を下ろした。足をぶらぶらさせながら、ラスト場面に目を通した。「奇岩城」内で対決、ルパン対ホームズ。唯一、立村ホームズが美里の演じるルパンの乳母役と共演する場面だ。

――奇岩城内で、めでたくルパンとイジドール少年は和解する。ルパンも愛する女性、そして最愛の乳母と共に新しい旅立ちをしようと心に決める。最高の ハッピーエンドが近づくがしかし、いきなり場を荒らしたのは、天敵シャーロック・ホームズだった。ホームズは卑劣にも、ルパンの愛する乳母を捕まえて頭に 銃口を向ける。青ざめるルパン、イジドール少年。次の瞬間……

つまり、上総は美里を捕まえて、ルパンたちの目の前で脅迫するわけである。
両腕を後ろに回し、素直におもちゃの拳銃を頭に当てて台詞を言うだけで終わる場面のはずだった。別に、取り立てて何かがあるというわけでもない。
あらためて読み直す。
『ホームズ、そばでおろおろしている乳母をむりやり後ろ手に回し、銃口を向ける』
ト書きはそれだけのはずだった。しっかと赤が入っている。
『ホームズ、そばでおろおろしている乳母を、両腕でしっかと「抱きかかえて」銃口を向ける』　――抱きかかえる？

ほんの一言、読み飛ばすだけでいい程度の訂正だろう。イメージがふくらんでよろしいではないですか。上総の感想はそれだけだ。なんで美里がそれだけ慌てるのかがわからない。

「なにかこれって問題あるのか？」
「あたりまえでしょ！　もう、杉本さんったらおませすぎ！」
「あの、俺が、すなわちどうするってさ」
美里が口角泡飛ばして騒ぐ理由が謎だ。
「杉本さん、わざわざこの場面を私に見せて、こうしてもらいなさいって言うんだから！　もう、本当にいや！」
完全にゆでタコ状態の美里をなだめたかった。
「どんな風にするんだ？　別に俺は、清坂氏の腕を取って、しばりあげて」
「違うの！　こうするの！」
大股で美里は近づいてきた。上総の手をひっぱって無理やり床に下ろした。つったったままの上総の前に背を向け、左腕を取り、抱きかかえさせるようにし た。カフスの部分がちょうど、美里の胸にあたった。ぬくもりが届く。かたいクッションを触ったみたいだった。鼻のところに美里の髪が擦れ、慌てて離した。
一瞬だけ、美里を片手で抱きしめた格好になった。

――あの、これって、もしかして、こうしなくちゃいけないってことか？

心臓が跳ね上がった。一秒後、美里は上総の抱きかかえた腕をぶるんと払いのけ、横を向いた。
「清坂氏、今のっていったいなんなんだ？」

「杉本さんがね、実演してくれたのよ、さっき！」
　泣きそうになりながら、美里が早回しカセットレコーダーのように説明する。
「こんな感じで、ホームズに抱きしめてもらうようにしなくちゃ、だめだって！　ビデオ演劇はわざとオーバーにやった方がわかりやすいから、しなさいって！」

　二階の窓から見下ろした。誰かの視線を感じていた。薄らいだ水色の空。ちょうど二年Ｄ組の教室真下に誰かがいる。すぐにポニーテールの誰かさんと見破った。
　――杉本のしそうなことだ。本当に。
　あらためて同じ文章を読み返した。抱きかかえる。抱きかかえるようにして。
　下でじっと見上げている杉本梨南と目が合った。
　笑いが止まらなくなった。

　さっきもそうだ。上総に一言、「先輩とはもう口を利きません」と言っていながら、ちゃんと挨拶代わりのことをしていくところとか、無視すると言っていながら教室の真下で見上げているところとか。
　これって、どうみたって、いやがらせじゃないだろう。
　杉本にとっての、「ごあいさつ」のひとつ。
　決して「ふつう」の社会では通用しないやり方だけど、上総にだけは通じる言葉。
　人から見たら、上総への嫌がらせと思うかもしれない。そう思われてもしかたない。
　でも、こんなことだったらいくらでもやってくれればいい。
　――嫌いになんてならないから。いくらでも、試されてやるから。

「なんで笑うのよ！」
　ぶんむくれた美里の顔で、さらに笑いの発作は止まらなくなってしまった。しばらく唇を尖らせていた美里は、シナリオを封筒に納めた。しずしずと上総に手渡した。そっとしたから上総の顔を見上げた。自然とそれにも笑みがこぼれた。
「清坂氏、本番、それで行きましょう。それで決まり」
「はあ？　立村くん、何考えてるのよ！」
「詳しいことは、二十四日に改めて決めましょうか。このシナリオ、俺のうちでゆっくり読み直そうか。杉本のことだ、他の場面にもどういう風に手を入れているか、楽しみだな」
　声がか細くなるのが意外だ。美里がおずおずと尋ねる。
「怒ってないの？」
「怒るわけないだろ」
　もう一度窓の下を覗き込むと、同じ顔で見上げつづけている杉本がいた。
　覗く空は薄青い。手を挙げて上総は了解のしるしを送った。
　くるっときびすを返し大股で、ポニーテールの君は砂利道へ戻っていった。
「なあに、してたのよ」

「杉本にお礼、言っといた」
　まだご機嫌斜めなままの美里にささやいた。

　私服で来い、ということは、中学生面していてはまずいんだろう。
　本条先輩との蜜月が終り、ひび割れた関係が続いているこの頃。
　あえて南雲に伝言させたというところからして、怪しい。
　明日、美里を我が家へお迎えする準備を少しずつ整え、洋服を選んだ。黒っぽいスーツに少し銀色の入ったチャイナ襟のシャツを纏った。コートだと重たいの で、マフラーにジャケットだけにとどめた。ついでに父から奪ったハンチング帽を被った。だいたいこんな感じでいいだろう。
　家から出た頃は、だいぶ日も落ちていた。青潟駅周辺の商店街は、学校内の飾りつけよりもはるかにスケールがでかかった。クリスマスツリーの立っていない 店は一軒もなく、まだ電気の入るまえのイルミネーションが、配電線の姿をあらわにしていた。夜になればきれいだろう。中学生よりも高校生、高校生よりも大 学生の集団が目立っていた。
　一軒、女子好みの雑貨屋を覗き込んでは、またため息をついた。
　美里には、むしろキャラクターグッズのようなものがよかったのかもしれない。気付いていたはずなのに、どうして、勘違いしてしまったんだろう。
　――なぐちゃんに聞いておけばよかったな。
　いつもだったら、本条先輩に何気なくかまをかけて教えてもらうことで、用が足りていた。
　なんだかんだからかわれつつも、いいものを薦めてくれただろう。
　――本条先輩、クリスマス忙しいんだろうな。ふたり分のプレゼントか。

　駅に着いた。ちょうど五分前だった。時刻にうるさい本条先輩を待たせたくないけれど、顔を合わせることを考えると、やはり胃が痛くなる。話したいこと、 よりも、話さなくてはならないこと、の方が多すぎる。こんなバランスの悪いことが、本条先輩との間にはいままでなかった。
　ちょうど仕事帰りの人たちが、市外に戻るために乗り込む時間帯で、混雑していた。改札の前に立って腕時計を覗き込んでいる本条先輩を見つけた後、上総は襟元を数回撫でた。いつものように「本条先輩、お待たせしました！」と駆け寄ることはできなかった。
　――なんか、似た格好だな。
　黒いジャケットに、チェックのマフラー。めがねを外しているので、いつもよりも精悍に見える。　 手荷物はない。片手に太めのボールペンみたいなものをもてあそんでいた。
　ちょうど、五時半だった。もう、猶予はない。
　上総は真っ正面から本条先輩のいるところへ歩いていった。
　目をあわせたまま近づいた。口を開きかけた。
「……」
　一礼すると、本条先輩は無言で外を親指で指した。
　外に出ろ、ということだろう。
　頷いた。上総は隣り合わず、本条先輩の背中を追った。振り返らず、進む速さもいつものまま

、ひとりで歩いていく本条先輩。すでに夜めいているのに、店の明かりが洩れていて、平べったい空の色に見えた。

　本条先輩の手から、数回小さな光が点滅した。
　――ペンライトだ。
　蛍に似た、かけらのような灯。
　駅の裏通りを通り抜け、あまりきたことのない場所へ連れてこられた。駅からもう少し近づいてみると、青潟の海が揺れているのが見えた。海というよりも、 藍色のゼリーが震えているかのようだった。人気は駅の近くにいるとまだ少なめだった。だんだん奥に歩いていくと、二人連れの男性たちが、懐中電灯らしきも のを片手にうろうろとさまよっていた。すれ違う人、通り過ぎる人、みな無言だった。友だち同士なのだろう。なぜか、女性と遭遇することはほとんどなく、本 条先輩が立ち止まる頃には、周りのほぼ八十パーセントが男性の集団だった。
　磯の匂い。しょっぱい匂い。魚の半ば腐りかけた匂い。
　本条先輩は一度上総に視線を送った後、また背を向けた。一本道を隔てた公園に入っていき、流木を使用した丸太のベンチに腰を下ろした。上総の方を今度は見なかった。
　――座れってことだよな。
　少し間をおいて、腰掛けた。すでにベンチは男性たちの二人組みにそれぞれ占拠されていた。座れたのは本当にラッキーだった。

　――何するとこだろう？
　ブランコに乗っているのも、鉄棒に腰掛けているのも、砂場のライオンさんやぞうさんの置物に腰掛けているのも、みな男性だけだった。駅前付近のカップル が多いのとは全く違う世界だった。さらに反対側の空き地には、同じような男性たちがひとりで石をけりながらそれぞれ思い思いの格好でたむろっていた。
　いつもだったら、ためらうことなく聞いている。
　教えてくれると分かっている。
　でも口が動かない。あえて本条先輩には話し掛けず、上総は周りの男性集団を観察していった。時たま、懐中電灯を点滅させているのはなんでなのかも知りたいけれど、今聞いてはいけないような気がした。
　空気が隣りで少し動いた。本条先輩が、ポケットからもぞもぞと何かを取り出した。片手ではペ ンライトをいじり、点滅させている。探し物が見つかったらしく、かちりと音を立てて開き、両目に当てた。オペラグラスらしかった。
　公園の向こう。近く。人々が何度も、点滅させている灯。動くたびに揺れた。
　何度も静かに流れていた。
「あん中に、里理がいる」
　あの日から、初めて口を利いてくれた。
　耳の中で本条先輩の言葉を吸い込んだ。

「里理の奴、ひとりでここにいるはずだ」

　本条先輩は四人兄弟の末っ子で、上のお兄さんふたりとはかなり歳が離れていると聞いた。
　三番目のお兄さんが里理さんと言って、本条先輩とは年子だとも聞いている。
　――そういうことなんだ。
　不意に怖くなり、打ち消そうとした。
　――本条先輩のお兄さんは、男にしか関心ないんだって聞いたことある。
　里理兄さんの話といえば、「あいつなよなよしててほんと、けり一発入れたくなるぜ」とか「あいつ、見た目からして男だってのに、なんでホモなんだよ！」とか、悪口しか聞かされていなかった。会った事はないけれども、一歳上なんて兄貴とは認めない、というタイプらしい。
　そんなぼろくそこき下ろしている兄貴なのに、本条先輩は里理さんのために、公立高校受験を決意した。青大附属をやめて、公立進学で浮いたお金で、里理さ んと一緒に下宿生活しようと持ちかけたらしい。もちろんいろいろ他にも事情があるのかもしれないけれど、里理さんがいなければ今ごろ本条先輩は公立受験な んてちらとも思っていないはずだ。

「これから、あいつがおんなじ仲間を探しにここに来るはずだ」
　本条先輩の言い方は、話し掛けるというのではなかった。ただひたすら、ひとりごとをつぶやき、わざと上総に聞かせている、そんな感じだった。
　――じゃあ、あの人たちは。
　懐中電灯を持ってちかちかさせている人たちは。
「夜が長いってことだな。これから徹夜で男が男を求める、ナンパ大会ってことだ」
　ふたたびポケットをいじくりまわし、くしゃくしゃの紙を広げ、上総の隣りに置いた。
　受け取って読んだ。

　――『友』を求めたい男たちの集い・冬至の夜に会いましょう――
　――合図は、ペンライトか懐中電灯を二回ずつ点滅させること――
　――興味本意でやってくる野次馬達には知られないように――

　暗くて読みづらい。大きな文字で読み取れたのはそのくらいだった。
　手書きのコピーで、文庫本大の紙。ほんの少し、綴られていた。

　ペンライトで先を照らしつつ、本条先輩は実況中継を続けた。
「まだあいつひとりかよ。あいつ何腰抜けなんだか。ほら、さっさと声かけてしまえよな」
　首を動かし、のびあがるようにして、誰かを追っていた。上総はペンライトの先にいる相手を探したが見えなかった。暗さに目が慣れてもわからなかった。
　舌打ちしながら本条先輩は、自分で自分の相槌を売っていた。兄のことを「あいつ」と言うくらいだから、敬う気なんてさらさらないのだろう。腰をかがめて動いていた身体が、ふと止ま

った。
「おやまあ」
　口元が緩んでいた。
「声、自分からかけられるんじゃないか。里理。おお、相手は結構、じじいじゃねえか。いいのか？　俺はそっちの方知らねえけど、里理の好みって、わけわからねえなあ」
　どうやら、里理さんは自分から、お目当ての男性に声をかけて、無事ＯＫをもらえたらしい。
「おいおい、もうツーショットかよ。まあ初対面だからなあ。ま、はじめてのナンパだったらこんなもんだろ。めでてえな」
　オペラグラスを顔から離し、ぱちんと閉じた。
「俺は女で十分間に合ってるから、とりあえずこんなとこだ、さ、行くぞ」
　ペンライトはつけていない。だから顔の表情は読み取れない。黒いシルエットが上総に向かって、声を発しているのがわかるだけだった。
　――本条先輩、そういうことですか。
　上総は動かずに、じっと本条先輩の顔を見据えた。尋ねることをまずした。
「今、ここにいることを、先輩のお兄さんはご存知なんですか」
「知るわけねえだろ！　あいつが隠していたものを、俺が見つけて追っかけてきたってそれだけだ。やばい集まりだったら、あいつ絶対逃げられねえしな」
　吐き出すようにつぶやいた本条先輩。息だけが熱く匂った。
「じゃあ、なぜここに来たんですか」
　微動だにせず、上総は言葉をつないだ。
「先輩は、お兄さんのことが本当に、心配なんだってことが、今わかりました」
　言い忘れたことをもうひとつ、続けた。
「これが、先輩のやり方のパターンだってことも、今はっきりと、理解しました」
　本条先輩は腰を下ろしなおした。上総のすぐ隣りにきて、黙って座った。何度かペンライトを点滅させている。知り合いにこんなところ見られたら、「本条・立村ホモ説」が真性のものと定義づけられてしまうだろう。

　いつもそうだった。本条先輩はいつも、自分が主役で相手が脇役、という形を崩さない人だった。　上総の家に本条先輩がきてくれて、いろいろ世話をしてく れた時も、評議委員会で面倒を見てくれた時も、美里とのことで相談にのってくれた時も。本条先輩はあくまでも、先輩だった。
　先輩、イコール、守ってくれる人だった。
　小学校時代の問題におびえながら過ごしてきた上総を救ってくれたのは、本条先輩だった。
　――この人にだけは、嫌われたくない。
　だから、評議委員長になりたかった。
　本条先輩の求める、評議委員長として当然のことをしたかった。

よわっちい兄が心配でならない。きっと本条先輩の本音はそこにあるのだろう。
青大附属の学年トップでありながら、あえて面倒な公立進学を選ぶくらいなのだから、相当深い繋がりに違いないだろう。もっと言うなら、兄がまともにナンパできるかどうか……それも同性を相手に……を心配して、しっかとくっついてくるところも、「ふつう」じゃないだろう。
上総の知る限り、本条先輩が他の人たちに里理兄さんのことについて、そこまで話すのを見たことはなかった。唯一、上総に公立進学の理由を問われた時に、さりげなく教えてくれただけだった。　決して見せない本条先輩の影の部分。
きっと隠したかったであろう、お兄さんの秘密。
そして、心配でならない自分を、きっと誰にも見せたくなかっただろう。
なんで上総にだけ、そういう部分をさらけ出してくれたのだろう。

「本条先輩。聞いてください」
身体をできるだけ向かい合うように傾けた。上総を斜に見つめるようにして本条先輩も受ける姿勢をとってくれた。言葉を発するタイミングがつかめず、沈黙がちょこっと続いた。
「評議委員会のことです。この前、一通り新井林に話をしました。先輩と顔を合わせた次の日です」
詳しく説明しようとしたが、遮られた。
「お前に関することは、南雲から聞いている。繰り返す必要はねえよ」
「南雲からってなんですか」
それには答えず、本条先輩は何度かペンライトをくるくる回して夜空に向けた。
「立村、お前は相変わらずガキだが、それでも杉本を評議から下ろしたり、新井林に頭を下げたりと、お前なりにできることはやってるってことだ。いざとなったら、規律の南雲もいるし、この辺は大丈夫だろう。安心しろ、お前をいきなり下ろすようなことは、しねえよ」
ペンライトの先を向けられ、目をしばたいた。
「来年の評議を仕切るのは、立村、お前だ」
　嬉しいのか、それとも驚いているのか、感情がつかめなかった。
なにかもやもやしたものが抜けてこない。
あれだけ欲しかったもの。泣くだけ泣いてあきらめたもの。また手元に戻ってきたこと。
――もっと喜べよ。
ひそかに自分を叱ってみても、気持ちが落ち着かなかった。
――俺が欲しいのは、評議委員長の座じゃない。
受け止めたブーメランが、他人のものだったと気付いた瞬間だった。

評議委員長の座にこだわっていた時はあえて見ないようにしてきたもの。
暗闇のペンライトの灯りと同じく、小さくちらついてきた。
――杉本を評議委員から下ろして、新井林に頭を下げて、そういうことを平気な顔でできるのなら、俺は本条先輩のような評議委員長になれるかもしれない。そうなりたかったよ、ずっと。

でけど俺はそんなこと。
　ペンライトの先を軽く握り、離した。受け取り、本条先輩の胸あたりから照らした。
　――したくてやったわけじゃない。本条先輩のやり方は、まねしたくないんだ。

「どうしたんだよ、あれだけお前こだわってたくせにさ。立村、ほらほら、闇の中だから泣いたっていいんだぞ、ほら、顔見せてみろ」
　顎のあたりを照らされた。
「本条先輩、そのことですが、評議委員長指名は三月まで、本条先輩のもとに権利があります。ぎりぎりで変更することももちろん可能です」
「ああ、だがお前は十分それをクリアした。俺が驚くくらいにな」
「だったら、最終判断を、三月の卒業式まで待ってもらえませんか」
「はあ？」
　鼻から空気が洩れたような声を出す本条先輩。闇だからこそ、言葉がするする流れる。
「俺は本条先輩のやり方で評議委員会を仕切りたいと思っていました。新井林と話をした時まで。でも、俺は本条先輩のようにはできません。評議委員会最優先主義をそのまま、やっていくことはできません」
「どうしてそう決め付けるんだよ」
「最後まで聞いてください。もし、本条先輩のやり方をできるだけ残したいというのだったら、評議委員長は俺よりも新井林の方がいいと思います。あいつの方が、自分ひとりの力でどんどんひっぱっていけるし、不可能も可能に変えてしまえるだけのパワーを持ってます」
　一息ついて、さらに続けた。
「俺に、同じやり方はできません。ただ、違うやり方を試すつもりはあります」
「違うやり方ってなんだそれは」
　他中学との交流会のことを話そうと思った。でもたぶん、誰かから聞いているだろう。繰り返すと嫌がられそうなのでやめた。
「来年、俺がまだ次期評議委員長としてやっていける三月までにその結果を出します。それを見て、本条先輩、判断してください。俺のやり方がいいか、それと も新井林のやり方がいいか。もし降ろされてたとしても、俺は別のところから計画を進めていきます。もし評議から外れたとしても、やりたいことをやるための 糸口はたくさん見つかるはずだと、俺は信じています」

　本条先輩は無言だった。照らされた顔に表情は読み取れなかった。が、すぐにペンライトをひったくって、先で軽く上総の額を小突いた。加減されていて痛くなかった。すっくと立ち上がりラジオ体操張りの深呼吸をした。
「よっくわかった。お前の挑戦状、確かに受けた。とことん見届けてやるさ」

「そろそろこの辺は、彼女もちの俺たちには関係のない世界に切り替わるってわけだ。さっさとずらかろうぜ」

闇だけど、笑っているのだけは伝わった。手足をさすっているのは、やはり寒いからか。上総も立ち上がり、襟を合わせて温みを守った。
「とことん新井林と勝負してみろ。どういう結果が出ても、お前は俺の弟分だ。それだけは忘れるな、それと」
言葉を切り、ポケットに手を突っ込み、腰を振った後、
「これからは俺よりも南雲を頼れ。どういう意味かは、わかっているな」
――わからないってさ。
さっきから、気になる部分に「南雲」の名前が出てきている。ひっかかってはいるのだが、うまく答えが出ない。もごもごとつぶやいた。
「南雲、って、何か関係あるんですか」
「お前気付いてねえのかよ！　ったくいいかげん気付けよ！　こういうのは粋にさらりと流すのが乙ってもんだろうよ、ったく、だからこういうとこが立村、お前ガキだっていうんだよ！」
結局、ガキ扱いからは脱することができなさそうだった。かなりむっとした。
「すみません。どうせ俺は先輩の永遠の弟分ですから」
「全く、手間がかかる奴だ」
今度はこつんと後頭部をやられた。真っ正面から覗き込まれた。闇の中、裸眼でも十分表情はうかがえる。にやついていた。
「今日、お前誰に連れられて三Ａの教室に来たんだ？」
「南雲が規律の関係で用があるって言ったから」
「お前を俺がひっぱたいた日、誰かから電話があっただろう？　南雲からかかってこなかったか」
「かかってきました、けど、出なかったから」
「いつだったか清坂ちゃんと修羅場ってた時にお前のクラスが妙に静かだったのは誰のおかげかなあ」
「そういうこともあったけど……」
返事をしてゆくうちに、繋がっていくことがある。問い詰められながら上総は、謎が溶けてゆき、さらさらした水になり流れていくのを感じていた。
――まさか、なぐちゃんが、全部本条先輩にスパイしていたってことかよ。
「あの、南雲が本条先輩のスパイだったとか」
「人聞き悪いこというな！　馬鹿野郎！」
今度は本気で脳天からひっぱたかれた。耳がぐわんとした。
「南雲はお前のこと心配してたんだ。単純明快な奴だ。感謝して欲しいなんて面倒なこと、ちっとも思ってないから、気付かないようにやってたみたいだがなあ。ざあとらしいことはしないがな、ほんと、あいつはいい奴だ。規律委員に置いとくのがもったいないぜ」
最後に一言、続けた。
「俺より、南雲を手本にしろ。これが本条里希最後のお言葉だ」

――俺のことを報告してたのはなぐちゃんだったんだ。
本条先輩とごたごたし始めてから、相談したいことも何もかも口に出せず、悶々としていた日々。必然、隣りの席でかつ、次期規律委員長の南雲にいろいろネタを振ることになる。
もともと本条先輩と南雲はつきあいがあったし、今日の放課後も親しげに会話を交わしていた。上総に伝言を伝えたりもしてくれた。
いや、さらにいうなら、本条先輩に張り倒されてべそかいてすれ違った後、電話をくれたのは南雲だった。しょっちゅう、「本条先輩とは話してないの？」と、軽くかまをかけるのも、わざと三年Ａ組の教室に連れていかれたのも、みなきっかけは南雲だった。
――本条先輩となぐちゃんがふたりで、俺をオペラグラスで観察してたってことか。

「野郎同士でいちゃついてどこが楽しいんだろうなあ。ったく、里理の考えていることがよくわからんぜ」
もと来た道を戻った。今度は本条先輩の隣りに並んだ。懐中電灯、ペンライトを片手にちらつかせる二人組の数は、すれ違うごとに増えていった。まだ言葉を交わさず、駅の賑わいに向かいながらゆっくりと歩いていった。本条先輩の表情に笑みが浮かんでいるのが嬉しかった。
「それじゃ、先に帰る。『奇岩城』のスケジュールが決まったらすぐに電話で連絡しろよ」
駅前ロータリーのバス乗り場へ向かった。どうやら先輩は自転車でなく、バスで来たらしい。

足下の氷をつま先でつつきつつ、上総は黒い空と星を目で追った。赤と黄色の入り交じった人工の薄い光。かすかに天を照らしていた。月が爪の切り痕程度に 残っていた。「ジングルベル」の鈴がうるさくなり響く商店街の有線放送。すぐ近くに、ペンライトだけで気持ちを伝え合っている人たちがいることを、街を歩 く人々のほとんどは知らないのだろう。

きっと本条先輩は、学校の中で上総を観察しながら、誰かに同じような実況中継をしていたに違いない。口では罵倒の嵐だけど、内心はらはらしながら。うまくまとまったらほっとしながらオペラグラスをぱちんとしまう。
――ほらほら、立村の奴何やってるんだよ。新井林に喧嘩売って勝てると思ってるのかよ。まったく、手に負えねえ奴だよな。だからあいつガキだって言うん だよ。俺が面倒みてやらないとだめなんだよなあ。まあ、しゃあねえか。ほらほら、ちょっと待ってろ。なんとかしてやる。ったく、杉本の巨乳に魂抜かれてし まってるんだから、まったくなあ。
せせら笑う口調でありながら、想像の中で聞く声は優しかった。
上総の行動が本条先輩のお心に叶ったかどうかはわからない。口では評議委員長に認めたと言ってくれたけれども、感覚そのものは新井林の方と重なっているだろう。もっとワンマンに、したたかに、邪魔者は切ってどんどん進んでいく。たぶん、上総には無理だろう。
杉本梨南をあっさり切り捨てるなんて、上総には出来なかった。

――もし、俺が本条先輩と勝負するとしたら。

上総には想像つかない「男と男」同士の世界。友だちの少し上、という程度の付き合いだろう。そうとしか、解釈しようがない。上総にとってもペンライトのうごめく公園内は未知の空間だった。オペラグラスで覗くしかない。

本条先輩も、新井林も根は同じだろう。杉本梨南や上総のことを、オペラグラスで観察し、その上で指示を出したり激励したりする。里理さんにしていること と同じことを、繰り返すだけだろう。理解できない感情……それこそ「男と男」の気持ちとか……に対処するには、それしかないと、あらためて上総も思った。 二股女子付き合いしている本条先輩もたぶん同じだろう。

でも、もしその人たちの心を感じ取ることができたならば。

公園の中にひとりで足を踏み入れることができたならば。

オペラグラスではなく、生身で入り込むことができたならば。

――俺が勝負できるのは、そこだけだ。

三月末に本条先輩がどういう結論を出すかはわからない。今の段階で評議委員長を上総に指名しなおしたところだと、たぶん可能性としては高いだろう。で も、あえて上総は本条先輩に検討しなおしてもらいたかった。やることをすべて見てもらい、その段階で判断してほしかった。本条先輩のようにカリスマ性で もって勝負していけない立村上総の仕切り方。本条先輩のやり方と勝負ができるかどうか、新井林健吾の力にはかなわないのか、しっかと判断を下してほしかっ た。

どういう結果が出ても、悔いはない。

評議から降りても、計画を捨てる気はさらさらない。

杉本梨南を評議委員から降ろしても、思いっきり意地悪されても、決して嫌いにはならないのと同じように。上総のみっともないところをさらけ出しても南雲が友だちでいることをやめないように。

――オペラグラスで覗くだけのことはしない。

――ペンライト片手に、あの公園で、夜空を見上げよう。

立村上総のしたいことは、たったひとつ、それだけだった。

――

終――

冬至の十字星

http://p.booklog.jp/book/77993

著者：舞夜じょんぬ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/maiyoruaogata/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/77993

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/77993

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ